

精神分析法

2598003097

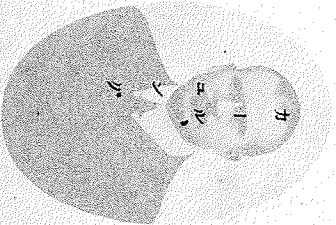
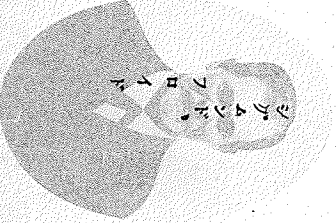
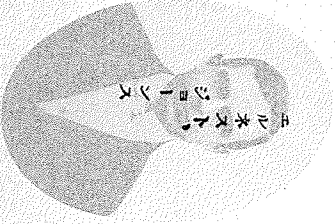
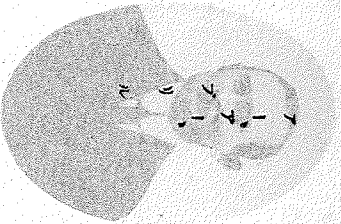
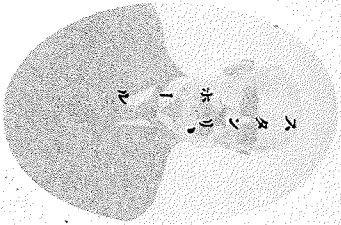
第3097号

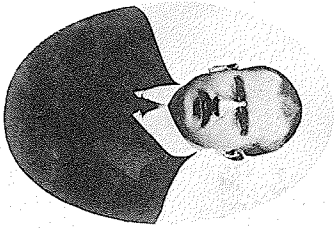
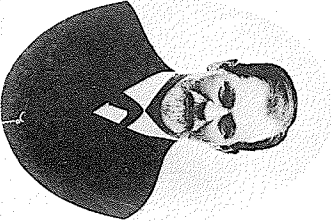
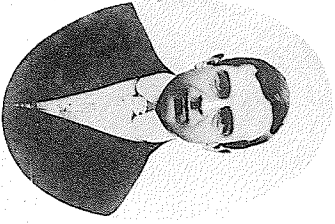
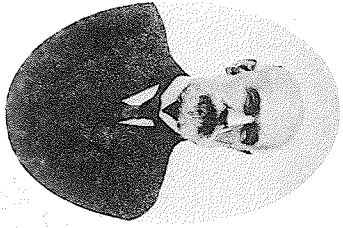
広島大学図書

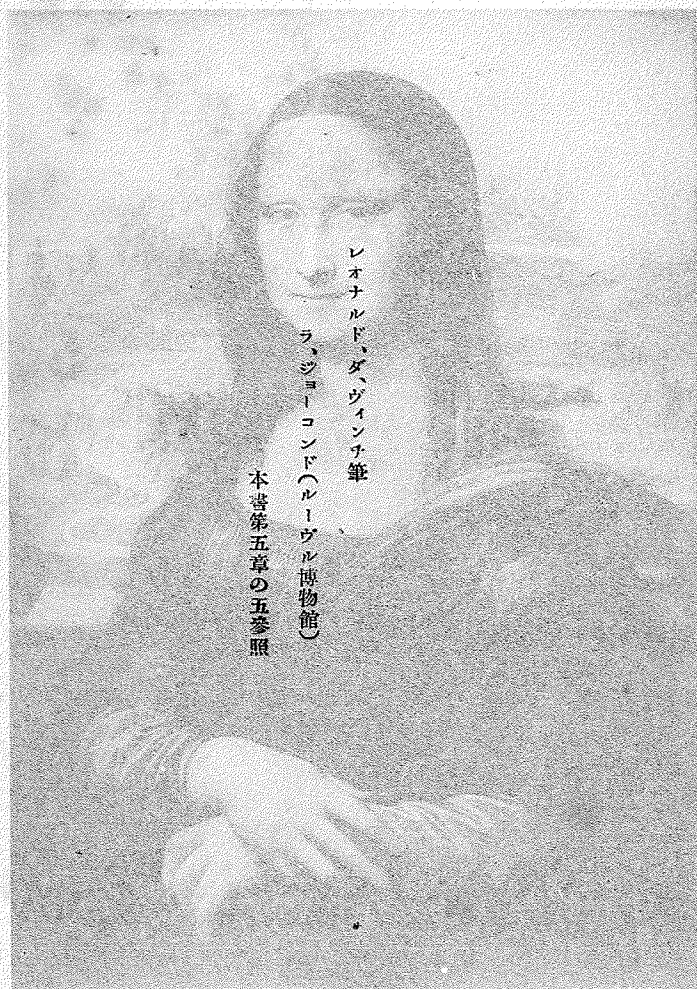
2598003097


F文
ク學
トル士
久保良英述





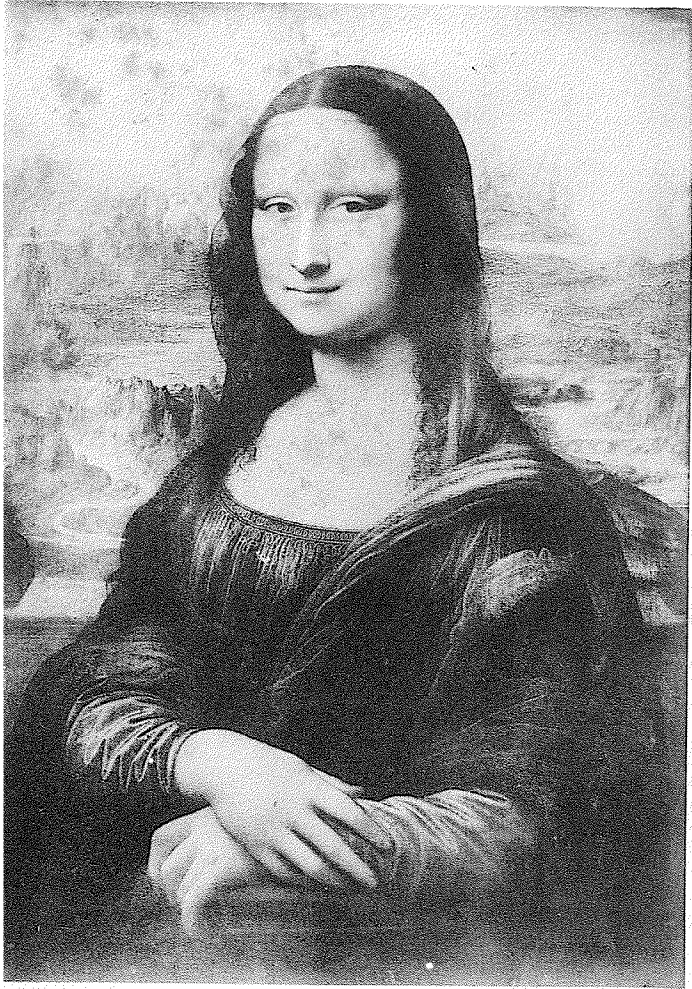




レオナルド、ダ、ヴィンチ筆

ラ、ジョーコンド（ルーヴル博物館）

本書第五章の五参照



序

本書はケンナ大學の精神病學教授シグムンド・フロイド博士の學說を集成したものである。フロイドが今より二十二年前にヒステリーの一新療法に關する論文を公にし、それに續いて夢・神話・藝術的作品・子供の性慾・日常生活に於ける忘却や誤謬・頓智・滑稽等に就て新しい解釋を試みたけれど、當時その眞價を知るものは極めて尠かつた。氏の新說が斯界の研究に一大暗示と革命とを齎らすものであると認めらるゝに至つたのは實に最近六七年の間である。殊にこの二三年はフロイド及びその一派に屬する研究や批評の論文が續々と米國に於て出版されて居る。氏の大膽なる主張に對しては兎角の批評はあるが、慥かにこれまで耕し盡したと考へられた土地から新たな鑛物を發掘したばかりでなく、尙未開の土地からも色々の鑛脈を發見しつつあるのである。

予が氏の學說の眞價を知るに至つたのは實に恩師スタンレー・ホール博士の賜

である。先生の一週二回の講義の中にフロイドと其反對派アドラーとの名が聞かれない時は殆ど無い位であつた。蓋し先生の偉大なる想像的傾向と先生の主張たる發生的見地とが、フロイド及びそれを聯關せる學說に甚深の興味を有せしめたに相違ない。クラーク大學の二十週年記念祭にはフロイド一派を遙々歐洲大陸より招待して講演をなさしめた一事でも、ホール先生が如何にフロイドの學說を重んじて居られるかと分かるのである。予がフロイド及びアドラーに關する知識を得るに至つたのは、全くホール先生の啓發によるもので、若し本書にして取る所があり、之によりて新研究の暗示を得る者があつたならば、そは一にホール先生の賜といふべきである。卷頭を飾る五博士の肖像は神田左京氏所藏の前記二十週年祭記念寫眞の中から、ダ、ヴィンチの畫は松本亦太郎先生所藏のものから複寫したものである。茲に此等を貸與された御好意を衷心より感謝する次第である。

大正六年十月

著者

目次

第一章 精神分析法の起源……………一

- 一、フロイユルの發見
- 二、フロイドの主張
- 三、抑壓作用

第二章 分析的治療法……………三一

- 一、一ヒステリー患者の治療
- 二、R嬢の回復
- 三、分析的療法の

範圍

第三章 夢の解釋……………六一

- 一、夢の解釋法
- 二、夢の思想
- 三、展縮
- 四、轉移
- 五、描

- 寫
- 六、二次的推敲
- 七、夢に於ける情緒
- 八、夢の材料とその

- 淵源
- 九、代表的の夢
- 十、内精神的監視
- 十一、夢の種類

第四章 性慾と子供……………一五五

- 一、性の意味
- 二、性慾の倒錯
- 三、性に關する質問
- 四、自己

- 色情
- 五、對手を要する性慾
- 六、對手の選擇
- 七、子供の性的

第五章

神話と藝術的作品……………二一七

一、英雄の生ひ立ち 二、英雄神話の分析 三、ハムレット劇の分

析 四、ダ、ヴィンチの生涯 五、ダ、ヴィンチの解剖 六、ワグ

ネルの「さまよへる和蘭人」 七、トルストイ伯の生ひ立ち

第六章

忘却と誤謬……………二八一

一、固有名詞の忘却 二、語句の忘却 三、言ひ損ひ 四、讀み

損ひ 五、書き損ひ 六、置き忘れ 七、實行の忘却 八、實

行の誤謬

第七章

頓智・滑稽及び喜劇……………三一九

一、壓縮 二、轉移 三、間接的表出 四、頓智の快感 五、

頓智と夢との異同 六、滑稽と喜劇

第八章

精神分析と教育……………三四五

一、性慾と宗教との關係 二、昇華作用とは何か 三、子供に於け

第九章

結論

る昇華作用 四、職業の選擇 五、個人教授と學級教授

一、フロイドの心理學 二、ジャネーの批評 三、アドラーの批評

四、レーエンフェルド及びシュテルンの批評

附錄

一、吃音者の精神分析的研究

二、トテムとタブー

三、ユングの聯想實驗法

— 目次終 —

第一章 精神分析法の起源

一、フロイエルの見

精神分析法と云へば直ぐにフロイドの名が聯想される。しかしフロイドは精神分析法を發達せしめた人で、此方法を始めて案出したのは決して氏の功績でない。フロイドが未だ一學生の身で、最終の試験に合格しようと忙しがつて居た際、并シナの醫師ヨゼフ、フロイエルが千八百八十年より同八十二年の間に始めて精神分析法を一ヒステリー患者に試みた。其患者は二十一歳の婦人で、知能も可なり發達して居た。二ケ年餘り病氣して居る間に、身體及精神上の障害が烈しくなつて來て、重患と認めらるゝに至つた。その病氣といふのは、右側の手と足とが烈しく麻痺を起して、全く無感覺となるので、往々左側の手足にも同様の現象が表はれた。眼球運動の障害・視力の減退・頭部を正しく保持することの困難・神經性

咳嗽・榮養物攝取の際の嘔吐を惹起し、或時の如きは烈しく渴けるに拘はらず、數週間一滴の水をも飲めないといふ奇現象を呈した。談話の力も漸次減退し、終には國語すら話すことも又理解することも出来なくなつた。かくて最後には無意識・錯亂・譫妄の状態に陥り、人格の轉換をも生ずるやうになつた。

如上の容體を聞くと、醫者でない讀者でも直ちに、その患者の腦髓が恐らく烈しい障害を蒙つて居て、遠からず一命を失ひはしないかと想像するであらう。處がその女を診斷して見ると、心臟や腎臟などに何等の故障もない。又別に腦に有機的の傷害があるのではない。凡て局部的障害がなくして右のやうな症狀を呈し、且つ一方に強度の情緒的障害があり、而かもその症狀が細かな點に於ては論理上期待さるべきものと異なつて居る場合には、希臘以來醫學上の謎となつて居るヒステリーの名が與へられ、別に生命に關する危険はない、症狀も自然に治癒するであらうと考へられて居る。この患者もやはり醫師の目から見ると、純然たるヒ

ステリーに罹つて居るやうである。而してこの病氣が如何なる機會に起つたかといふに、曾て懐しい父の大病を看護して居た時に、初めて病氣が起つたので、已むを得ずその看護をやめてしまつたが、その後父なる人は死んでしまつたといふに過ぎない。

診断の結果、病氣が腦の傷害に基かずして、ヒステリーであるといふことが分かつて、其て治療の見込がついたとは必ずしも言へない。烈しい腦病になると、殆んど醫療の効果が表はれないが、ヒステリーに對しても、醫師は殆んど無能力で、やはり溫和なる自然にその治療を委せて置くの外はない。故に病氣がヒステリーであると分かつても、患者の境遇がよくなると言ふのでない。之に反して醫師の態度は變つて來る。即ち醫師は普通の腦病に對する程に、ヒステリーに對し興味を感じないのが普通である。かの卒中や痲呆などの患者に於ては、腦髓に於ける故障が醫學上充分に研究されて居て、某の病狀は某の原因から生ずるものである

るといふことが知れて居る。處がヒステリー患者に現はるゝ症状は全く雲を掴むやうで、解剖・生理・病理に關するあらゆる知識を以てしても、ヒステリーの眞性を捉へることが出来ない。即ちヒステリーに對しては、醫者も素人も等しく無能と言つて差支ない。それで醫者の方では、自己の價値ある知識が、この病氣に對して全く無力であるといふ點から、心中甚だ心よくない、自然ヒステリーに對しては同情がなくなり、ヒステリー患者は自分等の學問の法則を蹂躪する異教徒であるかのやうに考へ、故意に症状を誇張し、假病を使ふ我儘者であると思ひ、彼等に對する興味を失つてしまつた。

處がプロイエルはかやうな態度を以て、ヒステリー患者に接しなかつた。尤も最初はその處置に當惑したが、絶えず同情と興味とを以て患者に接した。この同情と興味とが遂に氏をして意義ある發見をなさしめたのである。初め患者が失神の状態に陥つた時の有様を観察して居ると、何かブツ／＼獨り言をいつて居るの

が常であつた。恐らく之はその時、精神上に浮かんで居る思想から聯合して生ずるものであらうと考へられた。そこで氏は患者を一種の催眠状態に導き、患者の口から洩れる言葉を幾度も繰返して、それから如何なる聯合が行はれるかを知らうと試みた。患者は氏の暗示に感じて失神中思想の主位を占めて居た事柄を述べた。而してさきに洩した數語はこれから發したのであつた。その事柄は甚だしく悲哀に充ちた美しい空想で、患者が父の病床に侍して居た時の狀況が元となつて居た。處が不思議なことには、患者がその空想を物語る度毎に、精神生活の健康を回復することであつた。この健康状態が數時間も續くと、翌日は又失神の状態に陥る、又新に出來た空想を話させると前の如くに健康に復する。そこで精神が變調を來して失神の状態に陥るのは、この烈しい情緒性の空想から生ずる興奮の結果であると考へざるを得ないことになつた。當時この患者は不思議にも英語を理解し英語で話して居たが、この新治療法を談話治療(Talking cure)と名づけ、

又滑稽的に煙突掃除 (Chimney sweeping) とも名づけた。

茲に於てプロイエルは一の療法を思ひ當つた。即ちかやうな淨下療法を以てしたならば、斷えず精神に曇りが生ずるのを、一時晴らすことが出来るばかりでなく、もつと永久的効果を擧げることが出来るに相違ないと考へたのである。而してその方法としては、患者を催眠状態に導き、病氣の症狀が初めて發生した時の狀況とそれに結びついて居る事柄とを憶ひ出させ、それから生じた情緒を自由に解放させると、その症狀は忽ち消失するといふのである。或暑い夏の日に、この患者は非常に渴を覺えた。しかも何といふことなしに突然水を飲むことが出来なくなつた。彼女は水を飲まうとしてコップを取上げる。しかし之を唇につけようとすると、恰も恐水病にでも罹つたやうに突然之を押しやるのであつた。而してこの數分間明かに恍惚状態に陥るのであつた。それで已むを得ず果物や甜瓜などを食べて僅かに渴を醫するに過ぎなかつた。かゝる状態が約六週間ばかり續いた

後で、或日催眠状態に於て患者は次のやうなことを話した。患者に一人の嫌ひな英吉利生れの女教師が居た。曾てその婦人の室にはひつた時、自分の嫌ひな小犬がコップから水を飲んだといふことを、さも嫌やだといふ風をして物語つた。しかし患者はその時禮儀上遠慮をして、いや／＼ながら黙つて見て居たといふことである。然るにこの時抑壓された怒を充分に強く發表せしめた所が、患者はやがて水を請求し、何の苦もなく多量の水を飲むことが出来、コップを唇に當てながら催眠状態より覺めた。かやうにしてこの恐水病發作はその後全く治癒せられたのである。

從來かやうな方法でヒステリーの症狀を治療したのもなく、又その原因を探究闡明したものもない。故に若しヒステリーの多くの症狀がかやうな風にして起り、且之と同一の方法によりて治癒されるといふことが分かつたならば、實に此方法は偉大なる發見といふべきである。プロイエルは之を確信して研究の歩を進

め、もつと烈しい症状を捉へてその病源を一層秩序的に探索し始めた。所が多数のヒステリー患者の原因は凡て同様な形式で、或る情調を帯びた経験の殘滓に基づくのであるといふ事が分かつた。後に之に心理的外傷 (psychic traumata) といふ名を與へた。その症状の性質は其を惹起した四圍の状況に對する關係によりて明瞭にすることが出来る。蓋しヒステリーの症状は一として偶然的なるものなく、皆過去の経験が原因となつて、それによりて規定せられるからである。其症状を惹起す経験は常に單一のものと限つて居ない。同じやうな諸種の経験が繰返されて、或一つの症状となつて現れることが多い。而してこの諸種の外傷は経験された年月順に反復せらるゝもので、その順序は最新しいものが最初に表はれ、古いものが順次に後に表はれてくる。従つてその第一の経験即ち最も重要な外傷に直接到達することは非常に困難で、先づ最初に表はるゝ新しい経験を順々に除去して後に初めて到達することが出来る。

ブロイエルは前述の如く先づ患者の水を飲むことを厭ふ原因を検索したが、次に視力障礙が全く外的原因に基づくことを發見した。即ち彼女の自白によると、父の病床に侍して居た際に、父は不意に彼女に何時であるかを尋ねた。この時彼女は目に涙が一抔滿ちて居たので、はつきり時計の針を見ることが出来ず、爲めに眼を出来るだけ見張り、且つ時計を近くに引寄せて見た處が指針の面が非常に大きく見えた。而して病人に泣顔を見せまいと出来るだけ涙を押へようと努めたといふことである。これが彼女の過大視症と斜視とを生じた原因となつた。この他の症状も亦多くは病父の看護の際に初まつて居る。或る夜病父が烈しく發熱し、且つギンナの町から手術の爲めに來る筈になつて居る外科醫を待ちあぐんで、非常に心配しながら看護して居たことがある。母は暫らくの間外出し、その間彼女は右の腕を椅子の後に垂れかけたまま、父の病床の側に居たが、間もなく彼女は夢幻の状態に陥り、黒い蛇が壁の處からノロノロ這ひ出して來て病父に噛みつかう

とするのがあり／＼と見えた。尤もこの家の後方の牧場には多くの蛇が居て、彼女は屢その蛇に驚かされたことがあつたので、此等の経験がこの幻覺の材料となつたに相違ない。そこで彼女は、その蛇を追ひ拂はうと努めたけれど、どう云ふ譯か麻痺したやうに感ぜられた。椅子の後ろに垂れかけて居た右の腕は全く麻痺を起して感覺がなくなつた。その指を見て居る間に小さい蛇と變つて行つた。恐らく彼女は麻痺した右手で其蛇を追ひ拂はうと努めたに相違ない。かやうにして右手の麻痺及び感覺脱失と蛇の幻覺との聯合が出来上つた。この幻覺が無くなつた時に、彼女は苦悶のあまり何か言はうとしたが、如何なる言葉も口から出て來ない。漸く英語の子守歌の言葉を思ひ出した。其後彼女は英語でなければ考へることも話すことも出来ないやうになつてしまつた。而して此光景の記憶が催眠状態に於て再生された處が、病氣の發生以來固執して居た右腕の麻痺が全く治療されたといふことである。

二、フロイドの主張

フロイドが數年間多くのヒステリー患者を取扱つた結果、全くブロイエルと同
一の經驗を得たといふことである。氏の患者の中に約四十歳の婦人があつた。そ
れは顔面痙攣を有し、何か興奮した状態で仕事をする時に、これといふ理由もな
く特殊の舌打をする癖があつた。その原因を探ると二種の經驗から來て居る。何
れも出來るだけ靜かにしようとなつた結果、却て反意志的に寂寞を破つて音を
發するに至つたといふことである。第一の場合は子供が病氣した時、その眠を覺
ますまいと非常に用心したことである。第二の場合は或日子供等と馬に乗つて居
た時、俄かに雷鳴に逢ひ、馬が驚き跳ね廻るので、若し何かの音でもさせたら尙
驚くだらうと思つて、努めて靜肅を保たうと努力した結果であるといふことが分
つた。この他多くのヒステリー患者の實例を氏の著書『ヒステリーに關する研究』
中に掲げて居るが、その結論として氏は「吾人のヒステリー患者は凡て記憶せる

事物から苦しめられて居る」と述べて居る。即ちヒステリーの症状は或經驗即ち外傷の殘滓及び記憶的表號であると主張して居る。

この記憶的表號が吾人の日常生活に多大の印象を有することは言ふまでもない。例へば吾人が須田町の四辻に立つて廣瀬中佐の銅像を見上げる時に、その表號に聯關して吾人は種々のことを考へるであらう。閉塞隊の勇敢なる行動から杉野兵曹長の遺族に至るまで、同中佐を中心として當時の光景が聯想されるであらう。又泉岳寺に詣で、大石良雄以下の墓標を見ると、そとろに當時の夜討のことも、四十七士が吉良の首級を掲げて泉岳寺へ引揚げた有様などが聯想されるであらう。この他記念品や記念碑も凡て記憶表號で、恰もヒステリー症状のそれ等の如く、諸種の記憶殊に情調に富んだ經驗の記號である。殊に苦痛の經驗に至りては、その印象が殊に深く、その記號も長く吾人の精神中に止まつて居る。而してこの病源的外傷に吾人の精神が固執して居ることは非常に重大なことで、殊に神

經病の特質である。前に述べたブロイエルの例を見ると、彼女の外傷は凡て病父を看護して居た時に生じたもので、彼女の症狀は凡て父の病氣と死との記憶表號と見做すことが出来る。即ち其等の症狀は悲哀時の一の記念碑である。病父の死後その悲哀に精神が固執することは決して病的でなく、却て正常の情的行爲である。但しフロイドによりて擧げられた一種の顔面痙攣は、その起源が十年乃至十三年以前に沂つて居て、かやうな過去の出來事に何時までも固執して居ることは病的に相違ない。ブロイエルの患者も放棄して居たらば、其外傷が何時までも醫せらるゝことなく、病的に長く固執して居たに相違ない。幸ひにブロイエルが所謂淨下療法を施したので、早くその外傷的經驗を一掃することが出來たのである。病的に長く固執したか否かに拘はらず、此等のヒステリー症狀とその患者の經歷との關係を調べて見ると、何れも、強烈なる興奮的情緒が自由にその發露を見出すことが出來ず、無理に抑壓された結果であるといふことが分かる。ブロイエ

ルの患者が水を飲むことを嫌つたのも、コップより直下に水をのむ犬に對する嫌惡心を女教師の手前充分に發散することの出來なかつた結果である。又目が惡くなつたのも病父に自己の悲哀を知らせまいと努めた爲めである。然るにプロイエルの所で催眠状態に於て充分にその激情を再生することが出來たと同時に、凡ての疾患が一掃されてしまつた。勿論以前の經驗を單に再生するだけでは不十分である。それに伴ふ情緒を十分に發展せしめて赤裸々の状態にするに非ざれば、決して病根は勦絶されない。即ちヒステリーの本質は、幽閉されたる情緒が異常なる變化をなしたといふ事實に基いて居る。而してその抑壓された情緒は一方には絶えず心的生活の障害の原因となり、他方には異常の身體的神經衝動と禁止とを生じ、その爲めに種々の身體的症狀を呈するのである。この第二の過程はヒステリーの轉化と名づけられて居る。正常の状態では吾人の精神的エネルギーの一部は身體的神經衝動となつて外部に傳はり、所謂情緒の表出を生ずる。所がヒス

テリーの轉化は情調を帶べる心的過程の方面を擴大する。そはかの強烈なる感情表出の際に、新規の出口を發見する場合と一致して居る。蓋し二つの路を通つて居る流が、若し一方の通路に或障害が起ると、他の通路に於て溢れるやうになるからである。

かやうにヒステリーは初めてその原因を情的過程に歸せられ、全く心理的原理を以つて説明せらるゝに至つた。次に又プロイユルの觀察によりて、この症狀の特質として意識狀態の變化が生ずることが明かになつた。即ち氏の患者は正常狀態に於ては病源的經驗及び其と症狀との關係に就て少しも知らなかつた。催眠狀態に入りて初めて病父の病床時代のことを再生し、その再生によりて病源を根絶することが出來た。プロイユルは之を次の如く説明した。催眠術を研究して見ると、同じ個人の中に二種以上の精神狀態の成立し得ることが分かる。而して其精神狀態は比較的獨立して居て、互に相知らずに居る結果、意識に分裂を來すこと

がある。かゝる場合は二重人格と稱へられて居るが、それは往々自發的に發生することがある。而してこの人格分裂の場合に於て、意識は必ず二つの状態の中の孰れか一方と結び付いて居るもので、それを意識的精神状態と名づけ、他を無意識的精神状態と稱する。かの繼續暗示の現象に於て、催眠中に與へた命令が、覺醒後恰も命令的に暗示されたかの如くに實行せらるゝのは、無意識が意識に影響を及ぼして居る實例で、但し意識の方では無意識の存在を知らずに居るのである。ヒステリーの場合に現れる種々の事實も、之と同様に説明することが出来る。即ちヒステリーの症状も初めはかゝる特殊の精神状態に於て發生するもので、ブローイエルは之に催眠状態(Hypnotische Zustände)といふ名を與へて居る。この催眠状態中に起つた情緒性の經驗は、容易に病源となる傾がある。蓋し此状態では興奮せる情緒を正常に排出することが出来ないからである。従つて興奮過程は特殊の結果即ち症状を惹起すやうになり、其が健康状態中に全く異つたものゝ如くに投げ込

まれる。従つてこの健康状態の方では、この擬眠状態に於ける病源的經驗に就ては全く何等の概念も無い。故に或症状が表はるゝ場合には記憶の空隙を生ずる。即ち健康の意識だけでは、其空隙を充たすことが出来ない。そこで忘れられた經驗を無意識界から喚び起して、その空隙を埋めると、其症状を起した事情も自然に取除かれるやうになると説明した。

フロイユルの此考は實に面白いが、フロイドによると不完全な所があるとせられる。ヒステリーの症状を研究すればする程、フロイユルの擬眠状態の説明には限度があつて、現象全部を説明し盡すことが出来ない。勿論最初から完全な原理を發見することは困難である。フロイユルの此考は氏の思索の子供に過ぎないもので、決して事實の偏見的攻撃に基いた結果で無いことは無論である。只フロイドから見ればフロイユルの考は不充分であるといふに過ぎない。併しこの擬眠状態以外に如何なる影響・如何なる過程が行はれつゝあるかのフロイドの考を述べ

る前に、プロイエルと同時に佛國巴里のサルペトリエール病院で研究をつゞけて居たシャルコーの考と、ヒステリーの心理的過程を深く徹底的に研究したジャンネーの考とを紹介する必要がある。

プロイエルとフロイドとがヒステリーの淨下の療法より出立して、該症狀の心理的機制に就て意見を發表したる時に、シャルコーは他の方面より同様の事實を研究しつゝあつた。心的外傷に關する患者の經驗は、シャルコーの主張したヒステリー性麻痺に影響を及ぼす身體的外傷と相對應するものである。又プロイエルの擬眠状態の假設は、シャルコーが催眠術を用ひて人工的にこの外傷的麻痺を再生せしめた事實と相響應して居る。シャルコーの生徒であつたジャンネーはヒステリーの心理過程を深く研究し、人格の分裂並に轉換に關する精確なる研究を遂げた。ジャンネーは又當時佛國で流行して居た遺傳と變質との原理の上にヒステリーの理論を建設した。即ち氏によると、ヒステリーは神経系統の變質的變換の一形

式で、心的綜合作用が先天的に薄弱なるものであるとして居る。従つてヒステリ―患者は最初から多様な心的過程を相關せしめ、綜合することが出来ない。爲めに心的分裂の傾向が生じてくる。今卑近な例を以てシャネーの考を説明すると、ヒステリ―患者は力の弱い婦人に比すべきである。その婦人が町に買物に行き、品物や受取證で兩手が一杯になるまで買込み、今將に歸途に就かうとする。その時一つの品物が手から滑り落ちる。それを拾ひ上げると、他の手がゆるんで他の物が落ちるといふ有様に比較すべきである。

併しフロイドによると、かやうな精神薄弱を以てヒステリ―全部の症狀を説明することは出来ないと言つて居る。一部が弱くなれば、一種の補償作用として、他の機能の増進を來たすものである。かのプロイエルの患者が一方に母國語を忘れた代りに、彼女の英語の能力は、獨逸語の本を一目見るや否や直ちに流暢に巧みに翻譯することが出来る位になつた。フロイドがプロイエルによりてより提唱

された研究をつゞくるに及び、意識分裂の原因に關する見解が、ジャネーのそれと異なるを發見した。蓋しフロイドの出立點がジャネーのやうに實驗室の研究でなく、救治法を目的とした爲であらう。又實際的療法に於ても、プロイエルは患者を催眠状態に導いた。蓋し前述の如く催眠状態では、患者の正常態では全く知られない病源的状态に歸ることが容易である爲めである。しかしフロイドは催眠状態に患者を導くことは全く奇異なことで、謂はゞ神祕的であるので、この方法が嫌ひになつた。殊に氏は努力しても時々患者を催眠状態に導くことが出来ないので、益々嫌になり、遂にこの方法を放棄してしまひ、淨下的療法を催眠術と全く獨立的に行ふに至つた。

かやうにフロイドは、氏の欲するまゝに屢々患者の精神状態を變化することが出来なかつたので、患者の正常態に於て何等かの治療を施さんと苦心し初めた。之は從來醫者も知らないし、患者も知らなかつた何物かを發見しようとするので、

最初の間は全く無意味且無目的の企てであるやうに見えた。種々苦心の結果、フロイドが嘗てナンシーに居た時に見たペルンハイムの治療法に思ひ當つた。ペルンハイムは患者を催眠的睡遊状態に導きて種々の経験を興へ、その経験したことを常態に回復した後でも記憶するやうにした。氏がその患者に睡遊中何事を経験したかを尋ねると、最初は彼等は何も記憶しないと答へる。併し氏が必ず其を知つて居るに相違ないと固執し断言すると、患者は何時もその忘れたと稱する経験を想起することが出来たのである。フロイドはこの方法に倣つた。即ち患者に向つて種々の質問を試み、患者が最早何にも知らないといふ點に達すると、必ず知つて居るに相違ないと断言し、是非言はなければならぬと主張する。且つフロイドが患者の前額に手を當てた瞬間に表はれてくる記憶は正當のものであるといふことを患者に向つて断言し、以て患者の記憶再生を促した。かやうにして氏は催眠術を施すことなくして、忘られたる病源的状態と、後に残された症状との關係を

構成するに必要な凡ての事項を患者より知ることが出来た。尤もこの方法は仲々面倒な仕事で、その手續も永くかゝり、實に根氣が盡きる位であるので、完全な方法といふことは出来ない。しかしフロイドはその得たる材料から確實なる結論を引出すまでは決して中止しなかつた。而して忘られたる記憶は決して失はれるものでないといふ事實を確かめた。此等の記憶は常に患者の所有する所で、機會があれば何時でも外部に表はれんと用意して居る。併しそは他の心的内容と聯合し、且他の力によりて無理に抑壓されて意識下に潜在するを餘儀なくせられて居る。而してこの力が存在して居るといふことは確實に假定することが出来る。蓋しこの無意識的記憶をこの力に反抗して意識面に引き出すことを企つると、患者はその力に打勝つ爲めに努めた自己の努力の感を得るからである。又病的状態を維持して居た此力の觀念は患者の抵抗よりして明かにすることが出来た。

三、抑壓作用

フロイドはヒステリーの心的過程の原理の基礎を前に述べた抵抗の觀念に置いた。患者を救済するには、必ずこの力に打勝つやうにしなければならぬといふことが發見された。この治療の機制が發點となつて確實なる原理が亦構成せらるゝに至つた。現時忘られた觀念が意識に表はれてくることを妨げて居る抵抗力は亦病源的經驗を無意識界に押込めて之を忘却せしめた力と同一であるに相違ない。フロイドはこの假定的過程を抑壓作用 (Verdrängung) と名づけ、そは抵抗の存在によりて確かに證明せられると考へた。しかし茲に疑問となるのは、此等の力は抑_し何であるか、又この抑壓を生ずる條件は何であるかといふことである。淨下療法により治癒された病源的状态を比較研究することによりて、此等の疑問は解決せられる。凡て此等の經驗から考へると、患者の精神中に一の願望が生ずる。その願望は個人的で他人の願望と相容れないもので、従つて患者の人格の倫理的・美的・私人的主張と一致することの出來ないものである。茲に於て兩者の間に争が

起り、その結果觀念の抑壓を生ずる。而してその觀念はこの相容れない願望の支持者として意識に表はれるが、願望そのものは抑壓されて全く忘れられてしまふ。この觀念と患者の自我とが相容れないことが抑壓の動機となり、個人の倫理的又はその他の虚飾が抑壓する力となるのである。相容れない願望の存在、換言すれば争鬭の繼續が強度の心的苦痛を生ずるやうになり、この苦痛は抑壓作用によりて免かれることが出来る。故にかゝる場合にはこの抑壓作用は人格保護の一考案たるや明かである。

この抑壓作用の條件と效用とを明にする爲めに、茲にフロイドの一患者の例を簡単に述べ必要がある。その患者といふのは若い婦人で、前に述べたブロイエルBrodyの例と同じく父親から非常に愛されて居たが、少し以前にその父が死んだ。その姉が結婚すると、どうした譯かその姉の夫に對し特殊の同情を生じ初め、遂には互に相親しくするやうになつた。患者と母とが他行して居る間にその姉は病氣に

罹つて死んだ。それでこの姉の家ではこの悲惨なる有様に就ては充分に知らせず、兎も角早く歸宅するやうにと患者母子に言つてやつた。その患者が歸つて來て、死んだ姉の枕元に立つた時に、「彼の人は今は自由の身で、私と結婚することが出来る」といつた様な觀念がフイと心中に浮んだ。この觀念は明かに彼女が姉の夫に烈しき愛を有して居たことを裏切して居る。勿論彼女は今までその男を愛して居たとは意識して居ない。而して次の瞬間にはその觀念は不倫な心を起したものだとして抑壓されてしまつた。この女が烈しいヒステリーに犯されて、フロイドの治療を受けに來た時には、全く前述の光景を忘れ、不自然な利己的欲望を起したことも回想することが出来なかつた。所が治療を施す間に、此等全部の經驗が烈しき情的興奮を以て憶起され、遂に病氣が治つたといふことである。

この抑壓作用といふことはフロイドの學說の根本になるから、手近な例を取つてこの意義をもつと明瞭にする必要がある。今茲に私が講室に於て講演をして居

ると假定する。多勢の人は靜かに私の講演に耳を傾けて居るのに、或一人があつて妙な笑をしたり、高聲を發したり、或は足摺りをする。それで私はかやうな噪しい所では到底講演を續けることが出来ないと言ふと、聴衆の中から或力強い者が二三人表はれて、その暴漢を取抑へて室外に引ずり出したとする。かやうにしてその男は今抑壓されて私は再び講義をつゞることが出来るのである。所がその暴漢は再び私の講演の妨害を試みん爲め室に入つて來ようとする。それで私の要求によりて戸の開かないやうに聴衆の一人が戸の側に行つて其の戸を確乎と抑えて居る。これが即ち抑壓を維持する爲めの抵抗といふのである。而してこの講室の内部が意識界、外部が無意識界に比較せらるゝ。かやうにフロイドの考を説明して來ると、ジャネーの原理と大に相違して居ることが明白になつて來る。即ちジャネーは、人格分裂を以て經驗を綜合する力の缺亡に歸して居るが、フロイドは之を動的に説明する。即ち相對立する精神力の闘争の結果であるとする。しか

し茲に反駁論が起り得る。フロイドのいふ如く鬭争が分裂を引起すとせば、吾人の日常生活にては精神内部の鬭争が常に起り、苦痛の情に對し自我を保護せんとする企ては隨所に生じて居るが、精神分裂を惹起することはないと。フロイドは之に對して、鬭争によりて分裂を生ずる場合には、或他の條件が附加せられることを許さなければならぬ。しかしそれは現時の知識では充分明瞭になつて居ないと答へて居る。

次にフロイドの救治法に關する考を、前述の講演の例を以て説明すると次の如くである。聴衆の一人が戸を抑へて暴漢の入り來るを防いで居るが、暴漢は中に入りたがつて遂に狂ひ出して、大聲を發し、拳を以て戸をどん／＼叩いて尙も妨害を試みるとする。その時或有力者が出て來て、その暴漢を説諭し、最早初の様な亂暴をしないと云ふ保證の下に室内につれてくるとする。かくしてその有力者の勢力の爲めにその暴漢も靜まり、最早戸を抑へる必要も無く、聴衆は凡て靜か

に講演を聞くことが出来る。この有力者の役目が即ち精神分析をなして治療を施す醫者の職分である。ヒステリーや精神病患者は、反抗する願望を充分に抑壓することが出来ず、之を無理に意識又は記憶の外に逐ひ出して、漸く精神的苦痛を免かれて居る。所がその願望は機會さへあれば意識内に闖入しようとする無意識界に潜んで待かまへて居る。故に茲に人ありてその抑壓を取り去つて、願望を解放せしめると自づから病氣も平癒するのである。

フロイドが精神病患者を研究した経験の範圍によると、この無意識界に抑壓された願望は凡て性的衝動から構成されて居るといふことである。實に精神病の症状は性的衝動にその原動力を仰ぐ努力を代表して居ると言つてよい。凡ての精神病者の模型と考へられるヒステリー患者の、その病に罹る以前の性格と、其病症の原因とを知悉する時には、如上の主張が正當であることが分る。ヒステリーの特性は、通常の限度以上に達した性慾抑壓の一部、即ち羞耻及び嫌惡として知られた

性的衝動に對する抵抗力の擴大を明示する。粗雜な觀察でも往々ヒステリー患者に於て性慾が著しく發達して居ることを知ることがある。しかし精神分析を行ふと、此事實が常に明かになる計りでなく、烈しき性的欲求と擴大されたる性慾拒絶とが相對立して存在することの證明によりて、この矛盾に満ちた謎の如きヒステリーが解決せられる。若しヒステリーの素因を有する人が漸次成熟期に達するか、或は生活の外部條件の爲めに、眞の性的欲求と對抗するやうになると、直ちに其病症を惹起すものである。欲望の急迫と性慾拒絶の反抗との間に、一の遁路が出来る。この遁路は苦悶を除去するのではなく、淫慾的努力を症狀に變形せしめて苦悶を洩らさうとするのである。假令ヒステリー患者が或他の情緒的故障を被り、其苦悶の中心が性慾に關係してないやうに見えても、其は單に外見的に過ぎない。蓋し無意識界に抑壓された觀念が意識に上つて來る場合には、往々變装した代表者を送るからして、抑壓觀念そのもの、真相を捉へることは困難である。

所が精神分析法はよくこの假面を剥ぎ取りて、苦悶の性的成分を剔出することが出来る。而してこの變裝作用は如何にして起るか、又如何なる風に行はるゝかに就ては第三章「夢の解釋」の時再び論ずることにし、次章に於てはフロイドが如何にしてヒステリー患者の精神分析を試みたか、又如何にして其病症を治療したかに就て述べよう。

第二章 分析的療法

一、一ヒステリー患者の治療

従來精神療法として多く用ゐられて居たのは所謂暗示療法であつた。即ち患者を催眠状態に導き、之に暗示を與へてその病根を絶たうとするのである。所がこの暗示が種々の妨害的要素の爲めに甘く利かないことが往々ある。それでフロイドは前に述べた様に談話療法なるものを發見した。即ち病根となつて居る情的經驗を充分に發表せしめて之を救治するといふ、所謂淨下法を用ひた。フロイドもこの方法に倣つて偉大な効果を見た。しかしその病源的經驗を搜るにフロイドは催眠術を用ゐたが、フロイドはこの催眠術を用ゐることは凡ての患者に應用し難いことを看破し、かのベルンハイムの方法を參考として、遂に患者を覺醒状態に置きながら、その病源的經驗を檢索し之を救治することを發見した。之が氏

の所謂分析的療法である。その方法は極めて簡單であるだけ、又中々の技倆と忍耐とを要する。今その方法を明にする爲めに、フロイドが精神分析法を行つてヒステリー患者を救治した二三の實例を紹介しよう。

氏の方法は至つて簡單である。靜かに椅子に腰かけさせ、或は仰向に寝させて後、例へば「何時頃からこの症状が現はれたか」とか、或は「何處からこの症状は來るか」といふやうな問を發する。患者はこの時多く「知りません」と答へる。それで氏は患者の前額部に手を當て、或は兩手の間に患者の手を挟みながら、「私が手を壓すと其事柄があなたの心の中に表はれて來ます」と言ふのである。氏が暫時壓した後それを止めて、「どんなものがあなたの目の前に表はれてきましたか」とか、「何かあなたの氣付くやうな事柄を思浮べたでせう」と尋ねる。しかし或點まで行くと患者は又「何にも見えませぬ」とか、「何にも心に浮びません」といふやうになる。さうすると氏は又前の方法を繰返した。甚だしい時は三四回頭を押

すことがあるといふことである。さうすると患者は漸く「さうです最初その事に氣付きましたが、しかしそれを御話しなくなつたのです」とか、「どうかこんなことがないやうにと望んで居ます」などと言つて、遂に白狀するに至るものがある。氏は即ち患者は病源的意義を有する孰れの事項をも知つて居ると言ふ假定に基いて患者の答を要求するのである。かくして氏は患者を睡遊状態に導くことな
くして、氏の欲する凡ての病源的材料を得ることが出来たといふことである。

氏は嘗て諸種の苦悶例へば臨場苦悶・死に對する恐怖等を有する三十八歳の婦人患者の分析を試みた。この種の患者に多く見らるゝやうに、彼女もこの病氣が結婚して後に起つたといふことを拒み、ずつと若い時からこの病に罹つて居たと
言つた。即ち彼女は十七歳の時彼女の生れた小さい町の街道で初めて眩暈・苦悶・失神を起し、二三年前今の病氣になるまでは時々如上の發作が去來したと言つた。
フロイドはこの最初の眩暈がヒステリー性で、之を分析する必要があると考へた。

彼女の知つて居る所は只その町の大通りの所で買物をしようと思つた時に初めて眩暈が起つたといふことだけである。「何を買はうと思ひましたか」とフロイドは尋ねた。「いろんな物——舞踏會に招かれたので其準備をする爲めの物と思ひます」と患者は答へた。「何時その舞踏會はありましたか」「二日後だつたと思ひます」「舞踏會の二三日前に何かあなたを興奮させる事があつて、それが深い印象を残したに相違ありませんね」「いえ私は何にも知りません、何にしる二十一年以前のことですから」「年數なんかはどうでもいいですが、あなたはその事を思ひ出すせう、私が暫らくあなたの頭を手で壓しますから、それを止めた後あなたは何かを見或は考へるでせう。それを私に言つて下さい」。フロイドは手を彼女の頭の處に當て、壓したが彼女は黙つて居た。「何にも心に浮びませんか」「私は何か考へて居ました。しかしそれはこの事と丸で關係のないことでした」「いや一寸それを言つて御覽なさい」「私は死んだ若い娘のことを考へて居ました。その女は私が十八

の時即ち一年後に死にました」その事に就て少し吾々は御話しませう。あなたの
お友達はどうしたんですか」その女は最も親しい友達でしたから、その女の死ん
だことが非常に私の心を動かしました。町内で評判の若い娘が又二三週間前に死
んだ。丁度その時私は十七歳でした」そら御覧なさい、私があなたの頭を押した
ので、手がよりになる考が浮んできたでせう。それであなたは初め街道で眩暈を
感じた時に何と考へて居たかを言ふことが出来ますか」何にも考へて居ませんで
した。だゝ眩暈がただけです」それは不可能です。かやうな病氣は必ず何かの
思想に伴つて起るものです。も一度あなたの頭を押へませう。さうすると考へ出
せませう。さあどんなことが心に浮んできましたか」あゝ私が三番目だといふこ
とが心に浮びました」それは一體何といふ意味ですか」私が眩暈を起した時に、
私も他の二人のやうに死にはしないかと考へたに相違ありません」なる程發作の
時にあなたの友人のことを考へましたね。その友人の死が非常な印象をあなたに

與へたに相違ありませぬ」はい全くです。私は友人が死んで居るのに舞踏會に行かなければならぬかと思つて非常に恐ろしく感じました。しかし舞踏會の面白さを思つたり、又招待されて居ると思つたりすると、こんな悲しい友人の死などの事に就て考へたくないと思ひました」。

かくして發作の原因が大分説明せられた。しかしこの觀念を生じた際の四圍の事情を知る必要がある。フロイドは偶然にもこれに就て旨い想像を畫いた。「あなたはその時どちらの通りを歩いて居たか覚えて居ますか」「確に古い家のある大通りだつたと思ひます。今その通りが目に見えます」「あなたの友人はどこに住んで居ましたか」「同じ通りです。私は丁度その家の前を通りました。通つた後二軒目位の所で發作が起りました」「そんならその家の處を通つてあなたの死んだ朋友のことを思出し、又之に對してこんな事は考へたくないと思ひましたね」。しかしフロイドはまだこれにて満足しなかつた。かやうに常態であつた婦人をヒステリーに

した原因がこの外にあるに相違ないと考へた。即ち月經時と關係をして居ないかと思像して氏は次のやうに尋ねた。「あなたは通常毎月何日頃月經がありますか」茲に於て彼女は少しく怒つて、「あなたはそんなことまで聞かうとするのですか。私は月經が極めて稀で且不规则であつたことだけを知つて居ます。十七歳の時は只一度だけでした」「そんならその月經のあつた時を知る様に日と月とを數へて見ませう」。月ははつきり答へたが、日は多少曖昧で、例祭日の前日か或はその前々日であつたと答へた。「その祭日と舞踏會の日とは餘程違つて居ましたか」。彼女は靜かに答へて曰く、「舞踏會は丁度その祭日の目でした、今思ひ出しましたが、一年にたゞ一度あつた月經が、丁度舞踏會に行かなければならぬ時に初まつたといふので非常に私は感動しました。殊にその舞踏會へは初めて招待されましたので」と。茲に於て事件の聯絡が全く明白になり、ヒステリー發作の機制が分かつてきた。二十一年前の記憶を喚び起すやうにしたフロイドの手際と苦心とは非常なも

のであると言はなければならない。而してこの古い記憶即ち心的外傷が喚起されてその血路を見出したと同時に、此患者のヒステリーは全癒せられたといふことである。吾人は次に他の實例に就て氏の方法を紹介しよう。

二、R嬢の回復

千八百九十二年に同業者の一人がフロイドに一婦人R嬢を診察して貰ひたいと言つて來た。その同業者の一人はその婦人を慢性の化膿的鼻加答兒と診断し、後には節骨潰瘍と診断してその療治を行つた。處が最近になつて如上の局部的障害でない一新症狀に悩まされた。即ち彼女は匂に關する凡ての知覺を失ひ、只二三の主觀的匂ひの爲めに絶えず悩まされて居る。その爲めに彼女の精神も憂鬱となり、頭も重く、食慾も減退し、何にも仕事をする元氣がないとこぼして居る。この婦人の身元を尋ねると、ボンナ市の郊外にある工場監督の家庭教師で、身體はどつちかといふと瘦せた方で貧血であるが、しかし鼻の病氣以外には健康であつた。

彼女の最初の話は前の醫者にかゝつた時のことで、氣がふさいで、身體がだるく、主觀的嗅覺で困つて居るといふことである。ヒステリー性症狀としては一般に痛覺が喪失して居ることで、視野の狹窄は表はれなかつた。鼻粘膜は全く痛覺喪失し、無反射の有様である。嗅覺もアンモニヤや醋酸性の特殊の匂ひに對して全く失はれて居る。但し化膿性鼻加答兒は餘程よくなつて居た。

この症狀を理解するに當つて、先第一に匂ひの主觀的感覺はヒステリーの症狀を示す回歸的幻覺と考ふより外は無かつた。憂鬱は心的外傷に屬する情緒で、現在の主觀的匂ひが客觀的に存在した時の出來事があつたに相違ない。この出來事がその心的外傷となつたに相違なく、その外傷の表號が即ち嗅覺として記憶中に去來するに相違ない。寧ろこの憂鬱状態を伴ふ匂ひの幻覺がヒステリー發作と同一物であると考へた方が適當かも知れない。而してこの主觀的匂ひはその初め或一定の實在的對象であつたらうと聯想せらる程特殊の發達をなして居る。然るに此

豫想は全く適中した。即ちどんな匂に苦しめられるかと尋ねたら、彼女は饅頭の皮の焦げる様な匂ひだと答へた。それでフロイドはこの焦げる匂ひがこの外傷的出来事の中に實際に起つたと推定した。嗅覚が心的外傷の表號となることは極めて稀有のことではあるが、彼女は化膿性鼻加答兒であるので、鼻及びその感覚が彼女の注意の焦點となり、従つて記憶的表號に嗅覚を選んだのは無理もないことであらう。この患者の經歷に就てフロイドの知つてゐる所は、只二三年前急に死んだ婦人の二人の遺子の面倒を見て居たといふことだけであつた。

茲に於てフロイドはこの饅頭の焦げる匂ひを精神分析の出發點としようと決心した。氏は最初この患者を催眠状態に導かうとしたが、睡遊状態まで引入れることが出来ず、遂に之を中止して殆ど常態と等しき状態に於て分析を初めた。彼女はこの時目をつぶつて手足を少しも動かさずに居た。フロイドは彼女に向つて「どんな場合にこの焦げる匂ひを初めて感じたか覚えて居ますか」と尋ねた。彼女は

答へて曰く「はいよく存じて居ます。其は約二ヶ月以前で私の誕生日の二日前でした。私は二人の女生徒と教室で遊びながら料理を教へて居た時に、配達夫が持つて來た手紙を受取つた。その手紙の消印と書體とから直ちにグラスゴー市の母から來たのだと知り、其を開いて讀みたいと思つた。その時一人の生徒が走つて來て其の手紙を取り去り、「今讀んぢやいけません、それは多分誕生日の祝ひの手紙でせうから、誕生日までそのまゝなさいよ」と云つた。生徒等が遊んで居た時に不意に烈しい匂ひがして來た。そは彼等が料理をして居た饅頭を焼き放しにして、忘れて居た爲めに焦けたのです。それ以來私はこの匂ひに惱まされて居ます。何時もこの匂ひが表はれて來ますけれど、興奮した時が殊に著しく表はれて來ます」。

「その光景が目の前にはつきり見えますか」「はい私が經驗した時と寸分違はない位はつきりと見えます」その時何がそんなにあなたを感動させましたか「子供が

私に對して非常に親切であるといふことで、「しかし何時もそんなに親切ですか」
「はいしかし丁度私の母から手紙が來ました」「子供の親切と母からの手紙とがど
うして相對立して考へられたか私には分りませんが」「それはかうです、私は母の
所に歸らうといふ考がありました。そして此の可愛い子供達を残して行かなけれ
ばならぬと思ふと氣が鬱いで來ました」「あなたのお母さんはどうしたんですか、
あなたに歸つて貰ひたい程淋しいのですか、それとも病氣であつて何とか音信が
ないかと豫期して居たのですか」「いえ母は弱いたちですけれど病氣ではありませ
んでした。又友達も持つて居ります」「そんならどうしてあなたは子供を残して歸
らなければならぬのですか」「この家に居ることが私に堪へられなくなりました。
主婦・料理人・佛人の女中などが私が餘り高慢過ぎると思ふやうです。彼等は一致
して私に對し何事かを目論見、子供の祖父に私の事に就て陰口をしました。それ
で私はその事に就て二人の紳士に訴へましたけれど私の豫期した保護を得ません

でした。それで私は主人即ち子供の父に暇を貰ひたいと言ひましたら、その主人は大變親切な人で、私に最後の決定をする前に二週間計り再考したらよからうと言ひました。前に述べた事件は丁度私がまだ決心しない時に起りました。あとに氣は残りましたけれど遂にその家を去らうと決心しました。子供に氣が引かれる以外に何か特別に心残りのすることがありませんか。はいあります、子供の母は私の母の縁類に當りますので、子供の母が病氣で死なうとする際、私は眞の母になり代つて全力を盡して子供を養育してやらうと約束しました。所が今此家を去るとその約束を破ることになります」。

茲に於て主觀的嗅覺の分析は完了したやうに見ゆる。その匂ひは嘗ては客觀的に存在し、其が一の經驗と密接に聯合するに至つた。而して其經驗は二つの相反する心情即ち子供を置去りにする悲しみと之を抑制して其家を去らうとする決心との争闘である。母よりの手紙はこの決心の動機を再生せしめたのは自然である。

而して此等の争闘が昂じて遂に心的外傷となり、その匂ひはその外傷の表號となつて残つたに相違ない。この外傷的經驗の際には幾多の感官知覺があつたに相違ないのに、何故に特にこの嗅覺がその表號となつたのであるか。そは彼女が慢性的鼻疾によると説明するより外にないやうである。殊に彼女の話によるとその際烈しい鼻感冒に犯されて居て、饅頭の焦げる匂ひの外何にも嗅ぐことの出来なかつたといふことである。この説明は至極尤もであるやうに見ゆるが、フロイドはこれでどうも満足が出来ず、なにか其處に足りない所があるやうに思へた。この情緒の争闘と、興奮的刺戟とが何故にしかくヒステリーを引起したか。何故に此等は凡て通常の心理的基礎を作るに止まらなかつたか。何故に彼女はその經驗の表號として匂ひを再生して、經驗そのものを再生しないかといふのがフロイドの腑に落ちなかつた疑問であつた。

蓋しかやうな數多の症狀を分析した經驗のあるフロイドは既に或事件の表現が

故意に意識下に抑壓せられて、聯合的の同化以外に放逐せられて居ることを知つて居るからである。かやうに故意に抑壓せられると、その興奮の一部又は全部は他の形を取るやうになる。而して往々正常の道を通らず身體的の神經力の方に其活路を發見するやうになる。この抑壓を生ずる理由は不愉快なる感情、即ちその抑壓される觀念と支配者たる自我との不兩立に基づくのである。而してこの抑壓觀念は病源となりてその抑壓された腹癢やせをする。フロイドはこの患者にも之と同じく故意に忘れようとして苦んだことがあるに相違ない。而してそれが彼女の病源となつて居るに相違ないと推測した。殊に彼女が子供に對する執着心と、其の家に居る他の召使に對する嫉妬とを考へて見ると、何か外に病源となるべき事件があるに相違ないとフロイドは大膽なる解釋を敢てした。即ち氏は此等の凡ての事件が單に子供に對する愛情にのみ基づくとは思へない。或はその主人を愛して居たのではなからうか。又母の位置を占めたいと思つたのではなからうか。勿論そ

れは覺えず知らざる中に起つた事であらう。而してこの主人に對する愛よりして、數年間平和に暮して居た家の召使に對し敏感となつたのではあるまいか。しかし彼女はこの望みを氣付かれはしまいか又は嘲笑を受けはしまいかと恐れたに相違ないと考へ、氏は大膽に彼女にその旨を尋ねて見た。所が彼女は極簡單に「はいさうだと思ひます」と答へた。「主人を愛して居たと知つて居て、どうして其を私にお話になりませんか」「私はそれを知りませんでした。いや寧ろ其を知らうと望みませんでした。私はこの事を私の心から逐出して、少しもその事に就て考へまいと望みましたが、遂に望み通りに忘れて仕舞ました」「なぜあなたはそれを考へることを好みませんでしたか。あなたが一人の男子を愛することを耻しいと思つたのですか」「いえ私は理由なしに淑女ふるものではありません。又人は自己の感情に對して確かに責任はありませぬ。只私が苦しんだのは、その愛する人が私を使用して居る傭主であり、又私はその家に住んで居るので、その人に對して

は他の人に對する程不羈獨立に感ずることが出来ませんでした。これよりも尙一層苦にしたことは、私は貧しい女であるのに、彼人は有名な家柄に生れた資産家です。それで若し私があの人を愛してゐるなど、氣づかれでもしたらば、私は嘲笑の的となりましたでせう。

この後フロイドはその愛情の起りに就て充分細かに聞くことが出来た。彼女の談によると、その家に傭はれて來た最初の一年は何事も無く過した。この實現し難い望に就て少しも考ふことなく彼女の義務を果した。しかし或日眞面目で、忙がしく且極めて控目な主人が、子供を育てることの困難に就て彼女と話を交へた。話を進める間に主人は平常よりも優しく懇ろになりて、孤兒の養育に對して彼女に如何に多くを期待して居るかを告げ、稍異様な目つきで彼女を見た。この瞬間に彼女はその主人を戀し初めて、その後は會話の際に氣付いた喜ばしき希望に満たされて居た。しかしその後何にも起らず、彼女の期待に拘はらず、心と心

と話を交はすやうなことなく、爲めに彼女はこの事を彼女の心から逐ひやらうと決心した。而して前記の異様な目つきは恐らく死んだ妻の記憶の爲になされたのであらうといふことはフロイドと一致した意見であつた。かやうにして彼女は此の愛が全く望みのないことを確信した。

この會話の後フロイドは彼女の狀態に確然たる變化を豫期したが、その當座は何等の變化も起らなかつた。彼女は相變らず憂鬱狀態を持續し、フロイドが水治法を命じて朝の間多少快活になつた。饅頭の焦げた匂ひは大分弱くなり且つ稀になつたが、全く消失するに至らず、精神が興奮する時には何時も現はれて來た。かやうに何時までも記憶表號が繼續して居ることからして、フロイドは、此の主要なる光景以外に尙多くの技藝的外傷があるに相違ないと考へ、兎に角その焦げる匂ひと聯關した居さうなあらゆる事實を搜索した。かくして彼女が家内の不和に關すること、祖父その他の人々の行動に就て氏と話をするに至つて、漸次に焦

げる匂ひの感覺がなくなつて來た。彼女が歸宅してからフロイドに手紙を送つて、彼女は兩人の紳士並に傭人等から彼女を慰藉する爲めに、多くのクリスマス物の贈物を貰つたことや、先月の苦しい思ひ出は悉くとれて仕舞つたことなどを報じて來た。

その後フロイドはかの焦げる匂ひに就て彼女に尋ねた所が、その匂は全く消失したけれど、又新しい他の匂ひ、云はゞシガターの煙のやうな匂ひに苦しめられて居ると言つて來た。この匂ひは以前存在して居たに相違ない。唯焦げる匂の爲めに蔽はれて居たが、その匂ひが取れたので今現はれて來たのであらうとフロイドは考へ、自己の療法があまり成功しなかつたことを大に不快に感じた。蓋し症状の療法のみを行ふと、一の症状が除去されても、それは單に他の症状の餘地を作るのみであると非難せらるゝが、氏のこの度の治療は亦之に類して居るからである。しかし氏は直ちに又精神分析を行つてこの新しい記憶表號を除去しようとした。

この時氏はこの主觀的匂ひがどうして起つたか、又どんな重大な場合にそれが客觀的に存在したかを知つて居なかつたことは無論である。

種々と尋ねた結果氏は次のやうな答を得た。「彼等は絶えず家で煙草を飲みます。私が感ずる匂ひが或特殊の意義を有するか否かを知りませぬ」と。それで氏は手で頭を抑へて居る間に其事件を回想するやうにと彼女に求めた。既に明かなるが如く彼女の回想は成形的で、視覺型に屬して居る。フロイドの手の壓の爲めに心像が斷片的に徐々と現はれて來た。或日紳士が食事の爲めに工場より歸つてくるのを子供等と共に食堂に待つて居た。「今吾々は凡て食卓に就て居ます。紳士も、佛蘭西の女中も主婦も子供も私も一處に。それはいつもの通りです」。一寸その心像をつゞけて眺めて居らつしやい。それはすぐに發達して一々細かく見えませう」。はいそこにも客が一人居ます。それは會計長で、眞實の祖父のやうに子供を可愛がつてくれる老紳士です。よく吾々と一處に食事をするので、別に不思議

の來客と思ひません。」「も少し辛抱なさい。そしてその心像を見て居らつしやい。何か慥かに起つてくるでせう。」「何事も起りませぬ。吾々は食卓を去り、子供もそこを離れて、いつもの通りに第二階に登りて行きます。」「どうですか。」「そこに實際不思議なものがあります。今私は其光景が分かりました。子供が食卓を去らうとする時、其會計長に接吻をしようとした所が、私の主人が飛び上つて會計長に向つて「子供を接吻して下さるな」と叫びました。その時私は針でちくりとさされるやうに感じました。その紳士は煙草を飲んで居たので、その匂ひが未だ記憶に残つて居ます」。

此が外傷を生じ記憶表號を残した第二の根蒂深き光景であつた。しかし何故にこの光景がしかく印象深いのであるか。それでフロイドはこの光景と前に述べた焦げる匂を生じた光景と何れが先きであつたかを尋ねた。「この光景が約二ヶ月ばかり先きに起りました。」「あなたは何故に主人の干涉をさう烈しく感じたのです

か。なにもあなたを面責した譯でもないのに」。「親友であり且つ來客である老紳士をこんな風に面責するのは善くありません。もつと靜かに言ふ仕方もありますのに」。「そんならあなたは主人の性急の爲めにそんなに感動したのですか。その行爲が紳士として愧づべき行爲であると考へた爲ですが、或は又かやうな些細な事位に老紳士を責める程亂暴な人と若し結婚したならば、妻たるあなたをどんなに取扱ふであらうかと考へた爲ですか」。「いゝえさうではありません」。「そんなら單に主人の性急な行爲の爲めですか」。「其は子供を接吻することに就てゐず。主人は子供を接吻することを好みませぬ」。かくしてフロイドの手壓の爲めに、眞の病源となつた昔の光景が漸次に展開されて來た。

この事件より二三ヶ月以前に婦人の朋友がその家を訪ねて來て、歸る時に子供の唇を接吻した。子供の父は其處に居たが、此時は我慢して何事をも言はなかつた。その婦人が歸つた後で、主人は大變に彼女に向つて怒り、此接吻に對しては

女傳たる彼女の責任であると言ひ、こんな事を黙過しないのが彼女の義務であると責め、若し再びかやうな事があれば子供の教育を他の人に依托しなければならぬと告げた。この事件は彼女が主人から愛されて居ると信じ、再び親しい會話があるだらうと期待して居た時に起つた。この出來事が彼女の希望を全く破壊してしまつた。この時彼女は「若し主人がかやうな細事の爲めに全く無辜である私を非難し威嚇することが出來るとすれば、主人が私に對して親切な心を持つて居ると思つたのは私の誤りであつたに相違ない。若し私を愛して居たとすればもつと親切でなければならぬ」と考へた。その後主人が子供の接吻のことで老紳士を面責した時に、この苦しい光景が再び彼女の心に現出したことは當然である。

フロイドがこの最後の分析を行つてから二日目に彼女は氏を訪問した。彼女の容貌は全く一變して、微笑を含み、頭も高く上げて居た。それで氏はその瞬間に彼女の事情をこれまで誤つて解したかも知れない。恐らく子供の女傳は今や主人

の花嫁となつたのではなからうかと考へ、何か愉快なことでも起つたのですかと彼女に尋ねた。しかし氏の想像は全く當らなかつた。即ち彼女は、「何にも新らしい事は起りませんでした。あなたは私が病氣で憂鬱であつた時常に私を見て居ましたから、今の私をあなたは知らないのです。今私は愉快です。昨朝目を覺ました時に私の重荷がすつかり下りて、其以後は非常にいゝ氣持です。」「あの結婚の機會に就ては何と考へますか。」「その事は今全く明了になりました。私はその機會が全く無いことを知つて居ます。又そのことで私を不幸にしようとも思つて居ませぬ。」「家の内の他の人々と仲好く暮して行けると思ひますか。」「行けると思ひます。面倒の起りは凡て私の神經過敏の爲でしたから。」「あなたは尙主人を愛しますか。」「はい愛します。しかしそれが何にも私を煩はすことはありません。人は自分の欲する通りに考へることも又感ずることも出來ますから。」「

此時氏は彼女の鼻を診察したが、痛覺と反射作用とが殆んど完全に回復され、

又匂ひを區別することも出来た。但しその匂ひが餘まり強い時は判別が不確實であつたといふことである。この全き治療に九週間以上をも費したが、その後四ヶ月餘りたつてから、フロイドは氏の避暑地で彼女に不圖出會つた。其時彼女は快活で、相變らず健康も勝れて居ると告げたといふことである。

從來述べ來つた二個の實例は何れも軽いヒステリー患者の場合であつたことは勿論である。しかし其病氣の簡單なるに拘はらず、その中には多數の心的決定要素を含み、その發達變化の跡を知るに非常の苦心と勞力とを要する。従つて複雑なるヒステリーの場合の分析の困難は推して知るべきである。しかしそのヒステリーを引起す條件に至つては同様である。即ち自我と、それに近づいて來る或表象との間に不兩立が起る。爲めに自我はその苦痛に堪へ兼ねてその軋轢を免かれようと努める。しかしその反抗する表象を絶滅することが出来ず、其を單に無意識界に押込めるに過ぎない。この過程が自我より離れた新しい精神群を形成する

に至る最初の道程で、この押込められた表象が其群の核となるのである。而して後に得られた症状が以前の症状を蔽つてしまふから、後の症状を除去しなければ、最初に得られた症状、即ち其全病症の鍵を知ることが出来ない。かくして其分析が最後の鍵に到達した時初めてその病氣が突然と全治する。蓋し其は分裂したる精神群を無意識界に押込めて置くには非常な努力を要し従つて不愉快なものでそれが又種々の身體的症狀となるのであるが、その精神群を自由に意識界に持ち來つて自我と結びつけると、凡ての抵抗は除去せられ、不快の感の無くなると共に凡ての症狀をも消失するのである。之を又他の方面から解釋すると分裂精神殊に情緒などが無意識界にある間は絶えず氣まゝな働をして害をなすものであるが、一度それが意識界に入り來つて自我意識と結合するに至れば、吾人の最高精神活動の支配を受くる様になり、従つて吾人は之を自由に統御し得るやうになるのである。

三、分析的療法の範圍

この分析的精神療法によつて凡ての精神病が全癒せらるゝといふことが出来な
いことは勿論である。フロイドは自分が取扱つた経験よりして此療法の限度に就
て次の四項を擧げて居る。(一)この療法を施すには、其患者に一定度の教育があり
て、性格も多少信頼し得る程度のものでなければならぬ。従つて神經病的變質の
療法には不適當である。又自分の病氣の苦みから又は親近者の勧めによりて、この
療法を受けようと望む人でなければその効果がない。之を要するに分析的精神療
法の効果を示すには被教化性に由らなければならぬ。(二)精神病・混亂状態・著し
き憂鬱等はこの分析に不適當である。但し適當に手續を變更することによりて此
等の禁忌徴候を看過することが出来るであらう。かくすると精神病に對する精神
療法も可能となる譯である。(三)患者の年齢が此の分析に重大なる關係を有して
居る。五十歳近く又は夫以上の人は一方に其精神過程は可塑性、即ち被教化性に
缺けて居るから此療法に適當しない。又他方にかゝる老年の人は多くの経験を有

するからして、その一々の材料を抽出して之を治療するに多くの時日を要する。故に青年期の人或はそれ以前の人がこの療法に最も適當せる患者である。(四)ヒステリーの食慾欠亡の如き、急速に之を除去せざるべからざる症狀に對して此療法を行つてはならぬ。

かやうに制限的方面のみを列擧してみると、分析的₁精神療法₂の應用は極めて其範圍が狭いやうに思はれる。しかし尙應用の餘地は充分ある。例へば殘滓的表現を有する凡ての慢性ヒステリー、強迫觀念に襲はるゝ凡ての症狀、意識欠亡等にはこの療法を試みる事が出来る。但し此等の症狀に對しても合理的に此療法を行はなければ害を及ぼすことがある。フロイドは或醫者が此分析的療法の濫用をなした例を擧げて、この療法の科學的原理と技術的順序とを熟知せざる人が、この方法を取扱ふことの危険を述べて居る。そは一婦人がフロイドの所に來つて、どうしても一醫師の忠告に従ふことが出来ない₃と訴へて來た話である。其醫師の忠

告といふのは、彼女の病症は性的需要の不満足に基づいて居るからして、離婚した男の所に歸る方がいゝといふのであるが、此會談の後彼女の苦悶の感が却つて烈しくなつたといふことである。

フロイドは此醫師の分析的療法の濫用を悲しみながら、此場合に二個の誤謬があることを指摘して居る。第一は性慾といふ語を餘まり狹義に解して居る。これを只に身體的性慾に限るのは誤りで、凡ての心的方面即ち親切・同情・愛情等の念をも包含するのである。従つて心的不満足が必ずしも身體的性慾の不満足を伴ふものでない。而してこの心的性慾の不満足は之を満足する爲めに往々代表者を創造するもので、身體的性慾に耽けることが、其不満足を醫するといふ譯のものではない。故に身體的に限られた性慾の語を以て分析的精神療法 of 原理に適用するのは大なる誤謬である。此醫師の第二の誤解は性的不満足が神經的疾患の原因であると考へたことである。疾患の原因は決して不満足 of 爲めでない。性慾的衝動

と其を抑壓せんとする努力との間の争闘が其原因をなして居る。又苦悶を示す凡ての症状は凡て苦悶的神経病であるとし、其は又性慾的治療にて救治し得ると考ふるのは誤謬である。苦悶的神経病の症状を精しく知ることが必要で、其が他の病的條件より起つたか否かを確かめずして療法を施すことが實に危険千萬であることはいふまでもない、とフロイドは述べて居る。尤も氏はヒステリーも苦悶的神経病もその病源的經驗に於て性の分子があるといふことを強調的に主張するは前章の終りに述べた所である。従つて往々前述の如き誤謬を生ずるは免かれ難いことであらう。氏が如何にその汎性慾説を主張するかに就ては後章に至りて明かにする積りである。

第三章 夢の解釋

一、夢の解釋法

夢に關する從來の説明によると、夢を構成して居る精神作用は、直接先行する精神作用なくして生ずるもので、睡眠中に行はるゝ生理作用によつて、腦皮質の各要素が不規則に興奮された結果である。それで夢に現はれる精神作用は混雜して荒唐無稽のものであるとせられた。又夢の中に或程度まで論理的聯絡があるのは、解剖上又は生理上、相當に密接の關係を有して居る皮質要素が、周邊部の刺激の爲めに同時に興奮される爲めであると考へられて居る。随つて此等の見解よりすると、夢の心理的起源などは全く問題にならない。夢全體の意味の如きも、當然存在しないものと見做されて居る。所がフロイドによると、夢の作用には、他の精神作用と同じく心理的の歴史がある。夢には特別の性質があるけれども、

尙精神作用の起伏中に相當の地位を占めて居るから、他の精神作用と同様、その起源を心理學上から精確に探求して行くことが出來ると主張するのである。

夢を解釋するに當つてフロイドは前に述べた精神分析法を用ひた。勿論夢の解釋なるものは氏以前に行はれて居る。例へば夢の象徴的解釋法 (Symbolische Traumdeutung) に於ては、夢の内容を全體として取扱ふのである。換言すればその内容を他の理解し易く且つ或點に於て類似せる内容によりて置換へる。而してその置換へる事項は凡て將來に關係するものゝみである。聖書にヨゼフがファラオの夢を解釋した如きはこの適例である。即ちその夢といふのは七頭の肥えた牝牛の後に七頭の瘦せた牝牛が來て、後の七頭が前の七頭を食ひ盡したといふ夢である。この七頭の瘦牛はエジプトに七年間饑饉の來ることを豫言するもので、七頭の肥牛はその饑饉以前七年間は五穀が豐熟したことの象徴である。この他俗に行はるゝ夢の解釋法には、暗號法 (Chiffirmethode) といふものがある。これによ

ると夢は一種の暗號で、その一々の暗號を、夫々相當する他の意味ある言葉に翻譯するのである。それには手引がありて、例へば手紙の夢を見ると、手引には苦腦と解してある。又葬式の夢は許嫁と譯してある。而してこの苦腦とか許嫁とかの解答を以て、今將に行らんとする事實に當嵌めて將來を下するのである。この方法は前の象徴法と異つて夢の内容全部を取つて解釋するのではなく、その一部一部を取つて解釋するもので、夢を以て恰も各種の石塊よりなり立つ巒岩のやうに考へて居る。

併し此等の通俗的解釋法は共に其適用に限度がある計りでなく、その解釋法が非科學的であるので、哲學者や心理學者は此等の夢判斷を以て、想像上の所産とか迷信に過ぎないとか言つて、之を排斥してしまつた。所がフロイドは夢には必ず意味がある。而して之を科學的に解釋することが出來ると主張し、先づその一例として、氏自身の夢を分析して居る。その方法は前記の象徴的解釋法よりも寧ろ

暗號法に近い。蓋し氏によると、夢は精神的結晶體で、之を解釋するには一片一片に分析しなければならぬと考ふるからである。氏自身の夢の内容を記載する前に、その當時の四圍の状況を述ぶる必要がある。

○ 千八百九十五年の夏フロイドは若い一婦人の精神分析を行つた。その婦人は以前より氏並に氏の家族と極めて心易い間柄であつた。しかし人のよく知る如く、かやうな親密の關係のあることが、醫者特に精神療法をなす醫者に色々の煩ひを引起す原因となるものである。醫師の個人的興味が強くなるに従つて、益その權威は減じてくるのである。若しも治療が成功しなかつたならば、その親密關係を破りはしないかと思はれた。尤も患者に對する治療は一部分効果を收めた。即ち患者のヒステリー性不安だけは治つた。しかしその身體的症狀はまだ去らない。氏はこの時その患者のヒステリーの歴史の最後の部分が充分に腑に落ちないので、患者の嫌ふのにも拘はらず、無理にその部分を打明けるやうに求めた。所が夏にな

つて患者は田舎にゆくやうになり、治療もそのまゝに中止してしまつた。或日氏の親友である一醫師が訪ねて來た。その男は患者(名はイルマ)とその家族を訪問して來たので、氏はイルマはどうして居ると尋ねた處が、その男は「ずつと善くはなつたが全快とまでは行かない」と答へた。この友人オットーの話或はその音調が烈しく氏の不興を招いた。即ち氏は患者に對して餘まり約束し過ぎたと非難されるやうに思はれ、且つオットーが氏に背いて患者の味方をする事が、氏の治療を喜んで居ないやうに見えた。患者との友情關係までも影響はしないかといふ考が心に浮んで來た。而してこれ以外には氏の心を苦しめることはないやうであつた。しかし氏はその苦痛を少しも友人の前に表はさなかつた。その夜氏は患者仲間で人格の最優れたM氏にイルマを托さうと思つて、患者の病氣の歴史を書いた。但しそれは恰も氏の辯明に過ぎないやうであつた。所がその夜遅く、殆んど翌朝に近い頃、氏は次のやうな夢を見たのである。

「一つの大きい室——吾々の招待した多くの來客——その客の後にイルマが居る。直ちに予(フロイド)はイルマの手紙に返事をしようと、彼女を側に寄せた。それは彼女が今尙打明けることを承諾しないことに對する非難である。予は彼女に向つて、若しあなたの痛みがまだ取れないで居るなら、そはあなたの罪です」と言つた。それで彼女は、私が頭・胃・胸がどんなに痛むか、その痛みが私の身體を縛るやうにあることを若しあなたが知つたならば、そんなことは仰しやらないだらうと言つた。私は驚いて彼女を眺めた所が、青ざめて膨れ上つたやうに見えた。それで私は結局彼女の身體の方面を忽かせにしたと考へた。窓の所へつれて行つて彼女の頭の處を見た。その時彼女は恰も入歯をして居る婦人のやうに幾分反抗的態度を示した。彼女に治療は必要でないと考へた。——口がよく開いた。右の方に大きい白い斑點があり、左の方には著しい皺のあるのを見た。それは明かに鼻甲介を模倣したやうで、灰白色の結痂がその上に擴がつて居た。——私はドク

トルM氏を直ちに呼んだ。氏は診断を再び繰返して確證した。……ドクトルM氏はいつもより全く異つて居るやうに見えた。非常に青白く、片跛で、顎に鬚が無かつた。……私の友人のオートー氏が今彼女の側に立つて居る。朋友のレオ、ポルドは彼女の胸衣の上を打診して、左下の所に濁音があるといひ、又左肩の所の浸潤せる皮膚の一部を示した。(私は衣服のあるに拘らず彼が感ずる如くに感じた)……M氏は云ふに、疑もなくそれは傳染である。併し何でもない。が赤痢を起して病毒を排出するであらう。……吾々はその傳染が何處から來たかを直ちに知つた。友人オートー君はこの間彼女が病氣であつた時、プロビル化合物・プロピル・プロピオン酸……三メチルアミンを彼女に注射した。(三メチルアミンの文字が肉太に印刷されて居るのが私の目の前に見えた)……普通はこんな考へなしにかやうな注射はしない。……恐らく注射器が清淨でなかつたのであらう。

これでフロイドの夢は終つて居るが、この夢はその前日の出來事が主題となつ

て居ることは明かで、氏が夜遅くまで書いた病氣の経過が、睡眠中の精神活動にまでも尙影響して居ることが分かる。夢の後の部分は最初の部分に比して不明瞭で且混雜して居る。プロピオン酸の注射や、M氏の言つたことなどは實に滑稽に見える。この夢をフロイドは如何に分析するか、以下に之を詳述しよう。

室——吾々が招待した多數の來客。この夏私達（フロイド一家）は禿山に續いた岡の上にある一軒家の景色のいゝ所に住んで居た。以前この家は娛樂場であつたので、天井が非常に高く、反響のするやうに出來て居た。夢はこの見晴しの家で起つて居る。而して私の妻の誕生日の二三日前のことである。妻はその日の來ることを待ち構へて居り、又その日に多くの友人を、（その中にはイルマも）客として招待することになつて居た。それで私の夢は次のやうなことを豫示して居る。即ち私の妻の誕生日が來て、その日には多くの人々が、（その中にはイルマも）この見晴らしの室に賓客として招待せられるであらうと。

私はイルマに打明け、ことを承知しないことに就て非難した。若しあなたが尙苦痛を覚えるならば其はあなたの罪です。これは私が覺醒時に於て彼女に言ふことが出来ればと、或は言つてやればと思つたことである。この當時の私の考へでは、病人に症状の隠れたる意味を知らせることで私の職務は終つて居ると思つて居た。(これは後に正しくないと氣付いた)。それで病氣が治るか否かは彼女が打明けて話すか否かによるもので、私にはこの事に就て何等責任がないと思つた。この間違つた考へは私がイルマに話した言葉で明かであるが、これで自己の責任が全く免れたとして精神の小康を得たのである。

頸部・身體・胃に於ける痛みが彼女を非常に苦しめるとの非難。胃の痛みは彼女の症状に屬して居る。しかしそんなに烈しく無い。寧ろ彼女は不快と嘔氣とに苦しめられて居た。頸・胸・咽喉に於ける痛みは殆んど無い。それで私は何故にこの症状を特に選んで夢に見るやうにしたか、當時その原因を發見することが出来な

かつた。

彼女は青ざめて、膨れ上つたやうに見えた。彼女は常に薔薇色をして居た。私は他の人を彼女に移したと想像する。

私は彼女の身體的疾患を忽にしたとの考から驚いた。少しも減退しない恐怖や、その他の現象を、神經病専門の醫師はヒステリーであるとしてしまふ傾があるが、他の醫者は是等を身體的症狀として取扱ふことがあるといふことは、世人のよく知る所であらう。他方に又私の驚愕は果して正直なものであるか否かの軽い疑惑が生じて來た。イルマの痛みが身體的原因によるとすれば、私はその治療に責任が無いことになる。私の療法は只ヒステリー性苦痛のみを除去した。それでこの夢は特に、私が却て診断の誤謬を望んで居たかのやうに思へる。蓋し診断の誤謬とすれば、不結果に對する非難を免かれることが出来るからである。

私は彼女の頸部を見ようと窓の所につれて行つた。彼女は義齒を有する婦人の

如くに、少しく拒絶した。それは彼女に不必要であると思つた。私はこれまでイルマの口腔を検査したことがない。夢の中の出来事は少し以前は一女教師に就て研究を試みたことを思ひ起さしめる。その女教師に就ての第一の印象は若々しい美しさといふことで、口を開く時に努めて歯を見せまいとしたことである。之と聯關して他の醫術的研究と少しの秘密とを回想する。この二つとも愉快を示すやうなことでない。あなたに治療は必要でないといふことは、イルマに對する挨拶である。しかしこれには尙他の意味があるやうに思はれる。イルマのやうに窓の側に居る様子は突然他の經驗が心に浮んでくる。イルマは一人の親しい友人をもつて居たが、その婦人を私は非常に尊敬して居た。或夜その婦人を訪問した時に、夢に見た通りに窓の側に居るのを見た。彼女の醫師M氏が、彼女にはデフテリアの舌苔があると言つた。ドクトルM氏の容貌と舌苔とが、夢の通りに再現して來る。私は最後の瞬間に彼女はヒステリーの的であると思はれる凡ての原因を發見し

たことが今思ひ浮んでくる。イルマも亦私にその事を洩したことがある。如何なる状態から、彼女のヒステリーを知つたかといふに、彼女は私の夢の中にイルマと同じやうに、ヒステリー性嘔氣に苦しんで居るからである。かやうに夢の中では私の患者はその友人と入れ替つて居る。今私は思ひ起すが、この婦人がその症状を治癒する爲めに私に頼めばいゝがと度々想像した事がある。しかし大變に内氣な女だから、頼むやうなことはあるまいと思つた。それで已に彼女は拒絶して居る。又彼女にそれが必要でないといふ他の説明は斯うである。即ち彼女はこれまで實際に壯健で、他の助けを藉らずしてその状態を制することが出来るといふ解釋である。茲に又イルマにも、その婦人にも發見することの出来ない一二の状態がある。それは青白く膨れ上つた顔付と義齒とである。義齒に就ては茲に述べた女教師のことが思ひ浮べられる。私ならこんな入齒をしないで、悪い齒で満足して居ると思つた。青白く膨れ上つた顔付に就ては、他の婦人が心に浮んでくる。

それは私の患者でない。その婦人は不従順で、私を困らせるだらうと思はれるので、私の患者にしたいくないと思つた。その婦人は嘗て幸福に暮して居た時は肥つて居たが、しかし顔色は常に青白であつた。私が夢の中にイルマをそんな人と取換へたのは如何なる意味であるか。恐らく私は取換へたいと思つたのであらう。蓋しその婦人が強く私の同情をひいた爲か、或は知能が優れて居ると思つた爲に、私の患者になればいゝかと思つたのであらう。イルマは私に打明けることをしな

いから、彼女は餘まり利口でないと思つた。之に反して他の婦人はずつと利口で、私の言ふことに従ふであらうと思つた。口がよく開いたといふことは、イルマよりも多く物語つたといふ意味である。

私が首の處で發見したものは、白い斑點と結痂ある鼻甲介とであつた。白い點はデフテリアを憶起し、それからイルマの友人、並に私の長女が二年以前に烈しい病氣にかゝつたこと、その不幸時に於ける恐怖等を思浮べる。鼻甲介の結痂は、

私自身の健康に就ての心配を憶起する。この時鼻の腫脹を壓へようと屢々コカインを用ゐて居たが、二三日前私と同じくコカインを用ゐて居た一患者が、鼻粘膜の壞疽を引起したことを聞いた。千八百八十五年私が公にしたコカインの推擧が、眞面目なる非難を受けた。千八百九十五年に死んだ朋友は、コカインの濫用の爲めに其死期を早めた。

私は診斷を繰返すやうに、直ぐにドクトルM氏を呼んだ。この有様はM氏を吾々の所に呼んだといふに過ぎない。しかし直ちにといふことが、特殊の事情のあることを説明するに餘りあるのである。私は醫師としての悲しむべき経験を思ひ浮べる。私は嘗て一患者にゾルフ・ナルを永く用ゐた爲めに、その患者は烈しき中毒を引起し、それで經驗ある年上の同僚に急いで救助を求めた。この事實が特に眼前に浮んでくることは、その附帶の事情に基いて居ることが多い。即ち中毒を引起した患者の名が、私の長女の名と同じであるといふことである。私はこの事

に就て今まで思つたことはなかつたが、今になつて恰も復讐の運命に遭遇したやうである。目は目を以て讐ひ、齒は齒を以て報ゆと聖書にあるやうな賠償的欲望が他の意味に於て續いて居たやうである。即ち醫師としての良心が私自身を非難しようとして、あらゆる機會を捜がして居たやうに見ゆる。

ドクトルM氏は青白く、顎に鬚がなく、跛である。M氏は顔色が悪くて屢々友人の心配する所となつたことは事實である。しかし他の特徴はM氏でないやうである。それ等は今外國に住んで居る私の長兄のやうである。兄は常に鬚を剃つて居るし、又二三月前の通信によれば、腰部に於ける痛風の疾患の爲めに跛となつたといふことで、大體に於て夢の中の像と兄とが似て居た。何故に夢の中で兩人が混合して一つになつたかといふに、それには一の理由がある。私はこの兩人に對し同様の理由からして不快に思つて居る。即ち兩人に對して或申込をした所が、兩人ともそれを拒絶したので、私は甚だ心よく思つて居ないのである。

友人、オットーは病人の傍に立ち、友人、レオポルドは病人を診断して、左下の處に濁音のあることを報告した。友人、レオポルドは等しく醫者で、オットーの親族である。此兩人の専門は共に同じであるので、人が絶えず兩人を比較するといふ風に相互に競争者の位置にあつた。私が神經病の兒童を取扱つて居る時、兩人とも私の助手をして居た。それで今の夢に於けるやうな光景は屢起つた。私がオットーと或患者の診断に於て議論して居た時に、レオポルドは新に檢診をし、その判決に貢獻すべき全く豫期しない事實を提供した。兩人の性質は異つて居て、オットーの方は敏捷であるが、レオポルドの方は細心で、根本的に探究するといふ風であつた。夢でオットーと用心深きレオポルドとを對立せしめたのは、レオポルトを賞讚する爲であることは明白である。之と同様な比較を不從順なるイルマと利口さうに見えた朋友との間に行つた。夢の中の思想の聯合は病氣に罹れる子供から子供の病院へと進むで行つた。左下の濁音の發見に就て一の事實

が思當られる。レオ・ポルドが一患者の場合を詳細に報告した際に、私はその徹底的なることに驚いたことがあるが、その一々がよくイルマの場合と一致して居る。而してその患者に對する關係も亦同じやうにイルマの場合に起るかも知れないと思つたのであらう。蓋し私の見た所ではイルマは肺結核の眞似をして居ると思つて居たからである。

左肩に於ける浸潤せる皮膚の一部。私の知つて居る範圍では、これは私自身の肩のリューマチスである。夜遅くまで起て居ると、何時もこの痛みを感じた。「彼が感ずる如くに私が感じた」といふ夢の中の言葉は不明瞭である。「浸潤せる皮膚の一部」といふことも異様に響くやうである。脊の左り上の浸潤は通常肺と關係し、従つて結核と關係して居る。

衣服を着て居るに拘はらず。これは全くの挿入語である。小兒科病院では、子供を裸にして診斷する。しかし婦人患者を診斷する様に衣服を脱かないで行ふこ

ともある。或る有名な臨床學者は着衣のまま、衣服を透して身體上の檢診をするといふことである。これ以上の説明は出來ない。

ドクトルM氏が云ふに、それは傳染である。しかし何でもない。が赤痢になつて病毒を排出するであらう。これは最初馬鹿々々しいやうに思へたが、しかし他の部分と等しく注意深く解剖しなければならぬ。精密に考へて見ると、これにも一種の意味がある。私が例の婦人患者に發見した所のは、局處の *Diphtheritis* であつた。私の娘がこの病に冒されて以來、*Diphtheritis* と *Diphtherie* とに就て、一家の意見を有して居る。即ち後者は一般的傳染で、局處の *Diphtheritis* より起つたものであると思ひついた。レオッポルドはこの一般的傳染を濁音によりて證明し、その濁音は病毒移轉の巢窟であると考へた。私は *Diphtherie* の際にはかやうな病毒移轉は起らないと信ずる。而してこれ等は私をして膿毒症を聯想せしむるのである。

それは何でもないとはいふことは、慰安の言葉である。夢の最後の部分は、患者の苦痛が烈しき有機的障害に基づいて居るといふことを示して居る。私が自己の責任を免れようとして居ることを示して居る。デフテリヤの苦痛が繼續することに對しては、心理的療法は何等の責任がない。自己の責任を免れる爲めに、イルマにありもしない苦痛のことを書立てたことが、私を困らして居る。それは至つて残酷に見える。但し善い結果が得らるゝことを確證し、その慰安の言葉をM氏が云つたやうにしたといふことは、悪い選擇でないやうに思へる。しかしこの慰安の言葉が無意味に見えるのは何故であるか。

赤痢に就て思ひ出すことがある。二三ヶ月以前便通の悪い病氣に罹つて居る若い患者を診察したことがある。同僚はその者を榮養不良に基づく貧血の一種であると考へて居たが、私はそれをヒステリーとして取扱つた。しかし精神療法を彼に施すことを欲しないで、彼はそのまま航海の途についた。所が二三日前彼が埃

及から出した失望の手紙を受取つた。即ち彼はそこで新たな病氣に罹かつたが、醫師はそれを赤痢だと言つたといふことである。それでヒステリーだと私の云つたのを嘲つた無學の同僚の診断は誤謬であると思つた。しかしヒステリー性の腸疾患に有機的疾患を齎らすやうな状態に患者を置いたといふ非難は免れることが出来ない。而して Dysentery (赤痢) と Diphtherie (デフテリア) とは類似の音である。

赤痢に於てはこの外ドクトルM氏のことを附加する必要がある。彼が數年前一度他の同僚に就て之と同様なことが起つたことを私に話したことがある。即ち大病人があつて、その同僚の診断の相談に彼は一度呼ばれた。助かる望みがあると喜んで居る同僚に向つて、彼は病人の尿中に蛋白質のあることを注意した。しかしその同僚は少しも彼の言に耳を傾けることなく、落ちつき拂つて、それは何でもありません。蛋白質も分泌せられるでせうよと答へた。夢の中の此一節は、ヒス

テラーに就て何にも知らない同僚に對する嘲笑を含んで居るといふことが、茲に至つて明白となつた。これは又次のやうな意味に導いて行く。即ちドクトルM氏は患者即ちイルマの朋友が結核を恐れて居ることがヒステリーに基づくことを知つて居るか、氏は此種のヒステリーに關する知識があるか、或はその爲めに當惑しては居ないかなど、いふ疑問に導いてくる。

加何なる動機からして、かやうにM氏を輕蔑するのであるか。その理由は極めて簡單である。即ちM氏はイルマと同じく、私がイルマに對して自白を要求することに全く同意しない。かやうにして私は此夢の中で二人の者に復讐をして居る。即ちイルマに對しては、お前が痛みを持つのはお前のせいだといふ言葉で復讐して居るし、M氏に對しても、無意味の慰安の言葉を言はしむることによりて報復して居る。

この傳染が何處から來たかを吾々は直ちに知つた。この直ぐに知るといふこと

が注目すべき點である。レオポルドによりて傳染が證明されたからして、それが以前に吾々は知らなかつたのである。

友人オットーは彼女が不快を感じる時に注射を行つた。オットーの話によると、彼はイルマの近くの宿屋に泊つて居たが、或日イルマの家族を訪問すると間もなく、そこで急病に罹つた或人に注射をしたといふことである。注射に關聯して私は又コカインの中毒にかゝれる不幸の友達のことが想起される。私は彼にモルヒネ除去の間は、内服のみするやうにと忠告したが、彼は直ちにコカイン注射を行つた。

プロピル調劑……プロピル……プロピル酸。私は病歴を認めた晩、私の妻が飲料のはひつてる瓶を開けた。その上にAnanasといふ文字が讀まれた。(アナナスといふ音はイルマの苗字によく似て居る。)而してその飲料は友人オットーの贈物であつた。所がこの飲料を飲む氣になれない程、フーゼルの句(アミル)がする。そ

れて妻はそれを家僕にやらうと言つたが、私は博愛的注意を以てそれを遣つては宜くないと止めた。フーゼルの句は夢に表はれたプロピルやメチル等の全系列を明白に憶起せしむる。私はこの際アミルを嗅いだのに、夢には代用物を採用して、プロピルの夢を見たのである。しかしかやうな代置作用は有機化學にも起る所のものである。

三、メチラミン。私は夢に於てこの物質の化學方程式を見た。それを記憶するに何時も非常の努力を要したものであつた。よく世人が特に大切なる部分を肉太に印刷するが如く、此方程式も肉太に印刷されてあつた。何故に此文字がしかく私の注意を引いたのであるか。私は數年間胚種の研究を友人に示し、友人もその研究を私に示して、互に意見を交換して居たが、或時その友人は性的化學に關する一個の意見を述べ、且つ三メチラミンは性的物質代謝の産物の一であると信ずる旨を告げた。而して此物質は、私が治療せんと思つて居る神經的疾患の起源に最

重大なる意味を有して居る。私の患者イルマは若い寡婦である。彼女に對する治療の不結果の罪を免れようとするには、此事實を引用するのが最都合がよい。而して夢に於てイルマの位置を取て居る他の患者は、やはり若い寡婦であるといふに至りては實に驚くべきことである。

かやうに三ネテラミンの語には多くの重大なことが結び付て居る。即ちその語は性慾説の有力なる要素たることを示すばかりでなく、又一人の友人を暗示して居る。蓋しこの友人のみは、誰も願みない所の私の意見に賛同するので、私は極めて愉快にその人のことを憶ひ起すのである。かやうに私の生涯に重大なる意義を有する友人が、夢の思想聯合の上に表はれてくるのは當然である。彼は又鼻及び鼻副孔より生ずる作用に就ての専門家であつて、鼻甲介と婦人の生殖器との著しい關係に就ての研究を始めた。私はイルマの胃の痛みが鼻に原因して居ないかをその友人に診斷して貰つた。彼は自身に鼻の化膿に苦しんで居たので、私はそれ

を非常に心配して居た。而してこの病氣は夢に表はれた病毒移轉の場合の膿毒症を暗示して居る。

一般には考へなしに、こんな注射をしない。考へなしにといふ非難は友人オートーに向けられて居る。その日の午後彼が私の意見に反対した言葉と容貌を示した時に、如上の非難が私の心中に浮んだ。即ちすぐさま自己の判断で仕事をする男だと思つた。上述の言葉は又直ぐにコカイン注射を行つた所の死んだ朋友を憶ひ起させる。私は又前に云つた様に何等の考へもなくズルフォナルの注射を行つたことがある。私がオートーが直ぐさま化學的藥品を注射したことを非難すると同時に、ズルフォナル注射の爲め中毒を起した婦人のことが聯想され、その注射に對する非難が憶ひ出される。かやうにして私は、自己の細心であつた例と、その反對の例を凡て茲に蒐集して居る。

恐らく注射器は清淨でなかつた。これは又他の方面から起つた、オートーに對

する、非難である。昨日私は八十二歳になる婦人の子供に偶然出會つた。嘗て私はその婦人に毎日二回のモルヒネ注射を行ふ必要があつた。その婦人は目下田舎に住んで居るが、靜脈炎に苦しんで居るといふことを聞いた。その時注射器の不淨の爲に浸潤の起ることを考へた。而して二年間の注射に彼女に少しの浸潤をも起さなかつたことを自慢にして居る。蓋しこれは注射器が清淨であるか否かに常に注意深くあつた證據であるからである。靜脈炎のことから私の妻が妊娠の時、靜脈鬱血に罹つたことが聯想される。而して私の記憶の中に私の妻、イルマ、死んだ患者の三個の同様な光景が浮んでくる。夢の中でこの三人が相互に入れ代りて表はれてくるのは、一に此の三人の同一なることに基ついて居る。

二、夢の思想

前に説明した通りに、夢の各事項に注意して、それに伴うて生ずる思想に對し、

故意に選擇を行はずして得た所の、所謂自由聯想の結果を蒐め、それに秩序をつけて見ると、夢の表面だけでは、何の意味もないやうでも、その實は本人と重大の關係を有する精神作用であるといふことが分かつて來る。かやうにして得た所の精神作用は、フロイドの所謂夢の思想(Traumgedanken)で、夢の潜在内容(latente Traum Inhalt)を形成するものである。之に對して夢の表面に表はれたる精神作用は、顯在内容(manifeste Traum Inhalt)と名づけられる。故に夢の意味を知るには、まづその顯在内容を潜在内容に翻譯して見る必要がある。これは丁度解釋を加へて始めて象形文字の意味が明らかになると同じことである。

今前に述べたイルマに關する夢の例を取つて見ると、その顯在内容は荒唐無稽の點が極めて多い。處がその潜在内容即ち夢の思想を搜つて見ると、條理一貫した意味を持つて居る。即ちフロイドはこのイルマの夢によりて實現したいと言ふ目的を持つて居る。換言すれば夢の動機がある。この夢は前夜の出來事、例へば

オットーの報告や病床日誌の記載等によりて鼓舞されたる二三の欲望を満たして居る。夢の意味は、今尙存在するイルマの苦痛に對し、フロイドは責任がなく、却てオットーに責任があるといふことである。オットーはイルマが未だよくならないで居ると言つて、フロイドに心配を與へたが、夢に於てフロイドは彼を非難することによりて復讐をして居る。而してフロイド自身は全く責任を免れて居る。かやうに夢は氏自身が望んで居た事柄を實現して居る。故に夢の内容は願望の實現で、夢の動機は願望である。

夢は願望の實現であるといふ見地から、イルマの夢を解釋すると、その一々の意味が明白になつてくる。オットーに對する復讐ばかりでなく、ドクトルM氏の反對意見に向つても罵倒を浴せて居る。而して三メナラミンのことを告げた朋友を賞揚すること、イルマよりもその利口さうな友達を賞揚すること、オットーよりもレオポルドを賞讚することは、凡て同一の動機から起つて居る。但し氏の

娘の病氣、娘と同名の患者の病氣、コカイン中毒、埃及に行つて居る氏の患者の病氣、氏の妻及び兄の健康に就ての心配、氏自身の病氣、鼻の化膿に苦しめられて居る氏の友人に對する心配等は、イルマの病氣と何等の關係がないやうに見える。しかし之は自他共醫師としての細心といふことが基礎をなして居る。蓋し氏はイルマの病氣の治らないことは、醫師としての義務を盡して居ないとか、充分細心でなかつたとか言はれるやうな氣がして心配でないのである。それで如上の諸事實を擧げて、醫師としての注意を充分盡して居るといふことを示し、以てイルマの病氣に對する責任を免れんとして居るのである。

かやうに大人の夢のみが願望の實現でない。子供の夢に於ても同一である。フロイドの示した數多の例の中一二を述べると次の如くである。

或る夏フロイドは八歳の女の子と五歳の男の子とをつれてアウスゼーの側の小丘の處に避暑をした。好い天氣の日には、そこからダハスタイン山の景色を賞す

ることが出来、望遠鏡で見るとシモニー小屋がよく見えた。子供等は喜んで望遠鏡を以てそれ等の景色を見て居た。或日ハルスタットの方へ散歩に行かうとする時に、ハルスタットはダハスタイン山の麓にあると子供に言つて聞かせた。子供等はハルスタットの方へ行き、それからエッシエルン谷に下つて行つて、種々と景色の變化するのを喜んで居た。處が五歳の男の子は漸次機嫌を悪くして來て、新しい山が見える毎に、ダハスタインではないかと尋ねた。それでフロイドは、否それは前にある山であると説明しなければなかつた。幾度も同じやうな答を繰返して居たが、遂に黙つてしまつた。皆が瀑布を見る爲めに下りて行かうとしても、いやだといふので、フロイドは多分疲勞した爲だらうと思つて居た。處が翌朝になりて、その子供は氏に向つて、昨夜シモニー小屋の所に行つた夢を見たと言つた。茲に於て昨日子供が不機嫌になつたことが分かつた。即ちダハスタインの話の聞いて居た時、その山に登ると、嘗て望遠鏡で見ながら種々話した所の小

屋が見えるといふことを豫期して居たに相違ない。所が前方の山や瀑布を見ようと言はれるので、何だか違つて居やしないかと思つて機嫌を悪くしたのである。

それで子供は夢に於て賠償を求めたのである。

之と同じやうな夢が、フロイドの八歳になる娘にも経験された。一度氏が多勢の子供をつれて、蘆葦の小屋を見る爲めに、ドルンバッハの方へ行つた所が、餘り遅くなつたので途中から引返した。歸り途に「ハモード」と書いた道しるべの所を通つた。これも子供等が行きたがつて居たけれど、餘り遅いので後日再び連れに行く約束をして戻つて來た。所が翌朝になつて、その娘が満足したやうな顔付をしながら父に向つて、昨夜お父さんは吾々と一處に蘆葦小屋の所に行き、又ハモードへも行つた夢を見たと言げた。かやうにして此の女兒は、父と約束したことの實行せらるゝ日を待ち遠しく思つて、夢に於て之を實現したのである。

フロイドは又これ等の子供よりも、ずつと幼い子供の例を擧げて居る。氏の最

も小さい女の児が生後十九ヶ月の頃、或朝嘔吐を催したので、一日中飲食物を削減して居た。所がこの空腹に一日を暮した夜、眠を覺まして次のやうなことを叫んだ。「アンナ・フォイド(フロイド)、オランダ苺、ホッホペール(苺の一種)、卵子料理、バツプ(食物の一種)」と。これ等は凡て子供の欲する食物の名である。苺の名が二度までも表はれた理由は、家婢があらゆる苺を嫌つて居るので、それに対する示威運動に過ぎないのである。

かやうに夢の潜在内容は條理一貫して、何れも願望の實現であるが、この夢の思想が顯在内容となる場合には、種々と變装してその形を變へて表はれてくることが多い。例へば前記のイルヤの注射の夢に於て、フロイド自身の責任を免れたいと願望が、種々の形を取つて表はれて居る。かやうな變装作用は一定の心理上の法則に従ひ、確かなる理由があつて行はれるものである。而してフロイドはこの變装作用の原因は意識の監視作用(Wachheit)に由ると主張する。この點がフロ

イドの說の中心であり、又夢の說の中で最も創見的の部分である。抑、吾々には無意識的精神作用が働いて居る。これが意識上に表はれないのは、意識の監視作用が働いて居て、その出現を抑止して居るからである。氏が種々の異常なる精神作用や、精神病の症状等を分析して、此作用の存することに考へつゝいた事は既に前二章に述べた所であるが、今夢を分析して見ても、夢の作用は此等とよく似た計畫の上に構成されて居るといふことが分かつた。意識の裏面に潜む夢の思想が表面に表はれる際に、監視作用の爲めに變形せられる所謂變裝作用には以下に述ぶるやうな四種類がある。

三、壓縮(Verdichtung)

夢の顯在内容と潜在内容とを比較して見ると、前者は後者に比し、貧弱で簡潔で緊縮されて居る。それは顯在内容の各要素は、幾つかの夢の思想を代表して居るからである。フロイドの言葉で云へば überdeutern werden されて居るからであ

る。かやうに顯在内容は潜在内容の壓縮されたものであるから、或夢を分析して潜在内容を探つて見ると、顯在内容よりも遙かに豊富なものとなり、往々十倍乃至二十倍に及ぶこともある。今壓縮作用を示す一例としてフロイドが植物紀要に關して見たる夢とその分析とを述べよう。

夢の内容、私(フロイド)は或植物に關する紀要を書いた。その本は私の前に置いてある。私は折り込んだ色刷の表をめくつた。乾かした植物の標本が結びつけられてある。

この夢の最明白なる要素は、植物に關する紀要である。これは夢を見た前日の印象から起つて居る。フロイドはその日本屋の陳列窓の所で *Cyclamen* といふ植物に就ての紀要を見た。この種屬の叙述は夢の内容中に缺けて居る。只紀要及それが植物學に對する關係とが残つて居る。この植物紀要は氏が嘗て書いたことのある、コカインに關する論文に關係をして居る。コカインからは又二様の思想の

聯合が生じてくる。即ち一方には祝ひの手紙と大學實驗場に於ける或處置とに關聯し、他方には氏の友人にして眼科醫たるケーニヒスタインに關係してくる。此人はココインの利用に同意をして居る人である。この人の名からして、氏が前日の夕方その人と議論をして中途で止めたこと、及び同僚間の醫學上の仕事に對する報酬に就ての種々の交渉が聯想されてくる。此等の會話が實際に夢を惹起して居る。植物紀要は現實的のものではあるが、中性的のものである。換言すれば、この紀要は一方に中性的印象をそのまま得た當日の出來事と、他方に豊富なる聯想による重大なる心理的經驗の中間結合者と見るべきである。

植物紀要は單に複合概念である計りでなく、植物と紀要とその一々の概念にも種々の經驗が結合して、夢の思想を複雑にして居る。植物といふことには、ゲルトナー教授その人、その人の華やかな夫人、フロラといふフロイドの患者、妻の誕生日にその妻の愛する花を買つてくるのを夫が忘れたので、夫の無情を怨ん

だ所のその婦人等の記憶に關聯して居る。グルトナーの名より實驗場、實驗場よりケーニッヒスタインへと連想される。それからこの人と談話の際に聞いた二人の婦人患者のことが連想され、それは又花を持つた婦人を連想し、更に又氏の妻の愛する花へと移つて行つた。「植物」といふことはギムナジウムや大學時代の試験のことを聯想させる。それから氏の愛花であつた朝鮮薊が聯想され、これより一方には伊太利を聯想し、他方には子供時代のこと憶起されてくる。かやうに「植物」といふことは、多數の思想流が夢に向つて會合する所の交叉點となつて居る。又「紀要」といふことは一方に氏の研究の固陋なりしこと、他方に戀人の贅澤なりしことが關聯して居る。「彩色の表」に就ても諸種の觀念が結び付いて居る。即ち氏の研究、それに對する同僚の批評、幼時彩色の表のついた本を持つて居たこと等が憶ひ出される。「乾いた標本」に就いてはギムナジウム時代のことが聯想されて來るといふことである。

かやうに顯在内容は潜在内容の中に含まれる、廣汎なる材料をそのまま、壓縮して代表して居ることもあるが、稀には潜在内容の一部分を脱落したのみで、顯在内容となることがある。又夢に現はれた人の顔は、數人の顔の特徴を組み合せたものであることがある。この場合には之を「集合人物」(Samuel person)と名づける。

その中にも甲の人に屬する特徴に、乙の人の特徴を混じて作ることもある。又ゴルトンの重ね寫眞のやうに、兩者に共通せる特徴を強め、共通しない特徴を抜いて作ることもある。かのイルマに關する夢に於て、ドクトルM氏は、Mといふ名前・その話し振り・動作等は少しも本人に相違ないが、身體上の特質と痛みとは、フロイドの長兄に似て居る。只青白い容貌だけが、實際に兩者共相似て居るので、その特徴を強めて居る。

かやうに二人に共通したる特徴は夢の上に表はれてくるけれど、裏面に潜む夢の思想の中心點たる根本的の類似は、夢の顯在内容に表はれて來ないのが普通で

ある。夢の上に表はれた皮相的の類似は、もつと深い所にある根本的の類似を蔽ひ隠して居るもので、夢の思想の主要部分を知る手が、りとなるものである。又この作用は二人の間に、かくくゝの類似があればいゝがといふ希望を示すに止まることがある。前に述べたイルマの注射に關する夢に於て、イルマがその友人と交替したのは、即ちフロイドが自分の患者として、イルマの代りにこの友人を持ちたいといふ願望の實現に外ならない。

壓縮作用は又單語或は事物の名にも行はれるものである。フロイドの友人は嘗て或種の論文を書いて氏に送り届けた。氏はその論文が近時の生理的發見を餘り重く見すぎて居るし、且豊富なる辭句を以て書かれて居ると考へた。處がその晩この論文に關係した夢を見、それは眞にノレクダル(Norekhal)風である」といふ句が夢に現はれた。最初氏はこの語の構成を解釋することが出来なかつた。尤もKolossal(巨大なる)とか、Pyramidal(金字塔の)とかの形容詞に横して作つたも

のであるといふことだけは明白である。しかしその語源は何處から來たか。氏は種々考へた結果、それはイブセンの有名なる劇中の人物、ノラ(Nora)とエクダル(Ekhal)との二つの名が結びついて出來たものであるといふことが分かつた。蓋し氏は同じ夢の中で、イブセンの作を批評して居たし、且つ以前に雜誌でイブセンの作を讀んで居たといふことである。

かやうに夢の中で語を新しく作るといふことは、精神病患者、就中早發痴呆患者に於けるそれと甚だよく似て居る。子供の或時期に於て、語が對象物として取扱はれ、任意に新語を作り、又勝手に語の排列をする場合の技術も、夢や精神病に於ける夫等と同一のものである。

以上述ぶる所によりて、壓縮作用は或一方向にのみ起るもので、顯在内容に表れた各要素が、潜在内容に於ける多數の要素を代表して居る關係は、恰も代議士が多數國民を代表して居ると同様のものであると考へることも出來る。併し必ず

しもさうばかりとは云へない。蓋し顯在内容に表れたる各要素は、數多の潜在内容と結びついて居るばかりでなく、潜在内容の各要素は幾つかの顯在内容と結びついて居ることもあるからである。加之夢の全構造の各要素は、往々相互に聯合して居つて、恰も網をこぐらかしたやうな觀を呈して居るので、その中にははれて居る秩序や法則を知るには、十分なる分析を施さなければならぬ。

四、轉移 (Verschiebung)

前に述べた種々の夢の例を見ると、顯在内容に於て主要なる要素となつて居るものが、裏面に潜む夢の思想に於ては同一の役目を演じて居ないことがある。又之と反對に夢の表面に於ては些々なる事柄のやうに見えても、夢の思想に於ては極めて重大なる要素となつて居ることがある。夢の思想中の主要なる内容は、夢の表面に全く表はれないで、他の要素が中心となり、その周圍に内容が排列されて居ることがある。例へば前記の植物紀要の夢に於て、「植物」といふ要素が夢の

内容の中心點となつて居るが、その思想に於ては何等重大なる要素となつて居ないで、その中心は却つて同僚間の契約行爲より生じた紛争、並に戀人に多大の犠牲を拂ふことに對する非難等である。かやうに烈しい情緒を伴つて居る夢の思想が、顯在内容となつて表はれる時には、極めて弱い情緒を伴ふことがあるし、之と反對に夢に於ては憎惡とか心配とか云ふやうな烈しい情緒となつて表はれて居ても、夢の思想に於てそれに相當する要素は極めて微々たるに過ぎないことがある。かやうな轉移作用をフロイドは「あらゆる心理的價値の交換」と名づけた。蓋しニイチエの語を借りたものである。この現象は精神病者にも屢々現はれるもので、潑刺たる興味や、激烈なる情緒が、些々たる觀念と結びついて居ることがある。いづれの場合に於ても、情緒がその位置を換へて、極めて顯著なる觀念が、今までは些々たるものであつた觀念と交替するに至るのである。而してこの一次觀念と二次觀念との聯合は往々皮想的の場合がある。特にその中でも多くある例

は、二つの觀念を言ひ表はす言葉について機智を弄ぶことである。この皮想的の聯合は普通裏面に隠れて烈しい情緒を有するものを隠蔽して居るものであるといふことは、ユングも既に證明して居る。前日に經驗したことで、極々些細なことが、夢の中に現はれてくるのは如何なる理由によるのであるか、一見不條理のやうに見ゆるけれど、それはこの轉移作用に基いて居るのである。その經驗が極めて些末である爲めに、従前の精神作用との聯合が殆んど出來て居ないので、夢を作る際にはそれが重大なる觀念を代表するやうに用ひられ、その觀念に伴ふ情緒までも、些細なる經驗の方に結びついて夢に表れるのである。夢の性質が荒唐無稽なることも多くはこの轉移作用で説明がつくのである。特に情緒の強さと知的の内容とが、奇妙に一致して居ないのは全くこの爲めである。夢の中で何でもないやうなものに襲はれて恐怖を感じたり、恐ろしく危険であるべきものに遭遇して居ながら平氣で居るやうなことがあるのは、即ちその例である。今フロイド門

下のジョーンズが轉移作用の一例として擧げて居る三十九歳の婦人患者の夢の内容とその解釋とを紹介しよう。

夢の内容、何か觀せ物を見て居るやうな風で、大きな棧敷の中に坐つて居た。軍隊が勇ましい軍歌を奏しながらやつて來た。それは葬列の先頭であつた。X氏の葬列のやうに見える。棺は布で覆はれた砲車の上に載せてあつた。あんなつまらない男が死んだのに大騒ぎをするのは、可笑しいといふ驚きの感情が明かに浮んで來た。その後から故人の兄弟と一人の姉妹とが従つて來て、又その後から二人の姉妹がついて來る。不都合にも派手な灰色の縞の着物をきて居る。兄弟は踊つたり腕を動かしたりして、「野蠻人のやうに」進んで行つた。その背中にはヤツカといふ木を負うて居て、それには若い蕾が澤山について居た。

この夢の意味は明瞭であるが、患者の覺醒時に於ける精神生活には當てはまらないやうに思はれる。それでジョーンズは分析を試みた處が次のやうなことが分

かつた。即ちX氏といふのは婦人の夫の假装したものであつた。X氏と婦人の夫とは子供の時から深く將來を約して居たが、互に希望して居たことは達せられなかつた。X氏はモルヒネに耽つて健康と經歷とを害ひ、夫はアルコールを嗜んだ。患者は自分の夫が酒に耽る習慣のある爲めに、夫に對する妻としての愛情が疎隔するに至つたことや、夫が酒に酔つた時などには、全く嫌ひになることすらあるといふことを、激した調子で物語つた。それで夫が早く死ねばよいといふ希望の抑壓されて居たのが、第三者の葬式の夢となつて表はれたのである。X氏の經歷は夫の經歷に似て居るばかりでなく、同様に兄弟一人姉妹二人をもつて居るので、相互に交替をしたのである。加之患者の夫が何等の野心もないことや、その他様々の事情からして、妻たる患者は衷心之を甚だしく侮辱して居た。それも亦患者の夢に衣れて居る。即ちこんなつまらぬものゝためにかやうな大騒ぎをするのは可笑しいと考へたり、全世間がその葬式に對して喜んだり（軍隊は勇まし

い軍歌を奏した。夫は曾て義勇兵の士官であつたが、X氏は軍隊と何等の關係もなかつた)、極近い親戚に至るまでも之を喜んだ(兄弟の踊つたことや、派手な着物をきて居たこと)といふ夢を見たのである。X氏には妻があつたが、夢の中にはその妻が居なかつたことも、注意すべき點である。これは本人は自ら經驗して居ながら、それを嫌やだと思ふ感情は、他人にも屢それを移すといふことの一例として見るべきである。即ち嫌ひな夫の葬式には出たくないといふ感情を他人に移した結果、X氏の妻が夢の中に表はれなかつたのである。

併し實際に於ては、X氏は未だ生きて居る。X氏と患者とは面識ある普通の知人に過ぎない。只葬列に加はつて居たX氏の兄弟と患者とが曾て婚約をして居た。處が患者の両親は術策を廻らして二人の間に誤解を生ずるやうにしたので、遂に患者は怒つて、約婚の男を棄て、夫と結婚し、取返しのかぬ後悔の種を播いたのである。X氏の兄弟はこの結婚に對して非常に怒つて嫉視して居た。たゞ夢の

表面ばかりを見て、兄弟の死を喜んだといふと不合理のやうであるが、之を患者の夫が死んだといふことにして見ると、その人が葬列に従つて居ながら大に喜んだといふことは、大に理屈に協つて來る。彼が烈しく手を動かし、「野蠻人のやうに踊つた」のは患者が故國に於て見た儀式、殊に結婚の儀式を憶ひ起したのである。その男が背負つて居たヤツカの本は西方諸州に産する硬い灌木で、これは生殖器の象徴であることが分かつた。而して若い蕾は子孫を意味するものであつた。患者は夫の不品行のために、一人も子供の出來ないことを非常に遺憾に思つて居た。故にこの夢は、自分の夫が死んで、世人は誰も之を悲しまないで、自分は昔の戀人と結婚して多くの子供を生むといふ意味である。

五、描寫(Darstellung)

潜在内容が顯在内容に表はるゝ際にその形を變へるには、壓縮と轉移との兩作用あることを述べたが、これ等以外に、夢に採用せらるゝ材料の選擇に影響を及

ほす二個の條件がある。その一は描寫と稱する働きである。吾人の夢に表はるゝ顯在内容は、或境遇又は動作を描寫して居る。その描寫は恰も繪畫や彫刻の技術と同じく、一定の制限の下に立つて居るものである。直接に描き出すことの出来ない精神作用を示すには、特別なる技巧上の工夫を要するといふことは勿論である。この點に於て夢は又劇の描寫とよく似て居る。例へば劇の作者が數年間に亘る事件を二三時間の中に描寫してしまふには、どうしてもその材料に選擇と變形とを加へなければならぬ。夢に於ても之と同様である。例へば一個の象徴が多數の事物を代表して居ることもあるし、過去の經驗が現在の行動となつて表はれてくることもあるし、未來に關する希望が現在の境遇に於て實現されたことを夢みることもあるのである。

種々の知的作用を夢の上に表はすことも亦一種の描寫と見るべきである。判断のやうな知的作用は、屢夢の顯在内容に表はれてくるけれど、それは裏面に潜む夢

の思想中に生じたものである。夢の思想中には、判断・論議・條件・證明・反對などのやうな各種の知的作用が行はれて居る。しかし此等の多くは、夢の顯在内容に特別に表はれて居ない。通常は夢の思想の材料たり内容たるものだけが夢に表はれて、その間にある論理的關係は全く取れて仕舞つて表はれて來ない。しかし夢の作用は時々特別の工夫を用ひて、如上の論理的關係を間接に表はさうとして居る。但しこの工夫の行はるゝ範圍は、夢によりても、又人によりても、夫々異なるものである。

夢の思想の各要素間に存する論理的關係は、覺醒時の思想と同じやうに、「若し」「何となれば」「故に」「假令……と雖」……か……或は……かである」等の言葉で言表はされるけれど、それは直接顯在内容に表はれて來ない。それを間接に表はすには次のやうな工夫をする。例へば二つの思想の間に存する論理的聯絡を示す時には、それを代表する二要素が同時に顯在内容に表はれて來るのである。前に述

べた夢の例に於て、夫の死と再婚と子供を産むといふ三種の思想は、論理的に聯絡して居るけれど、顯在内容に於てはこれ等の三要素が同時に表はれて來て、その論理的關係を示して居る。恰も畫家が一室内或は一山巔に集合して居ない凡ての哲學者又は詩人を、それ等の思考方法に共通點がある爲めに一處に畫くやうなものである。

二つの夢の間に存する因果の關係は、通常少しも示されないものであるが、それが表はれる場合には、一つが他のものゝ後に生ずるといふやうな形式を取るものである。最も普通に見るのは、原因となるものが序夢(Vortraum)に表はれて、結果が本夢(Haupttraum)に表はれる場合である。フロイドの一婦人患者は嘗て序夢として次のやうな夢を見た。即ち「彼女は二人の下女の居る臺所に行つて、未だ食事の用意が少しも出來て居ないと小言を云つた。この時多數の大きな臺所道具がひつくり返つて、うづ高く積み重なつて居るのを見た。二人の下女は水を取り

に行つたが、家や庭の所まで溢れて居る小川に汲みに上つて行かなければならなかつた。

この序夢の後本夢が現はれて來た。即ち「彼女は珍らしく作られた欄干を越えて、高い所から下りて來た。而して彼女の衣物がどこにも懸けてなかつたことを喜んだ」。この序夢は前の婦人の兩親の家に關聯して居る。臺所に於ける言葉は、彼女の母親がよく屢言つた所のものである。大きい家具の積み重ねは、同宅に於て簡単な品物を取扱つたことに原因した居る。第二の夢は父に對する諷示である。蓋しその父なる人は下女のするやうな仕事をせつせと勤め、その後洪水（家が川の岸の處にあるので）の爲めに命に係はるやうな病氣に犯されたのである。序夢の下に潜む思想は、即ち「私はこの家、即ちかやうに賤しい不愉快な地位に生れたからして」といふことを意味する。本夢の思想は、前と同一の思想を繰返して居るが、願望實現の爲めに、「私は高貴の血統のものである」といふ風に變形して

居る。しかし本來は、「私はこんな賤しい血統のものであるから、私の經歷はかやうかやうであつた」といふことを意味して居る。

併し顯在内容がかやうに前後に分かれたと言つても、その二つの夢の思想の間に必ず因果の關係があると定まつたものでない。又稀には因果の關係を示す爲めに、甲の要素が乙の要素に變形するといふ方法を執ることもある。但しその變形は單に轉移するのみでなくて、直接の變形でなければならぬ。即ち甲の光景が乙の光景と交替して居るのではなく、甲が漸次に乙に變じて行くといふ風にして、因果關係を示すのである。

「或は」とか「いづれか」といふやうな論理的の關係が夢の思想には存在して居ても、顯在内容にはそれが表はれて來ない。それを代表する二つの要素がたゞ一緒に表はれるに過ぎない。この關係がそのまま顯在内容に表はれた場合には、それは夢の思想に於ける「及び」を翻譯したものである。即ち潜在内容にA及びBの要素

が存在する時、顯在内容ではA或はBとなつて表はれてくる。フロイドは伊太利に行つた友人から宿所を知らしてくるだらうと、永い間待つて居たので、或夜その宿所を電報で知らして來た夢を見た。その宿所は電報用紙に青く印刷され、第一の文字はほんやりして居て、Via或はVillaと書かれ、第二の文字ははつきり居して、Rezeno或は又Caseと書いてあつた。第二の文字が伊太利の地名の音と一致するといふことは、その朋友がその宿所を秘して居ることをフロイドが如何に心配して居たか分かる。分析の結果この後の三つの文字は夫々第一の文字に對し、思想連鎖の上から見て、相互に獨立・同權の地位を占めて居ることが知れた。

夢の思想間に存在する反對及び矛盾の關係を顯在内容に表はす方法に二種類ある。その一つは相反對する思想を代表する二つの要素が相融合して一つの統一體となるものである。前に掲げた所の珍らしい欄干を越えて下りて來た夢を見た婦

人は、尙その際花の咲いた枝を手に持つて居た夢を見た。この心像に關聯して、彼女は通告祭（三月廿五日天使 Gabriel の耶蘇降生を Maria に通告した記念の祭日。患者の名も亦マリヤである）の繪の中に天使が百合を手にして居ること、聖餐祭の行列に白衣をつけた女の子が行くこと、その時市中は緑の木の枝で飾られて居ることが憶ひ起された。この花の咲いた枝は慥かに性的無垢を暗示せるに相違ない。その枝には赤い花が一杯ついて居るが、その一々は椿の花に似て居た。彼女が行く道の端の方は、花が可なり落ちて居た。これは明かに月經を暗示して居る。その花の枝は一方に無垢の小女を示す百合の花が咲いて居るのに、之と同時には他方には、平生は白いが月經時には赤くなるといふ椿姫を暗示して居る。故にこの花の枝は性的無垢を示すと共にその反對をも示して居る。又この夢は一方に一生涯を通して無垢に暮すといふ喜びを表はして居るが、他方には之と全く反對な思想、即ち性的潔白に反する種々の罪惡に對する責を負ふといふ考が閃いて

居る。故に此夢は明かに二個の相反する思想に分析することが出来る。即ち一は表面に表はれた愉快な思想で、他は裏面に潜む非難に満ちたる思想である。しかしこの相反する二つの要素が、相融合して同一の夢の要素となつて居るのである。

かやうに二つの要素が融合して一つとなつて居る場合に、若しその融合が夢の材料中に既存して居るならば、これを同一化(Identifizierung)と稱し、新らしく構成せらるゝ場合には、之を混成(Mischbildung)と稱する。前者は主として人及び場所について行はれ、事物については滅多に行はれない。後者は主として事物について行はれ、時々人物及場所についても行はれることがある。同一化の作用に於ては、共通の點によりて結合したる人物の中の一つが描き出されて、他の人物は匿れてしまふものである。しかしこの表れた人物は自己及び匿された人物に基づく關係や位置の中に凡て表はれてくる。人物に於ける混成作用に於ては、例へ

ば夢中に表はれた顔は、一部は甲の、一部は乙の特徴をもつて居て、所謂集合人物となつて居る。

夢の思想間に存する反對の關係を顯在内容に表はす第二の仕方は、之を「逆」(Umgekehrt)に示す方法である。即ち夢の思想を變裝する爲めに、種々の機智をめぐらし、或要素の裏を以て代理せしむるのである。それで夢を分析するに當りて、それを逆にして見れば解釋のつくものが少くない。この逆にすることは、空間にも時間にも行はれる。空間に關する逆の場合には、上下を轉倒したり、左右を交替したり、或は前後を逆にしたりする。前に述べた夢の中で、生殖器を象徴するヤツカの本は、腹の方にあるべきを逆にして脊の方について居た。ジコーンスの掲げた所の時間を逆にして例によると、或婦人患者は最初出産を意味する夢を見、それに次いで夫の許を出奔して、戀人と同棲するを意味する夢を見て居る。

描寫作用の中で非常に興味のあることは、夢の中に表はれたる數字が、或特殊

の意味を表はすことである。一婦人患者はその病氣が治る少し前に次のやうな夢を見た。即ち彼女はどこかで支拂をしようとして居る。彼女の娘が財布から、三、グ
ル、デン、六十五、ク、ロイツ、ェルを取出した。それで「お前は どうしてそれだけの錢を
出すの、それはたつた二十一、ク、ロイツ、ェル拂へばいいのに」と言つた。この婦人
は外國人で、その娘はキーンKeeneの學校に入學して居た。それでその娘がキーンKeeneに居
る間はフロイドの治療を受くことが出来るのである。處が三週間でその學校は
休みになるので、これと同時に治療も中止しなければならぬ。この夢を見た二
三日前に、その學校の校長からも一年その娘を學校に止めて置くやうにすること
が出来ないかとの相談を受けた。それで若しさうなれば、一年治療を續けること
が出来ると彼女が考へたのは明白である。茲に於て夢に表はれた數字は、この一
年即ち三百六十五日と、學校の休み、並に治療の中止があつたと三週間即ち二十一、日
で來るといふこと、關係して居ることが明かになつた。何故に夢の思想中の同數

が、夢の内容では金銭の高で表はれたかといふに、これ「時は金なり」といふ諺の通り、時日が経つ程出費が嵩むことを意味して居る。而して夢に表はれた支拂金高の少ないことは、彼女の願望の實現に外ならない。即ち娘の學校の年限が短縮せらるゝと同じやうに、治療の費用も減ずればいゝがと希望したのである。

六、二次的推敲 (sekundäre Bearbeitung)

夢の内容に表はれた著しき出來事の起源を、その夢の思想に求むるに當りて、前に述べた三種の作用を知るだけでは不充分で、尙一つの假定を必要とするであらう。吾々は時々夢の中で非常に不思議に思つたり、或はその内容の或物に就て心配したり、或は之を拒絶したりすることがある。この夢の中の批評は多く夢の内容に向けられるのではなく、夢の中に採用された材料の一部として表はれてくる。しかも或場合には批評に相當する物を夢の材料中に見出すことが出來ない。夢の中に屢起る所の批評、即ち「それは夢に過ぎない」といふことは、抑何を意味

するのであるか。これは覺醒時に於ける批評と同じく、夢に對する實際の批評である。この批評は往々覺醒時の批評の先驅者となるもので、又屢その批評の前に苦痛の感情が起つてくる。而して此感情は、これは夢の状態であるといふ證言によつて靜まるものである。夢を見て居る間に「これは夢に過ぎない」といふ輕蔑的批評は何時も起るかといふに、それは未だ全く眠つて居ない監視作用が、既に許されたる夢によつて奇襲されると感ずる場合である。蓋しこの監視作用はその夢を抑壓するには餘り遅れ過ぎて居て、夢に伴ふ恐怖や苦痛の感に遭遇するやうになるからである。之は夢の凡ての内容が夢の思想に原因して居るとのみ限らないで、尙覺醒時の思考作用と同一なる心的機能、即ち批評作用が夢の内容に存して居ることの明白な證據である。しかし讀者の中には、この種の監視作用は全く例外的のものであるか、或は夢を構成する上に正規に表はれるものであるかといふ疑問が起るかも知れないが、それは言ふまでもなく正規に表はれるものである。

吾人は既に監視作用の影響として、夢の内容が緊縮及び省略せらるゝことを述べたが、この外内容の附加及び増大が起ることも、疑ふべからざることである。この附加は屢容易に發見せられる。しかしそれは大膽に活潑に表はれないで、
：であるかのやうに「見え、夢の内容の二つの部分の結合及びその結合の開拓に役立ち得る場合に表はれてくる。それは又夢の材料の純粹の派生物として、記憶の中に僅かの耐久性を示して居る。故に夢が忘れられる場合には、この附加が最初に脱落する。吾人は常に多くの夢を見るけれど、その大部分は忘れて、碎片のみが記憶に残るといふことは、一にこの接合思想の急速なる脱落に基づくと推定することが出来る。十分に分析を行つて見ても、夢の思想の中にはこの附加物に就ての何等の材料を發見することが出来ないことが多い。しかし注意深き研究の結果によると、此場合はずつと稀に起るものと言はなければならぬ。この接合思想は大抵夢の思想中の材料に原因して居るが、その材料はそれ自身の價值から

云つても、亦夢に採用せらるべき権利から云つても著しく表はるゝことの出来な
いものである。故に今述べ來つた所の、夢の構成に於ける心理的機能は、それが
極度の場合には創造物となるのである。しかし出來得べくんば、夢の材料中で選
出し得た有用な物を利用するものである。

前に述べた機能は、夢の作用の傾向である。この機能は夢の構成に於ける缺陷
を補足して行く。この努力の結果、荒唐無稽で、何等の聯絡もない夢が、條理整
然たる經驗の描寫に近寄つてくる。かの表面から見ると、何等の缺點もなく、論
理的で且正當である夢は、矛盾のないやうに絶えず變化され、不思議に思へないや
うな結論に導かれた結果である。即ち此夢は覺醒時の思考作用と等しき心理機能
によつて推敲されたのである。それでその夢は筋道のたつた意味を有して居るや
うに見ゆるけれど、この意味は夢の眞の意義とは關係の極めて遠いものである。
夢を分析して見ると、二次的推敲作用が最も自由にその材料を手玉に取つて居る

ことを知るであらう。その夢は吾人が覺醒時に解釋を附する以前に、既に一度解釋せられて居るといふべきである。或夢に於ては、この一次的推敲は一部分即ち聯合を維持するだけに止まり、それより夢は混亂せる無意味のものとなり、第二回の推敲作用によりて、外見上理解せらるゝやうになるものがある。或夢に於ては、推敲作用が全く拒絶せられて、只斷片的内容の無意味なる堆積に過ぎないものもある。

夢の構成に表はれるこの第四の作用は、創作的の新事物を夢に寄與する能力と見做してよい。而してこの能力の影響は、他の作用のそれと同じく、主として夢の思想中に既に構成されたる心理的材料を選び取ることである。夢の正面を建造する仕事は、夢の思想材料中に既にかやうな創作物が準備されて居て使用せらるゝことを待つて居ることの爲めに、大部分その手数を省く場合がある。而して夢の思想中に創作物の準備せらるゝことは、想像(Phantasie)作用に基づくもので、

その想像作用は、覺醒時に於て空想 (Phantasia) の創作せらるゝ場合に表はるゝ作用と同一のものである。推敲作用はその與へられたる材料を以て、空想のやうな或物を創作しようと求めて居るといふことが出来る。しかしかやうな空想が、既に夢の思想と聯合して夢を構成する場合には、夢の作用に於ける推敲作用は、空想の爲めに征服され、空想はそのまゝ、夢の内容に織り込まれてしまふものである。無意識的に構成された日中の想像を繰返すに過ぎない所の夢、例へば子供がトロイ戦争の英雄と戦争をしたといふ夢を見る如きは、この適例である。モリーによりて傳へられた有名なる斷頭臺の夢のやうに、極僅かの間に極めて複雑なる長々しき夢を見ることは、この事實からして説明することが出来る。

今翻つて上に述べ來つた夢を構成する四種の作用を通覽すると、夢を構成するには何等の知的作用も與つて居ないといふことが第一に氣付かれる。夢の作用は主として、以前より潜在して居た夢の思想を、他の形式に翻譯するといふに外な

らないで、その間に何等創作的作用の行はれた所がない。決斷・計算・判斷・比較・斷定等の思考作用は少しも行はれない。夢の中では或空想を推敲することすらしないで、そのまま採用することがある。夢の中に知的作用を行ふやうな部分があつても、それは潜在内容から直接に又は變裝せしめて採用して居るに過ぎない。又夢の中に表はれる數字や演説の文句などに就ても同様に説明することが出来る。夢に對する覺醒時の判斷の中にすら、潜在内容に屬するものがある位である。之を要するに夢を構成するといふことは、以前より存在する精神作用を變形せしむることに過ぎないのである。

故に夢を構成する作用は、覺醒時の精神作用と大に相違して居る。夢の内容は覺醒時の思想よりも不注意・不正當・不完全・非論理的で忘れ易いばかりでなく、二者は全く根本的に相違して居る。夢の内容では明かに矛盾があつても少しも頓着しない、不合理の類推も行はれる、又全く異つた觀念も外見的聯絡によりて聯

合せられるといふ有様で、若しかやうな精神作用が覺醒時に起つたならば、全く知能に異状を呈したと思ふに相違ない。實にユングが言つた通りに、夢は早發痴呆やその他の精神病の晩期に見る所の精神状態とよく似て居るのである。しかし夢の潜在内容は之と全く反して條理整然たるものであることは、既に述べた通りである。

七、夢に於ける情緒

夢の中に表はれた情緒は、吾人が目を醒ました後で、その夢の内容を輕視する程、價値の少ないものでないとのストリッケルの言は實に聰明なる注意である。例へば茲に強盜に襲はれた夢を見たとする。その強盜は想像的であるけれど、恐怖の感情は實際である。何か喜ばしい夢を見た場合も之と同一である。吾人の經驗からいふと、夢中に經驗された情緒は、覺醒中に經驗された同強度の情緒よりも決して價値に於て劣れる所がなく、表象内容を有するものよりも却て強い勢力

を有して居る。夢の中に於ける情緒と表象とは相互に一致して居ないから、之を覺醒状態に於て評價する際往々誤謬を生ずる。蓋し覺醒状態に於て情緒はその表象内容と結合せしめて心理的に評價せらるゝからである。

覺醒状態に於ては、表象内容は必ず情的影響を伴ふものと吾人は考ふるけれど、夢に於ては何等の情緒を伴はない場合がある。それでストリュンベルは、夢に於ける表象はその心理的價值を失つて居ると云つて居る。夢に於ては又之と反對に、情緒の遊離に何等の機會を與ふるやうに見えない内容の場合に、烈しい情緒の表出が現はるゝことがある。例へば吾人は夢の中で戰慄すべき、或は危険極まる、或は嫌はしき状態にありながら、何等恐怖の情も嫌惡の念も生じないことがある。之に反して何等危険もないことに吃驚したり、些細な子供らしいことを非常に喜んだりする夢を見ることがある。

かやうに夢の内容が烈しい情緒を伴つたり、或は伴ふべき所に伴はなかつたり

することは、その夢の思想に沂つて見ると、委細明了になるものである。夢の思想が顕在内容に表はれる際に、情緒が何故に抑壓されて、その強度を弱めるかといふに、フロイドは之を以て睡眠中には感覺的側面より運動的側面に向つて前進する運動が休止する爲めであるとし、(氏は情緒の過程を以て全然遠心的のものであると考へた) 又一部は意識の監視作用によりて抑壓される爲めであるとした。故に潜在内容が平靜で、それから感動的なる顕在内容を生ずることは決してない。夢の内容では往々何んでもない事に感動的のことはあるけれど、夢を分析して見るとその何でもない事は一の變裝に過ぎないで、やはり夢の思想は感動的であることが分かる。

顕在内容に表はるゝ情緒と、潜在内容に表はるゝ情緒との間に、強度の差あることは、精神病者に於て最も著しく表はれるものである。情緒はその性質より云へば少しも變化はないが、神經病的注意の轉移によりて、情緒の強度が著しく昂

進するものである。ヒステリー患者が些細なことに恐れたり、強迫観念を有する人が、何でもないことに苦悶するといふのを不思議であると考えるのは、その表象内容即ち些細なことや何でもないことを出發點として、此の現象を考ふるからである。

情緒が顯在内容に表はれてくる場合には、上述の如くその強度は弱くなることも又は強くなることもあるけれど、その性質に至ては少しも變化しない。それでステークルは、「夢に於て異なるものは情緒のみである」と云つて居る。情緒が潜在内容から顯在内容の方に表はれてくる時には、轉移・交替の作用によりて、結び付く對手が異なつてくるけれども、その形式には少しも變化はないのである。但し顯在内容に表はれた情緒が、潜在内容に於ては丁度その反對のことを代表して居ることがある。しかし之を更に精細に分析して見ると、その反對観念は二つ共潜在内容の中に存在して居つて、孰れを持つて來ても、その場合に於てはまる

といふやうなことが明かになつてくる。覺醒時の精神作用に於ても屢見る通りに、夢の思想に於ても、丁度正反對の精神作用が親密に聯合して居ることがあるのである。

上述の例證として、先づ初めに夢の表象内容は轉移するが、情緒はそのまゝにして居る所の夢を掲げて、之を分析して見よう。

夢の内容、彼女は沙漠の中に三匹の獅子を見た。その中の三匹を笑つて見て居て少しも恐ろしく感じなかつた。その後彼女は恐れたに相違ない。蓋し木の上に攀ぢ登らうとしたからである。しかし佛蘭西語の女教師をして居る姪が既に木の上に居るのを發見した云々。

この夢を生ぜしめた動機は、英語の課業に於ける、「鬘は獅子の飾りである」といふ一句である。彼女の父は鬘のやうに顔の周りに鬚が生へて居た。又彼女の英語教師の名はライオンヌ嬢といふのであつた。知人が獅子に關する詩を彼女に

送つた。それで獅子が三匹になつた。而してこの三匹の獅子に對して何故に恐怖心が起つたに相違ないかといふに、彼女は一の物語を讀んだことがある。それは、他人を煽動して謀叛をさせた一人の黒奴が、獵犬に追立てられ、之を免れようと木に攀ぢ登つたといふ話である。それから極めて大膽な獅子の捕獲方法に就ての話と思ひ起した。即ち人が沙漠の砂を取り上げ、これを篩にかけた處が、獅子が篩の中に残つたといふことが思ひ出されたのである。尙又極めて愉快なる併し餘まり禮儀正しくない一官吏の逸話をも夢に關係して居る。即ちその官吏が何故に長官から恩寵を被るやうに努めないかと尋ねられた際に、その男が答へるには、自分もその中にはいて行かうと努めたけれど、上役が既に、上に居つたと云つた。この婦人はその夢と見た前日夫の上役の訪問を受けたといふことを聞けば、この夢の全材料は全く理解せられるのである。その人は非常に丁寧な人で彼女の手にキツスをした。それでその人は偉大な動物で、彼女の町では社交界の獅子の役目

を演じて居たに係らず、彼女は、その人の前で、少しく恐ろしくなかつたといふことである。

次に夢の監視作用の爲めに、潜在内容の情緒が全く轉倒して顯在内容に表はれる例を述ぶると下の如くである。フロイドが嘗て次のやうな夢を見た。友人Rは私の伯父である。私は彼に對して大變に懐しみを感じた。彼の顔付が私の面前で幾分變化して居る。即ち顔が長くなつたやうである。その顔の周圍に生えて居る金色の鬚が特に目立つて見える。

この夢を分析して見ると、友人Rと伯父ヨーゼフとを混同して居るやうである。顔の長いのと金色の鬚とは伯父の顔に似て居る。友人Rは極めて黒い毛で、それが少し灰色が、つて來て居る。又伯父のヨーゼフは犯罪人である。それは氏の父の言によると、伯父は決して悪い人でないけれど、意志の弱い爲めに悲惨な目に逢つたといふことである。それ「友人Rは私の伯父である」といふことは、友人

Rは意志の弱い人であるといふことを意味して居る。而して氏が彼に對して懐しく感ずるといふことは眞實でない。犯罪者たる伯父に懐しみを感じないの言ふまでもない。又Rは數年來氏に對して忠實であるけれど、若し氏が彼に對して親愛の情を示すやうなことがあれば、それは不思議に思はれる位の間柄である。それでこの親愛の情は潜在内容に存在しないのみならず、却てその反對の情緒を有して居ることが分かる。即ち氏は夢の思想ではRを罵倒して居るが、氏自身には少しも之に氣付かず、その反對即ち親愛の情を夢に表はして居る。

八、夢の材料とその淵源

夢に表はるゝ記憶に三つの特質があるといふことは、多くの人によりて認められて居る。即ち(一)最近の印象が夢に表はれること、(二)覺醒時の記憶に於けるよりも、異なつた原理によりて經驗を選択する、即ち基本的の重要なる事柄よりは、殆んど注意に上らない程、些末なる事柄の方が却つてよく記憶されて居ること、

(三) 幼少の折の出來事で、極つまらない爲めに、覺醒時には永い間忘られて居た印象が表はれて來ること等がある。

この三特質の中で、(一)と(二)とは極めて密接の關係を有して居るからして、一處に説明を試みよう。如何なる夢にも、その人が最後の覺醒時に於て經驗した精神作用が必ず表はれるものである。假令この頃の經驗に屬することでも、夢の直ぐ前の日に經驗したもの、外は、皆舊い記憶と同様に取扱はれるのである。それで前日の精神的經驗は、夢を作る上に特に重要な性質を有して居るに相違ない。即ち前日の經驗をよく調査して見ると、その中には心理的に重要なものと、全く中性的のものがある。併しその中性的ものは、必ず或る重要な潜在的經驗と聯絡して居る。

夢の淵源には四種類ある。(a) 夢の中に直接表はれて居る近頃の重要な一個の經驗、(b) 夢によりて統一されて居る、近頃の重要な數多の經驗、(c) 結び付

て居る中性の經驗の出現によりて、間接に夢の内容に表はれて居る近頃の重要な一個若くは多數の經驗、(d)内部の重要な經驗(記憶・思想の通行)、これはそれと聯絡して居る近頃の中性的經驗の出現によりて、顯在内容に表はされるのが普通である。前に述べた「イルマの注射」に關する夢、「友人は私の伯父である」云々の夢は(a)に屬し、「植物紀要」に關する夢は、(c)に屬するものである。

かやうに前の日に經驗したことが、夢に表はれてくるが、その事柄は、それ自身が重要なこともあるし、或は何か他の重要なことと結び付いて居ることもある。些細な出來事が夢に表はれるのは、前日の出來事だけに限られて居る。舊い出來事で、一寸見ると些細のことのやうに思はれることが、どうして夢に表はれてくるかといふに、それは他の重要な精神作用と結びついて、その作用に伴ふ情緒がそれに移植された爲めに、それが表はれる時には、心理上極めて重要なものとなつて居るからである。故に夢を構成する材料には、心理上重要なものと、

然らざるものがあつて、重要ならざるものは、凡て前日の經驗に屬して居る。

右の如き事實をフロイドは、次のやうに説明した。中性の精神作用が顯在内容に表はれる理由は、夢を作る際、中性の精神を以て、心理上極めて重大なる潜在作用を代表せしむる爲めである。例へば聯隊を代表する旗が、旗そのものには何等の價値はないが、隊の名譽を代表して居ると同様である。精神病にも之と似た徴候があつて、重要な情緒を中性の觀念に移植することが屢ある。例へば無害の事物を見て烈しく恐怖するやうな場合である。これは甲といふ恐ろしい事物に結びついて居たのが、甲と聯絡を有する乙の方に移植された結果である。之は前に述べた一種の轉移作用である。夢に於ても、精神病と同じく、潜在的の第一觀念は意識的となり得ない性質をもつて居る。夢の中に新しい經驗が表はれるのは、經驗した後あまり時間がたつて居ないので、多數の聯合を形成して居ない爲に、自然、無意識的精神作用と容易に結合する傾向があるからである。

今最近の経験が夢に表はれた一例を挙げよう。若い婦人が下のやうな夢を見た。「彼女は蠟燭に一本の蠟燭を立てようとした。しかしその蠟燭は折れてよく立たなかつた。學校に於ける子供がいふには、それは不細工である。しかしそれは彼女の責任でない」。今この夢の實際の誘因を調べて見ると、彼女はその夢を見る前日、蠟臺に蠟燭を建てた。しかしその蠟燭は折れて居なかつた。茲に明白なる象徴が用ひられて居る。蠟燭は女の生殖器を刺激するものである。それが折れてよく立たないといふことは、男の陰萎を表はして居る。「それは彼女の責任でない」といふ語に照應する。注意深い教育を受け、凡ての忌まはしい事柄に遠ざかつて居た、この若い女がどうして蠟燭の利用といふことを知つたか。それは極めて偶然の経験によつて知つたのである。彼女は嘗てライン河に小舟を浮べて居た時、ボードが一艘その傍を通つた。それには學生が乗つて居て、大きな聲で歌を謡つて居た。即ち「瑞典の女王が、締めきつた窓の戸の側で、アポロの蠟燭を以て……」と。

この歌の最後の所は聞えないか、或は理解しなかつた。彼女は寄宿舍で一度或命令を極めて不器用に行つたことがあるが、その罪のない回想が夢の内容に於て、この歌と入れ代つたのである。而して「締めきつた窓の戸」は双方に共通して居る。手淫と陰萎との結合は極めて明白である。「アポロ」なる語はこの夢が以前に見たパラス女神に關する夢と潜在内容に於て聯關して居ることを示して居る。かやうにして凡てが實際罪のない夢ではないことになるのである。此の他フロイドはかやうに、外見上は罪のないやうに見えても、その潜在内容を調べて見ると、全く之と反對して居る夢の實例を數多擧げて居る。

(三) 子供時代に經驗したことが、夢に表はれてくることは、凡ての學者の既に認めて居る所である。中には顯在内容に表はれた事柄を、本人は嘗て經驗したことを全く忘れて仕舞つて、往々客觀的に自己の經驗たることを立證することがある。忘却されたる記憶は顯在内容に表はれる計りでなく、亦潜在内容に表はれる

ことが更に多い。フロイドは夢の潜在内容はすべて幼少の時の精神作用と結びついて居るに相違ないと考へる。一婦人患者は次のやうな夢を見た。即ち「彼女は大きい室に居る。そこには種々の機械がある。それは醫療的體操器具のやうに見える。彼女はフロイドが時間がないので、他の五人と同時に治療を受けなければならぬといふことを聞いた。しかし彼女は反抗して、彼女に定められた寢床に寢ようとしな。彼女は隅の處に立つて、フロイドがそれは嘘であるといふのを待つて居た。他のものは彼女が滑稽であるといつて笑つた。——恰も彼女は多くの小さい四角形を作らんとして居るかのやうに」と。

この夢の最初の部分は、フロイドの治療に關係して居る。第二の部分は子供時代の光景を暗示して居る。寢床の記述で二つ部分が相互に接合して居る。醫療的體操云々は、氏がその患者に向つて、氏の繼續的治療をその本質よりして醫療的體操と比較して説明したことに聯關して居る。氏は又目下時間が少なくて充分彼女に接

ずることが出来ないが、やがて全時間を彼女に捧げることが出来るであらうと屢彼女に話した。この事が彼女の幼時の經驗を呼び起した。彼女は子供の時から愛情に飢えて居た。彼女は六人兄弟の中で最も若い。(夢の中に他の五人と表はれて居る)而して父の秘藏兒であつたが、父は彼女の爲めに僅かな時間と注意とを捧げた。それは嘘であるとフロイドがいふまで待つた云々といふことは次の原因から來て居る。一人の小さい仕立屋の若者が衣服を持つて來た。それで金をその者に拂つた。その時彼女はその者に向つて、若し金を失つたら、一度金を拂はなければならぬかと尋ねた。その者は彼女を嘲弄する爲めに、さうですといつた。彼女は初めてこんな珍らしいことをきくので、その男が最後にそれは嘘ですといふのを待つて居た。これは又フロイドが二倍の時を彼女に捧ぐるやうになれば、二倍の拂ひをしなければならぬといふ吝しい汚れた者が、夢の潜在内容を形成して居ることを示して居る。(小供時代の不潔なことは、夢に於ては往々金錢に對す

る吝嗇として表はれる。蓋し汚いといふことが兩者の懸橋になつて居るからである。フロイドがそれは嘘ですといふのを待つて居た云々の夢が、汚いといふことを表はして居ることは、一方に隅に立て居るといふこと、及び寢床にねないといふことゝ一致して居る。これは子供時代の光景の一部で、彼女が寢床を汚すことがあれば、罰として窓の隅に立たせられ、父は最年彼女を愛しないと威喝されて居た。それを他の姉妹は笑つて見て居たといふことである。小さい四角形は、彼女に一種の計算法を教へた小さい姪に關係して居る。その計算法といふのは各方面に計算して十五になるやうに九個の正方形の中に數字を書き入れる一種の方法であつた。

従來消化困難が夢を惹起すとか、神經的刺戟又は身體的刺戟が夢の原因となるとか考へられた。フロイドによると、睡眠中に於ける身體的刺戟は決して夢の原因となることはない、たゞ夢の組織中に織り込まれるだけであるとする。しかし

夢の材料となるには、他の心理的材料と同じく或條件を充たさなければならぬ。例へば睡眠中に烈しい痛みを生ずるとすると、それに對する反應の方法には種々ある。第一肉體的疾病の場合に往々表はれるやうに全くそれを無視する場合がある。第二睡眠中それを感じては居るが、少しも夢にならない場合がある。第三その爲めに目が醒める場合がある。第四それを夢の中に織り込む場合がある。この最後の場合に於ても、變裝されて夢の中に織り込まれるもので、それは刺激の性質に基いて變裝せられるのでなく、夢の他の部分の性質によりて、その場合に當てはまるやうに變裝されるものである。それで同じ人が同じ刺激を受けた場合に於ても、その時の夢の異なるに従つて、全く違つた形をとつて表はれるのである。かやうに夢の性質により又動機によりて變裝する有様が異つて行くことは、夢を分析して見ると明白になつてくる。之を要するに、夢は單に身體の刺激を利用するに過ぎないので、而もその刺激はその夢にうまく當てはまるやうに、變裝作用

を被つて、夢の中に織り込まれるものである。

九、代表的の夢

第一の代表的の夢は肌着のまゝで居たとか、不完全な化粧室に居たとかいふ夢を見ることである。かやうな夢はどうして起るかといふに、それは吾人の露示 (exposition) の欲望に起因して居る。子供はよく裸になりたがり、客などがあるとわざと衣服を脱いで、陰部を露示する傾向がある。或種の精神病者にも之と同様の行爲がある。未だ羞耻の念が表はれて居ない子供時代は實に天國である。漸次的な生活や文化の影響の爲めに、吾人に羞耻の念を生じ、天國から遠ざかつて行く。所が毎夜夢の中で吾人は昔の天國に歸ることが出来る。故に裸の夢はこの露示の願望を實現したものと見ることが出来る。しかし例の監視作用は無意識界にも行はれて、赤裸々にこの露示の願望を實現することをしないで、種々と變化して表はれる。例へばフロイドが、浴室から出てくる途中で、女中に會ひ、せむ方

なく階段の所に身體をくつゝけて居たといふ夢を見たのは、やはり露示の夢に相違ないのである。

次に代表的の夢は、吾人の兄弟・姉妹・両親、又近親の死んだ夢を見ることである。吾人は今兄弟姉妹を愛して少しも彼等の死を希望したことのないのに何故に彼等の死を夢みるのであらうか。それは吾人の幼時の願望が今尙夢となつて表はれてくるのである。子供が三四歳の頃、その弟か又は妹が生れた場合を観察すると、這般の事實は明かになつてくる。その子供は非常に嫉妬心を起し、母が嬰兒に乳を飲ますのを嫌ひ、時には乳兒を母の膝より引ずり下ろさんとすることさへあるのである。この時その子供は乳兒がどこか餘所に行つて仕舞へばいゝがと欲することは慥かである。子供が死といふのは大人の場合と異なつて、單にその者の除去せらるゝことを意味する。それで弟や妹が死ぬことを希望するのは、單にそれ等が他所に行けばいゝがといふ願望に外ならない。

弟妹が愛の競争者となるばかりでなく、兩親も亦競争者となるものである。即ち男兒は父を排除して母愛を専有せんとし、女兒は母を驅逐して父愛を獨占せんとするものである。この幼時の願望が漸次抑壓されて、本人には全く無意識になつて居るが、監視作用が比較的勢力を失つた夢に於て再現され、兩親の死を夢みることがある。父親の死を希望することは、子供の精神と相似た野蠻民族の精神にも表はれるもので、エディプス王の傳説及びソフォクレスの書いた同名の劇は即ちその願望を表はしたものである。今ソフォクレスの劇の大意を述べると次の如くである。

エディプスの父ライオスはテーベの王で淫亂の質であつた。嘗て劣情に驅られてペロプのネクリシッポスを誘拐した。それでペロプは怒つてライオスを呪ひ、彼が子なくして死ぬか、或は子を生んでもその子の爲めに殺さるべきとを豫言した。所が王妃ヨカステとの間に一子を生んだので、ライオスはその豫言を恐れて之を

捨てさせた。その子は牧者に拾はれて、コリント王ポリプスの許に連れて行かれ、そこで王子として成長した。その子が即ちエディプスである。やがてエディプスは自分が見えぬものであるといふことを聞き、事の眞偽を確かめようと、デルファイの神殿に行つて伺つて見た。所が神宣はエディプスの父は誰であるかを示さないので、彼の父を殺し母と婚するに至るであらうと告げた。エディプスは非常に驚き、茫然として反對の途の方に彷徨つたが、途中で一臺の軍車に出會つた。彼は車上に疾呼する御者の無禮を怒つて刃傷に及んだ揚句、御者も車の主をも殺してしまつた、所がその車の主は彼の父ライオスである。勿論彼はその父たることを知る由もなかつた。やがて憤怒の神マルスはスフィンクスをテーベに送り、その謎を解くことの出来ぬものは凡て之を喰ひ殺した。それでテーベの人民は、この謎を解くものは、王位を譲り王妃と配すべき旨を宣言した。エディプスは偶然その謎を解くことが出来、人民の約束に基いて母たる王妃と婚するに至つた。最初は威厳ある王と

して、二男二女を生んだが、やがて彼の身分が知れて、彼は父を殺して母と婚するに至つたことが分つて來た。それでエディプスは天目を仰ぐに堪へないとして自ら双眼を抉り出して盲目となつた。その子供も彼に對して冷酷を極め、且つ兄弟争ひをして遂に双方とも陣没するに至つたといふ話である。フロイドによると、このエディプス錯綜は、古代の傳説や神説に多く見られる所で、シエクスピアーの書いたハムレット劇もこのエディプス錯綜と同一性質のものであると言つて居る。

十、内精神的監視

吾人は前に監視作用に就て屢述べたが、今少しくこの事を闡明する必要がある。それには先づフロイドの無意識精神作用の説を知らなければならぬ。即ち氏によると、與へられたる瞬間に於て吾人の意識して居る精神作用を「意識的」と名づけ、自發的隨意的に意識し得る精神作用を「前意識的」(Vorbewusste)と稱する。例へばその時は意識されて居ないけれども、容易に憶ひ出すことの出来る記憶の

如きは即ちそれである。之に反して自發的に意識に浮べることの出来ない精神作用を「無意識的」と名づける。但し催眠術や精神分析法を用ふると、之を再生せしむることが出来るのである。

この無意識になつて居るものを意識界に喚び起すには、之を抑壓して居る力を除去しなければならぬ。即ちこの力の抑壓によりて、精神作用が意識的となることが出来ない。凡て或種の精神作用が一次的又は二次的に意識中に同化するものが出来ないやうになると、それを意識から隔離するやうにする。その結果無意識になるのであるから、この力は一種の保護作用を營むと云ふべきである。或種の精神作用を抑へて無意識にして置くこの力を名づけて「内精神的監視」とフロイドはいうて居る。覺醒して居る間は、特に或異常を來すにあらざれば、無意識作用が外部に表はれてくることはない。所が睡眠して居る間は、凡ての意識作用と同じく、この監視作用も全く無くなることはないが、大にその力が減退してく

る。それで潜在内容たる無意識作用は夢の形をとつて表はれてくるのである。しかし監視作用は全く休止して居るのでないから、その監視の眼を盗む爲めに、種々の工夫をする。夢に於ける變裝作用は即ち監視を免れる一手段である。何故に夢が出来るかといふと、それは吾人が實現せんとする願望と内精神的監視との妥協の結果に過ぎない。故に夢を生ずるには、監視作用の方が催眠中に幾分減退することが必要である。

夢の思想が監視の眼を遁れる方法としては、壓縮や轉移の作用のみに限らず、又推敲作用をも行ふことは既に述べた所である。所がこの推敲作用は覺醒後にも行はれるものであるから、醒めてから直ぐに物語つた夢の内容と、暫らくたつてから話した夢とは大分異つた所がある。而してこの前の叙述と後の叙述との間の變化した部分は、必ず夢の思想の變裝した中の弱い部分に限つて居る。即ち覺醒後、意識の監視作用によつて推敲せられ、變裝の不十分な點を強めるのである。

かやうに變裝の不十分な點に變更を加へる代りに、監視作用がその記憶の眞偽に就て、本人の心に疑を惹起すやうにすることである。假へば「夢の中の人はこれ／＼のものを持つて居たやうにも思へるが、夢を思ひ出す際にそんな風に想像したのかも知れない」など、いふ場合がある。かやうに本人が自ら疑はしとする點は、却て記憶の最も明瞭な點であると斷言しても差支ない。蓋しこの疑は潜在内容が變裝を行ふ手續中の一階段たるに過ぎないからである。

次に本人が夢を見ながら、「それは夢に過ぎない」といふ確信を生ずることがある。これは夢が既に出來上つてしまつてから、遅ればせに監視作用の働いた爲めである。或精神作用が不圖意識に表はれてくると、本人はその重大なるに吃驚して、何氣なく「夢に過ぎない」としてしまふのである。吾人は夢の全部或は一部を忘却する傾向があるが、それはこの疑惑作用の擴大されたものである。フロイドはこの忘却の傾向を監視活動の抑壓作用によるとし、覺醒時に於ける忘却作用(第

六章參看)をもやはりこれに基づくと考へた。この忘られた部分は夢の思想の中で最も烈しく抑制されて居た部分で、随つて最も重大な部分である。

十一、夢の種類

夢には三種の別がある。第一は感覺的で同時に筋途の通つた夢である。子供の夢はこの種類に屬する。蓋し四歳以前の子供に於ては、變裝作用が起らず、顯在内容と潜在内容とが相一致して居るからである。この點から言つても、夢は腦細胞の孤立した活動から生ずる」といふ説の誤つてゐることが分かる。この説では大人の夢だけが支離滅裂で、子供の夢が論理的だといふことを説明することが出来ない。加之子供の夢を見ると、達せられないで居る希望が夢の中で想像上充たされるといふことが明らかに分かる。フロイドの考によると、前に述べた通り、凡ての夢の潜在内容は達せられずに居る希望を想像上で充たすことである。即ち子供に於ては或希望が充たれないで居る、併し大人のやうにそれが抑制されて居

ない。換言すれば、意識中に同化することの出来ないやうな性質のものでない。所が大人の希望は單に達せられないばかりでなく、意識中に同化することの出来ない性質のものであるから、それが抑制されて居るのである。

第二の種類の屬する夢は、聯絡もあり意味も明らかではあるが、その内容は奇怪極まるもので、覺醒時に於ける生活と調和せしめることが困難である。第三種の夢は、前と反對に聯絡もなく意味もなく、全く紛糾して居る夢で、最も屢表はれるものである。この第二及び第三の種類に屬する夢は、大人に表はれるもので、その性質が奇怪で不眞實であるのは、前に述べた抑制作用の行はれた結果である。之に精神分析法を適用して、自由聯想を求めて見ると、表面に於ては何の意味もなく、又平生の經驗と何等の緣故もないやうに見ゆる精神作用でも、その實は本人と密接の關係を有する精神作用であるといふことが分かつて來る。

フロイドの研究の發端は大人の精神病者であつたことは既に述べた通りであ

る。患者には意識的の希望とそれに反對する無意識的の希望とがあつて、その兩者の妥協の結果として種々の症狀を生ずるといふことを發見した。而してこの症狀はこの二様の希望の想像的充足を諷示的に表はして居るといふことを知つた。又二つの希望系統が相争つて、無意識的のものが意識的となるのを強ひて妨害して抑制して居る場合に、始めてかゝる症狀が生ずることも明かになつた。又患者の症狀を精神分析に附して見ると、自然その夢に移つて行くから、他の精神的材料と同様にその夢を分析して見ると、その構造は精神病の症狀の構造と非常によく似て居ることが明瞭になつた。いづれの場合に於ても、深く潜んで居る精神作用を諷示的に發表したものがその材料となつて居る。而してその潜在して居る精神作用は無意識的のもので、内精神的監視作用によりて變装を行つた上で始めて發表されるのである。夢に於ても、亦症狀に於ても、この變装の行はれる有様は極めてよく似て居る。たゞ夢の方は視覺心像によりて表はれることが多いといふ

だけの相違があるのみである。

夢の顯在内容が十中八九まで視覺に屬することは人のよく知る所である。種々の思想が視覺心像の形を取つて夢に表はれる作用を、フロイドは「逆行」と名づけた。即ち抽象的精神作用が逆行して、元の知覺作用に戻るといふ意味で名づけたのである。複雑なる夢の思想はこの逆行作用によりて、元の原料に分解されるのである。氏によると、夢及び幻視に見る逆行作用は意識の監視作用の抵抗によりて生ずるもので、又著しく元の視覺的性質をもつて居る子供時代の記憶の代表する精神作用の方に引きつけられることもその原因となつて居る。更に夢の場合に於ては、睡眠中感覺より運動に移る活動が休止して居るために、逆行作用は一層著しく表はれて來るものである。

次に夢が精神病の症狀と異つて居る點は、夢は睡眠を保護するといふことである。睡眠の妨害となる無意識的精神作用の活動に満足を與へることが即ち夢の

役目とする所である。尤も時としては恐ろしい夢の爲めに睡眠を破られることがある。しかしそれは内精神的の監視作用が睡眠中減退して居るために、夢の思想が意識に表はれるのを防ぐだけの力がないか、若しくはそれを變装せしめて不明ならしむるだけの力がない。それで監視作用が覺醒時に働く勢力に援助を求むるに至るのである。例へば、睡眠中の家を守つて居る番人の力が足りない爲めに、援助を乞ふ爲めに眠つて居る家人を呼び醒すやうにすると同一である。

第四章 性慾と子供

一、性の意味

吾人は前二章に於て夢は吾人の願望の實現で、その願望は多く性に關係して居ること、並にヒステリー患者の病源も亦性慾の抑壓に基づいて居ることを述べた。茲に於て諸君は恐らくフロイドの所謂「性慾」或は「性的」なる語が、普通に用ゐらるゝ用語よりも餘程その意味が廣く、一般に性的と認めて居ないことまでもその中に含まれて居るといふことに氣付かれたであらう。併し氏は通常の意味を無理にこぼつけようとする爲にしかするのではない。一般に性慾本能より由來したものと見做されない精神作用でも、精神分析を行つて見ると、その實は性慾と深い關係を有して居ることが明かになつたので、その「性的」なる概念の範圍を廣くしただけで、決して舊來の術語の包攝を廣げた譯でない。假令一步を讓つて、性的

といふ語を以て生殖本能に關係ある傾向のみを意味すると解しても、直接生殖行為を促す衝動のみに限ることは出来ない。蓋し生殖行為と直接に關係をして居ないでも、その本性に於て「性的」なるものは尠くない。例へば物品崇拜の如き性慾倒錯は、その本性から見ると明かに生殖行為を否定して居るけれど、その意味を充分に搜ると、誰もそれが性慾的のものであることを疑はない。羞耻・殘忍の如き普通に見らるゝ現象も本來は性慾本能に由來したものであることは、人類學者の認めて居る所であるが、其は直接生殖行為の完成に與つて居るものでない。併し間接に生殖と關係して居ることは眞實である。かやうな論據よりして、氏は「性的」といふ語を廣く用ひて、羞耻のやうな性的本能より由來する精神作用は、悉く性的と稱するのが至當であるとした。元來吾人には精神作用の蔭に性慾が潜んで居ても、故意に其を否定しようとする偏見がある。フロイドはかゝる偏見が如何に人の心の底に深く根ざして居るかを指摘し、氏自身努めて之の偏見から脱し

ようと努めた。氏が最初ブロイエルと共にヒステリー患者を研究した時代は、未だ現時に見るが如き汎性慾説を主張して居なかつたが、その後研究を積むに随つて益汎性慾説の正當なることを認めためたのである。

二、性慾の倒錯

氏の性慾説を論ずるには先づ性慾倒錯より述べなければならぬ。氏はまづ(一)誘引の元となる性慾の對手と、(二)衝動の働く活動即ち性慾の目的とを區別して居る。従つて性慾の倒錯も二種類に分けられる。一は普通に性慾の對手たるものに變動を來たすもので、之に三種ある。即ち(イ)同性を愛して異性に無頓着なるもの、(ロ)兩性とも孰れも無差別に愛するもの、(ハ)外部の事情よりして通常の性慾の對手を得ること出來ずして、遂に同性のものを愛するに至りしものである。何故にかゝる同性慾に陥るかに就て、或人は變質に基づくとし、或人は先天的性質であるとした。しかし此等の倒錯は正常の人にも起るので、之を以て變質に基づく

くとは言へない。又此等の倒錯を惹起した事情は一々之を探ることが出来るからして、決して先天的でなく、寧ろ外部の事情に基づくと言ふものもある。そこでフロイドは此等の二説に對して兩性説なるものを主張する。即ち斯の如き倒錯を生ずるのは、解剖的にも心理的にも吾人は兩性的の性質を具へて居るため、同性を對手とする場合があれば、之に對して異性を對手とした時と同様の快感が得られるのであると説明する。對手の倒錯には又同性に關するものばかりでなく、子供をその對手に選び、時としては同種族の制限を超えて家畜と性的關係を結ぶものすらあるのである。

物品崇拜も性慾の對手の倒錯に屬する。通常の性的目的に全く不適當なものが、性慾の對手の代表をすることがある。此代表物は一般に性的目的に適應しない身體の一部、例へば足・毛・或は對手の人に關係せる無生物、殊にその人の性と關係せるもの、例へば衣服の斷片・白の下着等である。ゲーテはファウストをして、彼

女の胸から、私の愛の徽章ともなるべき一のハンケチを得たい」と謠はしめた。或程度の物品崇拜は常人にも存して居る。愛を求めて未だその目的を達せざる間は殊に然りてある。病的の物品崇拜は唯その度が烈しいと云ふに過ぎない。野蠻民族の物品崇拜にも性慾の倒錯に基づくものがある。足が最原始的なる性的象徴であつたことは神話に屢發見せらるゝ所である。此他靴やスリッパは女の生殖器の象徴であり、毛皮も恐らく陰部の毛多きことを聯想せらるゝ爲めに同一の象徴であつた。かゝる象徴主義は亦兒童期の性的表出に屢見らるゝ所である。

(二)性慾本來の目的に關する倒錯にも種々ある。性慾を満足せしむるには、單に生殖器の交接のみに限られて居ない。舌・唇及び口腔の粘膜が生殖器の代用をする場合が多く、中にはこの方法を却て好むものすらある。又肛門が性的目的に用ひらるゝことも珍らしいことでない。かゝる傾向は勿論通常人にもあるが、嫌惡の感によりて制遏せらるゝものである。この嫌惡の感が往々病的に昂進して、異

性の生殖器すら嫌ふやうになることがある。これは凡てのヒステリー患者殊に婦人患者の特質として表はるゝことが多い。しかし性的衝動力が強大となる時は、容易にこの嫌惡の感に打勝ち、種々の倒錯的行動に陥るものである。

陰萎・對手を得るに高價なること・性的行動の危険等の爲めに通常の性慾がその目的を果たすこと出来ないか、或は目的の到達が遠くにある場合には、豫備的行動にさまよふ傾向が強くなり、遂にそれを性慾の目的にして、通常の目的の代りとするやうになる。或程度の觸接が通常の性的目的を達する爲めに用ひらるゝことは免るべからざること、對手の皮膚に觸れることが一般に多くの愉快を惹起し、新しい興奮を供給する。視的印象が性的興奮を惹起すことも之と同様である。文明の進むと共に身體を蔽ふことが厲行されるが、其を裸にして見たいと云ふ性的好奇心は誰でも持つて居る。かの藝術的に裸體美を賞するのもこの衝動の純化に過ぎない。故に性的行動をなす前に、對手に觸れたり又は之を視たりするのは

倒錯にまで至らないのである。しかし此等の行爲が單に對手の身體でなく、生殖器のみに限られるとか、或はその行爲が烈しくなつて、便所や湯屋を覗くやうになるとか、此等の行爲が性的目的となつて、單に豫備的目的でなくなる場合には倒錯と名づけられる。かの自己の生殖器を見せたがる患者の如きも性慾倒錯で、他人の生殖器を見たがると同一種類に屬すべきものである。只性的目的が能動と所動とに二様の形式を取つて表はれたに過ぎない。

能動と所動との形式を取つて表はるゝ性慾倒錯の中で最も著しいものは、^{サディズム} *Sadism* と ^{マゾヒズム} *Masochism* とである。前者は能動的で對手の男又は女に苦痛を與へ、又は残酷に取扱ふことによつて快感を得るもので、後者は所動的で對手の男又は女より身體或は精神的に苦痛を與へられて満足を感じるものである。此等の倒錯もその起源を尋ねると以前は正常的行爲であつたに相違ない。蓋し吾人の祖先は單に對手の機嫌を取る計りでなく、時としては對手の抵抗に打勝つて性慾を満足

するの必要があつたに相違ない。現時でも通常の性的行爲には進撃的色彩を帯びて居ることが多い。従つてサディズムはこの進撃的要素が病的に擴大されたものと見て差支ないやうである。マソヒズムは尙烈しい倒錯であるが、それは最初性的對象となつた時に自身に振り向けられたサディズムの繼續に外ならない場合がある。マソヒズムの極度に烈しい場合を分析して見ると、最初の所動的性的態度を擴大し固定した多くの要素(去勢に伴ふ精神錯綜・道義心)が相共働して居ることが分かる。次に又このサディズムとマソヒズムとが共に同一人によりて所有されることもある。即ち此種の人は性的關係に於て他人に苦痛を與へて喜ぶが、亦性的關係より生ずる苦痛をも愉快と感ずることが出来るのである。

以上列記した諸種の倒錯は凡て精神病者に著しく表はるゝ所であるが、通常人にもその傾向の存することは否定することが出来ない。唯倒錯の度合が通常人より精神病者へと漸進して居るに過ぎないで、二つの間に劃然たる區分をつけるこ

とが出来ない。メービウスが凡て吾人は幾分ヒステリーの的であると言つたのは實に穿つた言である。此等の倒錯の原因に就て、或人は生得的であると云ひ、或人は偶然的經驗に基づくと説明するが、其等は凡て病的方面のみを見て論じたに過ぎない。フロイドによると、倒錯傾向は勿論生得的であるが、その傾向は吾人凡てが所有して居る。併しその強度が人によりて異なり、又人生の影響の爲めに或人のみが著しく倒錯を現はすのである。詳言すれば、かゝる倒錯は既に子供の時から潜在して居るが、教育の力によりて通常は抑壓されてしまひ、その衝動に伴ふ心的勢力は純化されて、もつと社會的に價値ある方面に向けられるのである。かやうに教育の力によつて純化される普通の場合以外に尙二つの場合が可能である。即ち(一)その傾向が異常なる勢力を得、その爲め前に述べたやうな性慾の倒錯が實際に現はれてくる場合と、(二)その衝動と之を抑壓しようとする勢力との争闘が烈しい爲に、その衝動が精神病の症狀となつて現はれる場合とがある。後

の場合に於て、倒錯した衝動を變裝した形で満足せしむることが即ち精神病の症状である。ヒステリーの症状も亦消極的倒錯を代表して居る。然らば如上の三つの場合の中、孰れが一つの道をとつて現はれて來る幼時の傾向とは如何なるものであるか、又如何にそれが發達するかといふに、フロイドは次に述ぶるやうな從來にない大膽な説明を試みて居る。

三、性に關する質問

從來子供の時代といふと、寧ろ性慾衝動のないことを特色として居るやうに考へ、青春期に至つて初めて性慾の衝動が發生すること、恰も惡魔が豚の身體にはひり込むと福音書にいふ通りであると思つて居るが、それは大なる誤謬で、子供は生れる時から性の衝動も活動も具へて居る。大人の性慾はつまりこの中から種々の階級を経て發達して來るのである。吾人は前章に於て、健康なる大人や、精神病者などの夢を分析して見ると、その夢の淵源が子供時代の性的生活に存して

居ることが極めて多いことを述べた。之は勿論間接的證明であるが、子供の生活を直接に觀察しても、到る處に性の活動の現はれて居ることが知られる。而かも早きは三四歳の頃から性的衝動の存することが分かる。フロイドが五歳になる一男兒ハンスの恐怖症(Phobie)に就ての分析は充分に之を證明して居る。ユングも亦一女兒に就て同様の分析を試みた。今幼兒の性的生活の豊富なることを示す一例としてユングの研究を左に紹介しよう。

件の少女の名はアンナと云はれ、極めて伶俐で、快活で而かも健全なる情性に富んで居た。此研究が行はるゝまでは、烈しい病氣に罹つたこともなく、又神經系統に關する疾患もなかつた。アンナが約三歳の頃、一度次のやうな會話を祖母と交換した。「おばーちゃんはどうしてそんなにしなびた目をして居るの」「年取つて居るからさ」「しかし又若くなるでせう」「いゝえ、だん／＼年を取つて、おしまひには死ぬんですよ」「それから」「それからね、天使になるんです」「それからまた

赤ちやんになるんでせう」と。

アンナは茲に於て豫ねて疑問とした事を一時的に解決するの機會を得た。これより少し前に、アンナは生きた人形・小さい子供・小さい弟を持つてあらうかと常々母親に尋ねて居た。これは勿論子供の起源に關係する疑問である。しかしかやうな疑問が、自發的に間接に表はれたので、両親は別にも留めず、子供の質問を面白半分に聞いて居た。アンナは嘗て父から子供は鶴がもつてくるといふ面白い話を聞いたことがある。この以前或處で子供は天に住んで居る天使で、鶴が其を天からつれてくるといふ稍眞面目な話も聞いたことがある。この原理が即ち彼女の探究的活動の出發點となつて居るやうに見える。祖母との會話から見ると、此原理が廣く應用されることが出來たといふことが分かる。即ち離別とか死去とかの苦痛的觀念が愉快なる形に於て解決せらるゝのみならず、之と同時に子供の起源に關する謎も満足に解決せられた。併し一個の石で二羽の鳥を殺すやうな解

決の仕方は、子供に於ても早晚何かの矛盾に遭遇するのは自然の數である。

アンナが四歳に達した時に弟が生れたことが、思想の變り目となつた。母の姪に就ては何事も言はなかつたので、少しも氣づかずに居たことは明かである。出産の前夜、母が陣痛を覺えた時には父の室に居た。父がアンナを膝の上に抱き上げて、「今晚赤ちやんが生れたら何といふの、言つて御覽」と尋ねたら、「わたし赤ちやんを殺すの」と言下に答へた。「殺す」といふことは大變重大のやうに聞えるが、實際は全く罪の無い言葉である。蓋し子供が「殺す」とか「死ぬ」とかいふことは、單に能動的又は所動的に排除することを意味するもので、これはフロイドが既に屢述べた所である。併しそれが假令罪の無い言葉にしても、此傾向を有して居ることに注意することは、あながち價值のないことではない。

この出産は朝早く醫者と産婆との立會の下に行はれた。後の始末もすつかり濟んだ後に、父はアンナの寢て居る室に行つた。その時アンナは目を覺まし、父が

ら弟が生れたことを聞いて、驚いて顔を緊張させた。父は抱き上げて産室に連れ
て行つた所が、アンナは稍青ざめた母に先づ急速な一瞥を與へ、失望と疑惑とに
満たされた顔付をした。而してこれから何んなことが起らうとして居るかと訝か
る様子で、少しも赤坊の生れたことを喜んで居なかつた。その日の午前中は遠の
いて居たが、今までは常に母にくつついて居たのでそれが著しく目立つて見えた。
しかし母が獨りで居るのを見るや否や、室に走りて行つて母に抱きつきながら、
「死なうとしてゐるんぢやないの」と尋ねた。此は兒童の心中に於ける争闘の一部
を示して居る。即ち鶴の説は實際眞面目に考へられないにしても、人は死ぬこと
によりて子供に生命を與ふるものであるといふ再誕説を承認して居ることが分か
る。即ち此説によると母は死ななければならぬ。加之新に生れた弟に對して既
に嫉妬を感じて居るのに、どうしてその誕生を喜ぶことが出来ようか。此等の理
由からして、好機會を見つけて、母が死ぬか否かを確めたのである。換言すれば

母が死なぬいやうにとの希望を述べたのである。

しかしこの再誕説は母の安産の爲めに大打撃を被つた。弟の誕生及び一般に子供の起源を如何に説明し得たのであるか。鶴説は再誕説の爲めに暗々裡に取消されたとは云へ未だ其痕跡を留めて居る。次に如何なる説明が企てられたかは、其子供が數週間祖母の處に宿つて居たので、兩親は之を知ることが出来なかつた。祖母の話によると、鶴説が屢問題となつたといふことである。其後家に歸つて來て、母に會つた時に、再び出産の時に示した失望と懷疑とを示した。其様子は假令言表はすことは出来ないが、兩親には間違なく解せられた。赤坊に對する仕打は極めて良かつた。留守の間に一人の看護婦が來て居たが、その看護婦が制服を着てるので、非常な印象を與へ、その爲めに看護婦に對して最初烈しい反抗心を起した。看護婦が衣服を脱がせて眠らせようとしても、少しも言ふことを聞かない。赤坊の搖籃の近くで怒りながら看護婦に向つて、「この子はおまへの弟ぢやな

いよ、私の弟ですよ」と叫んだので、直ぐにこの看護婦に對する反抗的所業の原因が知れた。しかし漸次に看護婦と仲善くなり、自分で看護婦の眞似をして遊ぶやうになつた。即ちアンナ自身にも必ず白の帽子と前垂とを着けて、弟や人形の世話をするのであつた。

以前の氣質と反對に明かに悲しげな、且夢を見てるやうな氣質になつた。屢杌の側に坐りながら何か謡つて居た。その内容はよく聽取れないが、時としては看護に關するものを謡ひ、苦悶の情を表出しようと努力して居るのが明かに見えた。この詩作をするやうな空想的態度と憂鬱的發作の傾向とが表はれてくる現象はずつと後年即ち青年に達した頃、家庭の繫縛より離れて獨立的生活に入らうとする場合に、内部には尙懷郷病による苦痛の情と兩親の温かい情とが燃えて居るのと似て居る所がある。この時青年はその戀しい情を醫すること出來ない爲めに、詩的想像を描き出してその不足を償ふやうになる。かやうに四歳の幼兒と青春期の

ものとを比較するのは、一寸見ると不合理のやうである。しかしその關係は年齢の上存するのではなく、寧ろ機制の上存して居る。この悲哀的幻想は如何なる事實に基くかといふに、愛情の一部が以前は實在的對象に屬して居り、且屬すべきであつたのが、今はその愛情が内部に轉じて主體に向ひ、爲めに想像的活動を増加するに至つたのである。然らばその内向の起源は何であるか、又其は此年齢時代に特有な心理的表現であるか、或はその起源は争闘に負ふ所があるか。此等の疑問は次に述ぶる出來事によりて説明せらるゝのである。

アンナは屢母の言ふことを聞かなくなつた。而して傲慢な態度で、「おばーちゃん」の所へ歸らうとして居る」と言ふことが屢であつた。それで母が「私を置いて行くなら悲しい」と言ふと、「でも弟が居るんですもの」と答へた。かやうな答をしたのは、再び出て行くと言つて母を威嚇しようとして實際に目論見なやうに見える。蓋し母が何と答へるであらうか、換言すれば母がどんな態度を取るであらう

か、母の愛が弟の爲めに全く取去られはしなかつたかを知らうとしたやうに見えた。しかしこの幼き詐欺師の言をそのまま信用してはならない。蓋し弟が居ても母の愛に少しも變りがないことは容易に見られ且つ感ぜられることが出来るからである。故に母に對する非難は正當であるとは認められない。熟練した研究者の耳には、それは少しく情的調子を帯びて居ることが分かる。即ちこの非難は他の先驅者に過ぎないで、この後もつと厳しい抵抗が表はれて來た。前に述べた會話のあつた後、間もなく次のやうな出來事が起つて來たのである。

母が「おいで、今花園の方へ行かうとして居ますよ」といつた所が、「嘘をついて居ますね。本當なことを言つてるかどうかお氣を付けなさい」とアンナは答へた。「なにを考へてるの、いつも私は本當なことを言つてますよ」「いえ、本當なことを言つて居ません」「私が本當なことを言つてることが直ぐ分ります。今花園の方へ行きます」「全くそれは本當ですか、眞に本當ですか、嘘については居ません

か。かやうな光景は屢繰返された。この時の音調が以前よりも粗暴で鋭いこと、並に「嘘」といふ言葉に特に抑揚をつけることとは、何か變つたことがあるやうに思はれた。しかし兩親はそれが何事であるかを理解しなかつたし、最初又この子供の自發的言葉には餘り重きを置かなかつたので、兩親は只一般に行はるゝ教育の規程に基いて教へてやる外はなかつた。世人は一般に人生の各階級に於ける兒童に少しも注意しない。あらゆる重大なる事件に就ては兒童は責任がないとして取扱はれ、之に反して不必要な事件に就ては機械的精密を以て訓練せられることが極めて多い。

抵抗を生ずる所には常に疑問や争闘が起る。併し此等は後になつて或他の機會に於て表はるゝものである。それで抵抗と後に表はれた事との關係は通常忘られて仕舞ふことが多い。かやうにアンナは他の場合に於て母に向つて種々の難問題を提出した。即ち「大きくなつたら看護婦になりたい。おかーさんはどうして看

看護婦にならなかつたの」と尋ねた。それで母は「かゝさんになつたからさ。看護婦にならなくつても、やはり私は子供の世話をして居る」と答へた所が、アンナは暫く考へながら「私はかゝさんと違つた婦人になつて、かゝさんにお話しするやうになるでせうか」と言つた。

母の答からしてその子供の質問が實際何處に向つて居るかゞ分かる。アンナは看護婦と同じやうに子供の世話をしたかつたのである。看護婦がどこで子供を得たかは極めて明瞭である。アンナも亦大きくなつたら看護婦と同じ方法で子供を得ることが出来ると考へた。然らばどうして母は看護婦にならなかつたか、換言すれば看護婦と同じ方法によらないで、どうして子供を得ることが出来たか。看護婦のやうにすれば子供を得ることが出来る。處が將來に於て事實が變化して、子供を得る點に就て母に似るやうになるかも知れない。此等の點がアンナには不明瞭であつた。この疑からして「實際私はおかゝさんと異つた婦人になるでせう

か、凡ての點に異なるやうになるでせうか」といふやうな思慮ある質問を發したのである。鶴説は明かに價値のないものになつた。再誕説も亦同様の運命に遭遇した。それで看護婦と同じ方法で子供を得るのではなからうかと考へたのである。かゝる見地からして、アンナは「どうしてか」さんは看護婦とならなかつたの」と尋ねた。これは即ち何故に自然の方法で子供を設けなかつたかといふ質問と同じことを意味する。

間接に質問するといふことは、子供がその問題を充分に理解しないか、或は直接に質問することを避ける爲めの外交的不確實なるかである。處がアンナの質問は第二種に屬することが後に至つて分かつて來た。彼女は「どこから子供は生れるか」といふ問題に遭遇して居る。鶴は子供をつれて來なかつた。母は死ななかつた。又看護婦と同じ方法で子供を設けたのでも無かつた。アンナは以前にこの質問を試み、父より子供は鶴がつれてくるのだと告げられたが、それは絶對的に誤

謬であつて、最早之によりて欺かれることは出来ない。父も母も又他の人々も虚言をついて居ることが分かつた。その爲めに彼女は一面に子供の誕生に就て疑を起して母を信用しなくなり、一面には内向作用を起して悲哀的想像を惹起したのである。彼女は眞實を告げない且つ告ぐることを拒んだ両親より愛情を受けなければならぬ。言ふことの出来ない事とは抑如何なることであるべきか、如何なることが茲に起つて居るのであるかといふやうな疑問が子供の心中に起つたに相違ない。而してその答は、「慥かに何か危険なことが秘せられて居るに相違ない」といふのである。狡猾なる質問によりて眞理を引出さうとする企が無効に歸したので、抵抗に對する抵抗を行ふやうになり、愛の内向が起つて來た。昇華作用の能力も、四歳の兒童に於ては充分に發達して居ないので、症狀を引起す位が關の山である。故に精神は或他の代償作用を求めなければならぬ。即ち力を以て愛を保有しようとする子供らしき方法を求めた。而して此種の方法中最多く選まれるの

は、夜に泣きながら母を呼ぶといふ方法である。アンナは熱心にこの方法を實行し、最初の一年間は凡てこの方法のみを用ひた。所が月日を経るにつれてこの現象が確定的になり、又新しく起つた出來事の爲めに影響を被るに至つた。

その出來事といふのは、メ、シナに於ける地震で、その後は何時も食卓で地震の事が討議された。アンナは何れの事にも非常に興味を持ち、どんな風に地震が搖れたか、どんな風に家がこわれたか、どの位人が死んだか等と繰返し／＼祖母に尋ねた。この後夜間に恐怖を起すやうになり、一人で寝ることが出來ず、母は詮方なくアンナの室に行つて一緒に居なければならなかつた。さうしないと地震が起つて來て家が倒れて殺されはしないかと恐れた。後には日中も亦同様な考を以て滿されるやうになつた。母と外出して居た際にも「私達が内に歸るまでに家はそのまま建つて居るでせうか。内にはきつと地震がないでせうか、おとうさんはまだ生きてませうか」と尋ねて母を苦しめた。道に轉がつて居る石を見ても、

それは地震の爲めてはないかと尋ね、新しい家を見ると地震にこわされた爲めに新しく建てられたのではないかと怪んだ。終には夜間地震が起るとか雷が鳴るなどと言つて泣くことが屢であつた。それで夕方になると地震は起らないことを嚴かに確かめないと氣がすまぬやうになつた。

アンナを靜かにする方法が種々と企てられた。例へば地震は火山のある所に起るものであると言つて聞かせ、その町の周圍にある山は凡て火山でないことを知らせなければならなかつた。かやうな推理作用からして漸次學習に對する熱望を生じ、父の書齋から地理に關する凡ての書籍を引出して來て説明してやらなければならなかつた。數時間火山や地震の繪を熱心に注視し、絶えずそれに就て質問を發した。かやうにして恐怖を學習に對する熱望に昇華することに努力された。その爲に此年齢に對しては早熟過ぎる程知識慾に満たされた。併し之と同じ困難に苦んで居る多數の天才的兒童と等しく、早過ぎたる昇華作用は儘かに不利益な

結果を持來たした。蓋し此年齢に於ける兒童に昇華作用をなすやうに仕向けることは、單に神經病を引起すやうに強ふると同一であるからである。學習に對する熱望の根元は恐怖である。而して恐怖は轉化されたる淫慾の表現である。換言すればそれは後で神經病となる内向の表現である。随つてこれは此年齢の兒童には必要で、兒童の發育を沮害するものである。

學習に對する熱望が結局如何なる方面に向つたかといふことは、日々に起る連續的質問によりて知ることが出来る。どうしてソフィー(妹)は私より若いか、フレディ(弟)は以前どこへ居たか、天に居たか、そこで何をして居たか、何故の前には下りて來ないで、丁度今下りて來たかといふやうな質問を發した。此等の状態よりして、父は若し機會があつたら母をして弟の起源に就て眞實な話をして聞かしめようと決心した。その後アンナが鶴に就て尋ねた時に、この事が實行された。母は鶴説が眞實でないことを告げ、且つ弟のフレディは恰度植物に於ける花の

様に母の體內に成長した。最初フレッドは非常に小さかつたが、その後植物のやうにだん／＼大きくなつたと説明した。アンナは少しも驚かないで熱心に傾聴して居たが、「じかしフレッドは獨りで出て來たんですか」と尋ねた。母は「さうです」と答へた處が、「でも歩くことが出來ないのにね」と半疊を入れた。妹のアンナが「そんなら這つて出たんでせう」と言ふのを聞き、胸部を指さしながら「こゝに穴があるんですか、それとも口から出て來たんでせうか、誰が看護婦から生れたのですか」と尋ね、直ぐに「いや、鶴が弟を天から連れて來たんだ」と自答をした。やがて此問題を中止して、再び噴火山の圖を見ようと望んだ。

この會話の交換された次の夕方アンナは靜かになつた。不意の説明の爲めに、觀念の全系列が生じて來て、その幾分が彼女の質問の中に現はれて來た。豫期しない遠景が展開されて、急に中心問題即ち何處から子供は出てくるかといふことに接近した。處が何故に子供が胸にある穴からか又は口から出てくるかといふやう

に誤つて考へるやうになつたか。何故に下腹部にある口を思ひ當らなかつたか。その説明は極めて簡單である。最初下腹部の兩方の口に興味を持つたけれど、母から不潔で不作法であるとの批評を受け、その後はその部分を禁止區域にしてしまつた。随つてこの部分が一番最後に考へられるやうになつたのである。

子供はどこから出てくるかといふ問題が決定する前に、新しい問題が起つて來た。即ち子供が母から生れるとすれば、看護婦は何をする者であるか、誰がこの場合に出てくるかといふ疑問が起つた。それで、「いや、鶴が弟を天から運んで來た」といふ注釋を與へた。誰れ一人として看護婦から出て來ないといふ事實を知つて何か特別なことが起つたのであるか。以前アンナは看護婦と同じやうに子供を持ちたいといふことからして、看護婦の眞似をし、大きくなつたら看護婦にならうと望んだ。しかし今弟は母の體內に生長したといふことを知るに至つた。然らばその問題はどうなるであらうか。此等の問題は、以前信ぜられなかつた鶴の

説に急に復歸することによつて整返されたが、その説も二三の吟味の後全く棄てられてしまつた。茲に於て二個の問題は未決のままに残された。即ち第一に何處から子供は出てくるか、第二に看護婦や女中は子供を生まないのに、母のみがどうして子供を持つやうになつたか。勿論この二問題は最初その姿を現はして居なかつた。

母の説明のあつた次の日食事をして居る際に、突然次のやうなことを言つた。「私の弟はイタリーに居て、布と硝子とから出來た家を持って居た。併しその家は倒れなかつた」と。この場合も亦この話の説明を尋ねることは不可能であつた。蓋し抵抗が餘りに強く、アシナを會話に導くことは困難であつたからである。アシナ姉妹は此時三ヶ月ばかりの間に「大きい兄」といふ想像的概念を作り出した。此兄は何でも知つて居て、何でもすることが出來、何でも持つて居る。子供の居ない所には何處でも住まつて居たし、又住まつて居る。又大きい牝牛・牡牛・馬・犬

を所有し、何でもその人の所有である。姉妹各一人の「大きい兄」を持つて居る。

吾人は此空想の起源に就て遠く求むるを要しない。その雛形は父で、凡て前述の概念に相當して居る。「兄」といふのは父が母の兄のやうに見えるからである。この

「兄」は力強くて、勇氣に富み、今は危険の多い伊太利に居るけれど、少しも破れ無い家に住んで居る。而してその家は少しも倒れない。この「家が倒れない」といふのは、その子供の重大なる願望の實現である。地震は最早危険でなくなり、地震に對する恐怖も全く消失した。これまでは恐怖を祓ふやうに寢床に父を呼寄せ居たのが、今は大變に情愛が深くなつて毎夜接吻してくれるやうに父に願つた。

この新状態を試験する爲めに、父は慘憺たる火山や地震の光景を示す畫を見せた處が、アンナは少しも感動せらるゝことなく、無頓着な有様にその畫を見ながら、「此の人達は死んで居る、私は度々この畫を見た」と云つたに過ぎなかつた。之と同時に凡ての科學的興味は、それが發生した時と同じく突然消失し去つた。

母が説明した次の日は、一日中全く重大なる事件によつて彼女の心は占領された。その周囲の人に向つてフレ・デイも彼女も妹も母の體内に生長し、母や父は夫々その母の體内に生長し、女中も同じくその母の體内に生長するものであると、新たに得た知識を傳へ、時々はそれが本當であるといふことを確めながら話した。又屢問を發して其知識の眞の根據を試験した。蓋し彼女はその不確實を除去する爲めに、多くの確證を要する程、懷疑の念が烈しく起るからである。

所が偶然の出來事の爲めにこの原理の信用が全く破壊されるやうな破目に陥つた。母からの説明があつてから約一週間ばかり経つと、父がインフルエンザに罹つて、午前中寝て居なければならなかつた。子供達は少しもこの事を知らず、アンナが兩親の寢室に這入つて來て初めて父が寝て居るのを見た。彼女は又驚いた表情をなし、父の側に寄りつかないで居た。何か怪しみながら、控へて居る風が明かに見えた。所が突然父に向つて、「どうして寝て居るの、お父さんのお腹の中に

「植物があるんですか」と尋ねた。父は自然笑はざるを得なかつた。しかし父の腹には子供は成長しない、女のみが子供を持つことが出来て、男には出来ないといふことを教へて、落付かした。それで父と再び親しくなつた。しかしこの平靜は表面だけで、心の奥底には絶えず此問題が潜んで居た。二三日の後に食事の際、「私は昨夜ノアの船の夢を見ました」と語つた、それで父はその事に就てどんな夢を見たかと尋ねたけれど、アンナの答は全く無意味であつた。かゝる場合には注意を怠らないで、時期の到るを待つのが必要である。數分の後母に向つて、「昨夜ノアの船のことを夢みた。そこには小さい動物が澤山乗つて居ました」と言つた。暫らくしてから又、次のやうなことを話した。「昨夜ノアの船の夢を見ました。小さい動物がどつさりその船に乗つて居ました。下の方に蓋があつて、それが開いて、小さい動物は凡て落ちてしまつた」と。

アンナは實際ノアの船を持つて居た。しかしその口と蓋とは屋根の處にあつて

下の方には無がつた。子供が口から或は胸から生れるといふ話は誤りであるといふこと、又彼女は子供の出てくる場所に就て何かの暗示を有して居るといふことをかやうにして諷示した。其後二三週間は別に大した事も起らずに済んだ。所が或夜次のやうな夢を見た。私は父と母との夢を見た。二人とも夜遅くまで書齋に起きて居て、吾々子供等も亦そこに居た」と。これよりして子供は兩親と同じやうに遅くまで起きて居ることを許されたいとの願望を持つて居ることが分かる。換言すればこの夢は兩親が獨りで居る時の夕方にその側に居たいといふ重大な願望の實現である。しかしそれは種々面白い本を見たり、知識慾を満足せしめたりする書齋に無邪氣に居ようと言ふのであるとは勿論である。その知識慾といふのは、換言すれば弟が何處から來たかの強烈なる問題に對する答を得んと欲求であつた。而して彼女がその室に居たならば、恐らく其答を得るに至るであらう。

二三日後アンナは恐ろしい夢を見たと思え、「地震がして來て、家が揺り初めた」と

叫びながら目を覺ました。それで母は走つて行つて地震は少しもなく、凡てが静かだ、みんなの人も寢て居ると言つて静めてやつた。所がアンナが言ふに、「私は春が來てあらゆる小さい花が咲き初め、芝生が花で一杯になるのを見たい——私はフレッデイに逢ひたい——ほんとに可愛い小さな顔をもつて居る——お父さんは何をして居ますが、何と言つて居ますか」と。母が「お父さんは寢て居て、何にも言つて居ない」と言ふと、嘲弄的の笑をしながら、「明朝お父さんはきつと又病氣になるだらう」と言つた。

この最後の言葉は、冷笑的調子を以て述べられたけれど、之を眞面目に字義通りに解釋してはならない。話は少し後に戻るが、父が先きに病氣をした時、アンナは父の腹の中に植物がありしほしないかと疑つた。故にこの言葉は、「明日お父さんは急度子供を生まうとして居る」といふと同じである。しかしこの語も亦他の意味を含んで居る。即ち父は子供を産まうとして居ない、母のみが子供を生むか

らして、恐らく明朝も一人の子供を生むのであらう。そんなら何處から生むのであらうか。父は何をするのであるか。茲に至つて又一の難問題が表面に表はれて來たやうに見ゆる。即ち父が若し子供を産まなければ、實際父は何をするのであるか。アンナは此等の諸問題を解決したくてたまらなかつた。どうしてフレッドイが此世界に生れて來たかを知りたかつた。小さい花が春になつて地上に發生するのを見たかつた。而して此等の願望は地震に對する恐怖の背後に隠れて居たのである。

此夢の後は朝まで靜かに眠つた。朝になつて母は昨夜どんな夢を見たかと尋ねた。所が最初何にも思ひ出せないやうであつたが、暫くして、「私は夏が來るやうにすることが出來た。それから誰れかゞ人形を便所に投げ込んだ夢を見た」と答へた。この不思議な夢は、明かに二つの異つた光景からなり立つて、それは「それから」によりて結び付いて居る。第二の部分は、母が男の子を持つてゐるやうに

男の人形を持ちたいとの近頃起つた願望からその材料を取つて居る。誰れか人形を便所に投げ込んだといふのは、よく人が他の品物を便所に投げ込むからであらう。しかし子供の生れてくるのも之と同様である。一つの夢に種々の光景が發見される場合には、其一々の光景が通常複合體の特殊の變形を代表して居る。この夢に於ても第一の部分は第二の部分に表はれた趣意の變形に過ぎない。春を見る」とか、「小さい花の出てくるのを見る」といふことは既に述べた所である。今アンナは夏の來るやうにすることが出來るといふ夢を見たが、之は小さい花の出てくるやうにすることが出來るといふ意味である。尙言ひ換ふれば小さい子供を作ることが出來るといふことになる。かやうにして夢の第一の部分は第二の部分の變形に過ぎない。

二三日の後母の所に妊娠した婦人が訪ねて來た。子供等は腹の大きいことには餘り氣がついて居ないやうに見えた。所が次の日年上の子供が餓鬼大將となり、皆

なで父の紙屑籠から新聞紙を出して来て、それを衣服の下に詰込んで遊んで居た。その様子を一目見て昨日来た婦人の真似をして居ることが分かつた。その夜アンナは次のやうな夢を見た。「私は町に居る一人の婦人の夢を見た。その人は大變に大きい腹をして居た」と。夢に於ける主演者は何時も夢を見る人そのものである。かやうにして前日の遊戯の意味が全く明瞭になつた。此後間もなくしてアンナは次のやうな素振をして母を驚かした。人形を衣服の下に詰込み、人形の頭を下に向はて静かに之を引出し、之と同時に「御覽なさい、子供が出て来て居ます、ほーらすつかり出ました」と言つた。この舉動は即ち母に向つて、「私は誕生の問題を、こんを風に理解して居ますが、それに付て何とかお考へですか、私の考は本當でせうか」と質問すると同じ意味である。而してこの質問的行動は其後數回の間屢繰返された。

或日薔薇を眺めて居たが、祖母に向つて、「御覽なさい、薔薇が子供をもつて居

ます」と言つた。祖母はその意味が分からなかつたので、アンナは膨れた唇を指さしながら、「そこを御覽なさい、大變に膨れて居ます」と教へた。或日のことアンナは妹と喧嘩をした。妹が怒つて「ねーさんを殺しちゃう」と叫んだ所が、「若しも私が死んだら、おまへは獨りぼつちになるだらう。さうすると神様に生きた子供を下さいと祈らなければならぬ」と答へた。やがて争ひも治まり、此度はアンナが天使になり、妹はその前に跪いて、生きてゐる子供を下さるやうにと祈らなければならなかつた。

蜜柑が一度食膳に上つた。アンナは性急にその一をねだり、「今蜜柑を取つて、腹の中へ嚙み下さうとして居る。それから小さい子供を生むだらう」と言つた。茲に吾人は、一の昔噺を思ひ起すのである。即ち子供のない婦人が、果物や魚やその他のものを嚙下して遂に妊娠するやうになつたといふ噺がある。かやうにしてアンナも、子供がどうして母の胎内に入り來るかといふ問題を解決しようといふ企

てた。かやうにして從來にない犀利なる眼光を以て検査に取りかゝつた。但しその解決の方法としては、子供の思惟作用の特質たる類推の形式を取つた。即ち母の胎内に子供が育つといふことは、恰も果物が何かを食べるやうに、或物が口よりはひつて來て、それが大きくなると考ふるより外はないのである。しかし此見解には他の困難が起つてくる。即ち母の作る所のものが何であるかは明白であるが、父が何の役目をなすかに就ては未だ明白になつて居ない。

抑父は何をするものであるか。これは目下アンナの心を占領して居る問題であつた。或朝兩親が衣物を着て居る時、その寢室にはひつて行き、父の寢床に飛び上つて、腹を下にして寝ころび、兩足で蹴りながら、次のやうなことを言つた。「御覽なさい、お父さんはこんなにしますか」と。この行爲の後、問題の解決は全く中止したやうに見えた。これは無理もないことで、これ以上の推理をなすことは、兒童に取つて出來ないことである。この中止状態は約五ヶ月ばかり續き、そ

の間恐怖症も、錯綜に基づく何等の症状も表はれなかつたが、やがて新しい出来事に對する豫戒的徴候が表はれて來た。アンナ一家のものは此時池の近くの田舎に住んで居た。その池に母や子供は水泳をして居たが、アンナは膝の處よりも深い水の中にはひることを恐れて居た。一度父が深い處に入れた處が、驚いて泣き出した。夕方寢ようとする際母に向つて、「お父さんは私を溺らせようと思つたでせうか」と尋ねた。二三日後に園丁が新しく穴を掘つて居たが、その所に動かずに立つて見て居たが、終にその穴に落ち込んだ。アンナは烈しく泣き出して、園丁が自分を穴に埋めようとしたと言ひ出した。その晩アンナが泣いて目を覺ましたので、次の室に寢て居た母が行つて、之を靜めてやつた處が、「汽車が通つて、群集の中に落込んだ夢を見た」といつた。

この時の疑は母に對してとなく、父に對する疑であつた。蓋し父は慥かに秘密を知つてゐるに相違ない。併しそれをあかさうとしないのである。この秘密は子供

には危険なもので、随つて何か悪いことが父から起つてくるに相違ないとアンナは考へたからである。この理由よりして、父がアンナを溺死せしめようとしたといふ間違つた結論に到達したのである。之と同時に父なる對象物は危険なる行爲に關係を有して居るとの思想が、アンナの恐怖の中に含まれて居た。此思想の流は決して不條理の解釋でない。アンナはその間に少しく成人した。父に對する興味が一種説明し難い調子を帶びて來た。子供の目より射出してくる懐しい情のもつた特殊の好奇心を叙述することは、何れの國語を以てしても困難である。

アンナは或日園丁が草を蒔いてるのを、非常に喜んで手傳つた。二週間計り經てから、草の芽が出るのを喜んで觀察し初めた。この時母に次の問を發した。「どうして頭の所に眼が育ちますか、教へて下さい」と。之に對して母は知りませんと答へた。しかしアンナは、神様が父かゞ之を知つて居るかを尋ねた。それで母は恐らく父がそれを知つてゐるだらうと答へた。二三日後に一族の人々が晩食に來

だが、食事がすんで皆が立去つた後で、父のみは食卓に残つて新聞を讀んで居た。アンナもそこに残つて居たが、不意に父の所に行つて、「どうして頭に眼が育つか教へて下さい」と言つた。それで父は、「眼は頭の所に生長するものでない、最初からそこにあつて、頭と共に生長したものである」と答へた。

「眼は頭の所に植付けられたのではないですか」とアンナが尋ねた。「いえ、鼻と同じく頭の中に生じたものです」と父は答へた。「口も耳も同じ様に生じたのですか、又髪もですか」「さうです、それ等はみんな同じやうに生じたものです」「髪も亦同じですか、しかし鼠は裸でこの世に生れて來た。其前はどこに髪の毛はありましたか、別に種子をまくやうなことはないのですか」「いえ、髪の毛は種子のやうな小さい粒から出來てるけれど、この粒はずつと以前に皮の中にあつて、誰れもそれを蒔かなかつた」。父は此等の會話からして、アンナの思想が何處に向つて居るかを知つた。しかし父はアンナが誤つた適用をして居ることの爲めに、この

自然現象より歸納し得た種子説を覆へすことを好まなかつた。

アンナは明かに失望して、悲しい調子で尋ねた。「しかしフレッデイはどうして母の胎内にはひつて來たか、誰が彼を詰込んだか、誰がお父さんをお父さんの母の胎内に詰込んだか、どこからフレッデイは出て來たか」と。この不意の疑問の連發に對し、父は初め終りの答へを選んで言つた。「一寸考へて御覽、フレッデイは男の子で、男の子は男に、女の子は女になるといふことを、御前は善く知つて居る。そして女ばかりが子供を生むで男は生まない。そんならフレッデイが何處から出て來たか一寸考へて御覽」。アンナは嬉しさうに笑つて、陰部を指しながら、「ここから出て來たんですか」。「勿論さうです。御前は以前この事に吃度氣づいたに相違ないが」と父が尋ねるのを聞かぬ様子で、「しかしフレッデイはどうしてお母さんの中にはひつて來たんですか。誰れかどフレッデイを植ゑたんですか。種子を蒔いたんですか」と問ひ返した。

かやうな精細な質問に對して、父は最早その答を避くることが出来なかつた。そこで父は熱心に聞いて居る娘に向つて次の様に説明した。母は土壤のやうなもので、父は園丁のやうなものである。父が種子を蒔き、其が母の胎内で生長すると。此答を聞いてアンナは非常に満足し、直ちに母の所に走つて行き、「お父さんがすつかり私に言つてくれました。今私はすつかり知つてます」と言つた。しかしどんな事を知つてゐるかに就ては少しも言はなかつた。處が次の日になつて母の所に來て云ふには、「お母さん、フレッデーは小さい天使で、其を鶴が天からつれて來たとお父さんが言ひました」と。母は驚いて、「いえ、お前は間違つてます。きつとも父さんはそんな事を言つて聞かせませんよ」と言つた所が、アンナは笑ひながら、走り去つた。此は明かに一種の復讐であつた。母は眼がどうして頭の上に生ずるかを話すことを欲しなかつたか、或は話すことが出来なかつた。アンナは母がフレッデーがどうして胎内に入り來るかを知つて居ないと考へ、古い癖

を以て母を試して見たのである。

之でアンナの觀察は終つて居るが、之によると子供の性的衝動が如何に複雑なる形に於て現はれるか、分かる。併し大多數の人は兒童の性的生活に就て疑つて居る。兒童はもつと無邪氣で、純潔なものであると考へて居る。それは如何なる理由によるかといふに、フロイドによれば、此等の人々は自己の幼時の性的活動を文化に對する教育の抑壓の爲めに全く忘れてしまひ、且又その抑壓された材料を思ひ出さうとしないからである。若し自己の精神を分析し、自己の幼時の記憶を解釋することによつて、研究を始むならば、この幼時の性的生活の眞なることに思ひ當るであらうと。

四、自己色情

兒童の性的生活は單に前に述べたやうな性に關する疑問となつて表はるゝ計りでない。性の衝動は後年の生殖機能と直接聯絡のない、日常の行動中にも現はる

るものである。(一)先づ種々の感覺が兒童に快感を與へる。而して之は類似や聯絡等の點から見て性的の快感であることが分かる。就中身體の中で最も皮膚の鋭敏なる部分を自ら興奮せしむることが、子供に著しく快感を與へる。例へば生殖器は勿論のこと、直腸・尿道口・皮膚、その他の感覺面に自ら刺激を與へて快感を取るのである。此種の性的生活は、その満足を子供自身の身體の上に求めて、他の對手と關係することを要しないからして、エリスは之を自己色情 (auto-erotism) と名づけた。而してかやうに特に性的快感を與ふる身體の部分をフロイドは色情帶 (erogenous zones) と呼んで居る。身體の何れの部分でも色情帶となる譯のものではない。或特殊の刺激を與ふる部分に限られて居る。子供が拇指を喜んで吸ふが如きは、この色情帶を自ら興奮せしめて満足する適例である。この現象を始めて科學的に觀察した人は、ブダペストの小兒科醫リンドネルで、氏は之を以て正しく性的満足であると解し、これがもつと高等なる他の性的満足に變形して行くこと

を詳しく述べた。

拇指を吸ふといふことは、乳児のみに表はるゝと限らない。成人するまで、或は生涯を通じて此行爲がつゞくことがある。これは云ふまでもなく口をつけて律動的に吸込運動を繰返すものであるが、榮養物を取るといふ目的は全く除外されて居る。唇そのもの・舌・手のとゞく所にある皮膚・足の拇趾などが吸込運動の對象となることがある。之と同時に品物を握らうとする欲望がある。即ち耳朶又は他人の身體の一部を律動的に引張つて満足して居る。この喜んで吸ふといふことは、全注意を傾注することゝ關聯して、睡眠に導く時、或は色慾亢進の際に表はれる筋肉反應すら生ずることがある。吸込運動は亦屢感受性の強い身體の一部、例へば胸部、生殖器の外部を摩擦することゝ聯合することがある。かやうにして多くの子供は拇指を吸ふことから手淫に移つて行くのである。兒童が何故に自己の皮膚を撰んで、外界の事物を吸込運動の對象としないかといふことは、前者が

後者に比しずつと便利であるからである。換言すれば未だ統御することの出来ない外界とは關係なしに、性慾を満足することが出来るからである。

肛門が唇と同じく性慾の満足に利用せらるゝことは、往々子供が出ようとする糞の塊を保持して、遂に烈しき筋肉收縮を起すのを待つて居る事實によつて明白である。糞が肛門を通つて行くことは、粘膜に著しき刺激を興ふる傾向がある。それは苦痛を生ずると共に、又一方に快感を生ずるに相違ない。或子供に於ては、看護婦によつて便所につれ行かれて、腸を空にすることを頑固に拒み、その作用を自己の快樂に保存して置くものがある。これは自分の寢床を汚すといふことには頓着しない。只排泄の際の愉快を失はないやうに努めて居る。かやうに肛門を性慾的興奮に利用する爲めに、有意的に糞便を保持することが、少くとも神經病者の秘結の一原因となつて居る。この糞の排泄と同じく尿の排泄も、一種の刺激を生殖器に與へて快感を生ずる。これは男の子にも女の子にも屢見られる所で、

後日の正常の性的生活の端緒をなすものである。

五、對手を要する性慾

(二)次に對手として第二人者を必要とする性的快樂がある。此種の衝動は受動的と他動的との二つの相反した方向に現れる。即ち見るのと、見せるのと、苦痛を與ふるのと、與へらるゝのとといふ風に對をなして居る。子供は特に無耻で、幼少の頃には自己の身體、殊に生殖器を喜んで見せるものである。この欲望と相對するものは、他人の生殖器を見たがることで、即ち前の欲望の顛倒したるものである。この好奇心は、羞耻の感が餘程發達した後には表はれる。通常の人及び神經病者の幼年時代を調べて見ると、この見たがる衝動は、自發的の性的表現として兒童に現はれてくる。自己の生殖器に注意を向くるに至つた幼兒は、外部の干渉なくして此方面に發達し、遊び友達達の生殖器に非常な興味を有するやうになる。かやうな好奇心を満足せしむる機會は、排泄する時と凡そ一致して居るので、そ

の子供は他人の兩便の排出を熱心に觀察するやうになるのである。他人の生殖器を見たがる傾向が抑壓されると、それは苦悶的欲求として殘存し、或神經病者の症狀の如きはこれが最も強き原動力となつて居る。しかし此衝動が昇華されると、見て快を感ずる方からは知識に對する好奇心が發達し、見せて快を感ずる方からは、藝術的及劇的の模寫衝動が起つて來る。

性的衝動に於ける殘酷なる要素も亦子供の時に發達するもので、それは色情帶と關聯せる性的活動とは無關係に表はるゝものである。殘酷は特に子供の性格に近いもので、他人に苦痛を與ふる前に、その衝動を禁止する所謂同情的行爲はずつと後になつて發達する。この殘酷行爲をなさんとする衝動を未だ心理的に完全に分析したものはないが、恐らく殘酷の情は他人を統御せんとする衝動より發したもので、生殖器が性の役目を取るに至らない以前の性的生活の一時期を劃するものであらう。動物や遊び友達に對して、特に殘酷なる行爲をすると目ざされる子

供は、色情帶に於ける早熟的な烈しい性的活動を示したものと推測しても強ち不
合理でない。蓋し凡ての性的活動の早熟に於て、色情帶に於ける性的活動が第一
に表はれるからである。若し同情心が缺如する時は子供時代に形成された殘酷と
性慾的衝動との結合が、後年に於ても破壊されずに續くといふ危険に陥るもので
ある。

前に述べた所の殘酷は發動的で、所謂サディズムとして知られて居るが、之と
相對して、他人からいぢめられて快を感じるといふ所謂マソヒズムがある。殘酷
に對する受動的衝動の性慾的源泉の一は、ルッソーの自白以後凡ての教育者に知
られて居る、臀部の刺激に基づく苦痛の快感である。この事からして、兒童に體
罰を加ふること、殊に臀部を打擲するといふ風習を禁止しなければならぬと、教
育者をして叫ばしむるに至つたのは、誠に正當な要求といふべきである。

茲に吾人は又身體の律動的動搖が性的興奮を生ずることを述べなければなら

ぬ。搖籃に入れて揺ると、烈しく泣いて居た子供もすやくねむるやうになる。電車や汽車に乗つた時の動搖感覺も、之と同じく年長兒童の心を魅するものである。男の子が馭者となり運轉手となりたいと希望するのは、慥かにこの快感を味はん爲である。青春期に入る前、想像活動の盛んな時期に於て、汽車に關する興味が不思議なほど強いといふのは、之を以て性的象徴に利用するからである。處が後になると抑壓作用が行はれて、往々前と反對の現象を生ずるやうになる。青年又は大人には、動搖や廻轉運動の爲めに嘔吐を催し、又汽車旅行に於て烈しい苦悶や失神を生じ、遂には汽車に對する恐怖症を惹起するものがある。ヒステリー患者の心的外傷を解剖すると、往々この事實を發見する。此他烈しき筋肉活動に伴ふ快感も性的である。角力の際對手の身體に觸れることが、一層興奮を惹起することや、又一定の人を對手にしたいとの欲望があることは屢角力者の經驗する所である。

六、對手の選擇

(三) 第二人者を必要とする性的生活に於て、その對手を選むといふ極めて興味ある現象が起つてくる。之は最初補助の必要から生じたものであるが、子供は愛の對手として、兩親又はその一方を選むものである。子供を直接に觀察しても、又大人の精神を分析的に研究しても、子供と兩親との關係に性的興奮を伴はないと言ふことは出来ない。兩親が子供に對して示す愛情の如きは明かに性的のものである。一般に父は女の子を愛し、母は男の子を愛する。子供はかやうな境遇の下に生長する結果、男の子は父の地位に居て母の愛を占有せんとし、女の子は母の地位に居て父の愛を占有せんことを希ふやうになる。而してかくの如き關係によつて兩親と子供との間に生ずる感情、及びその結果として兒童相互の間に生ずる感情は、積極的に愛する計りでなく、消極的に愛の邪魔物を害せんとする感情である。併しかくの如き感情は發生すると間もなく抑壓されてしまふけれど、吾

人の無意識界に對しては著しき影響を及ぼすものである。ダ、ヴィンチの作品を解剖して見ると、作品中の女性は常にヴィンチの母がモデルになつて居る。フグネルの作品にも同一の傾向がある。又吾人が結婚する際にその妻を選択する標準は多く母がモデルとなつて居る。これ等は凡て母に對する愛情が無意識界に於て常に活動して居る證據である。ギリシヤの古き傳説にテーベの王エディプスが父と知らずして父を殺し、母と知らずして母と婚したことが傳へられて居ることは已に第三章に述べたが、之は幼時の願望が少しく形を變へて現はれたものである。蓋し原始民族の精神状態は兒童のそれと相似て居るからして、その願望も亦相似て居るのである。古代の神話や物語を見るとエディプスのやうな例は到る所に發見せられる。これはフロイドの「エディプス錯綜」或は「非倫説」として有名なものであるから、今一度次章に於て言及する積りである。

子供が兩親を以て最初の愛の對手とすることは、當然免れぬことである。併し

ながら子供の性慾は永く兩親の上に留つて居ないで、早晚それから離れる時期が来る。これは來るのが正當で、若し兩親が何時までも子供、例へば女の子を可愛がり過ぎる爲めに、この幼時の愛が青春期の後までも繼續するやうになり、結婚した後も夫に對し義務を充分に盡すことの出來ないことがある。獨り娘を嫁に貰ふなどといふ俚諺は慥かに精神分析法より見て一面の眞理がある。之と同じく男の子を男の手のみで育てるのは宜しくない。例へば昔時は自己の子供の教育を奴隸に委せた時代があつた。現今でも貴族の中には子弟の教養を男の教師に委せ、母が少しも面倒をみないことがある。これは同性戀愛の傾向を助長する。蓋し年少の子供に於ては、性の相違といふことは大した必要でない、只性的衝動の満足を目的として居るのであるが、漸次對手の選擇をなす場合に、男か女のみの手で育てるのは、選擇の材料に不完全を來たし、爲めに正しき抑壓作用が行はれなくなつて來て、遂には病的の性慾倒錯を生ずるやうになるものである。

七、子供の性的發達

身體的方面から見ても、子供が次第に生長するに隨ひ、從來各獨立して快感を生じつゝあつた各種の衝動の間に統一組織が出来て來る。故に青春期の終頃になると、殆ど性的の特質が一定するやうになる。即ち一方に各衝動は生殖器帶を中心としてそこに隸屬するやうになる。隨つて性的生活は全部の手段となり、此等の諸衝動は眞の性慾活動を準備し促進する補助となるに過ぎないやうになる。又一方には自己色情よりも對手の選擇の方が勝を占めて、愛する人を求めなければ如何なる性的衝動にも満足と與へることが出来なくなる。併しすべての衝動が悉く性慾生活の完成に與るのではなく、青春期に達するに先ち、或種の衝動は教育の力によりて烈しく抑壓せられ、その結果として羞恥とか嫌忌とか道德とかいふ如き精神現象が發達し、吾人の願望を抑壓して番兵の役目を勤めて居る。青春期にはひつて性慾が高潮して來ても、この精神作用が見張をして居て、恣に衝動の

活躍を許さないのてある。

子供の性的生活と大人の性的生活とを比べて見ると、主として異なる點が三つある。(一)その經驗する快感の性質が違ふ。(二)子供は必ずしも對手の人を必要としない。即ち自己色情である。(三)子供は大人に比して快感を得る淵源が多い、しかしその快感を得る方法が大人のやうに分化して居ない。然るに青春期に達するに及んで、此等の區別が漸次無くなつてくる。今までは機械的その他の興奮が子供の慾望に満足を與へて居たけれど、青春期に入ると共に、緊張の感情を經驗する爲めに不快を含むやうになる。即ち適當な對手を見ると生殖器帶の筋肉が緊張して多少不快を感じる。所がこの緊張が更に活動を促し、性的物質を排出すると、緊張が弛んで快感を生ずるやうになる。この緊張に伴ふ快感を前快(Vorlust)と名づけ、弛緩に伴ふ快感を後快(Endlust)と名づける。その前快は幼時の性的衝動によりて與へられた快感と同一である。只これが短縮した形にて表はれるのであ

る。後快は新しいもので青春期に於て恐らく初めて表はれるものであらう。此兩者の關係は、後快に向多くの満足を生ぜしむるやうに前快が働いてゐるやうに見える。而して前快が餘まり多過ぎたり、又少な過ぎたりすることは危険である。若し前快が餘まり強過ぎると、豫備的行爲が正常の性的目的の代りになつて、性的過程がそれ以上繼續しなくなつてくる。性的倒錯の中にはこの前快の階段にさまよつてゐるために生ずるものが極めて多い。

八、リビドー

何處から性的興奮が起るかに就ては種々の假説がある。クラフト、エビングの如きは、性的物質の蓄積がこの興奮を引起すものであると説明する。しかしこの假説は大人の性的生活のみを説明する時は差支ないが、幼時の性的生活を説明するには不都合である。又去勢した者を調べて見ると、青春期以後に手術を受けたものは性慾を維持するものが多い。第二の假説は化學説で、性慾興奮はサイロイ

ド腺の分泌と關係があるといふのである。通常その分泌液が有機體の中に一般的に分布されて居るが、色情帶の適當なる興奮、又は性的興奮を生ずる他の條件によつて、その物質が分解を來し、その分解された物質が、生殖器官又は之と連合して居る脊髓神經中樞に特種の刺激を與へるのであると説明する。しかしフロイドは之は餘り物質主義に傾き過ぎて居るとしてリビドー説を主張する。性慾倒錯や精神病を研究して見ると、性的興奮は所謂性的部分より生ずるものでなく、身體機關全部より供給せらるゝもので、その性的興奮を引起す原動力を氏は Libido と名づけて居る。この力の分量は變化的で、之によつて性的興奮の場合に、その過程と變形とを測定し得るものである。

このリビドーは通常心的過程に用ゐられて居るエネルギー(Energie)とは異つて居る。蓋しこのエネルギーは特殊の起源を有し、又質的のものであるからである。この量的リビドーの心的代表者に ego-libido の名を與へると、この ego-libido の産

出・増加・分布・轉置によつて、性的心理現象が説明し得らるゝのである。故にこの ego-libido は性的對象の上に用ゐらるゝ時、換言すれば object-libido となる時に、初めて精神分析法によりて研究せらるゝことが出来る。即ち ego-libido が對手に集中し、固着し、或は對手より離れて他の對手へ移る時に、吾人はそのリビドーを見ることが出来る。之はかのヒステリーや強迫觀念を有する神經病の精神分析法を行つて見ると明かになつてくる。object-libido の運命はどうなるかといふに、それが對象より撤回されて、特殊の緊張状態を維持しつゝ保存せられ、遂に自我に取戻されて ego-libido となるのである。換言すれば、ego-libido は對象を選出するに要するエネルギーを送り出し、又は取戻す一大貯水池のやうなものである。リビドーは男性的の性質を帯びて居るのが正規のものである。子供時代の色情帯にける自己色情的活動を見ると、男兒も女兒も同一で、何れも共に男性的である。故に性的差異は青春期以後に表はれると云つた方が適當である。婦人が男子

に比して精神病に罹り易いのも、これが一條件となつて居る。即ち子供の性的活動は男性的であるから、男兒が青春期に達した時には何事もないが、女兒が青春期に達すると、よほど同性に對する性的傾向を抑へなければならぬからである。又婦人に於ては、青春期に達すると色情を生ずる部分に變化が起る。蓋し女兒に於ける主要なる色情帶は陰核で、之は男兒の陰莖と相同的のものである。それで青春期に達しても男兒には變化はないが、女兒はこの陰核的色情を抑壓しなければならぬ。故に青春期は男兒に取りてはリビドーの烈しい發達を促す時期であるけれど、女兒に取つては却つて色情帶の變化期となつて居る。それで婦人は男子に比し、性的發達に錯誤を起し易く、隨つて精神病を發し易いのである。

之を要するに吾人の性的發達は三期に區別されるやうである。第一期は所謂自己色情を以て満足する時期で、之は生後より三歳頃までである。次は對手を選び時期で、之を更に二期に分つことが出来る。即ち最初に兩親や近親者が愛情の對

手となるのである。此時期に性に關する質問が盛んに起つて來る。所が漸次羞耻とか嫌忌とか道德とかのフロイドの所謂「非倫堡砦」が發達して來て、兩親を對手とすることを止め、それに似た他人を對手とするやうになる。性に關する事項も、最初は兩親の答辯に満足せず、自分の氣に入るやうな種々の説明を下して居るが、之も漸次抑壓されて、遂に忘却されるやうになる。是等は通常四五歳頃より青春期に達する間に表はれ、性的活動の潜在期ともいふべく、この間に昇華作用が最盛んに行はれる。第三期が即ち青春期以後で、大人の性的生活の構成せらるゝ時期である。成人後に至るまで残つて居る性的思想の記憶は、概ね潜在期の終り頃に始まつたもので、それ以前の幼時の思想は全く忘れてしまふ。世人が往々子供の性的生活の存在を疑ふのは、此忘却がその一原因となつて居る。抑壓作用と昇華作用(第八章に詳論せり)との盛んに行はるゝ潜在の時期が即ち教育の任の益重くなつて來る時であるが、現時の教育が此任務を知的に經濟的に解釋す

ることを知らないで居るのは實に慨はしいことである。

第五章 神話と藝術的作品

子供の精神發達は、種族のそれを或程度まで繰返すものであると謂はれて居る。殊に子供が父母に對する關係、並にそれに基づく願望は、上古民族の間に行はれた神話や傳説の中に表はれて居る。夢の解釋を述べた章下に、エディプスの話を一寸述べて置いたが、此種の想像はやはり子供の中に存して居る。それでフロイドは夢と子供と神話とは離るべからざる關係を有して居ると述べて居る。先初めにオットー、ランクによりて研究された、神話中の英雄の生立に就ての分析の大意を述べ、次にフロイド・ジョーンス・グラーツ其の他によりて研究された藝術家並にその作品の解剖を紹介しよう。

一、英雄の生立

現今傳はつて居る最も古い英雄神話は、紀元前二千八百年頃バビロンの建設時

代に出来たもので、その建設者サルゴン一世(Sargon)の誕生の歴史に關係したものである。それはサルゴン自身によりて書かれたと言はれて居る。即ち

「アゲードの勢力ある王サルゴンとは私のことである。母は貞女であつた。私は父を知らない。その時父の兄弟は山に住んで居た。ユーフラティス河の岸にあるアズピラニの町に於て母は私を生んだ。或る隠れた場所で母は私を育てた。母は私を蘆で作つた容器の中に入れ、松脂で封じ、川の中に沈めた。しかし溺死しなかつた。その河が水運搬夫のアッキの所へ私を運んで行つた。アッキは親切に私をとりあげ、自分の子として育て、後に私を園丁にした。園丁の仕事をして居る間に、私はイスターから愛された。私は王となつてから、四十五年間王權を握つた」。

次にモーゼ(Moses)の生ひ立ちも、サルゴンのそれと似て居る。レヴィ一家の中の一人の男がレヴィの娘を娶り、男兒を生んだ。この時ファラオー王は命令を

發してヘブリューに生れた凡ての男子を水中に投入すべきことを命じた。所がその母はこの子を水に投ずるに忍びず三ヶ月の間隠して居た。しかし遂に隠し切れず、蘆で作つた函の中に入れて、粘土と松脂とで密封し、それを河の岸の菖蒲の間に置いた。彼の姉はどんなになるかと思つて遠くから見張つて居た。その時アラオーのお姫様が川に行水にきてその川岸を歩いて居る中に、菖蒲の中の函を見た。腰元に命じて之を取りよせ、蓋を開いた處が、中に一人の男の子が泣いてるのを見た。姫は之を可愛相に思ひながら、あゝこれはヘブリュー人の子供だといつた。その時子供の姉が出て来て、あなたの爲めにヘブリュー婦人の乳母を呼んできませうかと尋ねた。姫はそれを許したので、その子の母を連れて來た。そこで姫は、自分の代りにこの子を育て、くれよと命じた。母はその子を育て、成長した後姫の處につれて行つた處が、姫の子にし、その名をモーゼとつけた。蓋し水から彼を救ひ出したからである。

アブラハム(Abraham)の生ひ立ちもモーゼのそれと似て居る。アブラハムの生れる前に、星の御告によりて、ニムロッド王はこの子が王位を奪ふことを知り、生れるや否や之を殺すことをその父に命じた。父は之を不便に思ひ、自分の子は死んだと言つて、その實地下の穴倉で育て上げたと言はれて居る。

前に述べたエディプス(Oedipus)の生立も同様である。彼の父はアポロの神託によりて、その子を恐れ、生れるや否やキタイロン河の邊に棄てた。處が牧羊者に拾はれて、その子供として生長し、遂に神託通りに、彼は父と知らずして父を殺すに至つた。その話は基督教神話の中にもその範を垂れて居る。即ちユダ(Judas)の如きも、その母は夢の告を信じて、ユダが後に悪魔の如くなるを恐れ、彼を箱に入れて海に投入した。グレゴリー(St. Gregory)の話も同様である。彼は宮廷に於ける親族相姦の結果生れた子で、母は彼を箱に入れて海中に棄てた。幸ひに彼は漁父に救はれて、後尼寺で教育を受けた。長じて後彼は騎士の生活を送り、

大に勳功を表はし、その賞與として王妃即ち彼の母と結婚するに至つた。後にその不倫の行爲が發覺して、彼は海中の一孤岩の上に十七年間苦行をし、神の命によりて遂に法王となつたと言はれて居る。

ギルガモス(Gilgamesh)の話も之と相似て居る。バビロンを支配して居たセネコロスが豫言者から次のやうなことを聞いた。王の娘の子はその祖父の王國を奪つてしまふだらうと。それで王は日夜その娘を監視した。所が目に見えない男がその娘の處に來り、遂にその娘は妊娠し、一人の男兒を生んだ。附添は王の怒を恐れ、その子を窓から投棄した。折よく一羽の鷺がその子の落ちるのを見、地に達しない中に捕へて、之を脊負ひ或る花園につれて行つた。處がその花園の監督が之を見出して養育し、之にギルガモスといふ名を與へた。而してこの子は豫言者の言の通りに、後にバビロンの王となつたといふことである。

キロメ(Kyros)の物語に就ては、作者によりて多少異つて居る。今ヘロドタス

の書いた所によると次の如くである。メーデの王アステイヤダスにマンドーネといふ一人の娘が居た。或日王はその娘から水が出て、メーデのみならず、亞細亞一杯が大洪水となつたといふ夢を見た。それで彼は夢判断をする者にその夢を解釋させた處、その洪水は併呑を意味すると言はれ、王は大に之を心配して居た。その後娘は生長して、カンピセスといふ波斯人の妻となつた。この時王は又夢を見た。それは娘の膝の處から葡萄が生え、それが全亞細亞を蔽うたといふ夢である。夢判断によると、その娘の子が祖父を殺してその地位を奪ふといふことで、王は大に驚き、使を娘の所にやり、丁度生れ落ちた計りの男の子を引取つた。王は昵近の家臣ハルバゴスを呼び、この子を殺せと命じた。ハルバゴスはその子を連れて自分の家に歸つた處が、彼は熟思ふに、若しこの子を殺すやうなことがあれば、後に娘から怨まれるに相違ない。王は老年で餘命幾もなく、又娘は王の唯一の相續者であるから、自分の手でこの子を殺すと、後に自分の生命を取られ

るのは明白の事であると思ひ、王の奴隸のキノーといふ者を呼び、この子を出
の中に棄てよと王が命じたと言ひ、若しその命に従はなければ汝の生命をとると
威嚇した。處がキノーの妻はこの子を殺すに忍びず、彼と相談して、自分の子供
の死んだのを身代りにして、その子を育てた。或日その子が村の子供と遊んで居
た時、他の子供はその子を王とし、その命令に服して遊んで居た。偶王の高官の
子供がその命に従はなかつた爲め、その子供は高官の子供を打擲した。打たれた
子は走りて父に言ついたので、高官は自分の子供が賤しい奴隸の子に打たれたの
を怒り、王のアステイアグスにその旨を告げた。王はキノー及びその子供を呼ん
で調べて見たが、その子供の非凡なる相と回答とにより、忽ちにして自分の孫で
あることを看破した。それで早速、キノーを呼んで、すかしたり嚇したりして調
べた處が、その實を吐いた。王は又ハルバゴスをも呼び、愈この子が娘の子であ
ることを確めた。王は心中大に怒つたけれど之を押かくし、自分は神の引合せに

よつて、この子を再び見ることが出来た。今夜その歓迎の宴を張るから、ハルバゴスの子供をよこして貰ひたいと言つた。ハルバゴスは王の謀を知るに由なく、自分の過失が却つて善い結果を來したと喜び、家に歸りて、十三になる一人息子を王の所に遣した。王はその子の頭を切り去り、手足をそのまゝにして、ハルバゴスの食膳に供し、他の者には羊の肉を供した。ハルバゴスは、自分の子供が食膳に供せられて居るのを見て、心中非常に驚いたけれど、さあらぬ體を裝ひ、王の命ずるまゝに、それを家に持歸つて葬つた。その後王はその孫を呼び、自分が夢の告げを信じて、間違つた取扱をしたことを詫び、父母の所に行つた方がよからうと、部下を従へさせて波斯に送つた。兩親は喜び迎へ、そこで成人し、キロスと名のつた。後キロスは、ハルバゴスの煽動によりて波斯軍を率ゐて、メーデの町を攻め、祖父アステアアゲスを擒にし、之に迫害は加へなかつたが、一生涯の間自分の手元に留め置いたといふことである。

基督の生ひ立ち、世人のよく知る如く、マリヤといふ處女の處に、天使が來て神の子を宿すべきことを告げた。マリヤは夫なき婦人の孕むことを耻としたけれど、天使は彼女に少しも恐るべきものでなく、却て神の子を生むのは極めて神聖なることであると告げたと云はれて居る。拜火教の祖ゾロアスターの生立も之に似て居る。母の胎内にある時、怪物が母胎に入りて胎兒を引き出さうとすると、光の神が來て之を征服し、再び胎兒を體内に吹き込んだといふ夢を見た。しかし最初夢判斷で之を解することが出来なかつたが、三日目に漸くこの子は傑出した人物になることが分かつた。ゾロアスターが生れた時直ちに笑つたので、また世人の注意を引き、魔術家はこの子を以て、國を擾すものであると云つた。それで國王は之を刺し殺すやうに命じたが、その執行者の手が急に麻痺して刀を振り上げる事が出来なかつた。その後惡魔が又彼を荒野に連れ去つて殺さうと企てたけれど、それも不成功に終つた。又王の命によつて牡牛の群の中に置かれたけれ

ど、最も大きい牛がその脚の間に彼を支へて、他の牛から踏みつけられることを防いだ。それで今度は馬の群の中に置いて蹴殺させようとしたけれど、一匹の馬が又彼を保護した。最後に狼の檻の中に置かれたけれど、神が狼の口を塞いだといふことである。

最も廣く知られて居る物語は、ローヘングリン (Lohengrin) のそれである。これは昔のケルト族の間に傳はつた話が、その始めのやうであるが、こゝにはグリム兄弟によりて、簡約された梗概を述べると、次の如くである。ブラバント及びリムブルグの公爵が死なんとする時、その後繼者たる一人娘エルスの後見者として、フリードリッヒなる勇者を選定した。處が、このフリードリッヒは、エルスと結婚したと偽り、その土地を支配しようとした。しかし彼女は斷然之を拒絶したので、フリードリッヒは皇帝に向つて、神明裁判を仰ぎ、彼女の身代りになる勇士と技を競ひ、若し勝を制したらば、自己の主張の正當なることを證明するこ

とが出来ようと請願した。此時エルヌの味方となつて、フリードリッヒと力を角
しようといふものなく、爲めに彼女は日夜神に祈願した。處が遠くモンツァルヴ
マチ(靈山の名、そこに聖盃グレイの寺院と呼ぶ神秘の城がある。その塔の中にはこの
世に於て無上に尊い聖盃が收めてある。この祠を守る騎士達は浮世を棄て、生命
を善行の爲に捧げて居る。その酬として、聖盃は彼等に何人も及ばぬ力を與へて
居るといふ)まで、救助を求むる鐘が聞えた。それでグレルの者はバルシファ
ルの子ローヘン格林を救助に赴かせようと決した。彼が足を馬驢にかけようと
する途端、鵜がその後に小さい舟を引きつゝやつて來た。それを見るや否や彼は
從者に向つて、この馬を厩舎に返してくれ、自分は鵜の導く所に行くからと言ひ、
その船に乗つた。五日間航海をつゞけたが、彼は何等食料の準備をして來なかつ
たので鵜は魚を捕へ、半分は自分が食し、半分はローヘン格林に與へた。この
間にエルヌはアントワープの會合の爲めに、多くの會長や從者を集めた。集會の

當時鵠は彼を乗せてその處に上陸し、彼が胄や劍を取り出すや否や鵠はもと來た道に歸つて行つた。ローヘングリンは、公爵の娘が災害に逢つて居ることを聞き、大に之に同情して、神明裁判に於ける彼女の選手たるを承諾した。皇帝の面前でフリードリッヒとの勝負が行はれたが、ローヘングリンが首尾よく勝を制した。

茲に於て彼はエルスと相愛する仲になつた。しかし彼は何處から來たかの祖先の系圖に就ては極めて秘密にし、若し之を打明ける時は彼は彼女と永の別れをしなければならぬと言つた。その後ローヘングリン夫婦は平和に且つ幸福に暮して居た。彼は利口で、よくその國を支配し、皇帝に忠勤を擧げてた。所が或日投槍をして居る時、クリーブ侯をして落馬せしめ、その腕を折るに至らしめた。クリーブ侯の夫人は怒つて、大勢に向つて叫んで言ふには、ローヘングリンは勇敢で、善良なる基督教徒ではあるが、何處の國から流れ込んで來たか薩張り分らないと。その夜から次になるとエルスは泣いてローヘングリンに素性を尋ねた。第三の晩

の翌朝、彼は公衆に向つて、彼の父は聖盃グレイプの守護長たるバルシナルで、神が
グレルから彼を遣はしたといひ、その後二人の子供に接吻をし、形見として、角
製の笛と劔とを渡し、エルスには母が彼に與へた小さい指輪を渡し、「さて私は行
かなければならぬ」と云つて出かけると、前の鶴が泳ぎながら來たので、その鳥
の引いて來た小舟にのり、元のグレルに歸つて行つた。エルスは失神した。皇
后は父の爲めに幼いローヘン格林を彼女の子供として育て上げた。寡婦のエル
スは再び歸らない夫を慕ひ、泣き悲しみつゝ、一生を終つたといふことである。

以上述べ來つた神話・傳説・物語の外に、オットー、ランクは尙多くの同様なる
形式を有する物語を列擧して居る。しかし茲には之を省き、此等の中に共通して
居る點を摘出して、分析的研究を試みたる氏の結果の大要を左に紹介しよう。

二、英雄神話の分析

英雄神話の主要點を摘記すると、先づ第一に英雄は多く高貴なる親の子である

點である。その生れる前には、必ず何等かの困難がある。例へば永い間子を妊まないとか、外部の事情の爲めに秘密に情交を行つた後である。又妊娠中に、夢告又は神託として、その子供の生れることに反對する豫言がある。その内容の多くは父又はその代表者に危険を興へるといふので、生れると直ぐに箱に入れて川に流されるか、荒野に捨てられる。そこで動物又は賤しい人に拾はれ、牝獸又は賤しい婦人によつて育てられる。成長すると、高貴の家に生れたことが分かり、その家に戻るやうになる。しかしその際多く父に對する復讐をなし、父の地位を取つて代はるものである。

先づ初めに、何故に神話の英雄は凡て高貴のものゝ子供であるかといふに、それは幼兒の精神を觀察すると明かになつてくる。子供は自分の親を非常に偉らしいものゝやうに思つて居る。従つて子供の最初の理想は、父又は母のやうにならうといふのである。處が漸次父母の眞價が分かるやうになると、一方には、實際の

兩親からは離れて行くが、他方には昔時の幸福なる時、即ち父が最も強く最も優れた人に見え、母が最も美しく最も親しい婦人に見えた時代を渴望するものである。而して實際にその望を満たすことが出来ない爲めに、空想に於て之を實現する。大人に於ても往々父や母が皇帝とか皇后とかである夢を見ることがあるのは、即ち子供時代の願望が夢の中に實現されたのである。

かやうに子供は一方には父母を偉大視すると同時に、他方には之に對抗し、その權威より脱れようとするものである。既に「性慾と子供」の章下に於て述べた通りに、男兒は父親に拮抗して、母の愛を奪はうとし、女兒は母親と競争して父の愛を専らにせんとするものである。古來親子間の争闘は多く之に基いて居る。所が神話に於ては、最初父親の方でその子又は孫の産れることを恐れて、之を殺さうと企てる。而してその子供が成人すると、意識的又は無意識的に父又は祖父を攻撃してその地位を奪ふやうになる筋が多い。故に神話と子供の精神とはその順序

を轉倒して居るやうであるが、これは神話作家特有の心理的活動に基づくもので、親子間の競争とか争闘とかの根本思想に於ては神話も子供の精神も變りはない。かやうに子供の自我は神話の英雄と同じやうな行動をする。只神話の英雄は卓絶せる多數の個體的自我を集めて作つた集合的自我である。

次に神話の英雄は多く、生れ落ちるや否や水中に捨てられるのであるが、それは如何なることを意味するのであるか。健全の人又は精神病者でも、やはり水中に曝される夢を見ることがある。而してフロイドはこの夢を以て出生の象徴であるといつて居る。即ち子供は水から出てくるからである。それで神話の英雄が水中に置かれるといふのは、この出産の過程を表はす象徴のやうである。殊にその英雄が籠や箱の中に密閉されて棄てられるのであるが、この籠や箱が子宮の象徴であることは言ふまでもない。

ある神話に於ては、母親が處女である。而して神が密かに來て子供を孕ますと

か、或は神の意志によつて子供を生むのである。中にも基督の母のやうに神の子を生んだ後に、普通の男と結婚するものもある。かやうに處女が子供を生むとの考は、神の子を生むやうな母は超人的であるといふ思想から來て居るばかりでなく、前に述べたやうな自分の父は、偉いものであるといふ子供らしき想像が、もつと極度に達して、自分の父を神と同一視したのである。しかし又之を一方から考へると、競争者たる自分の父を拒絶して居る。詳言すれば、父を排斥しようといふ願望が、無意識に働いて居るので、父の存在を顧みないやうになるのである。しかし前に一寸述べた通りに神話の心理と子供の精神とは全然一致しては居ない。蓋し神話は英雄によつて造られたものでなく、又勿論子供の英雄によつて造られたものでもないが、しかし成人した人民の生産物であるからである。神話を作る動機の中には確かに英雄の出現に就ての驚愕がある。而してその非凡の生涯を見て、幼年時代にも既に不思議なる行爲をしたに相違ないと想像するのである。

而してこの英雄の非凡なる子供時代を畫くに當つて個人的神話作家の自身の子供時代の經驗がその材料を提供するものである。即ち彼等自身の幼年時代の歴史を以て英雄を考察するに當りて、自身と英雄とを同一視し、自身の人格の中に同一の英雄的分子があるかのやうに想像する。故に神話は、大人が幼年時代の想像に溯つた結果として出來上つたもので、その英雄は神話作家が自己の幼年時代の歴史に照らして、作り上げたものである。神話の中に神話作家の個人的經驗が挿入されることは、次に述ぶるシェクスピアやダ、ヴィンチやゾクネルの作品の中に彼等の幼時の經驗が充分に織り込まれて居ると同一原理の下に立つものである。

三、ハムレットの分析

神話や傳話に表はれた親子の性的關係とか、幼年時代の願望とかは、古來有名な藝術的作品中にも表はれて居る。フロイドが「夢の解釋」中に、エディプス錯綜

なるものを述べ、ハムレットの傳説及びシニクスピヤ上の書いた其の劇にも、この種の錯綜があることを暗示したが、ジロースは尙一層詳細にハムレット劇の精神分析を企て、居る。

先づ初めにハムレット劇の梗概を述ぶる必要がある。丁抹の女王ガートルードは、ハムレット王が遽かに崩御した後、二ヶ月も経たざる中に、王の弟クロード・イアスと結婚した。それで、弟が先王を竊かに弑したといふ風評があつた。先王の子ハムレットも之を聞いて大に驚き、その風評の偽りならんことを希望した。處が或時先王の亡靈出で、先王が庭園に眠つて居る間に、弟にして現王たるクロード・イアスが近寄つて毒液を耳中に注入し、之を死に至らしめたと告げ且機會があれば之が復仇をしてくれるやうに頼んだ。ハムレットは性來虛弱なる上、亡靈の告によつて益憂鬱に陥つた。しかし先づ亡靈の言の眞偽を確める必要があると思ひ、一種の演劇を仕組み、その中に老王を弑する場的一幕を入れて、之を王

及び王妃に見せ、その時の王の顔付の變化如何によつて、實際先王を弑したか否かと推斷されるだらうとの考から、二人を招いでその演劇を見せた。處が王は先王を弑する場に至ると、見るに忍びないと云つて退場してしまつた。茲に於てハムレットは愈々靈の言の眞なるを知り、父の爲めに復仇をとげんと決心した。それには王の疑を解く爲めに狂人の眞似をするのがよからうと思ひ、常規に外れた舉動をした。それ以前にハムレットはポロニアスの娘オフィリヤを愛して居たけれど、今度の重要事件の爲めに殆んど思ふ隙もないやうになつた。一方に王はハムレットが諷刺劇を示したことを大に怒つたので、王妃は心配してハムレットを膝元に呼びよせ、氣をつけるやうに言ひきかせた。所がハムレットは却て母に向つてその不貞操を烈しく責め立てた。母は居たたまらず、その席を外して他の者呼びに行かうとした處が、ハムレットは無理に之を引とめた。その有様を物陰より見て居たポロニアスは、たゞ事でないと思つて聲をあげて助けを求め

た。ハムレットは其を王と思つて、忽ち劔を閃かして之を刺殺した。茲に於て王は危害の身に及ばんことを恐れ、ハムレットを使者として英國に遣はし、ハムレットの到着するや否や殺すべき旨を認めた書狀を英國王に送つた。ハムレットはそれを途中で知つた。處がハムレットの船は海賊に襲はれ彼は勇氣を鼓して敵船に飛び移つた。海賊等はハムレットを擒にしたけれど、丁抹の王子たることを知つて粗略にせず、丁抹の近くの港に上陸せしめた。宮殿に歸つた處が時恰もオフィリヤの葬式の日であつた。その兄レアーティーズは、ハムレットの爲めに父及妹が死んだので、ハムレットに對して敵意を有して居た。王は之に乗じて、レアーティーズを煽て、ハムレットと決闘せしめ、レアーティーズの劔には毒を塗つて與へた。試合をすること數番の後ハムレットは敵の劔をとつて之をさした。その時恰もハムレットが渴いた時に供すべき毒水を、王妃は知らずして飲み、遂にその場で絶命した。茲に於てレアーティーズは自分の用ひたのは毒劔であつたこと、

及び王こそ我等の爲めに憎むべき仇敵であることを叫び、ハムレットも半時の中に死ぬであらうから速に決心せよとすすめた。ハムレットはその毒劔を取りて王の方に向き直りて、胸も通るほど劔先をつき込んだ。これでハムレットは亡き父の命令も實行し、年來の希望も成就して、悲劇の幕は閉ぢられて居る。

ハムレットの話を分析して見ると、神話の構成された具合と非常によく似て居る。凡て男の兒は母の愛を専有せんとして父を嫌ふことは既に述べた。ハムレットは未だ年青い青年で、従つて幼時に經驗した父に對する嫉妬心が充分に抑壓されることが出來ず、容易に復活して來たに相違ない。ハムレットは最初父が死んだ時には、これより母の愛を専有することが出來ると竊かに喜んだに相違ない。所が、幾許もなくして第二の競争者として叔父が現はれた。これに對してハムレットが不快に思ひ、之を除去しようと考えたのは當然のことである。殊に亡靈によつて、叔父が父を毒殺したといふことを聞いてからは、復仇の考が義務の念を

伴つて益烈しくなつて來た。しかし茲に一つ面白いことは、ハムレットは叔父クローディアスが父の殺害者であるといふことよりも、母の不倫の結婚をしたといふことに就て烈しく怒つて居る。これはハムレットが母に對して性的愛情を有して居た立派な證據である。又王妃の方でもその子ハムレットを非常に可愛がり、クローディアスをして「彼女はハムレットの顔を見て生きて居る」と言はしめた程である。これも母が子に對する性的愛情といふより外に説明がつかない。

かやうにハムレットは母を以てその性的對象とした。しかし何故に彼は一時オフィーリヤに心を寄せたか。一部の論者によると、オフィーリヤは母とよく似た性質の女であつたと言はれる。しかし彼女は母と全く反對の性質を有して居た證據が、劇の文中隨處に表はれて居る。それでハムレットがオフィーリヤを愛したのは、全く反對の性質のものを選んで、少しも母親のことを思ひ出す機會のないやうに努めた結果であるやうに見える。或は又恰も戀に失望したものが、比較的

喜んで申込を聞いてくれた方に傾くやうに、彼は母に向つて、「私はあなたの愛を得なくともいい、異つた型の婦人の方に行くから」と言つて、見せつけにオフィリアを愛したやうである。だから復仇の念が強くなつてくると、ハムレットはオフィリアのことなどは念頭に置かなくなつたのである。

次に叔父が危害の身に及ばんことを恐れて、ハムレットを無きものにしようとした企ては、神話に於ては、多く父と子又は祖父と孫との間に行はれて居る、又ハムレットが偶然ポロニアスを殺したことも、ギルガモスその他の神話にその例を見出すことが出来る。即ちその動機は二重になつて居て、その一は青年が老人の頑固壓制に對する反抗と、その二はオフィリアをハムレットにやるのを惜んだことに對する復仇とである。殊に父がその娘を可愛がつて、他の青年の愛者たるを喜ばぬといふ「父娘錯綜」(father-daughter complex)は、神話の中に屢見する所で、ハムレットがポロニアスを偶然殺すに至つたことも、かの娘の無垢を

維持する爲めに幽閉して居たアクリシオスが、その孫ペルシオスによつて偶然殺されたのに似て居る。次にハムレットとレオーティーズとの争闘も亦精神分析者から見ると興味ある點である。レオーティーズとオフィリアの關係は所謂兄妹錯綜(Brother-sister complex)で、ハムレットから見ると、その兄はその父ポリーニアスと同じく愛の邪魔者である。ハムレットとレオーティーズとがオフィリアの墓の所で組打を初めたのは、實によく這般の機微を洩して居る。

最後にハムレットが復讐をするに優柔不斷で、急に決行しなかつたのは何故であるかといふ疑問である。之は従來種々に説明されて居たが、精神分析者の眼から見ると、それは抑壓作用に基いて居るやうである。即ち愛の競争者たる父、或は叔父を排斥しようとの幼時の願望は、教育の發達すると共に不倫であるとして抑壓されてしまふ。しかしそれは全然無に歸したのでなく、種々の形を取つて表はれてくる。ハムレットの場合は、叔父を殺すといふことが自分の愛の競争者を殺

すといふことになり、それは極めて非倫の行爲であるといふ懸念が無意識に働いて、復讐を抑壓して居るのである。外部に出ようとする力が大となればなる程、之を抑壓しようとする力も大となるものである。従つて心中に苦悶が起り、憂鬱状態となり、外部からは意志力の沮喪、優柔不斷といふやうに見えるのである。故にハムレットの麻痺的行爲は、身體の虚弱から來たとか、復讐行爲は道德上悪いとかいふ爲めではなく、彼自身の心の奥底に潜む卑しき願望の出現を防壓しようとする知的臆病である。

しかしこのハムレットの性格はその作者たるシェクスピアの性格の一部を示して居るやうである。このハムレット劇は千六百一年から二年にかけて書かれて居る。而して彼の父は千六百一年九月に死んで居る。彼の父は極めて父權を振まはす人でその爲めにシェクスピアの反抗心を引起したに相違ない。而して彼の母は父の死後尙七年間生きて居たので、恰もハムレットが父の死後、その幼時の抑

歴された記憶を呼び起したと同じやうに、シキクスビヤーもその父の死後幼時の記憶を呼び起したに相違ない。而してハムレットが内部の抑壓作用によりて、臆病となつたことは、シキクスビヤー自身の心内に生じて居る苦悶の反響であらう。これはシキクスビヤーばかりでない。他の藝術家の作品を解剖して見ても、その作家の性格が、その中に織り込まれて居るものである。

四、ダ、ヴァインチの生涯

次にはフロイドによつて分析されたレオナード、ダ、ヴァインチの生涯の概要を紹介しよう。

フロイドはヴァインチの傳記を確實に知るとは主張しないが、その知る所によると次のやうな生涯を送つたと云つて居る。即ちダ、ヴァインチは千四百五十二年に生れ、伊太利文藝復興期の人物中最も著名な且つ多藝の一人であつた。彼は畫家として有名であるばかりでなく、亦科學者としても一家をなして居た。この二つ

の性格は少しも相乖ひくことなく、攻究の精神は藝術的天才と常に相並んで居たが、晩年に於ては、前者が後者を殆んど壓倒してしまつた。その科學的興味は彼をしてベークソンの先驅者たらしめた。彼は鳥や人體を解剖したこともあるし、飛行機を作製したこともあるし、又植物の榮養及び毒物に對する反應をも研究した。三十歳の時ミラン侯に向つて、次のやうなことが出来る旨を建白したと言はれて居る。即ち彼は戰時並に平時の機械や道具を理解して居るし、輕便で丈夫な橋を建造することも出来るし、要塞を圍む溝の水を決することも出来、舟橋や梯子を造り、輕くて運搬し易く、彈丸を霰の如く發射し得る大砲をも鑄造することが出来る。尙平時には公私の建物を造り、水を引き、大理石・青銅・石膏で彫刻することも出来、繪畫をかくことも當時の畫家よりも優つて居ると述べて居る。

この科學的興味の爲めに、繪畫を畫く時間が割かれるので、完成せずして繪畫を放棄することが屢であつた。これは彼の特質の一つであるが、又遲筆であつた

ことも有名である。かの有名な聖晩餐の圖は、その準備に非常な苦心を重ねた上に、それを畫くに三年を費した。彼は往々夜明けから暗くなるまで繪筆を捨てなかつた。しかし時々仕事上の試験と内部の試みに數日を費し、少しも畫くことが進捗しないこともあつた。モンナ、リサの肖像の如きは四年を費して遂に完成せず終つたやうな次第である。

彼の手帳に準備的スケッチの多數なること、繪畫の動機に就て記した記録の多數なることは、如何に彼が細心であつたか分かり、時としては準備的研究が餘り多過ぎて恐らく決斷に困つたらうと思はるゝ位の處がある。彼の遲筆と、又晩年に繪筆を捨てたことゝは一にこの決定の出來ないことに基いて居るやうに思はれる。彼は毫も進取的態度に出づることなく、反抗とか爭論とかを避けて居た。彼は又動物の生命を取る權利がないといふ考から肉を食はなかつた。市場で鳥を買つて之を放してやるのを非常な樂しみにして居た。戦争や血を流すことを烈し

く攻撃し、人間は萬物の靈長でなく、却て凡ての動物中最惡のものであると云つた。かやうに女性的傾向があるに拘らず、彼は恐怖の表情を研究する爲めに死刑囚が斷頭臺の露とならんとすることを拒みもせず、又最も恐ろしき武器を描く爲めに、軍器製作長として奉職したこともあつた。

彼の性的生活に就て知る所は少ないが、極めて重大である。婦人美を描く畫家としては珍らしい程、彼は性に無頓着の人であつた。彼の書いたものを調べて見ても、少しも色慾に關することは毛頭なく、科學上の問題やその他性とは無頓着な記事に満たされて居る。この點に於て彼は、かの性的生活の想像を逞くして特殊の快を感ずる大藝術家と全く相反する性質を示して居る。彼が婦人を愛したとか、又ミケランジェロのヴィクトリア、コロナに於ける如く精神的に戀意にした婦人が居たとかいふ何等の證據もない。しかし昇華され且つうまく抑壓されたる同性的性慾の傾向のあつたことについては立派な證據がある。

彼が藝術家と科學者との二つの性格を有する外に、この特殊の情的並に性的生活を送つたといふとに就ては、フロイドによると唯一つの説明方法があると言つて居る。彼は感情や情緒を以て從屬的のものとし、知力を以て主位とした。この考は彼の書いた『繪畫論』にも表はれて居る。即ち彼は非宗教的であるとの非難に對して辯護して云ふには、大なる愛はその對手を十分に知るといふことから起つてくる。それで創造主を愛するにも、その神の仕事を理解しなければならぬといふ所がフロイドはこの主張は正當でない。蓋し愛は情緒で、對手を知るといふことは、その情緒を弱める傾向があるからであると言つて居る。ダ、ヴィンチの主張は、情緒を抑制して、思考作用の次位に置くといふ考で、彼は實際に之を實行した。彼は愛もしないし、又惡みもしなかつた。善にも惡にも無頓着であり、常に平靜を保つて少しも心を擾だすやうなことは無かつた。しかし全くの無感情ではなかつた。即ち凡ての人間のエネルギーを知識慾の衝動に轉用した。この感情

の轉用に基づく固執と平靜とを以て自然現象の研究に没頭した。謂はゞ水車を廻はす水流の様に感情の凡てを研究の方に向けたのである。彼の科學的知識に對する不健全の慾望からして、彼は伊太利に於けるファウストと言はれたが、その發達の點から見るとスピノザにもつとよく似て居る。

彼は自然の描寫を確實にする爲めに、光・色・影・遠景視等の研究をなし、又繪畫の對象物たる動物・植物・人體の鈞合・内部の構造・外部に表はれたる機能等の研究にも興味をもつた。これ等の研究は最初畫家としての用意として初めたのであるが、後には畫家としての必要以上に進み、最後には、その研究の爲めに繪を描くことを全く放棄するに至つた。即ち手段が目的に變化してしまつたのである。

ダ、ヴィンチに見るやうな科學的研究に非常に熱心な興味を有して居るといふことは、特殊の天賦によるといふことをフロイドは許して居る。しかし子供時代に或外界の影響によつてこの傾向が強められたのであるといふこと、及びその傾

向が性慾界からエネルギーの供給を受けたといふことを主張する。科學的研究が性慾界からその勢力を取つて、後には性慾の代理をするといふことは、研究的興味が情的生活の出費に基づいて居ることを示し、その原理は、性慾界に働く勢力が全く性と關係のない目的に使用せらるゝやうに昇華せらるゝことが出来るといふ假定に基づいて居る。フロイドによると性的衝動が他に轉用せらるゝことは日常生活の經驗から見ても疑ふ餘地のないことで、若し幼少の時から性的興味に對する非常に強い好奇心があるとすると、それは成人した後までも尙繼續して、しかも科學的探究の好奇心となり、性慾に就ては無頓着となるものである。只茲に反對の議論があるのは、その性的好奇心が兒童期にあるか否かといふ點であるが、フロイドは此種の好奇心は十分にであると主張するのである。精神分析法によると、性に關する好奇心は既に三歳頃から初まるもので、殊に利口な子供は早くから表はれる。而してこの好奇心は通常弟妹の誕生によりて覺醒せられる。何處

から赤坊が生れてくるかとか、どうして生れるかといふ質問を發して兩親を苦しめることがある。この疑問の解決に就て子供が兩親の回答を以て満足しないで、種々と憶測を逞くし、遂には精神的疾患を惹起すに至ることは既に前章に述べた所である。

二、ダ、ヴィンチの解剖

この幼時に於ける性慾攻究の衝動が、後に抑壓せらるゝに至ると、その結果として後年に於ける攻究心に異つた影響を及ぼすものである。それには三種の型がある。即ち第一の型に屬するものは、攻究の精神が、幼時の性慾と同一の運命に遭遇して全く抑壓せらるゝやうになり、知識慾が禁止せられ、知力の自由活動が制限を被り、殊に青年期に於て宗教思想の禁止が表はれてくる。これは精神病的禁止として知られたる型である。

第二の型に於ては、知的發達が性的抑壓に對抗する丈の力を有つて居り、第一

型に於て見る如く、それと共に抑壓されることはない。幼時の性慾攻究心が無くなり、知力が強くなると、今度は後者が前者を補助として呼び戻すやうにする。即ち抑壓された性的攻究に費すエネルギーは、無意識界から戻つて來て、思考作用を性的化し、知的活動を性的過程の快感と不安とで着色するやうになる。攻究は性的活動の方に向けられ、時として全く性的攻究のみをなすもので、思想に於ける成功の感が實際の性的満足の代りをするのである。

第三の型は最も完全に發達したもので、従つて極めて稀に見る所のものである。性的慾望は前二型の如く抑壓される。しかし全然消滅するやうに抑壓せらるゝのではなく、その衝動は昇華せられて、知識慾となり、研究に對する衝動を一層強烈にするものである。故に此種の人に於ては知的興味が性慾界より昇華されたエネルギーによつて強く鼓舞せらるゝのである。

今ダ、ヴィンチの場合を考へて見るに、一方に性的慾望は抑壓されて、同性的

理想にまで極限され、他方に知識慾が非常に旺盛であるのを見ると、彼は第三型の立派なる代表者である。若し吾人が氏の幼時よりの生立を吟味することが出来たらば、尙更この斷定の確かなことが分かるであらう。所が遺憾なことには氏の傳記の詳細を知るに由ない。只吾人の聞く所によれば、彼は私生子で、母はカタリナといつて農夫の娘であつた。父はビエロ、ダ、ヴィンチと言つて母よりも可なり高等の階級に屬する人であつたらしい。レオナードが五歳の時、他の婦人と結婚したその父と同棲することとなり、學校に入學するまで、父の家に住んで居た。

レオナードの子供時代の出來事に就ては記録に乏しいが、彼自身の書いた備忘録が一つ残つて居る。フロイドは、この手記が精神分析法上非常に大切なもので、これを調べて見ると、彼の幼時の經驗が後半生を規定する重大な一原因となつて居ることが分かると述べ、レオナードの幼時の生活を分析して居る。

ダ、ヴァインチは幼時より兀鷹に非常に興味を有して居た。兀鷹に就ての最初の経験は彼自身の手記によると、彼が尙搖籃に居た際、一羽の兀鷹が飛んで來た。尻尾で彼の口を開き、且つ唇の所を數回つゝいたといふことである。これは極めて不思議な話で、どうも實際にあつたやうにも思はれない。恐らく後に於ける空想の所産で、それを幼少の時代に投射したのに相違ない。これは普通に有り勝ちのことで、幼時の印象は正確に残るものでなく、後年に至りてその缺陷を想像作用で補足するものである。この點に於て個人は種族の發達と相似て居る。種族が未開化の時代には、生存競争の爲めに、惟れ目も足りない位であるが、漸次發達して餘裕が出來てくると、種族の歴史を作らうとする慾望が起る。所が過去の傳説は不完全で、その間に於ける多くの缺陷は當時の願望を以て之を補足する傾向がある。茲に於てこの歴史は全く想像の所産とも云へないし、又眞の事實の記載とも云へない。故に後世の歴史研究家はこの事實と想像とを區別する必要が起つ

てくる。ダ、ヴィンチの兀鷹の物語も全くこれと同一である。この物語も彼の幼時の経験であると考えることが重大な點である。即ちこの所謂幼時の記憶中に極めて重大なる意義が潜んで居る。

精神分析的眼光から之を研究して見ると、この物語は象徴的である。即ちこの物語は色慾的意味を含んで居る。尻尾(Orgel)は伊太利のみならず、他の國でも、男子生殖器の象徴である。物語に於て、彼が受動的なる點も大切なことである。これは同性慾に基づく夢や空想と同一である。物語の材料は、幼時母の胸より食物を得た手段の経験から來て居るに相違ない。これがその物語をして幼年時代に投射した理由である。この想像の裏面には、幼年時代に食物を得たことの記憶が幽かに潜んで居る。後年に於てこの美しい狀景が、子供としての基督とその母の繪の形に於て屢描き出された。この殘渣的記憶が受動的同性的想像の中に包有されて仕舞つた。しかし彼は母の代りに兀鷹を用ひて居る。それは如何なる理由に

よるのであるか。

埃及人の畫いた神聖なる繪畫の中には、母は常に兀鷹の繪を以て表はされて居る。又埃及人の崇拜する女神ムートは、兀鷹の頭を持つてゐるやうに畫いてある。恐らく兀鷹は埃及人に對しては母の象徴であつたに相違ない。蓋し彼等はこの種族の鳥には雌のみが居ると想像し、空中を飛んで居る中に、風が雄の役目をすると思つて居たからである。而してレオナードは、埃及人が兀鷹を以て母を代表するといふことを熟知して居たに相違ない。蓋し彼は多讀の人であり、且亂讀の人であつた。而してミランは書籍と圖書館の中心であつた。又教會の教父はマリヤの處女概念を例示する爲めに屢この兀鷹の話をしたに相違ない。

レオナードは教會でこの話を聞き、自然科学の書籍で兀鷹は雌のみで卵を生むことを讀んだので、後年に於て之を再生する場合に、無意識に之を以て自身の生立と同一視したに相違ない。蓋し彼は父がなくて母のみを有して居たばかりでな

く、幼少の時母の懷で樂しく暮したその快感がこの象徴によつて反響せらるゝからである。處女も子供を生むとの考は、他のものよりも彼の空想をそつたに相違ない。彼の兀鷹を以て母の象徴としたことは、彼が私生子で、父がないといふことを示し、且つ救世主の基督と彼自身を同一視したらしい。殊に彼は最初數年の間は母とのみ住んで居たことが知れて居る。この意味に於て彼は兀鷹の子と言つてよい。茲に於て彼の幼時兀鷹が來て尻尾を口に入れたといふ彼の記憶は十分に説明がつくのである。

子供の頃受けた印象は、深くその根跡を残して、後年に於てその影響を生ずるものである。ダ、ヴィンチの場合に於ても、幼時母と暫らくの間同棲したことが、彼の内的生活に深い影響を與へて居る。彼は幼時他の子供と同じく、子供は何處から生れるか、父は出生に何等の關係がないものか等の疑問に苦しめられたに相違ない。この攻究的態度は、後年に於て彼が兀鷹の飛翔力を研究したこと、密接

な關係を有して居る。

既に述べた通りに、兀鷹の話はレオナードの同性的傾向を表はして居る。しかし兀鷹は女性の象徴であるのに、何故に男性的屬性を有するかといふ疑問が起る。凡そ埃及の女神でも、希臘の女神でも男性と女性との兩方の器官を有して居る。而してレオナードは恐らくこの知識を書籍より得たのであらう。しかし彼が此の意味を幼時の記憶の中に織り込んだのは、如何にして説明せらるゝであらうか。先づ初めに子供の性的生活を述ぶる必要がある。子供は先づ自己の生殖器に非常に興味を有する。而して他の者も自分と同一のものを持つて居るだらうと考へて他の者を見たがる。所が異性のものの例へば女の生殖器を見ると、それが自分と違つて居るので、驚愕且つ嫌惡の情を生じ、青年期に達しても、精神的陰萎となり且つ永久の同性的傾向を生ずる。これは種族の發達にも見らるゝ所で、上古人民の女神にして男性の生殖器を有して居るものがある。即ち子供が母も自分と

同一の生殖器官をもつて居ると考ふるのと相似て居る。レオナードの元鷹の尻尾に就ての觀念も、彼の母は自分と同一の生殖器をもつて居るとの幼時の想像から起つて居る。かくして彼の幼時に考へた性の原理と、後年の同性的傾向との因果的關係が明白になつてくる。かやうな因果關係は、同性的傾向に陥つて居る多くの精神病者を調査すると、尙確實に證明せられる。此等は凡て幼時母に對する愛情が極めて烈しく、母の方でも亦可愛がり過ぎた結果に基づいて居る。殊にレオナードのやうに父のない場合には尙その影響が烈しいものである。而して後年に於て母に對する態度が抑壓され、母と自身とを同一視し、自己を以て理想とし、或はその理想と相似た人物を選定する。斯くして同性的傾向を生ずるのである。

彼の同性的傾向は、幼兒に表はるゝ自己色情にまで沂つて行く。蓋し彼は自分を愛すること、恰も母を愛するやうにしたのである。即ち愛の對象として母の代りに自身を採用したのである。母に對する愛情は抑壓されてしまつたが、それは

尙無意識界に潜在して、彼女に忠實を盡して居る。凡そ同性的傾向は外見上男性によりて刺激されるやうであるが、實際は女性より來た誘因によつて動かされて居るのが多い。但し婦人から受取る刺激を男子から受取るやうに轉移したに過ぎない。従つて同性的傾向に於ける心理的機制に至ては同一である。ダ、グインチも如上の型に屬する同性的傾向を有するもので、只彼は之を昇華したに過ぎない。尤も絶對に昇華して仕舞つたとは言へない。何となれば、自分の學校には奇麗な子供のみを選んで入學せしめたといふことがあるし、二三の生徒の爲めに、品物を買ひ與へた記録が残つて居るからである。彼は自分でのみ分かる記號を用ゐて手控を書いて居るが、それは一見大した事でないやうであるが、精神分析者より見る時は非常に重大なる意義を有して居る。

その記録によると、彼が家庭の收支に就て、極めて細密であつたことを表はすに足るべき、金銭の小さい支出の計算が載つて居る。しかし大きい支出の記録は

ないから、嚴密な意味の經濟家ではなかつたやうである。その記録によると、彼は一人の生徒に外套を新調してやつて居るし、他の生徒には衣服を買つてやつて居る。多數の傳記學者は、之を以て彼の親切に歸して居るけれど、それは正當なる説明と云はれない。彼をして、しかせしめたる情的動機の方を見る必要がある。而してその情的動機を知るの鍵は他の記録の中に存して居る。それは彼がミランを訪問して居る間に死んだ母の葬式に對する出費の記載である。ダ、グインチは研究的方面に彼の感情を向けることに成功し、感情が自由に發露することを禁止した。しかし抑壓された感情は、何かの形を以て機會ある毎に表はれるのは普通である。而して彼が嘗て非常に愛した所の母の死が、彼の感情を再生せしむる機會を與へた。しかしこの強烈ではあるが、無意識となつた感情がそのまま表はれたのでなく、假裝して、この計算帳の記録となつて表はれて居る。蓋し幼時の感情を壓伏した後年の抑壓作用が、もつと價值ある追憶を許さないので、只單に葬式の出

費を記載する位に止めて置いたのである。彼が生徒に衣服を買つてやつた計算を記録する如きも、やはり之と同一の情的動機から起つて居る。

兀鷹の話も亦重大な意義を有して居る。唇の所を尻尾で數回なでたといふことは、母と子との色情的關係を暗示する。即ち母がその子供の唇を、數回接吻したと考ふるのは、あながち附會の説明とは云へない。故に兀鷹の話は、彼が母に抱かれて居る時代の記憶と見るべきである。又彼は幼時の印象をその畫の中に十分に表はすことに成功して居る。ダ、ヴィンチのかいた若い婦人の繪を見たものは、すべて人を引つけるやうな特有の笑を呈して居るに氣がつくであらう。就中モナ、リサの容貌中にその特徴が著しく表はれて通常レオナード型の笑と云はれて居る。普通の解説者は、こんな特有の微笑をしたモデルがあつたのだらうといふけれど、フロイドによるとそれは正當でない。それは幼時に經驗した母の顔の印象が、長い間無意識界に潜んで居たのが、この際表はれ出たのである。その微笑は

母親の微笑であるに相違ないと言つて居る。彼はその後メーリーと基督と共にア
ンナの繪を畫いた。やはりレオナード型の笑顔をして居る。これも亦幼時の經驗
の綜合と見るべきである。即ち五歳の時生母の所を辭して、父の許に行つたが、
そこでは繼母の外に、彼の注意を惹いた祖母をも居た。これが彼に母と祖母との
觀念を暗示した。しかし繪によると祖母は尙若かくて容色が少しも衰へて居ない
のは何故であるか。彼は實際二人の母を有し、一人は彼の近くに、他はその背景に
居た。それが彼の繪に表はれたに相違ない。蓋し生母は繼母よりも少しく年長で、
少し離れた所に住んで居た具合が、恰度繪に於ける祖母のやうであるからであ
る。

他の記録は、父の死んだ日を二ヶ所にまでも記載して居ることである。これは
精神分析者から見ると極めて重要なことである。即ちかやうな反覆は執着現象と
して知られて居るもので、感情が烈しく昂進した爲めに、知力が一時禁止せられ

た結果から起るのである。彼の父は極めて強健な人で、父の不在の爲めに消極的に、又父と同様した爲めに積極的に彼の幼時の性的生活に影響を與へて居る。一般に男兒が母の愛に絆されて、父の身代りにならうとする欲望があることは、既に前章に述べた通りであるが、彼もやはり、父のやうにならうと試みた。尤もその方法に至つては異つて居る。殊に父がその子に對する態度の如きも父と同様に行つた。即ち彼の父が彼を顧みなかつたやうに、彼も繪筆を取る時には子供に就て無頓着であつた。

かやうに父の眞似をしたことが、一方に彼の藝術的成功を沮害したと云ふならば、他方に父の等閑に附したことが、彼をして一大科學者たらしめたと言つてよい。彼の後年に於ける科學的研究の犀利なることゝ不羈なることゝは、主として父の不在によりて引起されたる幼時の性的攻究に原因して居る。精神分析者によると、神の觀念と神に對する信仰とは、父錯綜 (Vater-komplex) と密接なる關係

を有して居ると云はれ、人格的神は心理的には父の擴大されたる觀念に外ならぬいとせられて居る。又自然に對する觀念は母錯綜(Mutter-komplex)によるとせられ、隨つて神と自然とは、父母錯綜の偉大なる昇華の結果であると言はれて居る。ダ、ヴィンチの經歷は最もよくこの傾向を説明して居る。彼は全く宗教的傳統を脱して、自然を崇拜した。自然現象に對する精密なる研究は、彼をして後年に於ける科學的發見の根本を憶測せしめた。彼の宗教は人格的宗教でなく、自然的宗教であつた。宗教の外部的勢力は、彼に取りては何等の意義をも有して居なかつた。

ダ、ヴィンチの全生涯に於ける一大熱望は飛行機を建造して之を操縦することであつた。何故に飛翔することに興味をもつたのであるか。精神分析者は、この欲望は他の欲望を言表はす手段に過ぎないことを發見した。性的行爲は鳥(Vogeln)の字を以て屢々言表はされる。伊太利語で男子の生殖器は亦鳥(uccello)の字で言

表はされて居る。これ等から考へると、飛ばんとする願望は、性的活動を實行することが出来ればとの願望に外ならないやうに見える。これは勿論幼時の願望である。子供は凡て大人たらんことを欲し、又その眞似をしたがるもので、若し子供が大人のするやうな性的行爲を知り、之と同様のことをしたいとの欲望が烈しくなると、飛行する夢を見るものである。故に現代人の飛行に對する熱望は、すべて幼時の色情にその根底があるとフロイドは述べて居る。

三、ワグネルの「さまよへる和蘭人」

マックス、グラーフはフロイドのダ、ヴェンチの解剖に倣つて、ワグネル作の「さまよへる和蘭人」(Fliegenden Holländer)を分析し、ワグネルの幼時の經驗が、後年の音樂並に演劇的作品に深く影響して居るばかりでなく、彼の全生涯に着色と方向とを與へて居ることを主張して居る。

ワグネルの作品中、この「和蘭人」ほど、彼の性格と特質とを知るよすがとなる

ものは外にない。彼の一生涯の歴史・内心の争闘・無意識的願望を反照して居るものは一にこの「和蘭人」である。彼が幼い時この「和蘭人」に關する傳説を聞いて非常に面白いと感じた。蓋しその内容が彼自身の内心の苦悶とよく似通つて居るからである。彼が倫敦と巴里とに航海したこと、及び巴里に於て非常な望みを屬して居たことが一敗地に塗れたことが、この「和蘭人」の物語と自分の境遇とが同一であるとの感を深くし、「和蘭人」てふ名の下に一のオペラを作つて見ようと企てた。そのオペラの大體を書き上げた後で、十日の間に之を詩に直し、七週間の間に音譜を附けた。尤もそれを書き上げようとする前に、詩句と音譜とは既に全く形になつて表はれて居た。

彼は最初その時代の浪漫的歌劇の主旨を全く改めて、彼自身を表出する必要を感じた。その改變の行はるゝ以前の歌劇に於ける三個の主要人物は次の如くである。

貞淑の若い婦人と俊才の一青年とが相互に愛に陥つた。處が超自然的怪力を有する惡魔が來て、その婦人をさらつて行つてしまつた。しかし惡魔の力はほんの一時的で、道徳の力が結局勝利を得、その婦人は愛人の許に歸ることが出來たといふ筋である。

ワグネルは三個の人物に就て、それ等の關係以外のことはすべて改めてしまつた。即ち初めエリックといふ男がゼンタといふ婦人を愛して居た。所が惡魔の呪の爲めに海上をさまよはなければならぬ和蘭人が來るに及んで、そのものを愛するに至つた。而してこの新に來た男を愛するの餘り、その男が恐ろしき運命に惱んでるのを救つてやらうと決心した。やがて和蘭人は偶然のことから彼女の愛が偽りであつたと誤解したので、彼女は自己の貞節を示す爲めに、喜んで生命をも犠牲に供した。この行爲によつて、不幸の男を擒にして居た呪ひが破れて、彼の運命に對する苦闘は終つたといふ風にワグネルは改めて居る。

これがワグネルの凡ての著作の中心主旨である。その主旨が彼の生涯を通じて居たやうである。彼は彼自身の生活を言表はさん爲めに、和蘭人の話を變更して、主要人物の表はるゝ前に、女主人公ゼンタの愛者たるエリックの話を挿入して居る。しかしその和蘭人の性格中にも、ワグネル自身の苦悶を投射して居るやうに見える。ゼンタといふ婦人は、彼の夢幻に表はれた理想的婦人の權化で、彼の最も内部に潜む感情が、その婦人の人物を規定して居る。實際彼の藝術的創作中に表はれる婦人は凡て同一型に屬するものゝみである。即ち孰れの婦人も直接周圍にない或物を想像的に熱望して居る。

彼はオディツシユスやコロンパスを稱揚したけれど、彼自身の經驗をそれに投射する程に至らなかつた。所が和蘭人の話を聞くと、その中に彼自身の生活の反影を見たのである。その主人公が眞の婦人の犠牲によりてのみ救済されることが出來たといふ事實が、ワグネルを感動せしめた點であつたやうである。二十三歳

の時、彼は急いで結婚したが、七ヶ月ばかりたつと、その妻は出て行つてしまつた。後に至りて和解がなり立つたけれど、その時の不和の印象は一生消す由もなかつた。彼が妻と別れる時、彼は一の理想的婦人、即ち達見で自己犠牲的で、且つ死に至るまで忠實であり、その愛情が彼の苦悶を和げるやうな婦人を想像に描いたに相違ない。

ワグネルの生涯と、その作品に於ける此等の苦悶は抑も如何なる原因によるか。この疑問に答ふるには彼の子供時代の經驗を見なければならぬ。彼が六歳の時父が死んだ。母は六ヶ月許り寡婦として暮したが、夫の死後その家族と親しくなつたガイエルといふ畫家であり且つ俳優であつた人と結婚した。ガイエルはこのワグネルに非常に感動した。蓋しワグネルはガイエルの子供であると喜んで信じて居たからである。凡そこの信仰は兒童には全く無意識のものでない。兒童は實父よりもすつと有名な人、例へば王又は神の子であればとの願望をもつて居る。

ゲイテでもペイトーベンでもやはり同様な願望をもつて居た。同様の考は神話や詩の中にも發見される。ワグネルは青年になつてからも、やはりガイエルが父であればいふ願望を捨てず、常に養父の肖像を座右に置くことを好んで居たし、その墓を奇麗に飾り、彼の書信にも如上の口吻が表はれて居た。處が實父に對しては少しもこの種の態度を示さなかつた。彼は又養父の着たやうな衣服をつけ、養父の帽子や外衣を着て居た。此等の願望は抑何に基いて居るかといふに、やはりエディプス錯綜がその土臺となつて居る。子供がその母親に對する態度は多少色情的で、殊に母が餘まりその子を愛し過ぎると、その現象が著しくなるものである。而してこの母との關係は、子供をして父と同一の者になりたいとの欲望を起さしめ、父と競争するやうになる。しかし實際には父に従屬して居るので、茲に於て、父親は一方に競争者であり、他方にその理想人物となるのである。異つた父を迎ふるといふことは、母の不貞操を包含するとは云ひながら、しかしそ

これは又競争者たる父が除去されたことを意味する。之と同時に父の性質を有する理想として、子供は神・王・親王等を選定する。父に對する愛と競争との間の争闘は、眞の父が除去されると同時に鎮まり、之と同時に新しい父に、前の父の性質を與ふるやうになるものである。

幼きエディプスが父と同一にならんとする願望は、遂には父と母との關係のやうな關係を母と結ばうとするやうになるものである。正常の状態に置かれた正常の子供に於ては、この非倫なる願望は抑壓されて、全く消え去るのであるが、之に反して若し子供が早熟であるか、或は母が餘まり可愛がり過ぎるかすると、この色情的衝動が烈しくなつて、父に對する競争とか母に對する非倫の欲望とか起り、往々全く之を打破することの出来ないやうになるものである。勿論抑壓作用なるものが、之を意識界より驅逐するかも知れない。併し其は無意識界に入つて一種の活動力となり、絶えず行爲に影響を及ぼすやうになるものである。

上に述べたことは、恰度このワグネルの場合に見られるやうである。彼が生れて六ヶ月たつと父が死んで、母はその悲しみをまぎらす爲めに、幼き彼を非常に愛した。それで彼はこの状態より脱却することが出来ず、成人して後も常に愛情と名譽とを渴望して居た。朋友の犠牲的精神も彼に取りてさほど有難く思はなかつた。婦人の崇拜者からの名譽と稱賛すら彼を満足するに足らなかつた。子供時代の記憶が異常に鋭く、子供時代の特質が著しく残つて居た。彼の嫌惡と愛情、彼の苦悶と歡喜とは、實に全く子供らしいものであつた。

かやうにして「和蘭人」の主旨は、ワグネルの他の傑作と等しく、子供時代の經驗と空想とから起つて居る。母が餘まり可愛がり過ぎたといふことが、彼をして一生涯母の性格と特質とから脱出することが出来なくならしめた程、彼の幼時の腦裡に浸み込んで仕舞つた。彼の書く女主人公は凡て、その母が所有して居たと彼が想像した所の理想化したる諸特質の權化である。その和蘭人が初めてゼンタ

に逢つた時の言葉は次の如くである。「實に不思議なことには、私の面前に立つて居るこの婦人は、永き以前の記憶から生れたやうに思へる」と。これは、母に就ての記憶がその女主人公の中に這入つてきたといふことを示して居る。

次に繼父のガイエルが父であればいゝがと望んだといふことは、母が彼自身の爲めに競争者たる實父に對して不忠實であつたといふ子供時代の欲望から生じて居る。何となれば彼は自己を以てガイエルと同一視し、且つガイエルに就ての記憶は、凡て彼れ親づからの幼時の空想であつたものをガイエルの屬性として居るのである。彼の競争的態度は、彼の心的生活に強き印象を残し、彼の全生涯が、その態度によりて着色されて居る。又競争關係は彼の書いた孰れの主人公にも殆んど表はれて居る。即ち何時も二人が一人の婦人の愛の競争者となり、その一人が、恰もこの和蘭人の如くその競争に打勝つといふのである。「和蘭人」の元の話には、かやうな競争は起つて居ない。しかしワグネルは和蘭人が来る前に、ゼン

タの愛人としてエリックなるものを造り出した。即ちそれは和蘭人をして、ワグネルの生涯の要求の權化とし、その願望を満足せしむる爲に過ぎない。彼は自己の藝術的作品を以て、現實界に於て満たすことの出来ない願望を實現する手段であると考へて居る。即ち若し人生そのものを完全に暮すことが出来たならば、何等藝術の必要がないと彼は言つて居る。

七、トルストイ伯の生ひ立ち

ハムレットや、ダ、ヴィンチや、ワグネルの解剖の外に、フロイド派の人々によりてなされた、詩人レノーやツインツェンドルフ伯やトルストイ伯の幼時の分析がある。フロイド自身にも尙ゲーテ・ナポレオン・アレキサンダー大帝を解剖する計畫があるさうである。就中ツイツェンドルフ伯の經歷は、昇華作用が最も完全に行はれた適例である爲めに、第八章に於て説明することとし、茲にはトルストイ伯の自叙傳の解剖の概要を紹介しよう。

伯の自叙傳によると、幼い時に母に死に別れ、父にも早く死に別れた。その本の中には、伯が過度に母を慕つたことが隨所に表はれて居る。今その一端を示すと次の如くである。

「もう二度と歸らぬ楽しい／＼幼な時！如何して愛せず想ひ出さずに居られようか。その頃のことを思へば、心が晴々浮き立つて、無上の歡樂の泉となつて來る。走り遊びも飽いた。高椅子にかゝつて茶卓に向つて、砂糖の入つた牛乳を飲んだのももう先刻である。睡氣がして臉が閉づる。しかしそこに坐つたまゝじつと聞いてゐる。如何して聞かずに居られようか。お母さんが誰かと話して居る。それは／＼誠に雅しい聲である。その聲だけでも私の胸にどんなに響くであらうか。寢ぼけてぼんやりした眼で、お母さんの顔を眺めて居ると、顔が忽ち小さく小さくなつて、鉦ぐらゐにしか見えない。私はお母さんがそんなに小さくなつてゐる所を見るのが好きである。尙眼を細くすると、お母さんが、よく瞳子に映つ

て見える小坊主ぐらゐになつた。しかし私が身體を動かしたので、幻影は消えて了つた。」

かやうに顔が小さく見ゆるのは、一方に疲勞の生理的現象に基づくのであるが、又他方に人形化して顔を見るといふ子供の大なる願望である。他の所に伯は次のやうなことを述べて居る。

「お母さんを想起して見ようとすると、常に愛と善とを表はして居つたその鳶色した眼付、生え際より少し下つた處にあつた頸の黒子、白い縫箔した襟飾、冷い軟かな手——それで屢私を撫でた。さうして私はそれを屢接吻した。」

これ等の追憶は、精神分析者の眼から見ると、どうしても幼時の性的愛情の再生と見るより外はない。十一歳の時伯はその父及び兄弟と共にモスコの郊外に引越した。彼は母に分れるのが非常に悲しかつたが、教育上モスコへ行かなければならぬことになつたので、詮方なく父の所に住むやうになつた。そこには祖

母が居た。やがて祖母の誕生日が来たので、其附近の貴族の人々を招き舞踏會を催した。伯は平生の醜男の上に、踊りに馴れない爲めに、色々と笑の種となつた。所が或貴女の手を取つて踊り初めた時、その踊を知らない爲めに棒立ちになつてしまつた。それで父は怒つた聲で「踊れなければおよしなさい」と云つて、伯を押しのけて、父自身でその貴女と踊つた。これを伯は子供心に非常に恥しく思つて居る。即ち

「私はどうしてこんなに酷い目に逢はされたのであらう？ 皆で私を輕蔑して居る。さうして始終私を罵つてゐる。百事——愛、友誼、名譽——を得る道は私には絶たれた。何にもかも失はれた。ワロデア(兄の名)は何故早く皆が見て居ると、私に合圖でとも知らしてくれなかつたのであらう。私に少しも助けを與へてくれなかつたであらう。何故あの嫌やな貴女はまた私の足元などに氣をつけて居たのだらう。何故ソニチカ(招かれた娘の名)——彼女は可愛い娘だが、何故彼女もそ

の時皆と一所になつて笑つたのだらう。何故お父さんは顔を赤めて私の手を抑へたのだらう。私のことを耻かしいとでも思つたのか。何といふ酷い事をしたのだらう。若しお母さんが彼處にゐたならば、大事なニコリンカ(伯をさす)に對して顔を赤めるなどいふことは、お母さんはしなかつたであらう。

かくして伯は又母と共に居た楽しい時代が、幻の如く眼の前に浮んで來て、遂には家の前の芝生の處でも、庭の木の下でも、散歩をしても、鳥の囀りをきいても、天の光を見ても凡て母のことがあり／＼と表はれて來たといふことである。かやうに彼が母を慕ふことは性的に相違なく、又父に對して怒る所は、エディプス錯綜に於ける父に對する反抗と相似て居る。

精神分析者に取つて尙一つ興味のある點は伯の十歳の時の夢である。伯は嘗て家庭教師に向つて母の死んだ夢を見たと言げた。家庭教師は伯を慰めてくれたが、伯はその夢を實際に見ないのを見たかやうに言つたやうである。尤も彼れ

は實際それを見たかどうか言ふことが出来なかつた。恐らくそれは他に動機があつたに相違ない。而して伯は自分が出鱈目に作り出した陰氣な思想に就て恐ろしくなつた。或朝彼は家庭教師が蠅を打つてる音によつて、不愉快な空想から覺めた。彼は家庭教師は實にいやな人だと思つた。しかし「サーなまけ者起きなさい、もう時間です」といひながら伯の足裏を擦つた。その時伯は「まゝ親切な人だ。どの位自分を可愛がつて居るんだらう。しかしどういふ譯で擦つたんだらう」と考へたといふことである。その後衣物の下に頭を埋め、眼は涙を以て滿され、「どうか獨りで置いておくれ」と家庭教師に乞うた。家庭教師は吃驚した風で、蹠をくすぐるのを止めて、「何か悪い夢でも見たのですか」と尋ねた。伯は何にも夢を見ないし、又この同情ある言葉をかけられたので、數分前彼を厭な奴だと思つたことを耻しく思つた。この時伯は實際母のことを考へて居り、且つ家庭教師と比較して居たのである。かやうに伯の幼時の經驗には母が何時もその中心となつ

て居るやうである。

サドガーによりて分析された詩人レノーも亦トルストイの如く母に非常に可愛がられ、且つレノーの方でも母の印象が一生を通じてその念頭を去らなかつた。

彼が幼時の家庭生活の條件と同一の條件が備はらなければ、如何なる婦人をも愛することが出来なかつた。ペルサとの愛も、ソフィーとの愛もさうである。凡てこれ等の婦人は母と同一の型に屬するもので、それによりて母を思ひ出すことの出る婦人でなければならなかつた。換言すれば他の婦人を愛するのは、假裝したる母を愛するに過ぎなかつたのである。それで精神分析者は母の勢力の如何に偉大なるかを述べると同時に、母が餘まり可愛がり過ぎるのは往々弊害の伴ふことを警めて居る。

第六章 忘却と誤謬

普通「忘れる」といふことは、その事柄に就ての印象を心に取り入れる場合に、明瞭に取り入れなかつたといふことに歸して居る。例へば記憶する事柄が餘り本人に興味がないか、又は忙しい爲めに、充分その事柄に注意することが出来なかつた爲めに、永く心に残らないことがある。しかし此等の普通に見る忘却以外に、その忘れ方がいかにも偶然的で、どうして忘れたか説明のつかない場合がある。世人は之を「つい忘れた」といふ言葉で葬つて居るが、精神分析者の目から見ると、その「つい忘れた」理由が、ちやんと明白になつてくる。この「つい忘れた」といふ中には、二種類ある。(一) 覺えた事柄が思ひ出せない場合と、(二) 實行しようとして計畫したことを忘れて實行しなかつた場合とである。しかしこの忘却に伴つて、(三) 他の事柄を間違つて思ひ出した場合と、(四) 間違つて實行した場合と

が起つてくる。

一、固有名詞の忘却

フロイドは嘗て部下の一醫員が、その下に使用して居た一看護婦の名が憶ひ出せないで困つて居たことに就て精神分析を試みた。その醫員は毎日その看護婦と顔を合すので、互に親しくなり、お互に姓を呼んで話をして居た。しかし名の方を呼んで話すことはしなかつた。この看護婦がその醫員の下に働くやうになつてから、一年有餘を経過したが、或日醫員はその看護婦に手紙を送つて、至急或用事を頼まなければならぬことが出来た。彼は手紙を書いて、それを封筒に入れ、表面に町名番地を記入したけれど、その姓がどうしても思ひ出せない。但し名前だけは思ひ出せた。日頃お互に呼び馴れた姓が思ひ出せないのは誠に不思議である。一生懸命に三週間ばかりも考へたけれど、やはり姓を思ひ出すことが出来なかつた。フロイドはこの事實を聞いて、早速同醫員の精神分析を試みたのである。

先づその醫員の平生を尋ねると、彼はその看護婦を呼ぶに常にその姓を用ゐて居た。しかしその看護婦から時々手紙を貰ふが、その時にはその看護婦は只名をかくだけで、姓を書いた事がない。しかし醫員が時々看護婦に手紙を送る場合には、その看護婦の姓名を正しく書いてゐたことが分かつた。所が今度の手紙だけが、その姓を思ひ出すことが出来ない。それでフロイドは、その醫員をして、看護婦の名から聯想される事柄を言はしめ、その一々に就て、該醫員との關係を取調べた。所が醫員の秘密が暴露して來て、姓を忘れた理由はその秘密に基いて居ることが分つた。即ち該醫員の聯想中に、姓の異つて名の同一である三人の女の名前があつた。その一つは前記の看護婦の名で、その二は該醫員の幼きな友達で、今尙親しくして居る婦人の名である。その三は該醫員が深き戀に陥つて居る婦人の名であつた。この三人の名は凡て同一で、只姓のみが互に違つて居た。而してこの最後の婦人の姓名は、該醫員が寸時も忘るゝことの出来ないもので、その名

を聞いて他の姓を思ひ出すことすら不快に感じて居た位であつた。若し彼がその名から他の姓を聯想したならば、自分の愛情が變じた印であると、心の奥で識らず／＼に考へて居た。毎日顔を見合せてその姓を言ひ馴れて居た看護婦の姓が忘られたのは、こんな秘密から起つたのである。換言すればその姓は烈しい情緒に伴ふ抑壓作用の働きでその姓が意識下に押込められ、つい思ひ出せなかつたのである。

ユングは又次のやうな一例を擧げて居る。Yと云ふ男は一婦人と愛に陥つて居たが、その後その婦人はXといふ男と結婚した。このYとXとは、古くからの知り合ひで、且つ商業上の關係から、時々手紙をやり取りしなければならなかつた。處がYはよくXの名前を忘れ、Xに手紙を書く時は屢Xの名を他の者に聞かなければならなかつたといふことである。この忘却の原因は言ふまでもなく、戀の競争者たるXのことを思ひ出したいとの無意識的慾望から、抑壓されてゐたの

である。

フロイドが嘗てライヘンハル停車場で、次ぎの大きい驛までの切符を買はうとしたが、どうしてもその驛名を思ひ出すことが出来なかつた。勿論氏は度々その驛を通つたことがあるから、知つて居る筈である。氏は詮方なく時間表を調べてその驛名を知つた。その名は Rosenheim である。氏は如何なる聯想からしてその名を忘れたかを直に發見した。即ち一時間前に氏はライヘンハルの姉の家を訪問した。而してその姉の名は Rose であるから、即ち Rosenheim (ローズの住宅) となるのである。それで停車場の名が氏の記憶から脱落した。氏はかやうに固有名詞の忘却が家族の關係からして、生ずる場合を「家族錯綜」によると言つて居るが、又職業の關係から起る、即ち「職業錯綜」に基く忘却に就ても、氏自身の例を擧げて居る。即ち一患者が避暑地の事を話して居る際に、世人のよく知れる二個所の旅館の外に第三の旅館のことを述べた。それで氏はその第三の旅館のことは少

しも知らない。自分は七回もそこへ避暑に行つたから、患者よりもよく知つて居る筈であると否定した。處がその患者は第三の旅館があることを固持し、その名はホッフワルトネルであると言つた。かやうに名を言はれて見ると、その旅館の存在を肯定せずに居られなかつた。實際氏は七回の避暑の際その旅館の近くに住んで居た。然らば何故にその名を氏が忘れたかといふに、氏と同じやうな専門を業として居る、ジンナの同業者の一人の名前が、その旅館の發音と非常によく似て居るからである。謂はゞ「職業錯綜」に基いて忘却したのであると氏は説明して居る。

二、語句の忘却

詩や文章を暗記して、之を再生する場合に、その語を變じたり、ぬかしたりすることは普通に起る事柄である。しかしその忘れるといふことは、暗記した凡ての事柄に影響するものでなく、往々一定の部分だけが影響を受くることがある。

何故に一定の部分が特に選定されるかといふことは、精神分析を行つて見ると、不可思議の原因がその間に潜在して居ることが分かる。プリルは次のやうな例を擧げて居る。

或日大變に伶俐な若い婦人と話をして居た時、彼女は偶キーツの詩中「ホーム
ーへの歌」の數行を引用した。即ち

In thy western house of gold

Where thou livest in thy state,

Bards, that once sublimely told

Prosaic truths that came too late.

彼女はこれを言ふのに數回繰返した。それは最後の行に何か間違があるやうに思へた。本を出して、それを比べて見た所が、最後の行ばかりでなく、他の場所にも間違があることを發見した。キーツの書いた原句は次の通りである。

In the western halls of gold

When thou sittest in thy state,

Bards, that erst sublimely told

Heroic deeds and sang of fate;

前記の行中イタリックに書いた所だけが、忘られて他の語を以て置き換へられた部分である。彼女は非常に驚き、それを以て記憶の不完全に歸してしまつた。それでブリルは彼女に向つて、この誤りは決して記憶の性質又は分量に於ける障害でないといふことを述べ、この詩を引用する以前に彼女と話して居たことを思ひ出すやうに命じた。彼女とブリルとの會話は主として、愛人の人格を評價する場合に、往々高くみつもり過ぎるといふことであつた。彼女がいふには、たしかピクトル、ユーゴのいつた言葉だつたと思ふが、愛は世界に於ける最大のものである。何となれば、雜貨店の店員でも天使にしたり、神にしたりする力がある

からであると言つて居る。實際その通りに、吾々が愛に陥つて居る時はかりが、人道に於ける盲目的信仰を有するものである。如何なるものも完全で、美麗で、……詩的に非實在である。その結果として多くは恐ろしい失望が來るに拘はらず、徹底的に進まうとする。吾人は神と同格になり、凡ての藝術的活動をするやうに吾人を鼓舞するものである。吾人は眞の詩人となり、詩を記憶する計りでなく、之を引用し、且つ屢アポロその者となつてしまふ。かやうに彼女は話をした後、茲に掲げた詩を引用したのである。

それでブリルはどんな時にその詩を暗記したかを尋ねた所が、彼女の在學中、話方の先生が常に澤山の詩を暗記させたので、何時このキーツの詩を暗記したか思ひ出すことが出來ないと言つた。ブリルは彼女との會話から判斷すると、この詩は彼女が愛に陥つた人を餘まり評價し過ぎたことゝ直接に聯關して居ると思ふと述べ、「あなたはこんな場合にその詩を暗記したでせう」と尋ねた。彼女は暫ら

くの間考へた後に次のやうなことを物語つた。即ち十二年以前、彼女が十八歳の時愛に陥つた。彼女は素人芝居に出演して居た際に一人の青年に逢つた。その男はその際舞臺のことを研究して居たが、他日マティネの愛重者たらんと囑目されて居た。彼はかやうな職業に必要な凡ての屬性を賦與されて居た。身體の恰好がよく、人を引きつける所があり、大變に利口で、衝動的で、移り氣の多い青年であつた。彼女は最初その青年に對して警戒されて居たが、しかしその警戒を少しも顧慮する所なく、それは、多分助言者の嫉妬から起つた忠告であらう位に考へて居た。數ヶ月の間は別に何事も起らなかつたが、一日、彼女がその爲めに詩を暗記した、アボロなる件の青年から、富有の一婦人と結婚する爲めに駈落ちしたといふ手紙を受取つた。數年を経てからその男は、妻の父の財産を管理する爲めに西部の町に住んで居るといふことを聞いたと彼女は話した。

茲に於て詩の引用の誤りは委細明白になつた。愛人を餘まり評價し過ぎるとい

ふやうな議論は、彼女に不愉快な経験を憶ひ出させる種となるのである。蓋し彼自身に評價し過ぎた経験があるからである。即ち彼女はその青年を神と同一視して居た所が、却て平均の人間以下のものであつた。かやうに不快で苦痛な経験は思ひ出したくないといふ無意識的作用によつて、それが意識面から排斥されるものである。彼女の経験もやはり、それと聯關した不快の感情の爲めに抑壓されて居るが、しかし彼女が無意識に誤つて言つた詩句の中に、明かに彼女の現在の状態を言ひ表はして居る。

三、言ひ損ひ

言ひ損ひに就ては、言語學や音韻學又は心理學の方面から、研究せられたものが多い。しかしフロイドは偶然の出來事として、從來はこれ等の方面から閑却されて居た言ひ損ひに就て、精神分析を試みた。所がその言ひ損ひの原因は、外部の或る障害、例へば音の接觸の具合によるといふ外に、内部的にその原因が存在して

居る場合がある。即ち無意識界に潜む或思想が、發音運動を抑制して居る場合があるといふことを發見した。

ブリルによると、一婦人が、子供の發明した遊戯のことを話して居た際、その遊戯の名を *the man in the box* と云ふが、*the manx in the boe* と書いた。その間違ひの原因は次の如くである。彼女は一夜彼女の夫が金錢の事に極めて大様であるといふ夢を見た。所が實際は夢と全く反對で、金錢に就て極めて細かい男である。而して前記の言ひ損ひは、この夢を分析しつゝあつた際に表はれたものである。この夢を見た前日この婦人は夫に向つて、一揃の毛皮を新調してくれるやうに求めた所が、その夫は、そんなものに多額の金を費すことは出来ないと言つて拒絶した。それで該婦人は夫が吝嗇で、堅固な箱の中にそんなに澤山金をためこむことを非難し、且友人の夫は収入の多くないに拘らず、誕生日に水獺 (mink) の外套を作つてやつた話をした。茲に於て該婦人の言ひ損ひは明白になつた。即

ち言ひ損つた *hank* は發音上 *mank* となり、それは彼女が熱望して居る *mink* と相似た音である。而して箱は彼女の夫の吝嗇に關係して居る。

一患者がブリルに電話をかけて、診察を受けたいが何時伺つていゝかを尋ね、且つ初診にはいくらも拂ひすることになつてゐるかを尋ねた。それで彼はその患者に向つて、初診には十弗拂ふことになつて居ると答へた。やがてその男が來て、診察を受けたが、又重ねていくら拂はねばならぬかを尋ね、且つ附言していふには、「私は他の人に借金することが大嫌ひです。殊にお醫者には直ぐに拂ふことにして居ます」と。このとき *pay* (支拂ふ) といふべきを *play* (欺く) と言ひ誤つた。この言誤りが、ブリルの注意を惹いたが、患者はその後二言三言云つた後、極めて平氣な風で財布を取り出し、紙幣を勘定した。所が四枚しかないので、非常に驚き且つ困つたといふ風をして、「これきりしか金がありませんが、不足の分は小切手にしてすぐに郵送します」と言つて立去つた。ブリルは患者の言損ひはその

心底を裏切つて居り、彼がブリルを欺きつゝ、(playing)あるといふことを確知して居たけれど、別になすべき術もなく、宜しいといつて返してやつた。數週経つてからブリルは勘定書を彼に送つてやつた所が、それは本人の居明不明といふ附箋が附いて郵便局から戻つて來た。

二人の婦人が藥種屋の前に立止まつて、一人が他の者にいふのには「若しあなたが暫らく(a few moments)お待ち下さいませれば、すぐかへつて參ります」といつた。その時 moments (瞬間)といふべきを movements (通じ)と言つてしまつた。蓋しその婦人は、子供に下劑を買つてやる爲めに、藥種屋の中にはひつて行つたのである。

ブリルは患者の眞の名はジェームス夫人であるのに、結婚した娘の名であるミス夫人と屢言ひ誤た。それで何故であるかを注意して見たら、ジェームス夫人と同じ名前で手術代を支拂ふことを拒んだ一患者が居たことを發見した。而してス

ミス夫人も私の患者であるが、いつも滞りなく薬代を拂つて居た。かやうにしてブリルの間違は、不快な人の名前を言ひたくないといふ抑壓作用に基いて居たことが分つた。

他人の姓名を故意に間違つていふことは、その人を侮辱することを意味するが、無意識に言ひ誤つた場合も、往々心の奥底に侮辱して居ることから起ることがある。マイヤーの報告によると、或人がフロイドの説を話す時に、フロイデルといつた。尤もその少し前にプロイエルと言つたのである。所が少し立つと、今度はプロイエル及フロイドの方法といふべきを、フロイエル及びフロイドの方法と言ひ誤つた。その人を調べて見ると、此の方法に餘まり熱心な人でないといふことが分かつた。

人の名を云ふ場合に、他の名前をいふことがあるが、それは前例と異つて、その人を尊崇する爲めに起ることが多い。フェレンツィの學校時代の記憶によ

ると、氏がカレ、ヂの第一年級に居た頃、全學級の學生の前で詩の暗誦をしなければならなかつた。氏が暗誦を初むるや否や、一同がどつと笑つた。氏はその何故なるかを知らなかつたが、後で一教授の説明によると、氏は最初詩の題の From the Distance をいふまでは正しかつたが、その後その作者の名前をいふ時に、氏自身の名前を言つたさうである。蓋しその作者の名は Alexander Petöf で、氏の名の初めが Alexander である爲めに、言ひ誤つたのである。しかしその言ひ損つた眞の理由は、氏自身をこの有名なる詩人と同一視した爲めである。意識的にも、氏はその詩人を大に尊敬して居たので、所謂「大望錯綜」がこの誤謬を惹起したのである。フロイドによると、ある若い醫者が自己紹介の場合に「私はドクトル、ヴィルヒ、ウです」といつたと云ふ大望錯綜の例を擧げて居る。

言ひ損ひには往々自己批評即ち心内の秘密を洩らすまいと努むる爲めに起る場合がある。所が意識には秘密にして居ると思つて居ても、無意識に内心の秘密が

裏切つて暴露せられるのである。前に述べた一患者が *paty* (支拂ふ) と *play* (欺く) とを間違つて言つたのはその一例である。これと同じ様な例をブリンは述べて居る。即ち一婦人に手術した後處方箋を書いて居ると、その患者が突然「どうか *big pills* (大きい支拂書) を下さいますな、飲みにくいですから」と言つた。勿論彼女は *big pills* (大きい丸薬) といふ積りであつたのである。

オットー、ランクは次のやうなことを報告して居る。或處に一人の父が居て、その人は凡ての愛國的感情に缺け、又その子供を教育するにもかやうな表面的感情から免かれるやうに努めて居た。従つてその息子が愛國的示威運動に加はることを非難し、伯父の例を引合ひに出して云ふには、「あの人の眞似をするやうになつてはならない。あの人は馬鹿 (*idiot*) だからね」と。平生に似合はない父の言葉をきいて子供等はびつくりしたやうな顔をした。子供等のげんな顔を見て父は自分の言ひ損ひに氣が付き、「勿論私は愛國者 (*patriot*) といふ積りだつた」と苦し

い辯解をした。此等の言ひ損ひは、音の類似より起るとか、原音が悪く變化したとか、又は壓縮されたとか等によりては説明がつかかねる。やはり心中に潜んで居た思想が、不知不識の間に外部に表はれ出たといふより外にその原因を求むることが出来ない。

四、読み損ひ

言ひ損ひの原理は又読み損ひの場合に應用することが出来る。フロイドは嘗てライプチッヒ畫報を横から見た所が、表紙の繪に「オヂッゼー (Otzsee)」に於ける結婚式」といふ題があるので、大に不思議に思つて、その畫報を眞直にして見た。所が「オストゼー (Ostsee) バルチック海」に於ける結婚式」といふのであつた。それで氏は何故にこんな間違を起したかを早速分析して見た。氏の思想は直ちにルートの「音樂的幻想に關する實驗的研究」の方に向いた。蓋しこの本は氏の最も興味とする心理問題と關係して居るので、當時この本のこと念頭を去らないで

居た。その本の中に著者は近い中に「夢の現象の分析と原理」といふ本を出版する旨を豫告して居る。而してフロイドはこの時「夢の解釋」を出版したばかりなので、この豫告の出るのを大なる興味を以て待つて居た。このルートの音樂的幻想に關する著書の中に、昔時のヘレニック神話と傳説は、主として音樂的幻想・夢の現象・又は譫妄状態から起つたものであるといふことを歸納的に證明した内容の目次があつた。それで氏はナウシカの前にオデッシーの表はれた光景が、普通の裸體の夢に基づいて居るといふことを該著者が氣付いて居るか否かを見ようと、その本に没頭した。氏の一友人は嘗てケラーのかいた *Grünen Heinrich* の中に、故國を離れてさまよつて居る水夫の夢の客觀的表現が、オデッシー中の挿話であるといふ説明のあることを氏に注意した。氏は氏の著書「夢の解釋」中にこのことが自己露出の夢に關聯して居ることを説明した、所がルートの本の中に少しもこの事がない。それでこの考へ方に付ては明かに氏が先驅者であると思つた

といふことである。

ブリルによると、子供を持ちたいと豫ねて熱望して居た一婦人は、常に *stork* といふ字を *storks* (鶴のこと) で一般に子供をつれてくると云はれて居る。) と讀んだといふことである。

フロイドは又次のやうな例を擧げて居る。或日氏は悲しむべき出来事を知らして来た手紙を受取つた。直ちに妻を呼んで、その手紙を見せながら可愛さうに *My* 夫人が重病に罹つて、醫者から見はなされて居ると書いてあると言つた。

妻は不思議に思つて、その手紙を取り上げて讀んだ所が、氏のいふやうなことは見出すことが出来なかつた。而して氏に向つて言ふには、誰れも妻のことを夫の名でいふものはない。殊に妻の實名がよく知れて居る場合には、通信文にはその實名を書くのが例であると、それに對して氏は訪問する時の名刺には、夫の實名を書くではないかと頑固に辯護した。しかししもやと思つても一度見直した處が、可

愛相に Dr. W. M. J. がと書いてあつた。而してこの讀み誤りは悲しい知らせを男子より婦人へ移さうとする一時的の努力に基いて居るといふことが分かつた。即ち可愛相といふ形容詞と、實名との間の稱號が、婦人を意味して居るに相違ないとの氏の要求の爲めに、間違つて見えてしまつたのである。勿論これは婦人に對する氏の同情が男子に對するそれよりも少ないといふ意味でない。しかし氏の近親の者に、この男と同じ病氣に罹つて居るものがあるので、この男の運命が烈しく氏の恐怖心をそゝつたのである。

五、書き損ひ

フロイドが嘗て神経病學及精神病學に關する年報に寄稿した校正刷を受取つた。氏は平常から著者の名前、殊にそれが外國人である場合には特別の注意を拂つて居た。この校正刷の中にも奇妙な著者の名前が幾つかあつて、校正しなければならなかつたが、不思議なことには、植字人が氏の書いた原稿の名前を只一

つ訂正して居るのを発見した。それは氏が Buchhard と書いたのを、植字人は Buchhard であらうと考へて訂正した。この著者は産科醫で、『幼兒の麻痺の起源に對する出産の影響』といふ論文を書いて居る。フロイドはその論文を推賞し、且つその人に對して何等の敵意を有して居ないのに、どうして名前を書きちがへたのであるか。よく調べて見ると、ヴィンナの町に、フロイドの夢の説を烈しく攻撃して、氏をして立腹せしめた一人の著者がある。これが、この産科醫と同じ名前であることを発見した。之によつて見ると、産科醫を意味する Buchhard といふ名前を書いて居る間に、他の Buchhard に連聯して居る不快の思想が、突然闖入して來て、書寫を誤らしめたのである。

一婦人はその姉が新たに大きい住宅を手に入れたといふことを祝ふ爲めに、手紙を姉に出した。丁度その時友人が側に居たが、その婦人が名宛を間違つて書いたといふことを注意した。殊に不思議なことには、普通に誤るやうに、姉の以前

の宿所に宛てて書いたのではなく、ずっと以前に姉が最初にかたづいた先の宿所であつた。友人が注意した時その婦人は「御尤です。しかしどうしてこんな間違をしたんでせう」と云つた。その友人が云ふには、「恐らくあなたは姉が新に大きい家を求めたのを羨んで居るんでせう。あなたはまだこんな狭い所に居なければならぬし、若しお姉さんが最初の家にお歸りになれば、あなたと同じ位な暮しをなさるからでせう」と。「勿論姉の新しい家が羨しいんです」とその婦人は正直に言つた。そして暫らく考へた後「人がこんなことにつまらない考を起すのは可愛想ですわね」と附言した。

ジョーンズは次のやうなことを報告して居る。それは一患者がブリルに宛てた手紙である。その患者は自己の神經質を、綿花の恐慌を來した時の商業上の煩悶から起つて居るとし、常に口癖のやうに「私の病氣は寒い海水に原因して居ます。新しい收穫を得るに要する種子が一つもありません」と云ひ、又綿花の收穫を臺

なしにしたのは、この寒い海水の爲めであるとして居る。所がこの寒い海水 (Frigid wave) と書く、*ハム*を冷やかな妻 (Frigid wife) とかいて居る。これはその男の心の奥に潜んで居る所の、子を産まな *S* (Frigidity) 妻に對する非難が、外部にその一端を表はしたのである。

書き落すといふことも、書き違ひと同じ原理によつて説明が出来る場合がある。ブリルは次のやうなことを言つて居る。一患者が氏に診察を受けたいから、何時伺つていゝかを手紙で尋ねて來、一定の日を面會日と決めた。處がその日になりて、患者から豫期した (forseen) 事情が出來て行かれないといふ詫の手紙が來た。それは豫期しない (unforseen) 事情が出來たと書くつもりであつたに相違ない。二三ヶ月經つてからその患者が來て、精神分析を行ふに當り、その患者の云ふには、過日約束して何はなかつたのは、何にも豫期しない事情があつたのではなく、友人から行かない方がいゝと忠告されて中止したのであると。之に由つて見ると無

意識界には決して虚言がないといふことが分かる。

六、置き忘れ

人に見せてはならないとか、大切であるからうつかりした所に置いてはならぬとか、見るも嫌やだからそこらあたりで置きたくないとか、あつまらないものであるとか心に思つたものは勿論、少しでもかゝる思ひが無意識的に作用すると、品物を一定の所に置きながら、その場所を忘るゝことが多い。

一青年がフロイドに次のやうなことを物語つた。數年前私は妻との間に誤解を生じた。彼女は餘まり冷淡過ぎると思つた。勿論彼女の優れた性質を尊重しては居たが、相互に何れの傾向をも明かにしないで一處に住んで居た。或日妻が散歩からかへつて來た時に、私に一冊の本を買つてきてくれた。恐らく私がその本に興味があるだらうと考へたのである。妻の氣付に對して禮を述べ、その中その本を讀まうと約束し、それを側にやつたが、それ以後その本を見出すことが出來な

かつた。數ヶ月の間は時々なくなつた本のことを思ひ出したけれど、どうしても見つからなかつた。六ヶ月許りの後、別居して居た母が病氣であるとの通知を得た。妻はその病母を看護する爲めに家を出立した。患者の状態は危険になつたが、しかしその看護が妻の良い性質の方面を私に示す機會となつた。一夜私は家に歸りて、妻の熱心な看護に心から感謝した。机の所に座つて、何といふ目論見もなく、恰も睡遊状態にあるかのやうに、或る引出しの所に行つて、その中を見た處が、その上の方に、永い間なくなつて居た本がありました」と。

ブリルによると、一人の男が、餘まり興味のない社交上の會に出席するやうに妻から勧められた。それで詮方なく、トランクから禮服を取り出さうとした時に、突然鬚を剃らなければならぬことに氣がついた。これを濟ました後、トランクの所に歸つて來た所が、鍵がかゝつて居た。永い間熱心にその鍵をさがしたけれど見つからなかつた。鍵鍛工は日曜日には休業して居るので、そこで求める譯にも

行かず、遂に遺憾ながら出席が出来ないと断り状を出すより外に仕様はなかつた。翌日になつてそのトランクをあけた處が、なくなつて居た鍵が見つかつた。その男は無意識にそのトランクをあけて、鍵をその中に落とし、後で錠をおろしてしまつたのである。勿論この行爲は故意に行つたのでないが、しかしその會に行くことを好まなかつたことは事實であると、その男は確言した。故にこの鍵を置き誤つたのは、決して何等の動機がなかつたとは言へない。

ジョーンズ自身の経験談によると、煙草を飲み過ぎて苦しむ間は、何時でも煙管を置き忘れる習慣がある。而してその煙管は平常滅多に置いたことのない所で発見されるのが常であるといつて居る。これ等の事實から考へると、置き忘れたり、置き誤つたりすることは、何等の無意識的意向がなくして起るといふことを假定するのは困難であるやうである。

七、實行の忘却

ジョーンスは自己の經驗談を次のやうに述べて居る。氏が未だ或病院の醫員で居た時、非常な失敗をしたことがある。その病院は院長が全權を握つてゐて、その下に各科の専門の醫局があつた。醫局には局長と助手とが居た。而してジョーンスはその助手を勤めて居たのである。この病院では、患者の受持及び診察を豫め院長が各週の始めに各醫員に分配しておくので、若し受持の人に差支があつて、他の人に依頼するやうな時は、その理由を陳べて院長の許可を得ることになつて居る。氏が失敗をした週間の役割も、例の如く院長がその週の始めに定めた。而してジョーンスは金曜日の午後何時にAといふ患者を診察することを命ぜられた。その上に種々の都合上、A患者の診察は、時と日とを變更してはいけなはいふことになつて居た。ジョーンスはこの命令を忘れないやうにと、氣をつけて時々思ひ出したりなどしてゐた。しかし實はあまり氣に入つた診察と思つて居なかつた。その翌日醫局長が氏を呼んで次のやうな事を依頼した。即ち醫局長は來

る金曜に或宴會があるので、義理上是非出席しなければならぬ。所が金曜日には、一人の患者の診察を院長から命ぜられて居る。その患者はBと言つて、病症も非常に面白い。しかし種々の都合上金曜日の午後何時に診察しなければならぬことになつて居て、時間を變更することが出来ない。しかしその患者は院外で、往つて診察しなければならぬ。若しジョーンズが代つて往診してくれるならば、醫局長は病院を缺勤してかの宴會の方に行くことが出来るから、どうか承諾してはくれまいか。その上に醫局長は、缺勤することや代理診察のことを院長に願ふのも嫌ひなので、規則違反ではあるが、内密に代理診察をやつて貰ひたい。勿論手續をすると非常に面倒だから、ジョーンズが診察すれば、診斷の方では、醫局長でもジョーンズでも同一であるから、便宜一寸代理して貰ひたい。又代理したとて診察だけすれば、別に院長に知れることもないからといふことを附け加へて依頼したのである。手續をして院長へ願ひ出せば、AとBとの兩患者の診察は、時日が

何れも同一であるから、ジョーンスは往診に行くことが出来ぬと知れるのであつたのに、氏は心安づくに、一寸金曜日の仕事を考へて見たが、A患者の診察のことを全く忘れてゐたので、醫局長の依頼に應じてしまつた。その後氏は時々A患者の診察のことを思ひ出し、又B患者の診察のことをも思ひ出した。しかし一度もA、B両患者の診察を同時に思ひ出したことはなかつた。即ちAの方を思ひ出す時には、Bの方のことは全く忘れて居たし、又Bの方を思ひ出す時には、Aのことはすつかり忘れて居た。而して思ひ出す度毎に、大切な要事だから忘れないやうにと決心はして居たが、兩方一處に思ひ出さない爲めに、時間の衝突があると云ふことに少しも氣が付かなかつた。やがて金曜日の午後となつた。ジョーンスはA患者のことを全く忘れて、B患者の方へ往診に出かけた。診察をすまして病院へ歸つてくると、小使が急を告げに來た。小使の言によると、ジョーンスは院務を等閑に附し、命令されたA患者の診察を怠つた。でジョーンスは勿論のこと、

その取締をなすべき醫局長も不都合であるといふので、病院長は大に腹を立て、居る。それが基になつて、醫局長が當日缺勤して他の會に出席したことも知れ、院の規則を破つたことも知れたので、重ね／＼の不心得であるとして、直ぐ醫局長を連れてくるやうに呼びに行けとの命令であると氏に知らせた。茲に於てジロースは始めてA患者の診察のことを思ひ出し、困つたことを仕出かしたと、大に當惑したといふことである。

八、實行の誤謬

實行の誤謬には最初から無意識に間違つた行爲をする場合と、豫期して行つた行爲が豫期通りに行はれなかつた場合とがある。しかし此等も前に述べた數多の例と同一原理の下に立つものである。フェレンツィがフロイドに告げた例によると、偶然拳銃で怪我をしたものがあるが、その前後の状態を分析して見ると、その男は無意識に自殺を企てたことが明了であるといふことである。而してフロ

イドはフェレンツィの斷言に賛成を表して居るが、今その話の梗概を述ぶると次の如くである。

「二十二歳になる一大工が千九百八年一月十八日に私（フェレンツィをさす）の所を尋ねて來た。その男は千九百七年三月二十日に顛顛の處に貫通した小銃彈を手術によりて取つてもらいたひと言つて來た。あまり烈しくはないが時々頭痛がするだけで、その外は何ともないと言つた。客觀的診斷によると、左の顛顛の所に火藥の傷口以外にもないから、私は手術をしない方がいゝと言つた。どうして怪我したかを尋ねた所が、偶然の出來事であつたと、次のやうなことを話した。即ち彼が兄弟の拳銃を玩具にして居たが、裝藥してないと思つて、左の手でその拳銃を左の顛顛の方へ押へながら引金を引いた。所が突然發射した。それは六連發であつたが三發だけ裝充してあつた。それで私は彼がどうしてその拳銃を持つて來たかを尋ねた。彼は答へていふに、恰度その時徴兵検査のある時で、彼

は争ひがあるかも知れんと恐るゝ餘まり、その前晚拳銃を携へて旅館に宿つた。検査の結果、靜脈腫の爲めに不合格となつた。それで家に歸つて拳銃をいぢくつて居た。勿論彼は自身を傷けるつもりではなかつたけれど、偶然怪我をしたと。私は種々その男の事情を聞いたが、別に財産上の苦勞はないやうである。只彼は一人の婦人と愛情關係を結んだが、只貪慾の爲めに、彼を捨てゝ亞米利加に移住することになり、その事件の起つた丁度一ヶ月以前、即ち一月二十日に出立した。彼はこの出來事を以て全く偶然的のものとして居るが、その拳銃が裝填されて居たか否かを見ることを怠つたことと、自分の方に向けて發射したことから、考へると、その動機が心理上確定されて居る。彼は愛に失敗して憂鬱状態に陥つたので、軍務に服してそれをまぎらせようとしたが、これも不合格でその目的を達することが出来なかつた。それで拳銃をいぢつて遊んで居た。それは言ふまでもなく無意識に自殺を企てたのである。しかし彼が拳銃を右手に持たず、左手に持つ

て居たといふことは、實際それを玩具にして居たに過ぎないといふ彼の主張を助くる事實であるが、これは彼が意識的に自殺を望まなかつたことを示して居る。一婦人が爪を切つて居た際、その薄皮を切らうとして、肉を切つた。こんな誤りは常にあることで、吾人は單に偶然の出來事として葬り去つて居る。しかし精神分析を行つて見ると、意外の秘密が暴露される。この婦人が傷つけた指は、結婚の指輪をさして居た指であつた。しかも傷をした日は結婚の當日であつた。何故にその婦人は結婚の指輪のはまつてる指を傷つけたのであるか。彼女の夫は法律家で *Doktor der Rechte* (文字通りに解すれば右のドクトル) の學位を有して居り、彼女が結婚以前に秘密に愛して居た男は醫者で、冗談に *Doktor der Linke* (文字通りに言へば左のドクトル) と言はれて居た。彼女が指を切つたことは即ちこれに原因して居ることは明かである。

ジョーンスの述べた一例を擧げると次の如くである。一日氏の許へ、一通の書

狀が届いた。その差出人は、その前日に診察を乞うた患者であつた。その者は氏の診察を受くる以前に、同じ町に住む有名なA醫師の診察を受けたのであつた。ジ・ロンスは診察の際患者からA醫師の診断を詳しく聞き、且つ運動を盛んにするのが唯一の治療法であると、A醫師が患者に勧めた事をも聞いた。ジ・ロンスは患者に向つて、精神分析法によりて病氣の原因を知り、その後その原因を除くやうにしなければならぬ。元來この病氣は或精神上の隠れたる原因に基いて居るといふことを懇々と話し、精神分析法の内容と効果とを説いた。そこで患者は兎に角今日は歸宅して、よくA醫師とジ・ロンスとの診断を考へ、その上で治療して貰ひたいと言つて歸つた。翌日ジ・ロンスの手元に届いた手紙によれば、運動を適度にやれば、病氣は治るから、入院して規則正しく運動せよとの御勸は尤もと思ひますが、未だ決心しかねますから、今二三日熟考の時間を與へて貰ひたいとあつて、宛名はA君としてあつた。しかし封筒には確かにジ・ロンスへの宛名

が書いてあつた。氏は變だと思つてゐると、午後はその患者が来て、精神分析によつて病原を調べて貰ひたいと言つた。ジ・トンスはその病原を調べる序に、その手紙の一件をも調べて見た。所が次のやうなことが分かつた。即ち患者は歸宅後、A醫師の説には、少しも尊敬を拂はないで、博士の診察に委せることに決心し、直ちに二通の手紙を書いた。その一はジ・トンスへ送つたA醫師宛の手紙で、他の一通はジ・トンス宛にして、精神分析の實際上必要なるを説き、是非共診察を受けたいとの意味を認めた。そして封筒二枚に各宛名を書いたが、封筒へ手紙を入れる時、全く無意識的に兩者を取り違へて封入したのであつた。その間違ひに就ては患者は少しも氣づかず、又その原因に就ても知る所はなかつた。しかし精神分析をやつて見て始めてその間違を惹起した動機が知れた。即ち患者の内心にジ・トンスの立派な意見とA醫師の愚なる診断とを、そのA醫師に知らしてやりたいとの悪意が潜んで居て、それが間違の動機となつたのであつた。

吾人は以上數節に亘りて、その原因が如何にも偶然的に見える所の、日常生活に於ける忘却と誤謬の實例を擧げ、且つその精神分析の結果を述べた。之によつて之を見ると、兎に角自覺しては居ないが、中心には一時的或は永久的の感情生活があつて、之に關係して居る度合と、之から起る無意識的聯想の爲めに、不快の事柄や都合の悪い思想は、思ひ出したくないので、思ひ出すまいといふ反對意志が、無意識的に作用して、自分に氣付かない間違や、もの忘れをするものである。しかも自己の利害問題と、自己の秘密と、自己の性慾とが殊にその情的生活の重大なる中心を形成して居ると斷言することが出来る。

第七章 頓智・滑稽及喜劇

從來頓智とか滑稽とかに就ては、種々の心理的説明が下された。例へばクノーフイシャーの如きは、頓智は戯れの判断であるといひ、ジャン、パウルのごときは、内部的內容や結合から云へば、相互に全く無關係なる多數の觀念を、驚くべき速さを以て結合する技巧であると定義して居る。クレーパーンは、相互に對比して居る二個の觀念を有意的に結び付けることが頓智であると言つて居る。リップスによると、言葉の簡潔といふことが頓智には大切で、その言葉は嚴密なる論理にも、通常の思想及發表の様式にも外れて居る。而かも最後は言はずして自らその事を知らせるやうにするものであると述べて居る。所がフロイドは種々と頓智の技巧を解剖し、その頓智を構成する過程が、夢の構成と非常によく似て居ることを發見した。即ち夢には顯在內容と潜在內容とがあつて、潜在内容は條理

整然たるものであるが、顯在内容は壓縮・轉移・描寫等の諸作用によつて、變化され、一見荒唐無稽のやうに見えるといふことは、既に第三章に述べた所であるが、頓智にも壓縮、轉移及び間接的代表等の形式が最も明白に存在して居るとフロイドは主張する。

一、壓縮

頓智には壓縮といふことが、その一技巧となつて居る。壓縮には混合語を作る場合と、變化及び代置による場合とがある。先づ初めに二つの語が壓縮されて一の混合語を作つて頓智を構成した例を述ぶると下の如くである。或る賤しい人が云ふには、*ノロスタイルド*（富豪）が私を全くの *famillionaire* のやうに待遇した」と。これが可笑味を生ずるのは *familiar*（親し）と *millionaire*（金満家）との二つの語を一處にしていふからである。若し、*ノロスタイルド* が私を金満家のやうに親しくしてくれた」といつたなら、平々凡々で少しもをかしまがない。或一部

の學生間に、「おい、君ちやく手をやるない」といふ俗語がある。「横著な手段をす
るな」といふよりも何となしにをかしく聞ゆる。又虚言家を許して千の中三つ位
しか眞實なことを云はないといふよりも「せんみつや」といへば可笑味をますの
である。プリルは次のやうな例を述べて居る。或人がクリスマススの時季は *Beer*
holidays であるといつた。これは *alcohol* (アルコール) と *holidays* (祭日) とを
一處にしていつた語であることはいふまでもなく、又祭日と酒を飲むといふことと
が何時も聯關して居ることを意味することも明かである。

次に變化及び代置による壓縮の例は次のやうなものである。或處に二人の兄弟
があつて、何れもカレッジの生徒であつた。一人はよく出来るが、他の一人は並
みの成績を示した。處が偶然いゝ方の子が學校で失敗した。それを母は心配して
これが墮落の初まりではないかといつた。出来ない方の弟は今まで何時も一方が
出来る爲め壓倒されて居たので、こゝぞと思つて母に合槌を打つていふには、「さ

うですよ、カールは四つんばひで退歩して居ます」と。これは退歩するといふことに、四つん這ひでといふ字を附加して居る。四足であるくといふことは、勿論動物を意味するものである。それで、この弟の言葉は、「母さん兄さんが學校で少し成績がいゝといつて、私より利口であると思つてはなりませんよ。あの人は全く鈍馬ですよ、私よりずつと馬鹿です」といふことを意味して居る。

或る知名の士が、農業に興味があるといふので、農業大臣に任命されたが、しかし無能の爲めに罷免されて、もとの農業に歸つた。それで「昔時のシンシンナタヌのやうに彼は犁の前に歸つて行つた」と評された。この昔時の羅馬人は、この人と同じく農家から出て官職につき、その後再び野に下りて、犁の後につくやうになつた人である。しかしこの人は犁の後につかず、前についたといふ點に可笑味がある。即ち犁の前につくのは牛で、換言すれば彼は馬鹿であるといふことを諷刺して居る。高等學校の生徒が、梅月に菓子を食べに行くといふことを「梅

げる」といつたり、コンパニーを作つて遊ぶといふことを「こんばる」といつたりして面白がつて居るが、これはやはり言葉を少しく變化し短縮することによりてをかしみを生するのである。

次に同じ材料を種々に用ひて可笑味を生ずることがある。例へば一つの語を二つに分けていつたり、話の順序を變化して云つたり、同一の語の一部又は全部の意味を取つて云つたりすることが可笑しく聞えることがある。例へば或巴里人の應接室で一青年が彼の有名なルソー(Rousseau)の親戚で、やはりルソーの姓を有すと云つて他の客に紹介された。彼の頭髮が非常に眞赤であるし、且つ行儀が非常に不作法であつたので、女主人はその青年を紹介した紳士に向つて、あなたは一人のルソーでなく一青年 roux et sot (赤くて馬鹿)を私に紹介しましたねと云つた。Rousseau の語を roux et sot と云ふやうにその音によりて二つに分割して、而かも皮肉を云ひ表して居る。少しく下品な例ではあるが、或女が何故に妾のこ

とを *conscience* といふのだらうと云へば、それは分り切つたことさ、困窮賣淫だからよと一友人が答へたといふことである。

又同一の語を一つの文章の中に意味をかへたり、位置をかへたりして用ふることによつてをかしみを生ずることがある。XとYといふ二人の頓智に富んだ政治家が或宴會で一處になつた。Xは司會者といふので、先づ口を開いて云ふには、「予の友人Y君は非常に不思議な人である。諸君がなすべきことは、Y君の口を開けて、御馳走をつぎ込むことである。さうすると話が出てくる」云々。それを對してY君が答へるには、「予の友人にして且司會者たるX君は、余を不思議な人であるといつた。而して諸君のなすべきことは予の口を開いて、御馳走を入れることとで、さうすると話が出てくると云つたが、しかし同君も亦非常に驚くべき人であると思ふ。諸君のなすべきことは、誰れかの口を開けて、話さしむることと、さうすると御馳走が出てくるのである」と。この可笑味は即ち「御馳走を食べる

と話が出る」といつたに對して、「話をすると御馳走が出る」といひ變へた點に存して居る。

語の順序を轉倒しても可笑味を生ずる。『てふちんをかりて返し給うてければよめる』といふ題で、雄長老といふ狂歌師が次のやうな歌を詠んで居る。

『てふちんをかへすによつて申すなり、さてもちんでふさてもちんでふ』

同一の語を異つた意味に用ふることも可笑味を引起すものである。頓才に富む一著者キンスローは亞米利加人にあり勝ちの家族の歴史を三行の句につとめて、Gold mine, Gold spoon, Gold cure と云つて居る。即ち父の代には金鑛で烈しく勞働したが、その子の生れる頃には金満家となり、生れると直ぐに金匙で食事をするやうになり、従つて生長するに及んで酒色に耽り、Gold cure を要するやうになるといふ意味である。同一の語を異つた意味に用ふるのは昔時の狂歌に多く見られる所である。あけら菅江が葛飾の龍眼寺の菘を見て、よせざれと見ゆるお

寺の錦かな、どこもかしこもはぎだらけにて」と歌つて居る。又讀人不知の歳暮の歌として、「びんぼうのぼうが次第に長くなり、ふりまはされぬ年のくれかな」といふのがある。

又プリルの他の例は下の如くである。一醫師が或人の妻の病氣を診察した後、「どうも顔付がよくない」といつたのを、その夫は「以前から顔付がよくなりません」と合槌をした。醫者の方では容體のわるい事を意味したことは勿論であるが、夫の方は妻の容色の醜いことを以前から嫌つて居たことをこの機會を利用して洩したのである。

語による可笑味の中で、所謂駄洒落といふものがある。例へば或人がステッキを買つて來た所が、友人が「これはステッキにいゝね」といつたといふことがある。クロムエル教授が、羅馬人は「indier」の宗教から「Jew Peter」の宗教にかはつたと洒落たのもこの類である。或小兒科醫が或家の子供を診察した後、「これはイチ

ヤウ(胃腸)がわるい」といつた處が、その母、「この子は何處かで銀杏でも食べたのでせうか」といつたといふ話もある。ブリルの擧げた例によると、一人が「この芝居の第一幕は書き直さ(rewritten)なければならなかつた程もとは貧弱なものだつた」といふと、他の一人が「そして今は又悪く(rewritten)なつて居る」と皮肉つたといふことである。

二、轉 移

ハインと詩人スーリエが一日或巴里人の應接間で話しをして居た。そこへ蓄財家として知られた一紳士が來たが、直ぐに多くの人々が彼を取り卷いた。スーリエがハインに向つて、「見給へ君、如何に十九世紀は Golden calf を崇拜するか」といつた。所が、ハインはその男に一瞥を與へながら「それよりもずつと年を取つてる筈だが」と答へた。Golden calf は財の神並に金錢崇拜を意味する。今スーリエが、「見給へ、君、人が金持の傍にたかるのを」といつては何にも可笑味を

生じない。ハイネが「それよりも年を取つてゐる」といつたのは golden calf (金の犢) と云はれたに對し「彼は最早犢どころでなく、もつと功勞へた牡牛である」といつたのである。即ちスーリエの方では golden calf を財の神又は拜金主義等といふ風に見たのを、ハイネの方では、それを文字通りに金の犢と取り、今は犢でなく牡牛になつて居る、即ち不作法なこと牡牛のやうであると、もぢつたのである。

猶太人は湯に滅多に入らない人種である。それでこの種類を題とした一口噺が極めて多い。二人の猶太人が湯屋の前で出逢ひ、一人が他の者に向つて、 Have you taken a bath? と尋ねると、他の猶太人は驚いて、「どうしたんです。風呂桶が紛失したんですか」と問ひ返へした。 Have you taken a bath? とは、風呂にはいりませんでしたかともなるし、風呂桶を取つたかともなるので、滅多に風呂にはいらず、且つ人の物でも泥棒しさうな猶太人には、後の意味に解せられたのである。

一人の貧乏人が必要にせまつて二十五弗を金持の知人から借り入れた。その日料理店で二人が偶然出會ひ、債権者はその債務者が鮭を注文して食つて居るのを見、「君は僕から金を借りて鮭を食つて居るが、その爲めに金が入用だったのか」と非難すると、債務者は不思議な顔をして、「あなたの言ふことは分りまんね。若し私が金のない時にはとても鮭などは食べられませんし、金がある時は食つてならないと云へば、私は何時鮭が食べられますか」と答へた。債権者の方では、他人から借金する位に貧乏して居る癖に、鮭などいふやうな贅澤なものを食して居るのは怪しからんと非難したのであるが、債務者の方では、金を借りた日に鮭を食つていけないと云はれたと解したのである。これは勿論非論理的で、間違つた答である。

かやうにその見地を變へて解するといふことは、元の答に於ける心理的強調を他の方に轉移することによるものである。即ち前例に於てスーリエは golden calf

を財の神とか拜金主義とかいふ風に一語のやうに解したのを、ハイネはその中の *call* のみを取つて、「最早や憤ではない」と答へて居る。一人の猶太人は *Have you taken a bath?* と風呂の字に力を入れて尋ねたに對し、他の猶太人は、*Have you taken a bath?* と取るといふ字に力を入れて聞いたので、滑稽な間違をして居る。鮭を食べる例も同様で、前二例に比し、もつと完全に轉移作用を表はして居る。

この轉移作用による可笑味は、語の變化に基づいたのではなく、吾人の心的態度が他の方に移つた結果である。

轉移作用に基づく頓智は、容易に他の種類の頓智と混同し易い。今一例を取ると次の如くである。或町に一人の學者が、自己の飲代を得るために教鞭を取つて居たものがあつた。しかし餘まり酒を飲み過ぎるので、學生が漸次減じて來た。それで彼の一友人は見るに見かねて、「若し君が酒を止めると、此町で最もよい學生を集めることが出来るが、どうして止めないのだ」と忠告した。そこで酒飲み

の先生は大に不平な顔付をしながら、「君は何を云つてゐるんだい。僕は酒を飲む爲めに教へてゐるぢやないか。學生を得る爲めに、どうして酒を止めようか」と云つた。これは一見轉移に基づく頓智のやうであるが、しかしさうでない。これは單に同一材料の順序を變へて云つたに過ぎない。換言すれば手段と目的との關係を轉倒して云つたに過ぎない。所が前に述べた、猶太人の風呂についての頓智は、大に複雑で、意味の二重と轉移作用と相寄つたものである。Golden calf の例も意味の二重と轉移作用とから成り立つて居る。

語が二重の意味を有することによつて頓智をきかした場合には、その語が種々の意味に解せられるので、聽く方では言つた方の意味と異つた意味に解し一つの思想から他の思想に移つて行くのである。所が轉移作用の起る場合の頓智は、頓智そのものゝ中に思想流の轉移を生ずるやうになつて居る。その最も著しい例を擧げると次の如くである。或馬商人が顧客に一匹の馬を示しながら、「若しあなた

がこの馬に乗つて朝四時に御宅を出れば、六時半にはモンチセロにつきます」といふと、その客は「朝の六時半にモンチセロに行つて私は何をしませうか」と尋ねたといふ話がある。勿論馬商人は、その馬が駿馬であることの一例として云つたに過ぎない。所が客の方では、その馬の能力に就ては少しも考へず、その例證の方のみをその文字通りに解してしまつたのである。

前に述べた例は論理的に考へると、何れも思想の誤謬、即ち思想流の轉移に基いて居る。所がその誤謬が往々全く意味をなさないやうになる場合がある。例へば一猶太人が砲兵聯隊に入營した。大變に利口ではあるが、少しも命令を聞かず、兵役に興味を有して居なかつた。上官の一人が親切さうに彼の方に向いていふには、「吾々の所は君に不適當だ。君に忠告するが大砲を買つて獨立したらどうだね」と。この上官の忠告は滑稽だが、全く意味をなして居ない。大砲を買つて獨立して戦争をしても何にもならない。しかし純粹の無意味でなく、滑稽的の無意

味である。

思想の誤謬に基く頓智には、論辯的思想によるものがある。或店に一人の客が来て、菓子を要求した。番頭が菓子を出したが、その客がいふには、その菓子を返すから飲み物を下さいと願つた。番頭は飲料を出したので、客はそれを持つてさつさと外に出た。番頭は驚いて代價を請求すると、その客は、その代りに菓子を返したではないかといつた。それで番頭がいふには、お返へしになつたけれど、その代はお拂ひにならなかつたと。客は「しかし僕はその菓子を食はなかつたから代は拂はなかつた」と答へた。

この他自働的に不知不識の間に思想の誤謬に陥つて滑稽を引起すこともある。仲介人が嫁の世話をする時、一人の助手をつれて行つて、口を極めて嫁を譽めた。非常にすばしい目元ですと仲人がいへば、全くですと助手が合槌をうつ。言葉以上に教育を受けて居るといへば、非常な教育を受けた婦人だと助言する。たゞ一

の實際を打明けなければならぬことは、彼女が少し猫背であるといふことですといふと、全くいゝ猫脊ですと合槌をしたといふ話がある。

三、間接的表出

直接に言表はささないで、それと關係とか聯絡とか存して居る言葉をして言表はす場合がある。一例として一亞米利加人の話を述べよう。危険な仕事をして金満家になつた、二人の餘まり謹直でない商人が居た。金がたまつてくると共に、少しく交際社會に顔を出したくなり、それには市中で技術の最も優れて居るとの評ある畫家に自分等の肖像をかゝせるにしくはないと思ひ、大金を出して肖像を畫いてもらつた。その繪を一夕大勢の集まる所にかけて、主人公から美術批評家を招いて、その鑑定を乞うた。勿論彼等に利益のある批評をするだらうと豫期して居た所が、その批評家は、何か品物でも搜がすやうな風に首をまげた。遂には二人の繪の中間の空地へ指さしながら、どこに救世主が居ますかと尋ねた。……

ここに救世主が居るか、或は「どこに救世主の繪があるか」との間は、この二つの繪と如何なる關係を有するのであるか。この繪の間には基督の像がぬけて居りはしないかといふのは如何なる諷刺であるか。これは基督が二人の盜人の間に十字架にかけられたといふことから來たのである。即ち汝等二人は恰も基督の左右に十字架にかゝつて居る盜人みたやうな下品な奴である。と批評家は諷刺したのである。そんな下品な奴の繪に吾々批評家が注意するものか、と遠まはしに言つたのである。

諷刺には省畧が行はるゝことが多い。即ちその一部だけを洩して、他は省略して聽者の判斷に委すのである。ハイネは或己惚家のことに就て次のやうなことを云つて居る。「彼が餘まり自分のことを讚め過ぎるので、香料の値が高くなつて來た」と。これには云ふまでもなく己惚は常に惡臭を放つといふことが省略されて居る。

次に比較することは又間接的表出の一部と見ることが出来る。リヒテンベルグの著書の中に、「誰れかの鬚を焼くことなく、群集中を通して真理の炬火を持つて行くことは殆んど不可能である」と書いて居る。これが頓智をきかして居るやうに見ゆるのは、「真理の炬火」といふ比較によるのでなく、「鬚をやく」といふ二次的屬性によるのである。真理の炬火といふことは、餘り屢用ひられて耳新らしくない。しかしリヒテンベルグは更にそれに説明を附加して、真理と炬火との比較を新にして居る。之と同じやうな例がある。即ち「この人は決して輝く所の光でなく、大きい燭臺であつた。……彼は哲學の教授であつた」といふ文に於て、「輝く光」といふことが、學生を意味することは、極めて古いことである。しかし「大きい燭臺」云々と他の言葉を附加した爲めに、「輝く光」と「學生」との比較が再びその新味を回復して居る。

四、頓智の快感

頓智からして快感を生ずるのは、一部はその技巧により、一部はその意向によるものである。而して頓智を生ずる技巧は、既に例を擧げて述べた通りに、夢を生ずる時の技巧と同じく壓縮・轉移・二次的表出・思想の誤謬・詞語新作・反對・融合等である。次に頓智の目的から分けると、罪のない頓智と、有目的の頓智とがある。而して前者は單に愉快を引起すといふ以外に何等の目的がないが、後者は更に之を四つに分けて、淫猥・敵意・嘲笑・懷疑的頓智とする。

頓智の快感は精神的出費の經濟から生ずる。頓智の發達には四個の階級がある。言語の戯れより生ずる頓智は最も原始的で早き子供時代の特質である。所がこの活動は論理的思想の發達の爲めに、抑壓されるが、後に或事情の下にその抑壓が弛み、且つ言語によりて代表された異りたる概念間の内部關係の知識も、或條件の下に屏息するやうになると、單純なる戯言が表はれて來て、昔時の戯言に基づき愉快を再び感ずるやうになる。次に害のない頓智の場合、即ち抑壓された批

評が全く除かれて居る場合には、價值ある思想が表出せられる。所が頓智の第二階級に屬する串談は殆んど頓智と同じ技巧を弄するけれど、その文章の調子が、價值がなくても、意味がなくても又有用でなくともよい。その發表が陳腐でも、皮想的でも、又無益でも差支ない。戯言の最著しき要素は満足といふ點である。この點が戯言と頓智と異なる所である。

最後の階級に屬するものは、即ち意向ある頓智で、最も複雑な機制を有して居る。これが思想に表はれてくる場合には、抑壓作用によりて、直接に表はれて來ない。多くは夢の潜在内容が變形される如く、非論理的に表はれたり、中斷されたり、又は間接的に表はれたりする。この意向ある頓智の場合には、或種の前快(Vorlust)が戯言そのもの、技巧によつて得られる。かの無害の頓智では、その前快だけでおしまいであるが、この意向ある頓智では、もつと深い快感を引起すやうに、尙多くの禁止作用を弛緩せしむるやうにする。

五、頓智と夢との異同

頓智と夢との共通點は、これ等の相等しき技巧を弄する點以上に尙多く存して居る。頓智や洒落は突然生ずるもので、それは決して意識的精神過程の產物でなく、全く無意識の所産である。快感の淵源も亦無意識のものである。嚴密に云へば、頓智に於ては、吾人は何を笑つてゐるのか知らない。その洒落の卓絶せることと、それに含まれて居る思想の價值とによりて吾人は欺かれて居る。思想を滑稽的に表はす爲めには、やはり言語に伴ふ快感を生ずる場合と同じやうな表出形式を選ぶものである。而してこの選擇は意識的注意によつてなされない。前意識的思想のエネルギーが無意識界に下りて行く時に、この選擇が最もよく行はれる。蓋し無意識界では、夢の作用に於て述べた通りに、言語より生ずる聯想と事物より生ずる聯想とが同等に取扱はれるからで、従つて表出の選擇に最適當なる状態を呈するのである。

しかし頓智と夢とは全然同一の過程をするものでない。兩者間の最主要なる差異の二三は、頓智は社會的過程であるが、夢は非社會的過程であるといふ點である。又頓智は快感の獲得といふことを目的として居るけれど、夢は苦痛を免れやうとの警護を目的として居るといふ點である。蓋し夢に於ては、全く個人的のもので、それを他人に知らせることなく、只自己の心内に争闘しつつある精神力相互の妥協を目的として居る。従つて夢は他人に理解されるといふことの必要がなく、寧ろ理解されるとその目的を達することが出来ないから、理解されないやうに警戒しなければならぬのである。故に夢は變装された形に於てのみ存在することが出来る。この理由からして夢に於ては、無意識的思想過程を支配する凡ての機制を自由に利用して、變形したものを作るに腐心して居る。

之に反して頓智に於ては、前にも述べた通り社會的で、往々三人が必要である。頓智を生ずる心的過程は常に少くとも二人相互の參與を要する。従つて他人に理

解されなければならぬ。勿論頓智にも壓縮とか轉移とかの無意識界の作用が行はれて變形するけれども、その變形の度が第三者の理解を破壊しない範囲に限られて居る。これ以外に於ては、夢と頓智とは全く相違した精神生活の範囲に於て發達したもので、心理學大系の全く異つた範疇の下に分類せられるのである。夢は願望を包んで居るが、頓智は發達したる遊戯である。夢は明かに非現實であるが、人生の利害と密接なる關係を有して居る。夢は幻覺の逆行性廻路を通りてその缺けたる所を補充する。しかし願望の實現は現實界で出來ないからして夢が存在するには夜眠むるといふとが必要條件となつてくる。之に反して頓智は吾人の心的機關の自由なる活動からして少量の快感を引出さうと求め、後にこの快感を偶發的獲得として捉へようとする。かやうにして二次的に外界に關聯する重要な機能となつてくる。夢は不快に對して警戒し、頓智は快感を求やうと努めて居るが、實に吾人に於ける凡ての心的活動はこの不快をさけ、快を求むといふ二大

目的に向つて會流して居る。

六、滑稽と喜劇

フロイドは尙進んで喜劇と頓智との關係を論じて居る。喜劇の製作とその快感の淵源とは全く意識的で、かの頓智に於ける夫等の無意識なると全く相反して居る。喜劇は人類の社會的關係に於て偶然發見されたやうである。喜劇は人類、詳言すれば人類の運動・形狀・行動・特性等の中に表はれる。最初これは恐らく精神的特質の中に表はれ、後には心的特質特にその表出の中に發見される。人格化する結果として動物や無生物をも喜劇の材料となるものである。人をして喜劇的とならしめた條件が辨別されるやうになると、喜劇的事實とその人とを分けて考へることが出来るやうになる。かやうにして喜劇的狀態が生じてくる。而して吾人がこの狀態に關する知識を得ると、喜劇に必要な條件が結付くやうな狀態に或人を自由に置いて、その人を喜劇的人物とすることが出来るやうになる。他人を喜

劇的にする力が得られるようになると、喜劇的快樂を護得する方法が開拓されるようになり、且つ非常に發達したる技巧の基礎を形成するようになる。それは又他人と同じやうに自分自身をも喜劇的にすることが出来る。人類を喜劇的とするに要する手段は、喜劇的狀態に變化すること、模倣、假裝、假面を去ること、道化畫狂詩や狂文等である。此等の技巧は往々敵意又は進撃的意向に利用され得ることは云ふまでもない。例へばその人を輕蔑したり、又はその人の威嚴や權威を殺ぐ爲めに、その人を喜劇的にすることがある。

次に滑稽は苦痛又は不愉快に對する防禦である。即ちエネルギーが滑稽に使用されなければ苦痛を生ずるのであるけれど、それが滑稽の爲めに快樂の淵源に變形される。滑稽には只一人を要するが、喜劇には笑ふ人と笑はれる人との二人が必要である。所が頓智になると、戲言の製作者と、それが向けられて居る想像的人物と、それを聽く人との三人が必要である。

全體として考ふる時は、滑稽は頓智よりも喜劇に接近して居る。その精神的局所は喜劇のやうに前意識界にあるが、頓智は前意識と無意識との中間に位して居る。しかし精神的出費の方面から考へると三者をれれ／＼相違して居る。即ち頓智の快感は禁止作用に於ける出費の經濟から起り、喜劇は思想に於ける出費の經濟から生じ、頓智は感情に於ける出費の經濟から起つて居る。此等三種の活動は凡て經濟よりして快感を引出さんとするのである。詳言すれば此等の活動は精神活動の發達によりて實際に失はれて居る所の快感を、再び精神活動から取戻すことを努むるものである。而してその快感を生ずるには、最も僅かな出費を以て精神的活動をして居た過去の状態に歸るより外に途はない。それで頓智・滑稽及び喜劇は、吾人を幸福にする爲めの頓智も知らず滑稽も出來ず喜劇も必要としない子供時代に吾人を運んで行くのである。

第八章 精神分析と教育

一、性慾と宗教との關係

吾人は『藝術家とその作品の解剖』の章下に於て、性的衝動と藝術又は宗教の如き活動との間には密接なる關係があることを述べた。宗教家の經歷を分析して見ると、性的本能に由來する感情や衝動が、全然宗教の活動に向けられたる證據を發見することが出来る。今その最も好適例としてオスカト、フイスターによりて分析されたツインツェンドルフ伯の宗教的生活の概要を次に述べよう。

ツインツェンドルフの生活に於て性的本能と宗教とが不思議にも相混合するに至つたのは、主として二つの要素に基いて居る。第一の要素は時代精神である。即ちその當時は快樂は凡て惡魔の仕業であると考へられて居た。凡ての基督教信者はこの人と神との敵に對して奮闘することを要求された。就中肉慾を抑制する

ことは最も困難なることゝせられ、従つて最も多く注意がそれに向けられた。かやうに烈しく抑壓される爲めに、思ひもかけない所にその血路を見出すことが往々ある。ツィツェンドルフの場合では、無意識的に基督の方にその血路を求めて居る。

第二の要素は、ツィンツェンドルフが幼年時代に受けた、母及教師からの印象である。彼は敬虔主義（十七世紀頃獨逸に起つた改革教派）の家に生れた。彼の父スペンネルは四歳の時既に基督の王國に彼を導いた。父は肺結核に犯され、その爲めに信仰の世界に慰安を求めた。しかしツィツェンドルフが生れて間もなく死んでしまつた。父の死後母は屢父が基督を愛して居たことを繰返し、彼に話したので、その話が深く彼に印象を残した。母の唯一の希望は、彼をして教に殉じた基督の後繼者たらしむることであつた。その爲めに母は基督の受けた迫害と磔刑とを最も詳しく説明して聞かせた。彼の幼時の生活は全く母に支配されて、彼

は常に自身を母に捧げてるやうに考へて居た。子供が母に對する如上の態度は、最初色情的であるが、後には基督がその母の代りになつた。幼い頃から彼は此世の中の快樂を斥けた。彼は子供らしくあることが出來ないし、又しかすることを敢てしなかつた。他の子供と一所に遊ぶことを禁ぜられ、只基督に祈禱をするこののみが、充分に行ふことを許された娛樂であつた。かやうにして基督は友達。同僚。兄弟。母及び父の代理をつとめるやうになつた。四歳の頃彼は初めて基督が吾々の兄弟であつて、吾々の爲めに死んだといふことを知り、大變その事に感動した。基督の殉教に關する歌は彼が最も好む歌であつた。六歳になる以前に、彼は自身の爲めに死んだ基督の爲めに生活しようと決心し、七歳の時基督が傷を受けた時の感情を想像して涙を出してその苦痛に同情した。彼は基督に宛てた手紙をかき、それを窓から投げたことがある。彼の後年に於けるサディズム及びマツヒズム的の傾向は、既にこの時その萌芽を表はした。彼は後にこの幼年時代に感

じたことに就て説教をした。彼の最も親しくする朋友ですら、彼は餘り極端に基督を愛すると言つた。しかし此等の批評は却て彼を喜ばせた。蓋し彼は之を以て基督の爲めに苦難を受けて居ると考へたからである。彼が八歳になつてからは、基督の傷害といふことを、一瞬時たりとも念頭から去らしめないやうにした。かくして明かに性慾の抑壓せられた結果として生じた苦悶の状態が早くから發達したのである。

十歳の時有名なる教師フランクと同棲する爲めにハルレに行つた。處がそこでも基督が唯一の朋友であり指導者であつて、基督の受けたやうな苦難を受けたいと渴望して居た。十三歳の時基督に宛てゝ次のやうな手紙を書いた。即ち「あなたの創を受けたやうな方面に吾々を導き玉へ。然らば吾々は罪惡と戦ひ、之を征服しようと思ふ」と。十六歳の時彼が書いた所によると、「惡魔は私を害ふことが出來ない。蓋し基督の傷の所に私の身體と精神とを托して居るからである」と言

つて居る。その學校で彼は又祈禱會を組織した。而してその行爲に於ても、基督の苦難・傷害及び死がその主旨となつて居た。基督の苦悶を追憶せしむる聖晚餐は彼をして殆んど有頂天の狀態に置くを常とした。

彼は結婚する義務を辨へては居たが、その爲めに基督に不正を行ひはしないかとの懸念から、どうしても婦人を愛する氣になれなかつた。四回彼は結婚せんとしたが、何時もその間に於て、その婦人は自分より外の人にもつと相當して居りはしないかと思つて結婚することを中止した。しかし結婚は基督に對する義務に妨げをなすものでないといふことを朋友から忠告されて、最後に彼は結婚し、十二人の子供を生んだが、その中四人だけ生き残つた。彼は家庭の幸福を増進するといふことをしない。只その妻を尊敬する以上に出なかつた。國家に對する勤務も基督の名譽にならぬといふ考から、涙ながらに従事して居た。

彼が基督に對する同性的性慾傾向は、一生を通じて彼の用ひた術語によりて明

かである。彼は基督を以て精神上の新郎であると言ひ、救世主の愛を得ることが許さるればいゝがと述べて居る。彼は自己の精神を基督の新婦と名づけることを喜び、最も豊富なる言辭を以て新郎を賞讃して居る。吾々の罪惡を宥して吾々に接吻するのは基督の側の仕事であるとも述べて居る。彼は又基督の抱擁といふことを述べて居る。彼はエリシヤが死んだ婦人の子を蘇生せしめたその仕方に非常なる興味を持つた。彼はいふに、之と同じ方法で基督は吾々の罪を宥し、その時に感ずる身體並に精神に於ける身震ひの感は、妻がその夫より愛せられる時の感情を以てのみ比較することが出来る。

四十歳の時、抑壓されて居た同性的、サディズム的、及びマソヒズム的傾向が新たに表はれて來た。これは性的衝動の抑壓が、以前よりも、もつと完全に行はれた結果、他の方法で表出しなければならなくなつた爲めである。この時に於て彼は尙完全に自身に頼るようになり、宗教的經驗に關する彼の權威が一層強大に

なつた。彼は漸次自身の想像並に副意識的表現を以前よりも多く信するに至つた。その結果として、彼の自然的傾向は全權を振ふようになり、無意識的衝動が充分に表はれるようになったのである。

この同性的性慾の明白なる表現以外に、尙他の倒錯的行動がある。即ち食屍肉主義 (nerophilia) の傾向が、基督の死體を考察する點に於て、聖晚餐に侍するに就て、死んだ夫の頸を抱くやうに妻に忠告する點に於て明白に表はれて居る。サディズムの傾向は、彼が基督の傷害を考へて愉快に感ずる點に表はれて居る。彼は又創傷祈禱といふべき恐ろしい儀式を述べた。その祈禱に就て彼が言つてる中に、刺の冠で生じた傷、唾液が垂れて居る口、打擲された頬、疲れ切つた眼、血の飛沫、汗にまみれた髪、及び創口等が述べられて居る。かくして創傷が唯一の最高善となつて、その方に彼の全生涯を向けた。基督の血は又咒物的になつて、最も豊富なる情操がそれに織込まれるようになつた。彼が其を味覺・嗅覺・視覺に

訴へたことは確かである。基督の汗は彼のサディズム的傾向を養成する唯一のものであつたし、基督の創傷は最高の興味の對象であつた。而して彼が基督の磔刑を考察するに當りて、彼の思想や感情が彼の色情的生活によつて著しく着色せられた。

ツィツェンドルフは又洗足・同胞間の接吻・寝ず番・愛の馳走等の儀式を初めた。而して此等は凡て色情的要求から起つてゐるやうである。洗禮・聖晚餐・確信式・葬式・禁慾・傳道事業・兒童の訓練・同胞組合會の組織等を初めたことも、やはり性的本能に關係して居る。此等の性的生活の表現に於て、何等基督の倫理的教育に關するものがない。これ蓋し基督は彼の性的生活の對象となりて、その他のものを凡て排除した爲めであらう。性的變態に關する近世の研究によると、彼が基督に對する態度は、性慾の對象を倒錯する有様と少しも變らない。彼は性慾に使ふべきエネルギーを凡て基督に向けたのである。かやうな場合をフロイド一派は、性

慾本能が昇華されたといつて居る。然らばその昇華作用とは何かといふことを、
ジコリンズによりて、之を説明して見よう。

二、昇華作用とは何か

昇華作用といふ用語は元化學に用ひられたもので、例へば一物質に熱を加へると、それが固體の状態から、液體に變ることなく、直ちに氣體になることを昇華と名づけて居る。フロイドは自己の學説を説明する爲めに、この用語を使用して居る。即ち元は性慾の目的であつたものを、それと關係はして居るけれど、もはや性的にあらざる他の目的に取り換へる働きに昇華作用の語を用ゐて居る。或は個人的の性慾から來る興奮があまり強過ぎるので、それが他の領域へ迸れて用ゐられるやうになる作用とも定義して居る。而してこの作用は大人のみならず子供にも表はるゝもので、而かも後の場合には、それが子供の四圍の境遇とか教育の仕方によりて無意識の間に行はれる。故に昇華作用は教育の問題と密接なる關

係をもつて居るのである。

前數章に於て屢述べた通りに、吾人の願望は容易に衰へるものでなく、外見上消滅したやうに見えても、よく調べて見ると、たゞ願望の表はれる形が變じたやうで、決して終熄したのでないことが分かる。恰もエネルギー保存變形の原理が物質界に行はれて居る如くに、精神界にもこの願望の保存變形の原理が行はれて居るやうに見える。性的本能を轉向せしめて、他の事項に興味をもつやうになつたとすると、この新しい興味に費さるゝ勢力は元の性的本能から生ずるものである。而して新しい興味を起すのは、その元になつて居る舊い欲望を間接に満足せしむる手段たるに外ならないのである。故に種々の根本的欲望は殆んど人の一生を通じて存続するものであるが、同じ形で現はれて來ないから、精神分析をして見た上でなければ、同じ欲望の繼續であるといふことが分らないことが多い。

昇華作用は主として本人の知らない中に行はれる作用である。勿論自から進ん

てやることもあるし、人から忠告を受けてやることもある。即ち或欲望を満足せしむることの出来ない爲めに、わざと遊戯や勉強などに耽ることもある。この場合には意識的に昇華作用を行つたのであるが、情緒が實際に移行するには無意識の間に行はれるもので、その真相は精神分析をやつて見ないと分らない。しかしかやうな現象は所謂昇華作用の一小部分に過ぎないのであつて、多くは昇華作用全部が無意識の中に行はれるものである。レーエンフェルドが云つたやうに、性慾が善人の精神生活に著しき影響を興へるといつても、意識上に現れて居る明白なる性慾が影響を興へるのではない。寧ろ意識以下に沈んでしまつた性慾と、それに相當する中樞的興奮とが主として影響を興へるのである。

三、子供に於ける昇華作用

昇華作用は大人にも行はれるけれど、之は寧ろ子供の精神生活に多く表はれる所のものである。兒童期殊にその前半に於ては、頗る廣い範圍に於て昇華作用が

行はれるが、大人の生活に於てはそれが非常に尠ない。これは教育上極めて重要な點である。子供が自發的に行ふ活動や興味は、教育の目的として居る所と全くその向を異にして居る。故に教育の目的を達しようとするには、それを他のものと入れかへるやうにしなければならない。しかし入れかへるといつても、舊い自發的の興味を排して、全然新しい教育的の興味をもつて來るといふ譯でない。只そのエネルギーの方向を變化しさへすればよいのである。子供の興味の指導をかやうに考へて來ると、興味の本來の性質や、それが自發的に現れてくる形式等について、もつと深い研究が必要になつてくる。教材を提出するには、それが子供の興味と合致しなければならぬといふことは、教育者の常に努力して居る所であるが、しかし子供の本來の興味に關する研究が不十分である爲めに、折角の努力も何等の效力がない。エーチャー氏が兒童の自發的構成及び原始的活動につき質問法を用ゐて研究した結果を見ると、その中には子供が雪・砂・土・糸・石・ナイ

フ等を以て自發的に行ふ活動に就て述べた所がある。氏はこの研究に關して次のやうなことを言つて居る。「この問題に就て過去二十年間に蒐集された資料を知つて居る兒童研究者から見ると、この兒童研究によつて示さるゝ教育の理論と、學校に於ける實際教育の基礎となつて居る理論との間に、著しき相違の存することが分かる。所がこれ等の研究によつて明らかになつた子供の本能や興味の中で、現時の學校で全く顧みられて居ないものが大分あるやうである。教育者は須らくその發達の順序に従つて進み、精神進化の流れに沿うて進んで行くやうに努めなければならぬ。現時屢見受けるやうに、それに逆行するやうなことをしてはならない。兒童研究の資料が漸次蒐集されて來ると、教育者は兒童の發達を指導變化すべきものでなく、寧ろ兒童の感情・動機・本能・興味等に従つてその作業の方向を定めて行くべきものであるといふことが、次第に明かになつて來る。兒童はその種族的遺傳との調和を保ちながら、自然に進化して行くやうにしなければなら

ない。所が今日の教育を見ると、比較的近代の社會的遺傳を強ふことにのみ没頭して、深くその精神の根柢をなして居る衝動とか本能とかに就ては少しも顧慮して居ない。吾人の氣づかない子供の本能や動機が澤山あるものである。それを十分に活動させることが出来たならば、子供の精神は如何に豊富なものとなり、又その興味の範圍が如何に擴大されるか分らない位である」と。

しかし氏の研究も、精神分析者の眼から見ると、二つの重大なる缺點がある。即ち氏は自發的活動を正面から研究したゞけて、更に之を前後に追及して研究しなかつた。(一)氏は前に述べた昇華の原理を明かにしなかつたので、これ等の活動が教育上社會上どういふ所に利用されるかを示すことが出来なかつたし、又その傾向が如何なる運命に終るかをも研究して見なかつた。(二)次に氏はその取扱つた所の自發的活動を以て根本的のものであると考へた。しかしそれは子供時代からその個人に存在して居る舊い傾向の現はれたものに過ぎないのである。かや

うな微細な點になると、質問法では到底分かるものでない。所が精神分析を行つて見ると、これ等の活動の發生や進化を詳しく探究することが出来る。かくして多數の經驗を集めた結果として、そこに何か共通の點が表はれて來れば、それを辿つて種々の概括的結論を試みる事が出来る。たゞ精神分析に慣れた人であれば、もつと根本的の傾向より説き初めて解釋を下し、更に進んではそれが將來どんな形を取るに至るかも明らかにすることが出来るのである。

精神分析を行つて見ると、昇華作用が子供の精神發達に如何なる役目を演じて居るかが分かつて來る。即ち子供の有する傾向は、文明社會の社會的倫理的標準に合はないものであり、又生後六ヶ月も經つて、外圍の壓迫を受くるやうになると、兒童自身の標準にも合はなくなるのであるから、そこでそれを他の傾向とおさかへる必要が生じてくる。他とおさかへる必要のある傾向といふのは、自分の身體特にその一局部を占有すること、種々の肉體的機能、殊に分泌機能に興味と

快感とを感ずること、兩性の差・子供の起源・夫婦關係の性質如何といふやうな問題に對する好奇心、他人に對する利己的思想、邪魔されたり干涉された時の嫉妬及び憤怒といふやうなものであつて、近時の學者は是等を總稱して、廣く「性的」といつて居る。子供は周圍の壓迫などの爲めに、是等の傾向を棄て、しまはなければならぬ。所が容易に放棄の出来る人と出来ない人とがある。勿論是等の傾向も成人した後には忘れてしまふ。精神分析の術語で云へば「抑壓」されてしまふものである。大人が是等のことを殆んど眼中に置かず、又これが子供の發達に對して重要なものであるといふことを氣付かないのは、一つはこの抑壓作用が原因となつて居るやうである。但し抑壓されるといつても、それが全く消滅してしまふのではない。形を變へて都合のよい體裁をなして表はれてくるのである。その結果として社會的及び教育的の活動を促して、文明の爲めに貢獻するに至るのである。

四、職業の選擇

近時精神分析學者は、各人が現在の職業や勤務先を選ぶやうになつた動機に興味を以て研究して居る。その結果によると、外部からの勧誘や、偶然の機會によりて職業につくことが最も多いやうに思はれるけれど、その實然然しない隠れて居る傾向によりて左右されて居ることの多いといふことが明らかになつた。皮相の觀察者から見れば、外部の事情も大切のことのやうに思はれるけれども、それには外から見えない、根本的要求があつて、それが外に表はれる爲めの口實に過ぎないことが多い。例へば茲に一人の子供があつて、残忍性戀愛の傾向を抑壓したとすれば、成長の後はその能力により又事情によりて、屠殺者として成功するか、又は外科醫として成功するであらう。又幼時自己廣告的又は陰部露出病的の傾向を有するものは、成長して後、俳優となり、競り屋となり、又は演説家となるであらう。或患者は幼時排尿に非常なる興味を有して居たが、少しく成長する

と、流れや水溜りを弄ぶことに殆んど狂的の嗜好を示したが、今日では有名なる技師となり、多數の運河や橋梁を作つた。又幼時主として排便作用に興味を有して居たものは、昇華作用によりて種々の競技（エーチャ―の所謂自發活動）に耽つて居たが、後一人は建築者となり、一人は彫刻者、一人は活字鑄造者となつた。又一人は圓形物もこれを熱すれば、型にはめ易くなり、弄ぶにも都合よくなることを知つて、料理を好むやうになり、遂に料理長になつた。尤もこれ等の要素だけで職業が極まるものでもなく、又右に述べたやうな無意識的の力が働いて職業が選定されるとは限つて居ないけれど、この無意識的要素の極めて執念深くして持續性に富んで居るところを見ると、職業の選擇に對しても可なりの勢力をもつて居ることが分かるのである。

かやうに職業選擇といふやうな一般的东西のものばかりでなく、兒童の日常生活に於けるもつと狭い範圍の興味にも無意識的の力が働いて居る。例へば地理又は歴

史の如き學科に對する兒童の好惡如何、又その學科の成績如何は、始めて兒童に提出する方法の如何にもより、又その際兒童の心中に存する興味とその方面との相聯合して居る程度の如何にもよることである。しかし兒童が某學科の習得に特別の困難を感ずるのは、その方面の學習に對して何か固有の缺陷をもつて居るためといふよりは、寧ろ或根本的の興味に對して或禁止作用が行はれ、その興味とその學科とが二次的に相聯結して居る關係上、禁止より生じたる情緒・困難及び矛盾が學科の方に移植され、そのため成績の不良を來すに至つたのであらうと考へられる。故に若し兒童の有する根本的の興味や傾向についてもつと十分なる研究が出來たらば、これから養成しようと思ふ傾向を、既に存在する傾向に結びつけて行くやうな教育上の工夫を試みる事が出來るであらう。さうなると、巧みに根本的の興味の方向を變じて、之を社會上教育上の目的に利用することが出來、今日經驗に訴へて行く方法よりも遙かに著しい効果を收めることが出來るで

あらう。

五、個人教授と學級教授

フロイドやレーエンフェルドが言つた通りに、昇華作用の行はるゝ範圍には、一定の限りがあるもので、それは個人によつて非常に相違して居るものである。今日特別の缺陷あるものゝ外は、凡ての兒童に對して同一程度の知識を強ひて居るが、一方に恐るべき刑罰を示して、均一の道德的社會的及び倫理的標準に合した行爲を強ふるのに比べて見ると、よほどその害は少ないに相違ない。行爲の方面に於ては、もつと個人の性質と傾向とを考へ、寛大なる心と、精密なる知識とを以て之に臨むやうにしなければならぬ。教育上の各方面に於ても、もつと手綱を緩くすると同時に、洞察的指導が大切である。その結果は社會的團體をして、益雜多性を増さしめ、延いては個人が益その仕事に適應するやうになり、各人の能率は益發達するに至るものである。

かやうに言ふと、今日の學級教授は全然間違つて居るやうに思はれるけれど、必ずしもさうとは云へない。經驗の示す所によれば、或傾向が昇華されて行く形式は大抵同一であつて、その根本的傾向の數もさまで多くはないから、昇華の行はれた結果は大抵の個人に於て粗同一なるやうに見える。勿論昇華作用の行はれる仕方は千差萬別で、個人に全然同じものゝない理由も一つはこゝに存するのであるが、實際について見ると、大多數が同一の徑路を通つて行く。殊に周圍が粗同一であれば昇華も粗相似てくるのである。故に現今教育のやり方に従つて、平均より甚しく離れて居る子供は之を特別に取扱つて差支ないとすれば、それ等を除外した最も一般的の昇華作用に適當した教育方法を工夫することが出来る譯である。然らばこれ等の方法に就て、十分の豫備的研究をなし、適當なる方法を案出することは、誰がやるべきことであるかといふに、學校教師はかくの如き研究に當るだけの素養に缺けて居るし又時間もない。加之この研究の一面たる性的と

いふやうなことに手を下すことを嫌ふからして、これはやはり教育的心理學者と
兒童心理學者との仕事にしなければならぬ。

第九章 結論

一、フロイドの心理學

吾人は前數章に亘りてフロイド及びその一派の研究の大要を紹介したが、今その總括として、フロイドの學說の主要なる點の二三を摘記しよう。

フロイドは心理的事實に對して嚴密なる決定論的見地に立つた。決定論といつても、勿論哲學的の意味でなく、寧ろ科學的の意味の決定論である。心的過程は決して孤立的のものでなく、又偶然的のもでない。常に前行せるものと密接に關係して居ること、恰も連續せる外界の出來事と同じである。外界に「偶然」といふことがないやうに、精神界にも決して「偶發」事項はない。この見地より出發してフロイドは所謂精神分析法なるものを發達させ、それに氏の凡ての結論の基礎を置いて居る。即ち患者に或事件が起ると、その事に就て氏は患者に向つて自由

聯想を求めゐる。その聯想された事柄は、その事件と直接に關係して居るに相違ないといふと、フロイドは主張する。

情緒的過程に就ても、フロイドの考は從來のそれと大に異つて居る。氏の假説によると、精神的機能の中に、量の屬性を有する或物、例へば情緒の量。興奮の總和といふやうなものがある。勿論此等を精密に測定する手段は未だ發見されてない。しかしその物は増加し、減退し、轉移し、滅亡する。而してそれは觀念の記憶的痕跡を残すこと、恰も物體の表面に電氣が集まるやうである。氏によると情緒は又遠心性のもので、絶えず心的運動的エネルギーを發射するものとせられる。殊に重要な假定は情緒が一定の獨立團體を形成して居るといふことである。即ち情緒は最初結びついた觀念から離れて、新しい精神的過程にはひつて、尙廣い範圍の結果を生ずる。情緒が一の觀念から他の觀念へと移つて行くのを、フロイドは轉移作用と名づけて居る。而して第二の觀念は第一觀念の代表物と名づけて

てもいゝといつて居る。例へば女の子が嬰兒の觀念に屬する情緒的過程を人形の觀念に移す時は、人形を洗つてやつたり、衣服をぬつてやつたり、種々と心配して可愛がつてやつたり、ねかしたり、食物を與へたりして、その人形が恰も嬰兒であるかのやうに取扱ふのである。

この情的過程と聯關して、フロイドは精神過程の動的性質を強調して居る。又空間に於ける局所の觀念を利用して精神的局所の意味を發達させて居る。精神は複雑なる反射機關又は反射系統で、一端には入口があり他端には出口の場所がある。前者は云ふまでもなく感官的終點で、後者は運動的終局である。各の精神過程は器官の一端より他端への運動を引起す傾向がある。その起點は感覺的形式に於ける認識である。しかし之はそのまゝ固定することなく、「記憶的痕跡」の形式に於て精神系統中に殘るものである。過程が遠く行くに従つて、他のものと聯合する範圍も大きくなる。而して最初の聯合は表面的であるが、後にはもつと高等

階級に屬する聯合、即ち類似、同格等になるものである。故に精神過程が再生されるにも、その一次的の認識的形式でなく、「記憶的痕跡」の形式を取るのである。各の心的過程に従つて、心的エネルギーの量に相違がある。而してそのエネルギーは吾人が情緒と稱するものと粗一致して居る。即ちこのエネルギーが極度に蓄積すると、苦痛として經驗される一種の緊張を生ずる。故にそこには絶えずこのエネルギーを放散しようとする傾向がある。而してこの放散が快感、免出、満足として經驗されるのである。

免出を計る方法は子供と大人とによつてその複雑の度が相違する。子供に於ては必要例へば飢餓の満足と一定の知覺例へば食物の外形とが經驗によつて聯合される。故に再び必要が起つてくると、それを満足せしむる事項の觀念を再現しようとするのである。最初これは恰も幻覺が起るやうに精神過程の逆行を引起すものである。所が幾度か經驗をくり返すと、この方法は必要を満たすに不適當であ

ることを知り、且つ外部的に引起された知覺と内部的に生じた知覺とに於て、その能力に相違あることを知るやうになる。内部知覺はかの精神病者に於ける幻覺のやうに、それが永續する時に於てのみ用に足るものである。故に必要に相當する精神的エネルギーは、尙多くの精神過程の團體を活動せしむるやうになる。その機能は欲求して居た外部知覺を將來するやう周圍を變化するのである。子供が乳を飲ませられるまで泣くのは其の一例である。内部的手段によりて一次的知覺を再現する逆行的傾向を、フロイドは一次的過程と名づけ、次にこの傾向を禁止して、エネルギーをもつと複雑なる通路に向ける過程は一次的過程と全く異つた心的系統の作業であるから、之を二次的過程と名づけて居る。欲求した知覺を繰返すやうに周圍を變化したる複雑な思想過程は、經驗より獲得したる欲望満足に必要な曲折した通路である。この二大系統は早き時代から既に存するもので、後に至りて夫々無意識と前意識とになるものである。

この一次的系統と二次的系統間の關係に直接連關して居るのは、フロイドの學說の中心となつて居る抑壓作用である。精神過程の基本的機制は、心的緊張から免れることによつて快を求め、心的エネルギーの蓄積を妨ぐることによりて苦を避ける傾向である。多少確定的の目的を有する此等の努力は、廣い意味に於ける願望を構成する。この願望が外部の理由によりて満足されない時には、發射せんとする心的エネルギーの傾向は禁止されて、局所的閉塞が起り、その精神過程は、以前の自由なる聯想を形作る力を失ふやうになる。かくしてユングの所謂「錯綜」が起る。この事情の爲めに二次的系統が一次的系統のその部分のエネルギーを使用することが出来ないやうになる。蓋し使用すると苦痛を引起すやうになるからである。従つて二次的系統は出来るだけ之を避けようとするのが主たる機能となるのである。茲に於て吾人は内部的精神争闘を感ずるやうになる。心的過程が反抗する情緒の競争場となるやうになると、通常の聯想活動が閉鎖され、心的過程

は閉止又は分離されるやうになる。

フロイドによると、精神的出來事の正常と異常とは、只量の上の區別で、質の上の相違でない。兩者とも同一の心的器官の同一機制によりて先行されて居るといつて居る。即ち兩者の場合に於て無意識的精神過程(例へば願望)のエネルギーは、快不快の原理によりて、複雑なる意識的通路に向けられる。只兩者の主要なる相違點は、異常なる場合に於けるエネルギーの發射は、正常の場合のそれに比し、多くの廻り曲つた異常の通路を通るといふことである。兩つの場合に於ては共に意識が動的過程の上に「監視」的勢力を行ひ、その過程は或一定の方法に於てのみ表出することを許されるのである。意識機能の特質はこの監視的勢力を實行することである。この監視的行動は無意識と前意識過程との間と同じやうに、前意識と意識的過程との間に介在して居る。

フロイドは又子供時代の精神過程を重大視して居る。氏によると子供時代に經

驗した精神作用、特に願望は無意識界の一勢力となり、その後の發達に對して永久の基礎をなすものである。總じて無意識界に作用して居る精神作用は極めて有力なものであつて、特に無意識的に働いて居る願望の力は一生消ゆるものではない。生長後の希望や興味も幼時の希望や興味と結びつかなければ、意義あるものとはならない。但し兩者は勿論意識的に結びつくのではない。幼時の精神作用が吾人に甚深の影響をするにも拘らず、一般にその大切なることを知らずに居るのは、幼時の經驗の忘却から起るものである。勿論忘却といつてもその經驗は無意識界に止まつて、絶えずその働を顯在意識に及ぼして居るのである。

フロイドは亦性慾傾向の重要なことを主張する。氏は「性的」といふ語を一般の用法よりも廣い意味に用ゐて居る。従つて直接生殖作用と關係のない精神作用も、フロイドは性的として居る。この性的活動が障害を被ると、種々の精神的疾患を引起すやうになる。通常子供には性慾衝動がないことに考へられて居るけれ

ど、フロイドによると、子供は生れる時から性の衝動も活動も具へて居る。大人の性慾はつまりその中から種々の階段を経て發達してくるのであると述べて居る。このフロイドの性慾説がよく諸學者の批評と非難とを被る所である。今以下に於て二三の著名なる精神病並に心理學者の批評を紹介して本書の結論としようと思ふ。

二、ジャネーの批評

ジャネーはフロイドの主張する精神病者に於ける外傷、及びその役目、外傷の性的特質に就て批評して居る。氏は精神的な外傷が或精神病者に重大なる役目を演ずることを許すけれど、しかしそれは極めて制限的のもので、一般に之をいふことが出来ないとして居る。蓋し外傷と全く無關係の精神病者があるばかりでなく、外傷に基いたやうに見えたものでも、その實極めて他の複雑なる原因に基づいて居るものがあるからである。

若し或事件が精神的な外傷となれば、そこに憂鬱の状態があるに相違ない。所がこの精神的な虚弱即ち憂鬱はどこから来るか。ジャナーによると、憂鬱は一時的にその事件に原因して居る。換言すればその事件の起る前後の瞬間に起るのである。而してその状態の原因は遺傳的組織に基づいて居る。個人の生涯に於て受けた有機的疾患は種々の中毒を生じ、それが何等の外傷的事件なくしても精神病を引起すことがある。精神病者に表はれる固持観念は必ずしも外傷的事件の表現でなく、極めて異つた機制によつて發達することがある。故に一方に外傷的事件を發見するに努力することは大切ではあるけれど、他方に外傷的事件のない場合にまでその發見に全力を注ぐのは正しい仕方でない。

この外傷的事實を發見する方法として、フロイド一派は精神分析法を用ひ、之を治療する方法を淨下法と名づけて居る。所がジャナーによると、この分析的方法は決してフロイドの創案でなく、氏が精神的分析と名づけて行つて居たもの

で、淨下法も氏が觀念の分離又は道德的消毒と名づけて居るものである。フロイドが錯綜といつてるのもやはりジャナーが心理的證候と名づけて、早くから認め居た所であると述べて居る。

ジャナーは又フロイドの夢の解釋殊に性的解釋を攻撃して居る。ジャナーの方も亦フロイドと同一の問題、即ち精神病に於ける外傷的事件の研究を取扱つて居るけれど、その學說に於ては相互に異つて居る。即ちジャナーの心理的分析では、夢が他の事實と結合して或症狀の決定に必要な役目を演ずることを、一の假設として許して居る。處がフロイドの精神分析では、この假定を一般的原理となし、以前から確定されたものとして之を豫想して居る。而してそれを根據として凡ての觀察を容易に説明して居る。ジャナーの取扱つた或患者は何等外傷的事件に左右せらるゝことなく、言はゞ全く忘却されたと同一の有様であつた。而してそれが忘却せらるゝばかりでなく、最近の事件が眞の活動を引起し、夢や譫妄や

その他の障害を引起すほど、全くその効果が無くなつて居るのを發見したといふことである。

ジャネーは尙フロイド派の性慾説に論及していふには、この派の用ゐる性的緊張は特殊の意味を有して居る。この派の取扱ふ外傷的記憶は只性的出來事又は性的冒險に關係したもののばかりである。此等の事件の頻繁に起ることをフロイド派は極めて簡単に述べて居る。しかしこれ等の現象は多くの精神病者に起るもので、決して凡ての精神病者の場合にさうであるとは云へない。フロイドが外傷的記憶を凡て性慾で以て説明して居るのを見ると、大分野師的で、牽強附會の所がある。ジャネーは手ひどく攻撃して居る。勿論ジャネーとても性的外傷が精神病の一原因であることは拒まない。それは恰も現時梅毒が勞瘵や麻痺の特殊原因となつて居るやうなものであるとして居る。

ジャネーの考へによると、フロイドの性慾が精神病の病原となるやうに性慾以

外の情緒も、亦精神病の病原となるものであるとするのである。例へばコリアー
トによると嘔氣、サイデイスによると恐怖が、多くの精神病の中心點となつて居
る。フロイドが性慾をかつぐと同じく此等の思想を以ても兎に角容易に精神病の
原因を説明することが出来る。吾人々生には憂鬱を感じる傾向と興奮を求むる傾
向とが重大なる役目を演じて居る。而してこの傾向が障害を被ると、それが多數
の苦悶的觀念及び衝動の出發點となるのであるとジヤネーは論じて居る。

最後にジヤネーはフロイドの性慾過重説を評していふに、これは一時暗示とい
ふことが佛國に於ける一種の流行病であつたと同じ觀がある。何でも暗示で説明
した如く、フロイドは性慾の一語を以て凡ての衝動を説明し盡さうとして居る。
この筆法で行けば肺結核でも癩腫でも少年時代の手淫の驚くべき間接的結果であ
るといへるかも知れない。ジヤネーは尙進んで精神分析法は科學的醫學でもな
く、寧ろ哲學である。故に哲學者には喜ばれるかも知れないが、診断とか療法と

かの方面から見ると實に危険千萬なものであると極論して居る。

三、アドラーの批評

アルフレッド・アドラーはフロイドの住んで居るキナナの町の精神病の醫者である。フロイドの學說を獨逸語で縱横に批判した最初の學者である。アドラーが多年取扱つたヒステリトその他の精神病患者の實例によると、性慾異常は精神病の症狀として表はれるもので、決して病原となるものでない。吾人々類には凡て意識的又は無意識的に劣等 (Minderwertigkeit) の感なるものがあつて、何とかして之に打勝ちて、他の者を凌駕しようと企てる。従つて一方に身體的又は精神的に劣等の所があると、種々と之を補充しようとして所謂代償作用 (Kompensation) をするやうになる。例へば盲目の人はその指先や前額の觸覺が通常の人よりも鋭敏に働き、往々視覺の代償をすることがある。精神界にも之と同様な現象が起る。而してその代償作用が好都合にゆかないと、種々の精神的疾患を生ずるとし

て、アドラーはその著『精神病的特質』といふ本に數多のヒステリー患者その他の實例を擧げて居る。

アドラーは又フロイドの所謂幼年時の性慾に就て、烈しく攻撃して居る。フロイドが一例として五歳になるハンズといふ男兒の恐怖症を解剖し、その病原が性慾的衝動によることを主張せるに對し、アドラーはやはり劣等の感を以て説明しようとするのである。子供は凡て大人に比し劣等であるので、早く大人たらんとする願望がある。これよりして子供は大人を模倣する遊戯を喜んだり、又は兩親を理想とするのである。又男子は女子よりも一般に優勝の位置にあるので、女子の多くは男子たらんことを希望し、その傾向は極めて幼ない時から表はれる。これによりて女兒がその父親を理想するやうになる。然らば女兒が母親を理想とするのは何であるか。それは女兒が已に男子たることの出來ないのを自覺して、せめて母親のやうになりたいと欲するのである。又男兒は多く父親を理想とする

が、その父親は一家の主権者である爲めに、自分もそれに對抗する地位になりた
いと欲し、且つ往々にして父親に頑強に反抗することがある。女兒が母親に反抗
するのものと同理である。かやうに劣等者がその優等者に對して反抗すること
を、アドラーは「人としての拮抗」(manliche Protest)と名づけて居る。それでフ
ロイドが所謂エディプス錯綜なるものを主張し、男兒がその父親を敵とするのを、
一に性慾關係に基づくとして居るのに對し、アドラーは此等の現象を凡て人とし
ての拮抗で説明して居る。而して氏の擧げて居る一例によると、六歳になる女兒
がよく頭痛に苦しめられて居た。而して母親が美しい衣裳を買つたり、父より愛
情を示さるゝ時に、殊に頭痛が烈しかつたといふことである。アドラーは之を説
明してその女の子は母親と拮抗しようとするの念が強い爲めで、衣服でも愛情で
も母親同様に取扱はれたい欲望から頭痛が起るので、それ等の刺戟を除去した處
が、頭痛がよくなつたといふことである。

この人としての拮抗の仕方には二つの方向がある。一は積極的又は進撃的で、他は消極的又は退嬰的である。自己の劣等を補償する爲めに種々と腕いて居る中に、若し外界より烈しく抵抗を被るときは、或者に於ては積極的に益之に拮抗して行かうとするし、之に反して或者に於ては、退嬰的に引込んでしまふやうになる。兒童が頑固・執拗になるのは前者の理由に基き、因循・憂鬱又は甚しい時は自殺をするに至る場合は後者に原因して居るのである。かの後天的吃音の如きも、アドラーによると、代償作用が甘くゆかないで、横道に外れた結果であるとして居る。

勿論アドラーとても、幼兒が出生に關する質問をしたり、男女の別に就て不審を懷いたりする現象を否定するものでない。此等はフロイドのいふやうに、さう根底の深いものでなく、子供に有がちな一時的の好奇心から起ることで、フロイドの分析したハンスやエンゲの分析したアンナのやうに、性的知識慾からして、

種々の症状を引起すことはない。性慾衝動がその原因のやうに見えるのは、徒らに牽強附會的に説明を加へた結果である。此等の症状は凡て男、女、強、弱、優、劣、親、子、兄妹、弟妹といふやうな關係から起つた拮抗作用の結果であると主張するのである。

四、レーエンフェルド及びシュテルンの批評

レーエンフェルドは自己の觀察を基礎として、フロイド一派の幼兒時代の性慾説に反對して居る。即ちフロイドによると子供は早くから性的衝動を満足せしむる爲めに、種々の手淫的興奮を喜ぶといふが、レーエンフェルドは決してその事實を認めないと云つて居る。又子供は往々自分の身體又はその一部を露示するを喜び、それが後になると他人の裸體を見たがるやうになるが、之は凡て性慾に關係して居るとフロイド一派は説明するのである。しかしレーエンフェルドは、自己露示を以て子供が衣服の束縛から離れて自由の活動を喜ぶと説明する方がもつと適當

ではなからうか。又自己や他人の身體の一部を見ることに興味を有するのは、兒童が被はれた物の内部を見たがる、所謂學習的好奇心と差別がないやうである。何にもそれを以て性慾と關係せしむる必要はないやうであると言つて居る。

次にフロイド一派によると、子供の恐怖は性慾と密接の關係があると言つて居るが、レーエンフェルドは之を以て確實なる事實でないと言張する。幼兒の恐怖は只無智より起る自然の結果、即ち見馴れないものが出現するに當りて全く助けないことを感じた結果から生じて居る。又フロイドが身體に於ける分泌帶の性的特質は既に幼兒時代から表はれて居るといつた假定は、レーエンフェルドの觀察より云へば、滅多にかやうな事實は起らないと云ふことである。即ちレーエンフェルドの考によると、此等の身體的部分の性的特質は少くとも學齡期に達せなければ表はれないし、又フロイドによりて記述されて居る恐ろしき結果を生ずることなく、性的啓蒙が表はれてくるといふことである。

又フロイド及びサドガー等は幼児時代から肛門色情 (Analerotik) は表はれるもので、幼児はよく便所に入りて大便を排出する際一種快感を覚え、中には之を排出することを惜しがり、母親が便所からつれ出すのをいやがる子供があるといふことを述べて居る。しかしレーエンフェルドによると、これは極めて極端な臆説であると非難して居る。

次にシュテルンはフロイドの學說に就て次のやうな批評を下した。フロイドの性慾説は或特種の事實を捕へて之を一般原理とした傾がある。或變態的兒童に於ては早熟的に色情を解するかも知れないが、一般にはさうでない。勿論或種の萌芽はあるかも知れない。それが身體並に精神の發育するにつれて、漸次に開發されて行くこと、地中にある種子が月日を経るに従つて花を開き實を結ぶに至ると同一であるとシュテルンは考へるのである。

故にシュテルンはこの精神分析法を兒童に應用することをひどく攻撃して居

る。未だ性慾の何物をも解しない兒童を捕へて、種々と暗示的の質問を發し、且つ兒童の間に對して臆面もなく生殖機能の有様を洩すといふのは、よく心の奥底に眠つて居るものを揺り起すと同じである。或は自然の開花を待たずして、無理に温室に入れて早咲きをなさしむるに比すべきである。精神分析學者は最重大なる教育的結果といふことを顧慮しない。若しこの方法を兒童に應用することがあつたらばそれは危険極まることで、教育上大なる罪惡を犯すものである。又エディプス錯綜の如きものを信じて天真爛漫たる子供を、猜疑の目を以て見るやうになつたならば、それこそ兒童教養上由々して一大事であるといつて居る。シュテルンが『心理學者の歌』と題して、現時の心理學を批評して歌つたものがあるが、その中のフロイドに屬する部分を摘出すれば次の如くで、精神分析法に對するシュテルンの態度の如何なるものかの一端が窺はれるやうである。

オー、フロイドよフロイドよ

汝は天の火花なり。

(述ぶるに難き吾が想ひ

諷示の外に道もなし。)

いたづら者の喋々と

語るに似たりその言葉。

隠れし係蹄わなにゆくりなく

かゝりて心は破滅せむ。

汝なが言ふところなす所

描けることはすべて皆

複雑なれど眞ならず。

今搖籃の幼な兒は

未恐ろしき游蕩兒

(本庄學士譚)

以上の批評を綜合するに、フロイドの性慾説は一部分には眞理であるけれど、之を一般原理とするのは誤謬であるといふ點に歸着する。性慾衝動が夢に表はれる場合にも、かのエリスの如きは、その一部分眞理なることを承認して居る。發生的見地に立つ心理學者によると、食慾も亦性慾と等しく、吾人々類の基本的衝動であると主張する。即ち性慾を以て或種類の精神活動が説明出來ると同じく、食慾を以ても或種の精神活動を説明するの鍵とすることが出來る。殊に近時有名になつた露國のバヴロフ及びその門下生によりてなされた所の、唾液や胃液の分泌と認識との關係の研究の如きは、慥かにユングの所謂リビドー、即ち性に對する飢の外に、食物に對する飢があり、それが認識とか辨別とかの精神作用の基礎となつて居ることを證明して居る。又性慾衝動が幼年時代に既にその萌芽を有することは誰しも疑はないけれど、フロイドのいふやうに、兒童の一舉一動が、多く性慾と關係して居ると考へるものは同派以外の人に全くないやうである。スタ

ンレー、ホルルの如きも、フロイドの児童心理は、大人の心理を解剖した結果から作り上げたもので、児童の精神そのものを分析したのは只五歳の男兒一人に過ぎないと云つて居る。この短所を補はん爲めに、フロイド派の人、殊にフィスターやフォン、フーグ、ヘルムート嬢の如きは、直接に児童を觀察した結果を夥多擧げて居る。殊にヘルムート嬢の如きは『精神分析的研究に基づく児童の精神生活』といふ本を公にして居る位である。併し之とても試験的ヴァンダヤのもので、決して確立した結論に達するには、大分前途があるやうである。

しかしこれ等の批評の爲めにフロイドの精神分析法の價値が全然滅却するとは云へない。氏が従來行はれ居た所の催眠術を應用した精神療法を棄て、しまつて、一新方法(ジャネーによると、氏の従來行つて居た心理的分析とフロイドの精神分析とは異名同法であるといつて居るが)を創立したのは確かに氏の功績といはなければならぬ。現時の心理學を見ると、一方には行動説の如く、純客觀的

觀察を以て研究するものがあるに反し、他方には内省法を重用して高等精神作用の内容を知らうと努めて居る。所が精神分析法は一方に客觀的に精神現象を觀察すると同時に、その行動の原因を探究する爲めに、所謂分析を試みるのである。その分析は内省法にて達せらるゝよりも尙一層奥底に立入ることが出来る。たゞ分析の方法がジャーネーのいつたやうに多少哲學的で、往々牽強附會の説明をするのが缺點である。しかしその方法を用ひて精神療法に資することはいふまでもなく、日常生活に於ける誤謬・忘却・夢の現象から、尙進んでは神話・英雄の傳記・頓智・喜劇・野蠻民族及び子供の精神に至るまで研究して、斯界に一革命を將來したばかりでなく、尙幾多の新問題を暗示して居る點は、實にフロイド及びその一派の功績として十分に賞揚する値があるものである。

—(終)—

一、吃音者の精神分析的研 究

苦悶を有する神經病者は屢々奇妙な、異なつた動作をすると云ふステークルの暗示よりして、ダットナー(Datman)は從來種々の方法を試みて成功しなかつた吃音に精神分析法を適用して見た。その効果は眞に奇蹟と思はれる程迅速に表はれて來た。多年の間、吃る癖が治らないで、いろ／＼の方法を試みても無効であつたのが、僅か六日間、分析法を實行して見たら充分に救治の効が現はれた。

この分析法を試みた時、患者は三十六歳であつた。八歳頃に大きな犬に驚かされたので吃る様になつたのだと彼は思つて居た。しかし母親は患者が二歳の時にヂフテリアに罹つた爲めに吃る様になつたのだと思ひ込んで居る。分析法を實行

した経過は時間も浪費せず、非常に早く結果を出すことが出来た。これは患者から充分の信頼を最初から受けて居た爲めである。分析法が試みられると間もなく、患者は最も真面目の状態となつて幼年時代の追憶を始めた。既に六歳の時彼は手淫に感溺して居つた。而も彼は當時四歳の妹と交接類似の眞似をした。其後すぐに妹は死んでしまつた。この出来事は彼に悲哀の印象を與へ、この行爲を憶ひ起す毎に悲しみ多き苦痛に悩まされて居た。一方彼は非常な小心家で誰れにもこの悩みを打ち開けることを敢てしないで唯一人で苦しんで居た。従つて誰も彼の秘密を知らないのであるが、自分では何時か必ず悪事露見して永久に世人の嘲笑を招き、身の破滅を來すであらうと、深く恐れ慄いて居た。

彼が屢々吃る言葉を二三擧げて見ると次の如くである。即ち男女の性を指示して居る *man*(男性)と *wife*(女性)とを讀む時に *me*(汝)と發言する。殊に仕事に従事して居つて言葉に注意を拂はない時には甚だしい。*him*(彼に)が *him*(彼を)にな

つたり、*Du*(彼女に)が殆んど常に *Ich*(私)になつたりする。斯う云ふ事は學校に通つて居る間にも屢經驗して居つた、特に男女の性を指示する言葉を發言する時に一層困難である、例へば *Man*(男性) *Frau*(女性)の様な冠詞は幼年時代の罪惡を思ひ起すので、かゝる言葉に出會はずと、いつでも口籠りたり、吃つたりする。之れが段々激しくなつて行つて、男女の性を指示する言葉は皆難澁の言葉となつてしまつた。斯うなると性を指示する語は凡て秘密の所持者となり、罪惡の目撃者となるので、自然話す場合に口訥る様になつたのである。是等の事情が凡てフロイド説によりて説明されたので、悔罪の苦惱は和らげられ、呵責の重荷は減ぜられた。その結果吃音が全くよくなつた。

患者は *anstoßend*(妨ぐる)と云ふ言葉も難澁で常に *angestossen*(妨げられたる)と讀むで居る。その理由を患者に尋ねると、「生活に於ける感覺は常に妨げられなければならなかつた」と云つた。この説明と安心を與へるやうな著者の助言とに

よつて、間もなくこの困難は除かれた。

讀方や、發音に難澁をする言葉の蔭には、當然病原的の記憶錯綜が作用して居る。故にこの患者が主として難澁する所の言葉を順次に取つて、その自由聯想や、記憶心像を出来る丈け精細に分析して見た。例へば *Osterfeiertag* (耶蘇復活祭) の語を満足に發音するに患者は數回口訥つた。その時すぐ患者の記憶に上つて來たものは何かといふに、患者の四歳頃、復活祭の日に父親が母親を殘忍に打擲して居る悲痛な光景であつた。これは母親が父の命令に背いて、私生兒を産むだ母の妹を世話した爲めであつた。彼はその母親の膝下に脆づいて痛ましき光景を目撃して居た。その後三十餘年を経過して居るが、父親の聞くに堪へざる言葉や、侮辱を尙ほあり／＼と憶ひ起すことが出來た。然しその三十餘年の間に起つた悲痛の他の出來事は別に心に浮ばなかつた。患者自身の偽らざる告白に従へば、性慾的要素を含むで居る愛情を以て、非常にその伯母に戀著して居つたの

で、尙一層追憶の念を強めたのであつた。常に患者は極端と思はれる程母親に愛著して居るが、父親に對しては全く正反對に嫌忌の感を懷いて居た。

その他いろいろの告白があつたが、いづれも戀愛や、性的經驗に關した事柄であつた。その中二三の戀愛に關する出來事は常に彼をして深く悔罪の念に堪へざらしめたものである。惡事をしたと云ふ念慮と、遅かれ早かれ何等の形で、必ず我に報いが來ると云ふ恐怖がある爲めに懊惱して居つた。長々しき告白が終つたので、著者は患者の追憶する事柄について、その相互關係を一々説明した。そして適當の安心を與へて、悔罪の念を和らげてやつた所が、その後一週間ならずして吃る事なく完全に話し得る様になつたといふことである。

これはフロイド派の研究であるが、フロイド説の批評家アドラーは吃音の原因を劣等の感に求めた。即ち兒童は凡て偉大なるもの、大人・教師・大將たらんと希望がある。所が父親が餘まり嚴格過ぎると、或兒童に於ては執拗・頑固になるが、

或兒童に於ては臆病となり、延いて吃音を生ずるやうになる。アドラーの擧げて居る例によると、三歳の時から吃音となつた一男兒は、その父の嚴格なることが吃音の原因であつた。或男兒は男の衣服を着せると吃音が止み、女の衣物を着せるといつて嚇すと吃音になつた。或兒童は來客がその子供の寫眞と女兒の寫眞だといつたので吃音となつたといふことである。蓋し女といふことは劣等を意味する爲めに如上の結果を生ずるのである。而して此等の吃音者に確信の念を生ずるやうにした所が、凡て全治するに至つたと報告して居る。

この二派の主張の中孰れが眞實であるかといふに、他の研究家によると、何れも眞實である。但しフロイド説もアドラー説も共にその一部分の吃音を説明するに止つて、その現象全部を説明して居ないと非難せられる。

二、トテムとタブー

吾人は本論の『性慾と子供』の章下に於て、夢と子供と野蠻民族と密接なる關係があるといつたフロイドの學説を紹介した。フロイドは尙進んでトテム及びタブー (Totem und Tabu) に、氏一流の精神分析的見地からして一新説明を與へて居る。

タブーとはポリネシア人の語で、二つの相反する意味、即ち一方には神聖とか崇拜とかの意味があるし、他方には崇るとか危険とか不淨とかの意味を有して居る。フロイドはこのタブーと異族結婚 (Exogamy) とが密接なる關係を有して居ると主張する。この異族結婚は彼等の同族間の結婚を禁止するに努めた結果で、延いてはカンリック教會に於ける如く同族間の自然的非倫を防禦する爲めに起つたものである。

フロイドはこのタブーと神経病患者に表はるゝ強迫禁制(Nwangverbot)との間に、最も密接に且つ最も著しい一致點のあることを發見した。神経病患者の禁制の中心點は恰もタブーに於ける如く、觸れるといふことで、兩者ともに所謂接觸苦悶(Berührungsangst)に苦しめられるのである。この事實を證明する爲めに、フロイドは一方にマオリ種族の生活を叙述し、他方に強迫症に罹つて居る一婦人患者の觀察を擧げて居る。而してタブーの風習と強迫神経病患者の症狀との一致點を次のやうに總括して居る。即ち(一)命令が何等の動機なくして起ること、(二)その命令が内部の力によりて建設されること、(三)病毒が傳染する如くに禁制せられる對象が轉移すること、(四)儀式的行爲の原因や命令は凡てこの禁止されたるものから起つてくるといふ諸點である。

觸れることの快感は早き子供時代から強く表はれるものである。しかしこの快感は直ちに外部からの障害を受けて禁止されるやうになる。而してこの快感と禁

止とは兒童自身の生殖器に觸れること、聯關して居る。かやうにして固定された心的錯綜の特質は、プロイラーがいつたやうに、行爲よりも寧ろ對象に對する個人の相反的態度に基づくものである。

やがてこの禁止の方は意識的となるが、觸れることの快感は繼續はするけれども無意識になるものである。そこで禁止作用と觸れることの衝動との間に争闘が起り、種々の苦悶を生ずるやうになるのである。これは原始民族に於けるタブーと神經病者の強迫禁制と相共通した點である。

所がフロイドは又他方に於て、タブーと強迫禁制とが相一致しない點があると云つて居る。即ちタブーは決して神經病的現象でなく、社會的產物である。原始人民は禁制を犯すことによりて刑罰、殊に烈しい病氣や死の來ることを恐れる。しかし強迫神經病者は之と異りて、或る禁制事項を取つても、彼自身の爲めに恐れる計りでなく、尙他人の爲め、詳言すれば精神分析を行つて見ると、彼の最

も親しくして居るものや、又は彼の愛人の爲めに恐れるものである。故に原始人民は利己的に働くが、神経病者は恰も利他的精神に充ちたやうな行爲をするものである。

フロイドは又原始人民と神経病者とは、吾人が思想と行爲とを區別する如くに判然と區別しないと云つて居る。しかし神経病者に於ては就中行爲が禁止され、思想がその行爲の代用を充分に勤めて居る。之に反して原始人民に於ては、思想が直に行爲に變ずるもので、行爲が思想の代表といふよりも寧ろ行爲が思想そのものであるといつた方がよい位である。單言すれば最初から行爲であるとフロイドは述べて居る。

次にフロイドは幼年時代の恐怖症とエディプス錯綜とトテム崇拜との間に密接なる關係のあることを述べて居る。トテムは最初動物である。而してその動物は各個人の祖先であると考へられた。且つ又トテムは女性の血統にのみ遺傳せられ

る。トテムを殺すことを禁ぜらるゝことは言ふまでもないが、トテム仲間と性的交接をすることも禁止された。

トテム崇拜の動機は動物に對する恐怖である。一般に子供には動物に對する恐怖が多い。フロイドが分析した五歳の男兒は馬を恐れた。ウルフの觀察した八歳の兒は犬を恐れ、フェレンツィの研究した子供は鳥に對する倒錯を有して居た。而して此等の恐怖症は何れも父親に對する苦悶がこの原因をなして居る。謂はゞ其等の動物は父親の象徴である。之と同じくトテム崇拜に於ける動物は先祖及び主父である。トテムが父である以上、彼等はトテム及びトテムに屬する婦人を殺してはならないと命ぜられる。換言すれば自分の父を殺して母と婚した所のエディプスのやうな罪を犯してはならないと命ぜられる。かくしてフロイドは、トテムの組織はエディプス錯綜の發達から起つたものであると結論して居る。

次にフロイドはトテムに對する犠牲のことを述べて居る。原始民族は神聖なる

動物をトテムに犠牲とする。この場合に父は二重に働いて居る。即ち一方に神となり、他方に又犠牲物となつて居る。蓋し父は一方に愛の競争者であり、従つて理想的崇拜者である。父を犠牲にする點は父を殺したいといふ欲望から起るのであるが、他方に子としてのやさしい情愛を示す爲めに、犠牲物を父に供するのである。動物の犠牲は人即ち父を犠牲とする代りに用ゐられた。それで後には人の形をしたものを犠牲とするやうになつた。かくして動物犠牲が再び人類犠牲に變つて行つたのである、とフロイドは述べて居る。

三、ユングの聯想實驗法

一の刺激語を與へて、之に對する反應語を求め、その反應するに要する時間、反應語の性質によりて、被験者の心中に横はる心的錯綜を探知するの端緒とする方法が、ユング(Jung)の所謂聯想法(Associationmethode)で、之はフロイドの精神分析法に於て、患者に自由聯想を求める方法の一別法と見るべきである。聯想法は心理學の實驗に行はるゝ方法と變りがなく、ユングは先づ刺激語として、例へば頭・綠・水・歌ふ・死・長い・船・遊ぶ・窓・睦しき・料理する・尋ねる・寒い・幹・舞踏する・村落・湖・病氣・自慢等の總計百個の語を選出した。これ等の語を選出した標準は別に確然たる原理に基づいたのではなく、氏が多年の經驗上、各種の患者の聯想を引起すに最も都合のよい語であると思つたものだけを並び出したのである。而して語を聞くや否や先づ第一に心中に浮んだ語を出来るだけ早く答へるやうに

被験者に命ずるのである。

聯想實驗ではいふまでもなく孤立したる心的機能を取扱ふことは出来ない。蓋し孰れの心的出來事も決して單獨の事物でなく、それは常に過去の全精神的活動の合威力に基いて居る。故に聯想實驗は孤立したる聯立語を再生せしむる方法でなく、それは一種の過去の經驗を再生せしむる所の、實驗者と被験者との間の會話である。しかし或意味に於てはそれ以上である。語は實際短縮されたる行爲・状態・事物のやうなもので、若し實驗者が被験者に向つて行爲を表はす語を提出する時は、その語は恰も行爲そのものを被験者に示して「あなたはそれに對してどんな行ひをするか」とか、「それに就て何と考へるか」とか、「この状態であなただどうしますか」とかと尋ねると同じ意味になるものである。

今茲に「花嫁」又は「花聲」といふ刺激語を提示すると、若い婦人は之に對して簡單なる反應をするものでなく、刺激語によりて引起された強烈なる情調によりて

深き影響を被るものである。殊に實驗者が男子である場合には尙それが烈しい。かやうに被験者が凡ての刺激語に對して、急速に且つ平滑に反應することの出来ない場合が往々ある。實際に被験者が急速且つ確實に考へることの出来ない行為・状態・事物を表はす刺激語がある。この時にはその反應に要する時間が極めて長くなり、且つ他の障害が伴つて來て、完全なる反應をすることが出来ない。この刺激語に對する反應が阻害されるといふことは、刺激語に對する順應作用が障害を被ることを意味する。刺激語は吾人に影響を及ぼす實在の一部で、その刺激語によりて障害を示す人は或意味に於てその實在に順應することが不完全であると言はなければならぬ。凡そ病氣は順應を不完全ならしめる。故にこの場合に於て精神の上に一時的又は永久的なる何か病的のものがあるに相違ないと吾々は判断しなければならぬ。

反應時間が長くなるといふことは聯想法の研究に極めて重大なる事實である。

被験者はその刺激語に對して何と答へていゝかを實際知らない場合が往々起つてくる。この際被験者は何れの反應をも放棄してしまひ、最初下された命令に従ふことに失敗し、彼自身を實驗者に順應せしむることが出来なくなつてくる。若しかかる現象が實驗の際屢起る時には、それは順應に高度の障害があることを示して居る。或被験者に於ては餘り多數の觀念が突然心中に浮んでくるといふものもあるし、或患者に於ては觀念が充分に表はれて來ない場合もある。しかし大抵の場合に遭遇する困難は、禁止作用が起つて全反應を放棄してしまふことである。次に示す一ヒステリー婦人患者の反應の例を見ると度々反應の失敗を示して居る。

刺激語	反應時間	反應語
歌ふ	〇、二秒單位	奇麗
死	一五	恐ろしい
長い	四〇	時、旅行
船		

刺激語	反應時間	反應語
拂ふ	〇、二秒單位	錢
窓	一〇	大きい
友愛なる	五〇	男子
料理する	一〇	スープ

インキ	九	黒か青	鹽	二五	鹽からい
怒る	九	縫ふ	新しい		
針			税關		
ランプ	一四	光	祈る		
罪を犯す			錢	三五	買ふ、人は出来る
パン	一五	食べる	小冊子	一六	書く
富める	四〇	善い、便利な	賤しむ	二二	人民
黄色	一八	紙	指		
山	一〇	高い	貴い	一二	事物
死する	一五	恐ろしい	鳥	一二	歌ふ又は飛ぶ

前掲の第三の例は特質ある現象を示して居る。即ち被験者は命令通りに一語を以て答へることに満足しないで敷衍を答へて居る。彼女は明かに命令によつて要求せらるゝよりもより多くをなして居るが、しかしそれはよつて命令の要求を満たして居ない。例へば税關といへば、よい——野蠻的と答へ、馬鹿らしいと尋ぬ

れば、狭量——制限的と答へ、家族といへば、大——小——何事も可能であると答へた。此等の現象は、反應語が多くの他の語と結合して居ることを示して居る。即ち被験者は順次に表はれてくる觀念を抑壓することが困難であるやうに見えた。彼女は又説明的語句を附加する傾向があつた。例へば新——舊——反對に。指——手のみでなく足にも——a limb(手足)——member(手足)——extremity(手足)等と答へて居る。かやうに附加するといふことは、その反應が不完全であるとか不正當であるとか思はれて何となしに物足りない感がするに相違ない。而してこれは精神病者の精神生活に於て基本的一般的現象として表はれるものである。フロイドによるとこれは強度になつた Object-libido の一表號である。詳言すれば内的不満足及び感情の空虚に對する補償であるといつて居る。

要求よりも多くの反應をした他の甚しい例を擧げると次の如くである。争ふ——怒る——色々なこと——私はいつも家庭で争つて居る。結婚する——どうし

てあなたは結婚することが出来ますか——再同盟——同盟。梅——食べる——摘む——それは何を意味するか——何かの象徴である。罪を犯す——この觀念は自分には全く不思議で、それを認識しない云々。

此等の反應は被験者が實驗の地位から全く離れて居ることを示して居る。要求としては勿論被験者が刺激語に次いで思ひついた最初の一語を答へなければならぬ。處がこゝでは刺激語が恰も直接の個人的質問であるかのやうに異常な勢力を以て働いて居る。被験者はたゞ單純なる語を取扱つて居るといふことを忘れて、それに深い意味を與へ、それを神靈化して、それに對して自己を辯護しようとするのである。この事實はヒステリック患者に共通なる特性、即ち何れの物も人格化し、之を客觀的に殘して置くことが出來ないで、従つてその瞬間的印象によつて精神を奪ひ去られるといふ性質の一端を表はして居る。

順應障害を示す他の表號は、刺激語が再三反覆されることである。被験者は恰

も刺激語が分からなかつたかのやうに、之を繰返して答へる。丁度吾人が困難なる質問を受けた時には、之を理解する爲めに再三その問を反覆して見ると同様である。ヒステリー患者に對しては、刺激語が困難なる個人的質問と同じやうに働く爲めに、刺激語が反覆せられるのである。これは又異つた刺激語に對して同一の反應語が反覆せられると同じ原理に基づくものである。ユングの或患者は、刺激語を幾つ變へても、相變らず「短かい」といふ反應語を繰返したといふことである。而して患者自身にも、何故に同一語が繰返されて答となるかの理由を知らなかつた。ユングの經驗から考へると、かやうな賓辭は常に被験者そのものの、或は被験者の親近の者に關係して居る。それでこの「短かい」といふ語も、この患者自身を意味するもので、この語によりて彼自身の極めて不快なることを言表はす手段として居るとユングは推定した。實際被験者は身長が極めて短かかつた。彼は實に家庭に於ける「子供」で「ちび」といふ綽名をつけられ、凡てのものから「小さ

い者、扱ひはされた。これが彼の自信を全く無くしてしまつた。彼は可なりの知能を有し、且つ長い間勉強して居たにかゝはらず、試験を受くるだけの決心に缺けて居た。彼は遂に無氣力になり、精神病に傾きかけた。彼が獨りで室に居る時は、高く見せる爲めに爪立つて歩いて居た。かやうに「短かい」といふ語は彼に取りて極めて苦しい經驗を表はして居ることが分かつた。一般に同一の反應語が繰返さるゝのは、常に被験者の個人的精神に極めて重大なる或物が包含せられて居ることを示すものである。

かゝる徴候は全實驗に於て任意の場所に表はるゝものでなく、一定の局所がある。詳言すれば刺激語が特に高調の情性を帯びた錯綜を刺激する場合にこの現象が表はれるのである。この事實は所謂事實の診断 (Tatbestandsdiagnostik) の基礎である。詳言すればこの事實は聯想實驗によりて犯罪嫌疑者の犯罪事實を發見する手段の基礎となつて居る。今キングが聯想法によつて眞の犯人たるや否やを検

診したる實例を舉げると次の如くである。

千九百八年二月六日監督がユングに告ぐるに、一看護婦が前日の午前に錢を盗まれたことを以てした。その事實は次の如くである。その看護婦は七十フランばかりの錢を巾着に入れて、それを衣服を仕まつて置く戸棚の中に置いて居た。その戸棚は中途に仕切りがあつて、一方はその盗まれた看護婦に屬し、他方は看護婦長に屬して居た。この二人と、看護婦長の友人とが三人で、その戸棚のある室に寢て居た。この室は自由の通路を以て通常六人の看護婦の占有する室に續いて居た。かやうに室の構造その他を説明してくると、ユングが監督に向つて誰れが嫌疑者らしいかを尋ねた時に、その監督が肩を揺つて答に當惑したのも敢て不思議なことではない。

種々と詮議をして見ると、その盗まれた朝看護婦長の友人は少し氣分が悪いと言つて、その朝の間その室の中の寢床に横はつて居た。故に原告の陳述から考へ

ると、盗難は午後以外には起り得ないやうである。嫌疑のかゝりさうな他の四人の看護婦の中一人は室掃除に何時もその室に来る女であつたが、他の三人はその室と何等の關係がなく、盗難の日にその室に寄りついた何等の形跡もなかつた。故にこの三人の看護婦に疑を挾さむ餘地のないことは勿論である。それでユングは最初の三人を疑つて實驗に取りかゝつた。

その戸棚は錠を卸してあつたが、しかし鍵はその場所からあまり遠くない所に置いてあつた。戸棚をあけると、先づ最初に見らるゝのは毛皮の頸巻の裝飾であつた。巾着は目立たないやうにリンネルの布の間に置かれてあつた。而してそれは暗赤色の皮で出来て居て、その中には五十フランの銀行紙幣、二十フランの銀貨、幾干の小さい貨幣、懐中時計の銀鎖、臺所用具を記す爲めに精神病院で用ゐらるゝ形板一個、及びチューリップ市のドーセンパッハ靴店の受取書とがあつた。

原告と犯罪者との外に、看護婦長のみがその事件を特に詳細に知つて居た。蓋

し被害者が錢をなくしたことを發見するや、その看護婦長にその金を捜し出すやうに助力を乞ふたので、看護婦長は微細なことまで知ることが出來た。それで實驗も極めて困難であつた。しかも看護婦長には最も多く嫌疑がかいつて居たのである。之に反して他の者は餘まりこの事柄を詳しく知らないし、中には犯罪の事實さへ知らないものがあつたので、實驗も比較的容易であつた。刺激語としてユングは盜まれた看護婦の名前の外に尙次のやうな數語を選出した。即ち戸棚・戸・開く・鍵・昨日・紙幣・金・七十・五十・二十・錢貨・時計・巾着・鎖・銀・隠す・毛皮・暗赤色・皮・サンチーム・形板・受取書・ドーセンバッハ等であつた。事件に直接關係して居る語の外に、特に情的價值を有するもの、即ち盜難・取る・盗む・嫌疑・非難・法廷・巡査・欺く・恐れる・發見する・拘引・無罪等の語を用いた。

後に列舉した語は、假令無辜の人であつても、強き情的憤恚を引起すかも知れないと屢非難されるのである。その爲めに吾人はそれ等に比較的價值を與へるこ

とが出来ない、しかし無辜の人の情的憤恚が、有罪者のそれと同じく聯想に影響を及ぼすといふことは疑はしい。同じ影響を生ずるか否かは経験によりてのみ解決されることが出来る。處がユングの経験によると、反證の擧がらぬ間は、前に掲げたやうな語で十分犯罪檢索の實驗が出来ると主張し得ると云つて居る。

鑑定に用ゐる此等の話の外に無關係の語を選び、各鑑定語の後に二個の無關係語を置くやうにした。通常鑑定語を第一に置き無關係語をその後には置くことは、最初の行爲をして明白ならしむるに都合がよい。しかし時としては一の鑑定語を他の鑑定語の後に置いて、第二の行爲を尙一層目だゝしむることが出来る。それでユングは「暗赤色」の後に「皮」の語を用ゐ、「銀」と「鎖」とを一處に用ゐて實驗した。

ユングは先づ三人の看護婦を實驗した。最初は看護婦長の友人を檢查したが、極僅か動かされたやうであつた。次に看護婦長を檢查した所が非常に興奮して、

實驗後の脈搏が一秒間に百二十を算するに至つた。最後に検査したのは、室掃除に來る女であつたが、三人の中で最も靜寂で、少しも當惑したやうなことは無かつた。しかし實驗をする間に、竊盜の嫌疑を被るに足るべき事實は、只實驗の終りに少しく動搖を來たしたことであつた。

次にこの三人の反應時間を測定する必要がある。各個人の反應時間を表はすには種々あるけれど、蓋然平均即ち中數（種々の反應時間數を大さの順に並べた際その中央に位する數）を以て示す方がよい。例へば茲に反應するに要する時間數が夫々 5, 5, 5, 7, 7, 7, 8, 9, 9, 9, 12, 13, 14（反應時間は常に一秒の五分の一を以て單位とす）であつたとすれば、此等の中數八がこの系列の蓋然平均である。今實驗の順序よりして、看護婦長の友人をAの字にて代表し、看護婦長をB、看護婦をCの字で表はすとすると、反應時間の蓋然平均は左の通りになる。

A 10.1

B 11.0

C 13.5

これだけでは何等の結果に到達することが出来ない。しかし平均反應時間を、無關係の語による反應と、鑑定語による反應と、それに直接繼續される鑑定語による反應とに區別して見ると極めて興味ある結果を得るやうである。即ち

被験者	反應時間の蓋然平均		
	無關係反應	鑑定反應	繼續鑑定反應
A	一〇、〇	一六、〇	一〇、〇
B	一一、〇	一三、〇	一一、〇
C	一二、〇	一五、〇	一三、〇

この表から見ると、被験者Aは無關係反應に對しては最も短い時間を要して居るが、鑑定反應に對しては、他の二人に比して最も長い時間を要して居る。又無關係反應との差から考へると、Aは六、Bは二、Cは三となつて居る。即ちAは他の者の二倍乃至三倍の差を示して居る。

之と同じ方法で、無關係反應、鑑定反應、繼續鑑定反應に對し錯綜が幾回表は

れたかの平均数をも計算することが出来る。即ち

被験者	無關係反應	鑑定反應	繼續鑑定反應
A	〇・六	一・三	〇・六
B	〇・九	〇・九	一・〇
C	〇・八	一・二	〇・八

無關係反應と鑑定反應との差異を見ると、Aは〇・七、Bは〇、Cは〇・四で、やはりAは最高数を示して居る。

次に不完全なる反應をした割合を計算すると、Aは三四%、Bは二八%、Cは三〇%で、Aが最高點を取つて居る。觀念が強き情調と聯合する時は、實驗に於て執着現象を生ずる。この現象は只に鑑定的に與へられた刺激語に對する時ばかりでなく、それに續いて提示される二三の刺激語に對しても表はれて、觀念の再生が不完全になるものである。今前記の三被験者に於て、連續的に表はれた不完全再生の割合を計算すると、Aは六四・七%、Bは五五・五%、Cは三〇・〇%で

あつた。即ち又Aが最上位を示し、之に反して情緒の興奮を餘まり烈しく表さなかつたOが最低數を示して居る。

不完全なる再生が心内の錯綜を指示するものとするれば、その不完全再生の度數が無關係反應・鑑定反應・繼續鑑定反應によつて夫々如何に異なるかを知る必要がある。即ち

被驗者	無關係反應	鑑定反應	繼續鑑定反應
A	一〇	一九	五
B	一二	九	七
C	一一	一二	七

かやうに無關係反應と鑑定反應との間の差異が、各個人によつて夫々異なつて居る。而してその差異の最も著しいものは、やはりAである。しかし茲にも少し深く攻究すべきことがある。若し不完全再生の數が全體に於て多ければ、鑑定反應に於ける不完全再生の數も隨つて多くなる譯である。今被驗者Aは全體に於て

不完全再生数が高いから、鑑定反應に於けるそれ等の多いのも自然の結果であるといふかも知れない。それで不完全再生が全部の反應に萬遍なく行はれるとすれば、これだけの不完全再生が鑑定反應にもあるべき筈だといふ豫定數を定め、その豫定數と實際の數とを比較する必要が起つてくる。今之を計算すると次の如くなる。

不完全再生の豫定數				不完全再生の實際數			
	無關係反應	鑑定反應	繼續鑑定反應		無關係反應	鑑定反應	繼續鑑定反應
A	一一・二	一二・五	一〇・二	A	一〇	一九	五
B	九・二	一〇・三	八・四	B	一二	九	七
C	九・九	一二・一	九・四	C	一一	一二	七

この計算の結果から、鑑定反應の場合の不完全再生の豫定數と實際數とを比較すると、Aは豫定數よりも六・五だけ増加し、Bは豫定數よりも一・三だけ減じ、Cは〇・九だけ増加して居る。やはりAが最高位を示して居る。

前に述べた通りの種々の計算からして、被験者Aは鑑定的刺激語によりて、烈しい情調を引起したことは明瞭となり、Aに對する嫌疑は益々深くなつた。かやうな場合には實際その者を犯人と推斷していゝかも知れない。所がその晩被験者Aは自分が盗んだことを告白した。かくして本實驗の成功は確證されたのである。

かやうな實驗の適用から考へると刺激語によつて潜在せる（無意識的）錯綜が發見せらるゝことの可能を示して居る。逆に又錯綜を指示する所の反應の裏面に錯綜が潜んで居ることをも確言することが出来る。但しその錯綜の潜んで居ることを被験者は強く拒むかも知れない。かの教育あり且つ知能の優れた被験者は彼自身の錯綜を知ることが出来ると思ふのは誤りである。何れの人も自分で知らない、即ち無意識の錯綜を有するもので、誰れ一人として自身の錯綜を完全に指揮し得ることは出来ない。若しそれが分かるといふ人があれば、その人は自分の鼻

の上にかけて居る眼鏡を見ない人である。

永い間聯想實驗は吾人の知能の型式を分類することの出来るものと考へられて居た。しかしてこの實驗は純粹の知能過程に就て何等特別の達見を與ふるものではなく、寧ろ情的過程に就ての洞察を吾人に與ふるものである。勿論吾人は反應の型式を區別することは出来る。しかしそれは知的特性に基づくものでなく、純粹に情的状態に基づくものである。教育ある被験者になると、通常外見的で、しかし言語上根底深い聯合をするが、教育のない被験者に於ては、もつと價值ある聯合、時として極めて巧妙なる意義を有する聯合をする。この行爲は知的見地よりすると矛盾して居るやうである。教育のない者の意義ある聯合は實際知的思考作用の結果でなく、單に特殊の情的状態に基づいて居る。教育のない者に向つて全事物が重要となればなる程、彼の情緒は大となるもので、従つて彼は教育のあるものよりもその實驗に對してずつと多くの注意を拂ふのである。それで彼の聯合

がずつと意義あるものになつてくる。教育によつて決定された型より離れて、エングは主要なる個人型を分類して左の三個として居る。即ち

(一) 平静の反應をする客觀型

(二) 錯綜の爲めに實驗の際多くの變動を生ずる所謂錯綜型

(三) 所謂定義型。この型に屬するものは刺激語の内容を説明したり、定義したりするを常とするのである。例へば林檎——木の實、机——家具の一つ、運動——活動の一つ、父——家族の首長の如き反應である。かやうな反應は主として魯鈍の人に表はれ、白痴に近い人は常にこの種の反應をする。しかし實際には馬鹿でなく、馬鹿と思はれまいと思つて如上の反應をすることもある。例へば一被験者はこの實驗を以て知能の検査と考へて、刺激語の意味の方に彼の注意を向けて居たので、彼の聯想は恰も白痴のそれのやうであつたといふことである。かやうに彼自身が實際あるよりも尙一層伶俐であると他人より思はれる爲めに定義を

以て反應する場合の錯綜をユングは「知的錯綜」と名づけて居る。或正常の被験者は最も誇大的に次のやうな反應をした。即ち心配——心の苦痛、接吻する——愛の開發、接吻——友愛の知覺等である。

この型に屬する人は、自己の現在の資格よりも以上の資格者たらんと欲し、自己の有する勢力よりも以上の勢力者たらんと欲する人である。故に知的錯綜を有する人は通常不自然で虚飾の多い人である。複雑なる外國語や高調の引用語や他の知的裝飾を偏愛する人である。かやうにして外見的教育と知識とを以て他人に印象を與へ、自己の鈍才たるの苦しき感情を補償しようとするのである。定義型は又賓辭型と密接なる關係をもつて居る。賓辭型といふのは、個人的判斷を言ひ表はす傾向で、定義型よりも尙精しく刺激語の説明をする型式である。例へば花——美しい、動物——醜い、小刀——危ない、死——恐ろしい等の如きである。

定義型に於ては刺激語の知的意義が著しく表はれるが、賓辭型に於てはその情

的意義が著しく表はれてくる。この賓辭型が最も極端に表はれて居る反應の例を擧げると次の如くである。ピアノ——恐ろしい、歌ふ——神々しい、母——烈しく愛せられる、父——善くて上品で神聖のもの等。

定義型に於ては絶對的知的化粧が表はれるが、賓辭型に於ては情的化粧をするのである。しかし定義型が實際の知識の不足を蔽ふやうに、賓辭型に於ては過度の情的表出をなして、情緒の缺陷を隠蔽し補償するものである。この結論は次に述ぶる事實によりて説明することが出来る。即ち種々の人に聯想實驗を行つて見ると、青年の者には賓辭型の人が殆んどない。之に反して年齢の進むに従つて賓辭型が増してくる。而して賓辭型の増加は、婦人に於ては四十歳より少し後に表はれ、男子に於ては六十歳以後に表はれる。此等の年齢は實に性慾の喪失と共に著しく情性が減退する時期である。故に若し被験者にして明瞭なる賓辭型を示す場合には、その者は内部の情性の缺陷があつて、それを補償する爲めに賓辭的の反

應をすると言つて差支ない。しかし逆に情性の缺陷あるものは凡て賓辭型の人であると推論することは出来ない。賓辭型の人には種々の外部的行動、例へば特殊の愛情や、熱心なる感嘆や、外飾的行爲や、不自然なる強調的言語などを使ふことによつて、心内の情的缺陷を蔽つて居る。

錯綜型は錯綜を隠匿するといふ以外に何等の傾向をも示さない。故にかの定義型や賓辭型に於て實驗者に對して何等かの影響を與へようとする積極的努力と相反して、只單に消極的に錯綜を隠すといふだけである。

ユングは如上の聯想法の外に氏の所謂再生法の實驗を附加して居る。即ち同一の刺激語を再び提示して、被験者が以前の反應を記憶して居るか否かを試験するのである。多くの場合にその記憶は脱落する。而してその脱落する場所は、主として情的に強調されたる錯綜に觸接する刺激語、又はかやうな鑑定語に直接繼續する刺激語に對する反應である。

この現象は凡ての経験と矛盾すると考へられるかも知れない。蓋し從來は情的に強調されたる事物は、中性的事物よりもよく記憶せられると考へられて居たからである。勿論これは眞理である。しかし情的に強調された内容を言語にて發表する場合には適用が出来ない。却つて情緒の烈しい時に言つた事柄は極めて容易に忘れられ、言つたことゝ矛盾した行爲をする傾向がある。故に再生法は錯綜刺激を尙一層著しくするに要用のものである。ユングの経験によると通常人では誤りたる再生の數が一〇―二〇%よりも多いことは稀であるが、ヒステリー患者になると、二〇―四〇%も再生の誤謬をするものである。故に再生法は或場合に於ては被験者の情性を測定することが出来るとユングは主張して居る。

ユングはまた抑壓されたる錯綜を検索するに聯想法を用ゐた例を擧げて居る。三十歳になる教育ある一婦人が結婚後三年ばかりたつが、非常に内氣で且つ嫉妬深くあつた。しかし彼女は夫を愛し、夫の方でも何等嫉妬を引起すべき行爲をし

なかつた。只婦人はカソリック信者だが、夫は新教徒であるといふことはあつたけれど、それが嫉妬の原因となるやうにも思はれなかつた。それでこの婦人に聯想實驗をなし、刺激語として前に述べた一百語を提示した。その中で著しく障害を被つた刺激語は、黄色・祈る・分かれる・結婚する・争ふ・老いたる・家族・幸福・虚偽・恐怖・接吻する・新婦・選ぶ・満足する等であつた。その中で最も烈しい障害のあつたものは、祈る・結婚する・幸福・恐怖・虚偽・満足であつた。これ等の刺激語はいふまでもなく心内の錯綜を烈しく刺衝したに相違ない。これ等の事實より考へる時は、彼女は夫が新教徒たるに無頓着でないとか、結婚に不正の所があるとか、又は結婚に満足せず夫と分かれたいとかの思想が潜在して居るに相違ないと推斷される。ユングはこのことを彼女に話した處が、最初は之を否定したが、最後に全部を承認し、且つ彼女は多くの不忠實の幻想や、夫に對する非難を思ひ出したと附言した。又彼女の内氣と嫉妬とは夫に對する彼女の性的願望の投射に過ぎな

かつた。蓋し彼女は自分の幻想を信じなかつた爲めに、夫に對して嫉妬深くあつたとは氣が付かなかつたといふことである。

この後ユングの聯想實驗法は種々の人によりて犯罪の有無を検索する爲めに用ゐられた。殊にミュンステルベルヒやシュタインなどは、極めて面白い例を擧げて居る。就中シュタインは十八人の犯罪者を調査して、凡て聯想實驗の成功したことを述べて居る。今その一例を擧げると、次の如くである。或る所に一人の下男が貯金通帳を入れた鞆を盗まれた。その家に他の一人の下男が居たが、それに聯想實驗を行つて見た。鑑定語としては、下男・貯金の通帳・銀行・鞆等を用ゐた。所がその下男の反應時間を刺激語の性質によりて分類すると次の如くなつた。

無關係反應

二・一

鑑定反應

三・二

繼續鑑定反應

二・三

同一の語を普通人に試みた處が次の如き結果を得た。

無關係反應

一・八

鑑定反應

一・九

繼續鑑定反應

一・六

これによつて見ると、前者の反應時間、殊に鑑定語に對する反應が著しく障害を被つて居る。所がこの實驗の結果の示す通り、その下男はやはり眞の犯人であつたといふことである。

—(附録終)—

大正六年十月二十日 印刷
大正六年十月二十三日 發行

【定價金壹圓五拾錢】

著者 久保良英

芝區白金三光町五三七

上野陽一

東京上駒込一二〇

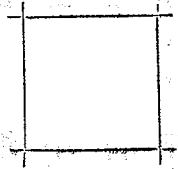
中西彦三郎

小石川區久堅町一〇八

山縣純次

神田區今川小路

發行者
印刷者
製本者



發行所

電話小石川九百十一番
振替東京三三五九九番

心理學研究會出版部

東京上駒込一二〇

目書庫文學理心世近

- | | | | |
|------|--------|----------|------|
| 第一卷 | 木村文學士著 | 早教育と天才 | (既刊) |
| 第二卷 | 寺田文學士著 | 兒童の惡癖 | (既刊) |
| 第三卷 | 久保文學士著 | 精神分析法 | (既刊) |
| 第四卷 | 齋藤文學士著 | 遺傳と人性 | (近刊) |
| 第五卷 | 増田文學士著 | 職業の心理 | (未刊) |
| 第六卷 | 小熊文學士著 | 心靈研究 | (未刊) |
| 第七卷 | 香川鐵藏著 | 性慾の心理 | (未刊) |
| 第八卷 | 佐久間學士著 | リズムと人生 | (未刊) |
| 第九卷 | 寺澤醫學士著 | 老衰の心理 | (未刊) |
| 第十卷 | 菅原文學士著 | 佛國心理小説 | (未刊) |
| 第十一卷 | 野上文學士著 | ホルルの學說 | (未刊) |
| 第十二卷 | 諸岡醫學士著 | 精神の養生と食物 | (未刊) |

心理叢書

(每冊の購讀を豫約せらるゝ方に限り實費にて配布す)

書名	著者	定價	送料	實費 (送料共)
第一冊 靈魂信仰と祖先崇拜	文學士 桑田 芳藏	〇、七五	〇、〇六	〇、六一
第二冊 智能の遺傳 <small>日本人についての研究</small>	村瀬 雄平	〇、八五	〇、〇八	〇、六八
第三冊 左利と右利	文學士 富田 精	〇、八〇	〇、〇八	〇、五五
第四冊 精神作業 <small>に於ける</small> 疲勞と練習	文學士 千輪 浩	一、三〇	〇、〇八	〇、五五
第五冊 國語のアクセント	文學士 佐久間 鼎	〇、八五	〇、〇八	〇、六一
第六冊 現代日本人の信仰 <small>に關する研究</small>	文學士 飯沼 龍遠	未刊		大正七年 二月發行
第七冊 書及び書き方の研究	文學博士 松本 亦太郎 城戸 幡太郎	未刊		大正七年 五月發行
第八冊 智能相關の研究	文學士 古賀 行義	未刊		大正七年 二月發行
學校兒童 精神検査法指針	文學士 上野 陽一	〇、七五	〇、〇六	(既刊)
心理學者寫眞帖 (十二枚一組)	心理學研究會編	〇、三五	〇、〇三	(既刊)

東京上駒込

電話小石川九百十一
振替東京三三五九九

心理學研究會出版部

文學士 上野陽一 著

四六版二百二十頁布裝挿畫十數個
定價金七拾五錢 送料金六錢

學校兒童精神検査法指針

再版

内容は「兒童研究法の指南書」の一句に盡きる。子供を研究するには如何なる方法があるかの概論について、記憶や學習や發明聯合・想像・注意等の各種精神能力の發達がどの位の程度にあるかを測定する法を示し、更に知力一般の發達程度を診斷する方法を説き、その測定の結果を始末する仕方を明らかにしたのが本書である。附録ヤーキス氏の知力測定法は一の方法を以て各年齢兒童の知力を測定して點數に現す事が出来る。

發行所

東京市外上野込一三〇
振替東京三三五九九

心理學研究會出版部

賣捌所
東京堂